亀井北

（その2）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

亀井北

（その２）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

巻頭写真図版

古墳時代第１遺構面　１号方形周溝墓

序　　文

河内平野のごとく、砂と粘土の互層となった厚い大和川水系の堆積土層で覆われたところでは、通常、遺跡の確認は非常に困難である。

亀井北遺跡は、そのようなことから当初遺跡として周知されていなかったが、南北に隣接する亀井、久宝寺遺跡の調査の所見を基に試掘調査を実施した結果、新たに発見された近畿自動車道の天理～吹田線（大阪線）では15番目の遺跡である。

そして、弥生時代以来の河内の〝クニ〟の歩みと河内平野の生成を刻みこんだ亀井、久宝寺、加美の大遺跡にすっぽり囲まれた位置にあたることから、これら三遺跡の最近の調査大成果を更に補完する遺跡として大いに注目されることところであった。

今回の調査によって、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世の各時期の遺構、遺物を確認したが、特に、弥生、古墳時代においては、亀井、久宝寺、加美の三大遺跡の影響を如実に物語ると共に当該地域の消長発展と古代史解明に大いに寄与するところとなった。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和61年３月31日

大阪府教育委員会

文化財保護課長　吉　房　康　幸

序　　文

河内平野に包括される古代史は、我国の歴史を知る上で、欠くことの出来ない重要な部分を占めている。

大和川と淀川が形成した三角州は、時々の住民や権力者の力量を反影しながら、刻々と変化して今に至っている。

自然と人間の果てしないかかわりが、河内平野ほど単的に把握され、複雑な変化の中に人間の努力、限界、妥協、克服が見て取れる地域も少ないのではなかろうか。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる15遺跡の発掘調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に発掘調査を依頼され、既に長原遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡、美園遺跡、大堀城遺跡、亀井遺跡、久宝寺遺跡、佐堂遺跡、城山遺跡の14遺跡の調査が完了し、多大の成果を挙げてきた。

本書は、近畿自動車天理～吹田線内最後の調査対象遺跡となった大阪市平野区加美福井戸町、同加美新家町、同加美松山町並びに八尾市北亀井町一帯に所在する亀井北遺跡の発掘調査の概要を記したものである。

河内平野の内部に所在する各種の遺跡の調査は、低湿地における発掘技術の進歩とあいまって、近年急速に実態が明らかとなってきたが、本冊子に記載の諸事実も、これらに付加される時、その及ぼす影響大であると確信するものである。

最後に、限られた調査期間の中で、およそ２ケ年間連続で発掘調査を担当した調査関係者各位の努力に深謝するとともに、調査を御指導いただいた大阪府教育委員会、調査の円滑な推進に多大の援助をおしまれなかった日本道路公団の関係各位に厚く御礼申し上げ、今後とも当センターにより一層の御理解、御支援を願ってやまない。

昭 和 61 年 3 月

財団法人　大阪文化財センター

理事長　加　藤　三之雄

例　　言

1．本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、大阪市平野区加美南４丁目に所在する亀井北遺跡（その２）の発掘調査概要報告書である。

2．亀井北遺跡の発掘調査は、その１（Ａ～Ｃ地区）、その２（Ｄ、Ｅ地区）、その３（Ｆ～Ｉ地区）に分けて行なったが、本書で報告するのはそのうちのその２（Ｄ、Ｅ地区）における調査成果の概要である。

3．本調査は、大阪府教育委員会及び大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。

4．本調査に要した費用275,095,000円はすべて日本道路公団が負担した。

5．本調査は、昭和59年３月10日から昭和61年１月16日までの間実施した。

6．基本的な遺物整理作業は、発掘調査と併行してこれを行なった。遺構図面等の整理は、基礎作業のみ発掘調査と併行して行ない、概括的整理及び本書の作成の作業は、昭和60年11月15日から昭和61年２月15日までの間実施した。

7．本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査及び本書作成に関係した者は以下の通りである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	小林廣喜
		村田和三郎
	事務局次長兼総務課長	尾田勝之
	事務局次長	金丸義和
	総務課長兼庶務係長	阪上允代、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子、宮本哲男
調査総括責任者	業務課長	泉本知秀（昭和59年４月１日～昭和60年４月30日）
		中西靖人（昭和60年５月１日～）
長吉分室	業務第２係長	赤木克己　技師　奥和之、山上弘
美原分室	業務第２係長	国乗和雄
長田分室	業務第１係	技師　山口誠治、片山彰一

調査に関しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、平野警察署に格別の配慮を受けた。

8．本書の記述は、奥和之、山上弘が担当し、一部調査参加者が起稿を分担して行なった。また、縄文土器に関しては、技師大野薫、石器に関しては、技師竹原伸次の協力を得た。

9．調査にあたっては、以下の学生諸君の協力を得た。

泉谷博幸、北川和美、杉原亜希子、谷正実、中川直人、長岡崇倫、光田勝彦（以上四天王寺国際仏教大学）、田中純一、速水紀孝、藤田修司、和田衛（以上大阪工業大学）、田部井仁（近畿大学）、武村千津子（関西大学）、桑島範子（成蹊女子短期大学）、甲斐浩子（大阪女子短期大学）、清水邦子（城南女子短期大学）、伊藤尚子、小林一江（以上堺女子短期大学）

10．本書の編集は、奥、山上が行ない、文責は文末に掲げた。

凡　例

1．本調査の測量には国土座標を用い、遺構実測図及び本文では、X＝－153km000m、Y＝－38km000mを原点としm単位で標した。例えばX200、Y720は、X＝－153km200m、Y＝－38km720mを指す。従って方位も座標北を指す。

2．本書で使用した標高は、T.P.（東京湾標準潮位）による。T.P.±0mはO.P.（大阪湾標準潮位）＋1.3mに当たる。

3．本書に記載した土器は一連番号を与え、木製品、石器、金属器については、それぞれ頭にW.S.Bの記号を付して一連番号を与え、実測図と写真を対照できるようにした。また、遺物実測図の断面は、須恵器…黒ぬり、瓦器…ドット、瓦…斜線、それ以外については、白抜きを行ない区別した。また、木器、石器、金属器の断面については、斜線を入れた。

4．出土した遺物は、地区割を設定して取り上げ、また、遺構の説明についてもこれを用いた。地区割の設定については、第1章第2節の中で詳述する。

5．本書に記載した各遺構は、遺構面ごとに一連番号を与え、表記については、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査報告書の略号を使用し、それ以外の略号のない遺構については、日本語表記を行なった。略号の種別は、以下の通りである。

ＳＢ……建物、ＳＤ……溝、ＳＥ……井戸、ＳＫ……土壙、Ｐ……ピット

亀　井　北

(その2)

近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

巻頭写真図版

序文

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　はじめに

　第1節　調査に至る経過…… 1

　第2節　調査の目的と方法…… 2

第Ⅱ章　周辺の環境…… 5

第Ⅲ章　基本層序…… 7

第Ⅳ章　調査の概要

　第1節　縄文時代…… 13

　第2節　弥生時代…… 16

　第3節　古墳時代…… 38

　第4節　奈良・平安時代…… 83

　第5節　中世…… 87

　第6節　近世・近代…… 95

第Ⅴ章　遺物…… 99

第Ⅵ章　まとめ…… 150

挿図目次

第１図　調査区位置図…… 3
第２図　調査区地区割図…… 4
第３図　周辺遺跡分布図…… 5
第４図　亀井北遺跡その２調査区標準土層柱状図…… 7
第５図　亀井北遺跡Ｄ・Ｅトレンチ縦断土層断面図……９～10
第６図　縄文時代遺構面自然流路０２土層断面図…… 14
第７図　縄文時代遺構面自然流路０２出土遺物実測図…… 15
第８図　弥生時代第１遺構面ＳＤ０４他出土遺物実測図…… 17
第９図　弥生時代第２遺構面平面図…… 20
第10図　弥生時代第３遺構面出土遺物実測図…… 21
第11図　弥生時代第３遺構面ＳＤ０１土層断面図…… 22
第12図　弥生時代第３遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図…… 22
第13図　弥生時代第４遺構面出土遺物実測図…… 23
第14図　弥生時代第４遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図…… 23
第15図　弥生時代第４遺構面大畦畔０２土層断面図…… 24
第16図　弥生時代第４遺構面ＳＤ０１平面、立面図……25～26
第17図　弥生時代第５遺構面自然流路０１、土堤０１土層断面図…… 27
第18図　弥生時代第５遺構面自然流路０１出土遺物実測図…… 28
第19図　弥生時代第５遺構面自然流路０１他出土遺物実測図…… 29
第20図　弥生時代第５遺構面自然流路０１出土遺物実測図…… 30
第21図　弥生時代第６遺構面ＳＤ０１～ＳＤ０４土層断面図…… 31
第22図　弥生時代第６遺構面ＳＤ０４遺物出土状況図…… 32
第23図　弥生時代第６遺構面ＳＤ０２、０４出土遺物実測図…… 33
第24図　弥生時代第７遺構面ＳＤ０１～ＳＤ０３土層断面図…… 35
第25図　弥生時代第７遺構面自然流路０１、０２出土遺物実測図…… 36
第26図　古墳時代第１遺構面建物、土壙平面図…… 39
第27図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０１平面図…… 41
第28図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０２平面図…… 42
第29図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０３平面図…… 43
第30図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０７遺物出土状況図…… 45
第31図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０７出土遺物実測図…… 45

第32図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０８出土遺物実測図…… 46
第33図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０８遺物出土状況図…… 46
第34図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１０出土遺物実測図…… 46
第35図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１０遺物出土状況図…… 47
第36図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１２平面図…… 47
第37図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１３遺物出土状況図…… 48
第38図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１３出土遺物実測図…… 48
第39図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図…… 48
第40図　古墳時代第１遺構面遺構出土遺物実測図…… 49
第41図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図…… 50
第42図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図…… 51
第43図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図…… 52
第44図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図…… 53
第45図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図…… 54
第46図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓平面、断面図…… 55
第47図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図…… 57
第48図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図…… 57
第49図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓出土遺物実測図…… 58
第50図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓出土遺物実測図…… 59
第51図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓壺棺出土状況図…… 60
第52図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓平面、断面図…… 61
第53図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓出土遺物実測図…… 63
第54図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓出土遺物実測図…… 64
第55図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓遺物出土状況図…… 64
第56図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓平面、断面図…… 65
第57図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓主体部平面、断面図…… 66
第58図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓出土遺物実測図…… 66
第59図　古墳時代第１遺構面４号方形周溝墓平面、断面図…… 67
第60図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓遺物出土状況図…… 68
第61図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓平面、断面図…… 69
第62図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓出土遺物実測図…… 71
第63図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓出土遺物実測図…… 71
第64図　古墳時代第１遺構面ＳＤ０１土層断面図…… 72
第65図　古墳時代第１遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図…… 72

第66図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１平面図…… 73
第67図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１木器出土状況図…… 74
第68図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図…… 75
第69図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図…… 75
第70図　古墳時代第３遺構面大畦畔０１、０２土層断面図…… 76
第71図　古墳時代第３遺構面出土遺物実測図…… 77
第72図　古墳時代第４遺構面出土遺物実測図…… 78
第73図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０１土層断面図…… 80
第74図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０２遺物出土状況図…… 80
第75図　古墳時代第５遺構面平面図…… 81
第76図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０１、０２出土遺物実測図…… 82
第77図　奈良・平安時代第１遺構面平面図…… 84
第78図　奈良・平安時代遺構面出土遺物実測図…… 85
第79図　奈良・平安時代第２遺構面平面図…… 86
第80図　中世第１遺構面平面図…… 88
第81図　中世第２遺構面Ｐ０１出土遺物実測図…… 89
第82図　中世第２遺構面Ｐ０１遺物出土状況図…… 90
第83図　中世第２遺構面ＳＥ０１出土遺物実測図…… 90
第84図　中世第２遺構面ＳＥ０１遺物出土状況図…… 91
第85図　中世第２遺構面ＳＥ０２～０４平面、立面図…… 93
第86図　中世第２遺構面ＳＥ０１、０２出土遺物実測図…… 94
第87図　中世・近世スキミゾ土層断面図…… 95
第88図　近世・近代第１遺構面平面図…… 96
第89図　近世・近代第２遺構面ＳＥ０１平面、立面図…… 97
第90図　近世・近代第２遺構面ＳＥ０１出土遺物実測図…… 98
第91図　各器種の部分名称…… 102

表　目　次

遺物観察表…… 103～149

図版目次

図版１　縄文時代遺構面
　　１．Ｄ、溝状遺構（北東から）
　　２．６Ｅ、溝状遺構（北から）
図版２　縄文時代遺構面
　　１．Ｅ、自然流路０２（北から）
　　２．Ｅ、自然流路０２縄文土器出土状況（北東から）
図版３　弥生時代遺構面
　　１．Ｅ、弥生時代第１遺構面溝状遺構他（南から）
　　２．Ｅ、弥生時代第２遺構面溝状遺構他（東から）
図版４　弥生時代第３遺構面
　　１．Ｅ、ＳＤ０１他（北から）
　　２．Ｅ、ＳＤ０１遺物出土状況（東から）
図版５　弥生時代第４遺構面
　　１．Ｄ、ＳＤ０１しがらみ上面（北東から）
　　２．Ｄ、ＳＤ０１しがらみ完掘（北西から）
図版６　弥生時代第４遺構面
　　１．Ｅ、水田大畦畔、小畦畔（西から）
　　２．３Ｅ、水田小畦畔（北から）
図版７　弥生時代第５遺構面
　　１．Ｄ、自然流路０１（南から）
　　２．Ｅ、土堤０１（南から）
図版８　弥生時代第６遺構面
　　１．Ｄ、溝状遺構（南から）
　　２．Ｅ、ＳＤ０４遺物出土状況（西から）
図版９　弥生時代、古墳時代遺構面
　　１．Ｄ、弥生時代第７遺構面溝状遺構他（北から）
　　２．Ｄ、古墳時代第１遺構面ウネミゾ他（東から）
図版10　古墳時代第１遺構面全景（垂直）
図版11　古墳時代第１遺構面
　　１．２Ｄ、ＳＢ０１（北から）
　　２．１Ｄ、ＳＢ０３（東から）

図版12　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｄ、遺構内遺物出土状況
　　２．Ｄ、包含層遺物出土状況、ＳＫ１２土層
図版13　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、方形周溝墓群（北から）
　　２．Ｅ、１号方形周溝墓（西から）
図版14　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、１号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）
　　２．Ｅ、１号方形周溝墓遺物出土状況
図版15　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、１号方形周溝墓主体部（東から）
　　２．Ｅ、１号方形周溝墓主体部、周溝土層
図版16　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、２号方形周溝墓（東から）
　　２．Ｅ、２号方形周溝墓主体部（西から）
図版17　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、２号方形周溝墓壺棺出土状況（北から）
　　２．Ｅ、２号方形周溝墓壺棺出土状況（北から）
図版18　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、３号方形周溝墓（西から）
　　２．Ｅ、３号方形周溝墓主体部（東から）
図版19　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、３号方形周溝墓主体部（西から）
　　２．Ｅ、３号方形周溝墓主体部人骨出土状況（東から）
図版20　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、３号方形周溝墓主体部、周溝土層、遺物出土状況
　　２．Ｅ、４号方形周溝墓（東から）
図版21　古墳時代第１遺構面
　　１．Ｅ、５号方形周溝墓（東から）
　　２．Ｅ、５号方形周溝墓遺物出土状況
図版22　古墳時代第２遺構面
　　１．２Ｄ、ＳＤ０１（北から）
　　２．Ｄ、ＳＤ０１えぶり出土状況（上から）
図版23　古墳時代遺構面

１．２Ｄ、古墳時代第３遺構面大畦畔０１（北西から）

２．Ｅ、古墳時代第４遺構面水田小畦畔（南から）

図版24　古墳時代第４遺構面

１．３Ｅ、水田小畦畔、足跡（北から）

２．Ｅ、水田小畦畔、足跡（北東から）

図版25　古墳時代第５遺構面

１．Ｅ、ＳＤ０１（南から）

２．６Ｅ、ＳＤ０２、遺物出土状況

図版26　奈良・平安時代遺構面

１．Ｅ、奈良・平安時代第１遺構面柱穴（北東から）

２．Ｅ、奈良・平安時代第２遺構面柱穴（東から）

図版27　中世遺構面

１．１Ｄ、中世第１遺構面足跡（西から）

２．Ｄ、中世第２遺構面Ｐ０１瓦器椀出土状況（西から）

図版28　中世第２遺構面

１．Ｅ、溝状遺構他（北から）

２．Ｅ、溝状遺構他（北東から）

図版29　中世第２遺構面

１．Ｅ、ＳＥ０１、０２遺物出土状況（東から）

２．Ｅ、ＳＥ０３、０４（南から）

図版30　中世、近世・近代遺構面

１．Ｅ、中世第２遺構面ＳＥ０１、０２

２．Ｄ、近世・近代第１遺構面スキミゾ（北から）

図版31　近世・近代第２遺構面

１．Ｄ、スキミゾ（南から）

２．Ｅ、スキミゾ（北から）

図版32　出土遺物

縄文時代遺構面自然流路０２（１～11）、弥生時代第１遺構面（12～14）

図版33　出土遺物

１．弥生時代第３遺構面ＳＤ０１（15）、弥生時代第４遺構面（17）

２．弥生時代第４遺構面ＳＤ０１（19）、弥生時代第５遺構面自然流路０１

図版34　出土遺物

弥生時代第３遺構面（16、19）、弥生時代第５遺構面自然流路０１

図版35　出土遺物

弥生時代第５遺構面自然流路０１

図版36　出土遺物

１．弥生時代第５遺構面自然流路０１

２．弥生時代第６遺構面ＳＤ０２（53）、ＳＤ０４（50～52）

図版37　出土遺物

弥生時代第６遺構面ＳＤ０４

図版38　出土遺物

弥生時代第７遺構面自然流路０１、０２他

図版39　出土遺物

弥生時代第５遺構面自然流路０１、弥生時代第７遺構面自然流路０１

図版40　出土遺物

古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓

図版41　出土遺物

古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓

図版42　出土遺物

古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓

図版43　出土遺物

１．古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓（195）、５号方形周溝墓（196～198）

２．古墳時代第１遺構面ＳＤ０１

図版44　出土遺物

古墳時代第１遺構面

図版45　出土遺物

１．古墳時代第１遺構面ＳＫ０７、０８、ウネミゾ５８、１０９

２．古墳時代第１遺構面包含層

図版46　出土遺物

古墳時代第１遺構面包含層

図版47　出土遺物

古墳時代第１遺構面包含層

図版48　出土遺物

古墳時代第３遺構面

図版49　出土遺物

１．古墳時代第５遺構面ＳＤ０１、０２

２．古墳時代第５遺構面ＳＤ０２

図版50　出土遺物

１．古墳時代第４遺構面

２．奈良・平安時代遺構面

図版51　出土遺物

中世第２遺構面ＳＥ０１

図版52　出土遺物

中世第２遺構面ＳＥ０１、０２

図版53　出土遺物

１．弥生時代第３遺構面ＳＤ０１　杵、鍬未製品

２．弥生時代第５遺構面自然流路０１　杵、木包丁他

図版54　出土遺物

１．古墳時代第１、２遺構面木製品

２．石器、砥石、耳環

付図目次

付図	1	縄文時代遺構面　全体図	(S＝1/200)
付図	2	弥生時代第1遺構面　前期　全体図	(S＝1/200)
付図	3	弥生時代第3遺構面　中期　全体図	(S＝1/200)
付図	4	弥生時代第4遺構面　後期　全体図	(S＝1/200)
付図	5	弥生時代第5遺構面　後期　全体図	(S＝1/200)
付図	6	弥生時代第6遺構面　後期　全体図	(S＝1/200)
付図	7	弥生時代第7遺構面　後期　全体図	(S＝1/200)
付図	8	古墳時代第1遺構面　前期　全体図	(S＝1/200)
付図	9	古墳時代第1遺構面　前期　方形周溝墓	(S＝1/100)
付図	10	古墳時代第3遺構面　中期　全体図	(S＝1/200)
付図	11	古墳時代第4遺構面　後期　全体図	(S＝1/200)
付図	12	中世第2遺構面　全体図	(S＝1/200)
付図	13	近世・近代第2遺構面　全体図	(S＝1/200)

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経過

亀井北遺跡は、大阪市平野区加美南から八尾市北亀井町にかけて所在する。府道中央環状線内の高速道路用地では国鉄関西線から国道25線北80mまでの間、約570mを範囲としている。

日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線の内、大阪府側の吹田～松原間（通称・大阪線）約27kmについては、昭和42年度に基本計画、及び整備計画が決定され、翌43年度より建設が開始されている。昭和45年３月に吹田～門真間２車線が開通して以来、順次北より供用区間を延長してきている。

遺跡の存在する東大阪～松原間約13kmについては、昭和46年以来、大阪府教育委員会と日本道路公団との間で協議が重ねられてきた。当時、河内平野内の遺跡は、遺構面が地中深く埋没しているがゆえに、対象になる遺跡の範囲、埋没深度等不明な部分が多かった。そこで、各遺跡の範囲、埋没深度を探るための第１次発掘調査を周知の９遺跡（新家・西岩田・瓜生堂・巨摩廃寺・若江北・山賀・友井東・久宝寺・亀井）について実施することになった。調査は、財団法人大阪文化財センターが担当して、昭和48・49年に実施された。その過程で佐堂遺跡が新規発見され、また、路線周辺で実施された地下鉄谷町線建設に伴う事前調査で長原・城山遺跡、大阪ガスの管埋設時の調査で美園遺跡の存在が明らかとなり、各遺跡の範囲がそれぞれ路線内にまで広がることが確実となった。結局、大阪線の路線内には13の遺跡が含まれることになり、第１次調査の結果とも合わせて府教委、公団は本調査の調査主体、方法等の検討を進めた。

協議の結果、現地調査については府教委の指導・監督のもとに大阪文化財センターが担当することになり、昭和51年４月、道路公団を交えた３者で協定書が締結された。そして、同年７月、長原遺跡より調査を開始し、順次各遺跡の調査を進めてきた。その間、松原ジャンクション以南の大堀城跡遺跡も大阪線の範囲となっている。

亀井北遺跡は、当初は遺跡としては認識されていなかった。ところが南側の亀井遺跡の北端のＡトレンチ、及び北側の国鉄関西線を隔てた久宝寺遺跡の南端で遺構面が途切れなかったことから、遺跡である可能性が高くなった。そこで、昭和58年10月から59年２月にかけて第１次調査を実施したところ、全域にわたって地表下4.5mまで遺構面が存在することが確認された。

そこで、大阪線15番目の遺跡である亀井北遺跡とし、本調査を昭和59年３月から開始した。調査は、期間を短縮するために、遺跡の全長が短いにもかかわらず３分割し、北よりその１、２、３調査区とした。その内のその２調査区は、道路公団の測量測点でＳＴＡ126＋94から128＋55までの約161mの間で、トレンチ名でいえばＤ・Ｅトレンチにあたる。

その２調査区の調査は、順調に進み、予定通り昭和61年１月現地調査を終了した。　　（赤木）

第2節　調査の方法

亀井北遺跡の地域が、当初、遺跡として認識されていなかったことは、既に前節で述べた。この地域に調査の手が延びたのは、昭和48年度に実施された亀井遺跡の第1次調査によってである。この時の調査は、周知の遺跡の範囲確認という制約があったために、平野川を中心に広がっていると考えられていた亀井遺跡が、どこまで南北に延びるかが調査の目的であった。第1次調査では合計5本のトレンチが設定されたが、その内の最も北のＳＴＡ129＋40付近に設定されたNo.32トレンチでは遺構、遺物ともに検出できなかった。また、国道25号線と交差する亀井交差点すぐ北のＳＴＡ131＋00付近に設定されたNo.33トレンチでもわずかに遺物が出土したのみであった。第1次調査では、以上の調査結果から、亀井遺跡の範囲を国道25号線の北側まもなくで途切れるとの結論を下している。

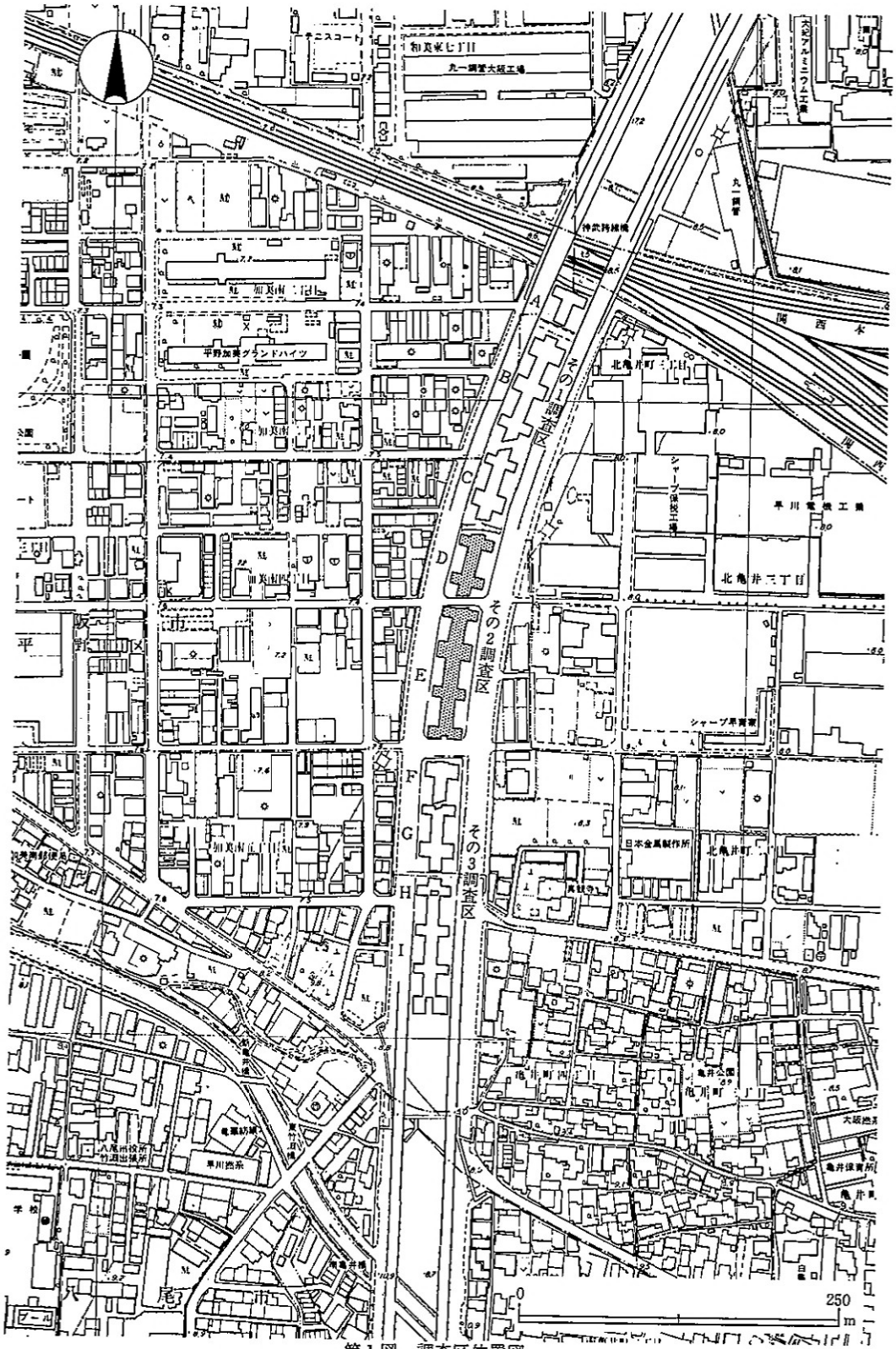
しかしながら、この調査は、全長1㎞にもおよぶ調査範囲に5×5ｍのトレンチを5本入れただけであり、堆積土層の変化の激しい沖積平野の遺跡状況を探るにはあまりにも量が不足していた。しかも、ＧＬ－5ｍまで調査を行なったが、掘削が機械を主にしたものであり、包含層、遺構面のみを人力掘削するという方法であったため、遺構、遺物の疎らな部分は見逃しやすいという弊害を持っていた。

以上のような理由から、昭和48年度の第1次調査では亀井北遺跡部分は、遺跡範囲から除外されてしまった。しかし、近畿道大阪線の本調査が昭和51年度に始まって以来、低湿地遺跡における土層の認識、遺構の検出等について、相当な技術的進展があった。特に、水田遺構の検出にめざましい成果を見せた。このことが、大阪線の遺構範囲を水平、垂直方向に拡大する大きな力となってきた。水田遺構は、小面積の調査では判明しがたいものである。亀井北遺跡も、一度は否定されたものの、上記の点と、周辺遺跡の調査ともあわせて遺跡である可能性が高いと見られるようになった。

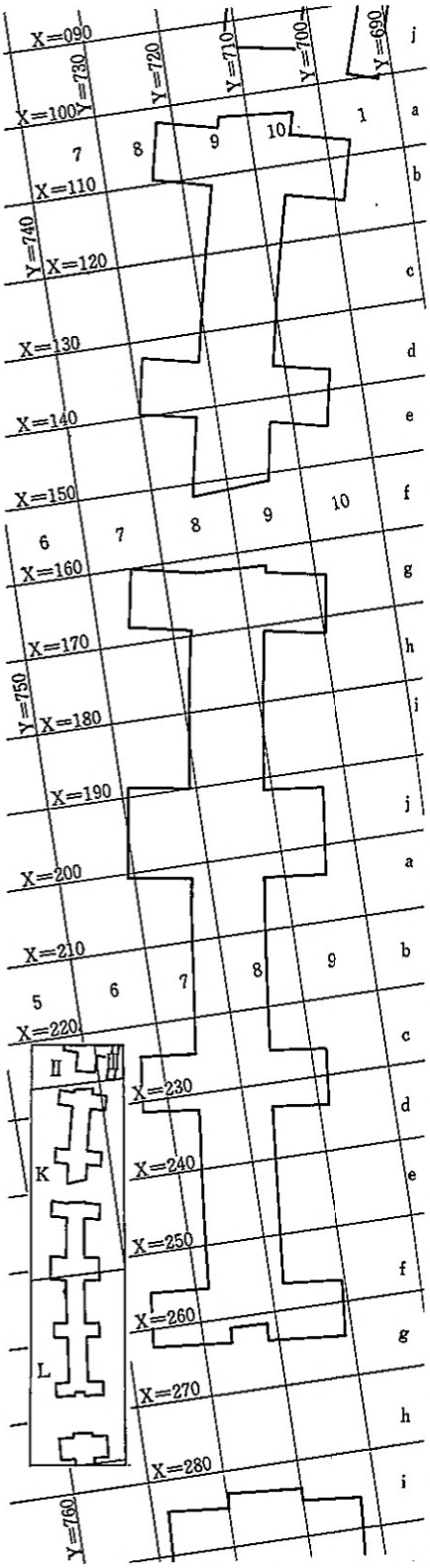
昭和58年10月より実施された亀井北遺跡の第1次調査は、最終遺構面が深いと予想されたため、水平方向と垂直方向の両方の遺構分布を探るために、2つの方法が取られた。水平方向の遺構分布は、ほぼ全線に素掘りによる幅2ｍのトレンチを設定し、第1遺構面の検出でもって調査を停止し、それ以下は、本調査に委ねることにした。垂直方向の遺構分布は、鋼矢板で囲った5×5ｍのトレンチを6本設定し、ＧＬ－6ｍまで調査を行なった。その結果、水平方向は全域、垂直方向はＧＬ－4.5mまで調査する必要が認められた。

本調査は、第1次調査に引続き、昭和59年3月より開始された。その2調査区は、その1調査区との工区境である水路より東西横断道である交差点までの間であるが、地下埋没管を有する旧横断道によってＤ・Ｅトレンチに2分された。Ｄトレンチの全長約50m、Ｅトレンチの全長は約100mである。

調査方法は、いわゆる「トレンチ調査方式」によっている。この方式は、試掘的側面を有する


知美東七丁目
丸一鋼管大阪工場
大阪アルミニウム工業
神武跨線橋
丸一鋼管
関西本
平野加美グランドハイツ
加美南
北亀井町三丁目
シャープ亀井工場
早川電機工業
その1調査区
その2調査区
その3調査区
シャープ早川寮
日本金属製作所
亀井公園
亀井保育所
亀井橋
八尾市役所
竹渕出張所
早川酒系
電源紡績
A
B
C
D
E
F
G
H
I
0
250
m

第1図　調査区位置図



第２図　調査区地区割図

「トレンチ部の調査」と、破壊される橋脚部を対象とした「切拡げ部の調査」の２段階に分けて調査される。トレンチ部の調査は、一応最終遺構面までの調査を行なうことが原則であるが、保存に値する遺構が検出された場合は、それより下層の調査を停止し、大阪府教育委員会と日本道路公団との保存協議を待つことになっている。

今回の調査においても、Ｅトレンチの古墳時代前期の方形周溝墓群が保存協議の対象になり、その結果、保存措置が取られている。

切拡げ部は、Ｄ地区が１Ｄ～４Ｄピットまでの４か所、Ｅ地区が１Ｅ～８Ｅピットまでの８か所である。

調査は、ＧＬ－4.5ｍまでの予定があったため、ＳＰ．３型８ｍの鋼矢板と１段梁でもって土留とした。しかし、切拡げ時には、道路公団の要請により、橋脚基礎工事にそのまま使用できる8.5ｍの鋼矢板を打設している。また、縄文時代の河道が検出された５Ｅ・８Ｅピットについては、トレンチ部の鋼矢板長では掘削不能のため、切拡げ時に橋脚部全域を10ｍの鋼矢板で囲み、河床のＧＬ－6.5ｍまでの掘削を可能にした。

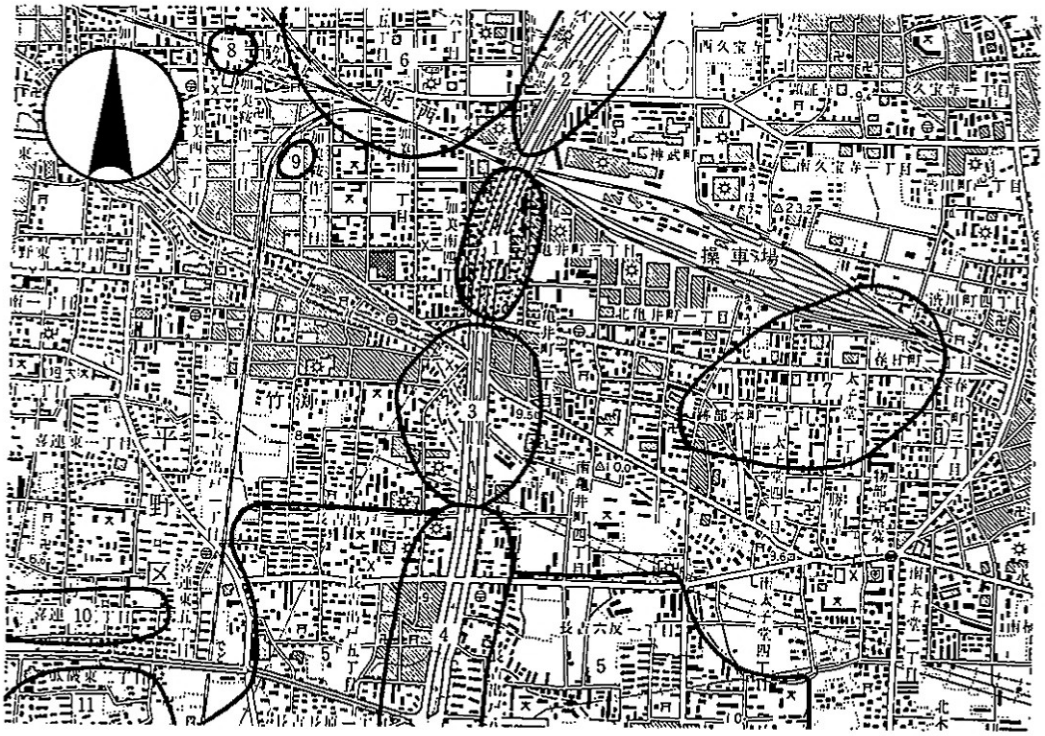
地区割りは、久宝寺遺跡南地区のものを延長している。これは、第１次調査の結果から、亀井北遺跡が北側の久宝寺・加美遺跡との関連が強いと考えられたためである。この地区割りは、国土座標系において東経136°0′、北緯36°0′を原点とする第Ⅵ系の区割りを利用したものである。Ｘ－152,100.000、Ｙ－36,000.000を基点とし、南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100ｍ単位の大区画を設定し、さらに、その大区画の中を北西部を基点として10ｍ単位に南、東へそれぞれａ～ｊ、１～10と細分している。表示はａ－１区で地区を示し、必要に応じて、それをさらに南、東へＸ０００、Ｙ０００として細分することにしている。その２調査区は、ほぼＫⅢ、ＬⅢ区内に属する。また、基準線については、座標値をそのまま使用している場合もある。その場合、座標値の前半は省略している。　（赤木）

第 II 章　周 辺 の 環 境

亀井北遺跡は、河内平野の南部に位置し、行政区画でいえば、大阪市平野区加美南から、八尾市北亀井町にかけて所在する。本遺跡のある河内平野は、旧大和川を含めた数多くの河川からの土砂の堆積により形成された沖積平野である。今回の近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、従来、部分的にしか知られていなかった河内平野の歴史的環境に新しい知見が付け加えられた。これに基づき、亀井北遺跡周辺の歴史的環境について述べてみたい。

旧石器時代においては、沖積平野は、また形成されてはいない。この時代の遺跡は、生駒山系や上町台地、羽曳野丘陵などの洪積台地に点在しているが、遺物の出土量も少なく、その実体は不明な点が多い。しかし、最近、藤井寺所在のはさみ山遺跡で、多量の国府型ナイフの石器とともに、旧石器時代の竪穴住居址が検出された。これにより、旧石器時代の生活様式を研究する上で重要な資料となるであろう。

縄文時代は、海退現象の活発化により自然環境が変化した。人々の生活も河内湖周辺へと移動



1．亀井北遺跡　　5．長原遺跡　　9．鞍作廃寺
2．久宝寺遺跡　　6．加美遺跡　　10．喜連東遺跡
3．亀井遺跡　　7．跡部遺跡　　11．瓜破遺跡
4．城山遺跡　　8．長楽廃寺

第3図　周辺遺跡分布図

してくる。後期より、人々は形成されて間もない河内平野へと足を踏み入れたと思われる。本遺跡周辺の久宝寺・城山遺跡では、後期の土器が出土している。また、晩期になると、出土量、出土地域が拡大してくる。河内平野においては、人々が確実に定着したという根拠になる生活址等は、従来の調査では、確認されていないが、定着して生活を営んでいた可能性が大いにある。

弥生時代前期においては、友井東遺跡では、水田址、山賀遺跡では、住居址をともなう水田址が検出されており、河内平野の広範囲で水稲耕作が行なわれていたと推察できる。中期になると亀井・加美・城山遺跡などでは、方形周溝墓が築造され始める。加美遺跡で検出された方形周溝墓の規模は、墳丘上面で南北約22m、東西約11m、周溝幅約５ｍを測る大型のもので、木棺13基による複数の埋葬が行なわれている。また、亀井・城山遺跡では、方形周溝墓群と住居址が検出され、このことから本遺跡をはさんで、加美遺跡と亀井・城山遺跡とそれぞれの集落を形成していたと考えられる。後期になると、城山遺跡では、竪穴住居址が検出されている。本遺跡においては、水田が形成されており、集落の一部に含まれるのではないかと考えられる。

古墳時代初頭になると、加美・久宝寺・亀井北遺跡を含む、東西約１㎞、南北約1.5㎞にもおよぶ大集落址が形成されたと推察できる。この集落址の中には、方形周溝墓・掘立柱建物があるものと考えられる。特に、久宝寺遺跡では、木製の準構造船が出土している。前期になれば、久宝寺遺跡では、畦畔で区画された水田が検出された。その後、河内平野の広範囲が水田化していき、数多くの村落が形成されていたと考えられる。また、従来、河内平野には、古墳は存在しないと言われていたが、近年の発掘調査で、現地表下にあった数多くの古墳が確認された。前期のものでは、内部にベット状の寝具をもつ家形埴輪の出土で知られている美園１号墳がある。中期になると、河内平野の台地部では、百舌鳥・古市等で、大型前方後円墳を中心とする古墳群が形成される。平野部では、塚ノ本古墳を中心とする長原古墳群が形成されている。長原古墳群は、大半が小型の方墳であるが、最近発掘された七ノ坪古墳は、横穴式石室を持つ小型の帆立貝式の古墳であり、畿内で横穴式石室が、一般化するのに先行して作られたものと推定される。また、石室内より馬具が一括して出土しており、当時の馬装を復元するのに貴重な資料である。後期になれば、高安・平尾山等に群集墳が形成されるが、山賀１号墳のように平野部でも、まだ古墳が築造される所も存在している。

奈良・平安時代になると、久宝寺遺跡とともに本遺跡でも掘立柱建物が検出されている。

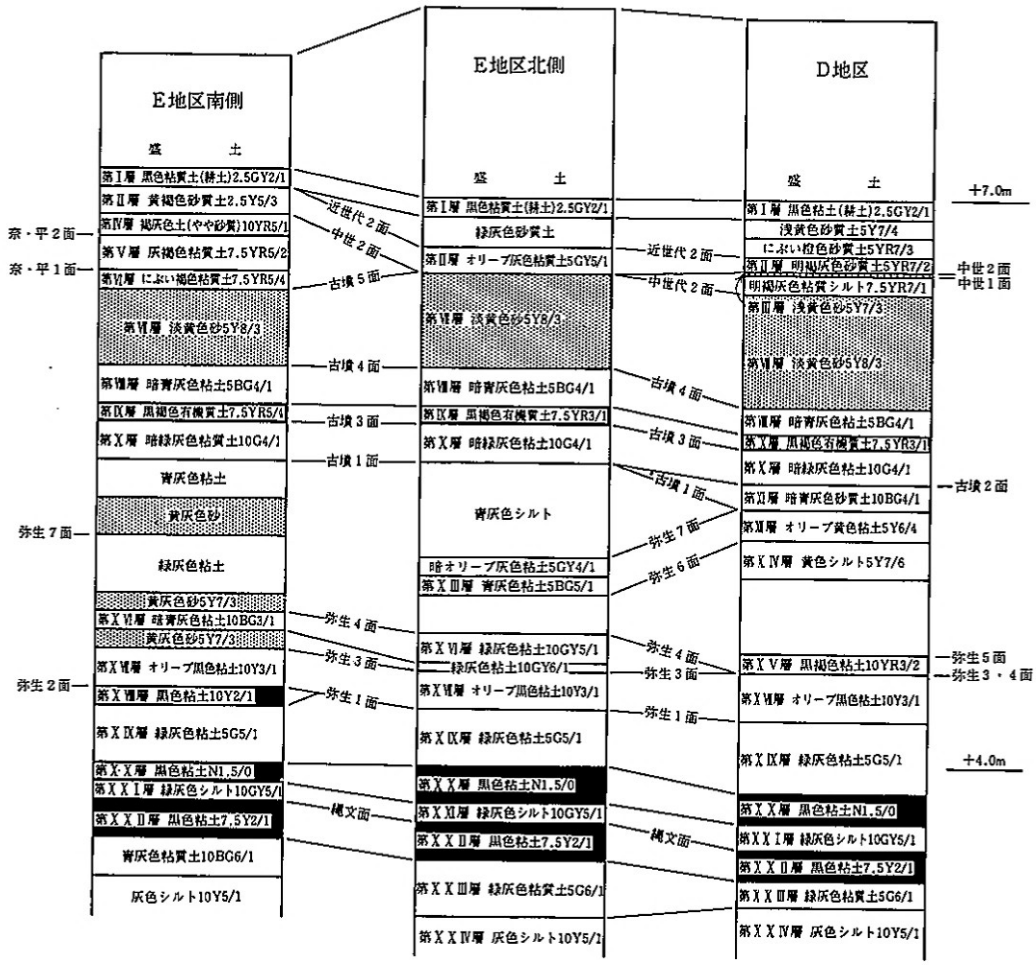
中世になると、平野川の自然堤防上に、数多くの遺跡が点在するものと思われるが、亀井北遺跡（その３）では狭い調査範囲であるが、遺構とともに大量の遺物が出土している。それ以外は、水田化されるものと推定される。

以上のように、亀井北遺跡周辺の歴史的環境を述べてきた。10年間にも及ぶ近畿自動車道建設に伴う発掘調査により、河内平野の歴史というものは、かなり明らかになったとはいえ、洪積台地との関連・各時代のつながりなど、まだまだ解決していない問題が残されている。これからの研究で、河内平野の歴史像が克明に復元されることを期待したい。　　（泉谷）

第Ⅲ章　基本層序

亀井北遺跡その２調査区では、層序を確認するためにトレンチ調査部では、トレンチ西側に幅約0.8mの土層観察用の畦を残し、また、東西方向の層位を観察するためにＸ軸に乗せて10mごとに幅約0.5mの土層観察用の畦を残した。橋脚部調査ピットでは、東側ピットで東側と北側、西側ピットで西側と北側に幅約0.8mの土層観察用の畦を残した。調査は、地表下4.5m～6.0mにまで及ぶため掘り下げが進むごとに約１mを越えない範囲で順次撤去していった。

調査区は、全長160mに及ぶため、複雑な様相を示し、単純には理解しにくいため、第４図に示す標準土層柱状図を作成し、層序の単純化を図った。第５図に示すＤ・Ｅトレンチ縦断土層断面図には、表われない土層についても柱状図には加えておいた。また、土層は、上層から順に第



第４図　亀井北遺跡その２調査区標準土層柱状図

Ⅰ層、第Ⅱ層と名称を与えた。

また、Eトレンチでは、+5.6m～+5.8mの古墳時代第1遺構面で5基の方形周溝墓を検出した。この方形周溝墓が橋脚によって破壊されない様に保存したため、X171.5からX189までと、X201.5からX220までの間については、土層の観察が行なえず、保存地区を隔てて層序の対応は、困難であった。

以下、基本土層について、上層から順に説明していく。

第Ⅰ層（黒色粘質土　2.5GY2/1）　この層は、D・E地区全面で検出された中央環状線建設以前の旧耕作土であり、厚さ約0.1mで堆積しているが、中央環状線建設時にある程度削平されている。近・現代の遺物を含む層である。

第Ⅱ層（明褐灰色砂質土　5YR7/2、オリーブ灰色粘質土　5GY5/1、黄褐色砂質土　2.5Y5/3）

この層は、D・E地区全面で検出され、D地区では、明褐灰色砂質土であり、E地区中央部以北では、オリーブ色粘質土、E地区南側で黄灰色砂質土に変化する。スキミゾが全面に検出される近世・近代第2遺構面のベースとなる層である。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、D地区（明褐灰色砂質土）とE地区中央部以北（オリーブ灰色粘質土）では、耕作により攪乱され、近世の遺物が出土し、E地区中央部以南（黄褐色砂質土）では、中世の遺物を包含する。

第Ⅲ層（浅黄色砂　5Y7/3）　この層は、D地区ほぼ全面で検出され、中世第1遺構面を被っており、厚さ約0.05mで堆積し、中世第2遺構面のベース層となっている。

第Ⅳ層（褐灰色土　7.5YR5/1）　この層は、Eトレンチ西壁断面でX226付近からX231付近にかけて存在し、ここでは、中世第2遺構面のベースとなっているが、中世・近世の削平を免れて残存したものと考えられる。厚さ約0.1m～0.2mで堆積し、奈良時代後期の遺物を包含している。

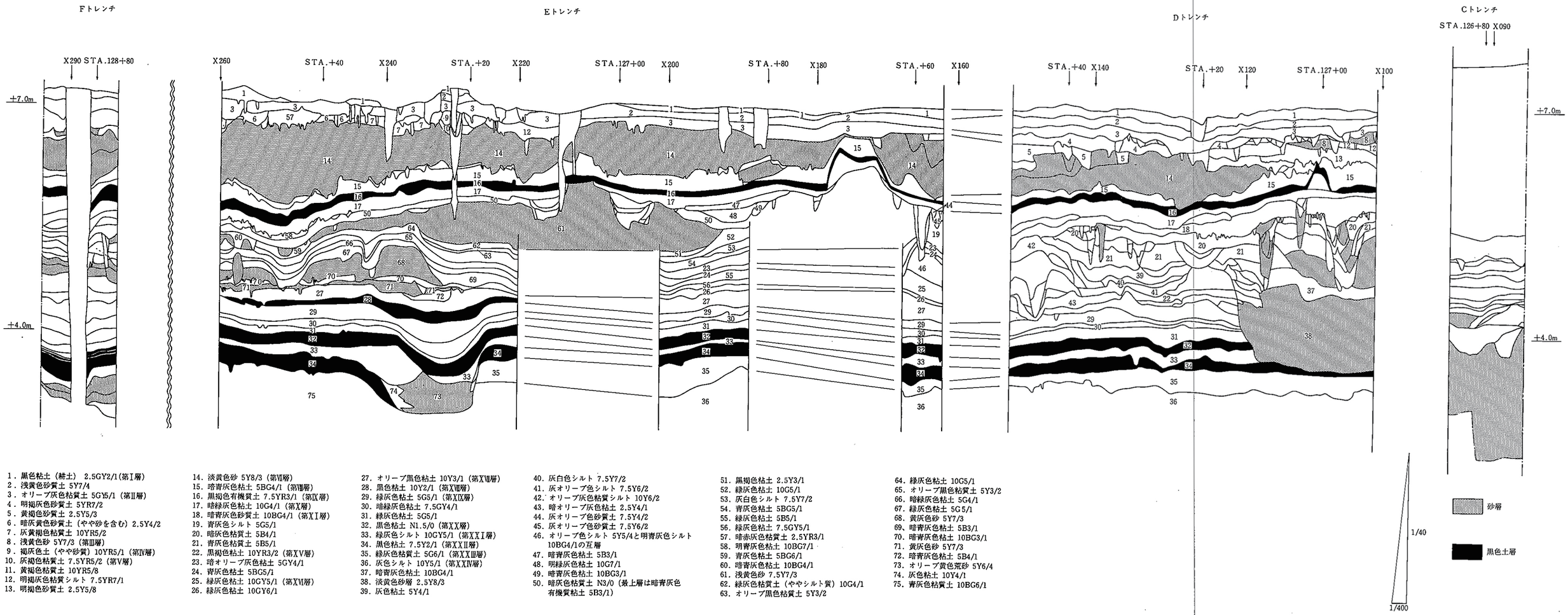
第Ⅴ層（灰褐色粘質土　7.5YR5/2）　この層は、第Ⅳ層と同様の範囲に存在し、奈良・平安時代第2遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1mで堆積し、奈良時代後期の土器を包含している。

第Ⅵ層（にぶい褐色粘質土　7.5YR5/4）　この層は、E地区X230付近を中心に東方向に約10m程度の範囲で部分的に存在し、奈良・平安時代第1遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1mで堆積し、僅かに遺物を包含している。

第Ⅶ層（淡黄色砂　5Y8/3）　この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代後期の水田面である古墳時代第4遺構面全面を厚さ約0.5m～1.0mで被う黄灰色を呈する砂層であり、古墳時代後期の遺物を包含している。E地区中央部以北では、中世第2遺構面のベースとなり、E地区中央部以南では、大溝が検出される古墳時代第5遺構面のベースとなっている。

第Ⅷ層（暗青灰色粘土　5BG4/1）　この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代後期の水田面である古墳時代第4遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、大畦畔、小畦畔を形成し、古墳時代後期の遺物を包含している。

第Ⅸ層（黒褐色有機質土　7.5YR3/1）　この層は、D・E地区全面で検出され、植物遺体を多



1．黒色粘土（耕土） 2.5GY2/1（第Ⅰ層）
2．浅黄色砂質土 5Y7/4
3．オリーブ灰色粘質土 5GY5/1（第Ⅱ層）
4．明褐灰色砂質土 5YR7/2
5．黄褐色砂質土 2.5Y5/3
6．暗灰黄色砂質土（やや砂を含む）2.5Y4/2
7．灰黄褐色粘質土 10YR5/2
8．浅黄色砂 5Y7/3（第Ⅲ層）
9．褐灰色土（やや砂質）10YR5/1（第Ⅳ層）
10．灰褐色粘質土 7.5YR5/2（第Ⅴ層）
11．黄褐色粘質土 10YR5/8
12．明褐灰色粘質シルト 7.5YR7/1
13．明褐色砂質土 2.5Y5/8
14．淡黄色砂 5Y8/3（第Ⅵ層）
15．暗青灰色粘土 5BG4/1（第Ⅶ層）
16．黒褐色有機質土 7.5YR3/1（第Ⅸ層）
17．暗緑灰色粘土 10G4/1（第Ⅹ層）
18．暗青灰色砂質土 10BG4/1（第ⅩⅠ層）
19．青灰色シルト 5G5/1
20．暗灰色粘質土 5B4/1
21．青灰色粘質土 5B5/1
22．黒褐色粘土 10YR3/2（第ⅩⅤ層）
23．暗オリーブ灰色粘土 5GY4/1
24．青灰色粘土 5BG5/1
25．緑灰色粘土 10GY5/1（第ⅩⅥ層）
26．緑灰色粘土 10GY6/1
27．オリーブ黒色粘土 10Y3/1（第ⅩⅦ層）
28．黒色粘土 10Y2/1（第ⅩⅧ層）
29．緑灰色粘土 5G5/1（第ⅩⅨ層）
30．暗緑灰色粘土 7.5GY4/1
31．緑灰色粘土 5G5/1
32．黒色粘土 N1.5/0（第ⅩⅩ層）
33．緑灰色シルト 10GY5/1（第ⅩⅩⅠ層）
34．黒色粘土 7.5Y2/1（第ⅩⅩⅡ層）
35．緑灰色粘質土 5G6/1（第ⅩⅩⅢ層）
36．灰色シルト 10Y5/1（第ⅩⅩⅣ層）
37．暗青灰色粘土 10BG4/1
38．淡黄色砂層 2.5Y8/3
39．灰色粘土 5Y4/1
40．灰白色シルト 7.5Y7/2
41．灰オリーブ色シルト 7.5Y6/2
42．オリーブ灰色粘質シルト 10Y6/2
43．暗オリーブ灰色粘土 2.5Y4/1
44．灰オリーブ色砂質土 7.5Y4/2
45．灰オリーブ色砂質土 7.5Y6/2
46．オリーブ色シルト 5Y5/4と明青灰色シルト 10BG4/1の互層
47．暗青灰色粘土 5B3/1
48．明緑灰色粘土 10G7/1
49．暗青灰色粘土 10BG3/1
50．暗灰色粘質土 N3/0（基上層は暗青灰色有機質粘土 5B3/1）
51．黒褐色粘土 2.5Y3/1
52．緑灰色粘土 10G5/1
53．灰白色シルト 7.5Y7/2
54．青灰色粘土 5BG5/1
55．緑灰色粘土 5B5/1
56．緑灰色粘土 7.5GY5/1
57．暗赤灰色粘質土 2.5YR3/1
58．明青灰色粘土 10BG7/1
59．青灰色粘土 5BG6/1
60．暗青灰色粘土 10BG4/1
61．浅黄色砂 7.5Y7/3
62．緑灰色粘質土（ややシルト質）10G4/1
63．オリーブ黒色粘質土 5Y3/2
64．緑灰色粘土 10G5/1
65．オリーブ黒色粘質土 5Y3/2
66．暗緑灰色粘土 5G4/1
67．緑灰色粘土 5G5/1
68．黄灰色砂 5Y7/3
69．暗青灰色粘土 5B3/1
70．暗青灰色粘土 10BG3/1
71．黄灰色砂 5Y7/3
72．暗青灰色粘土 5B4/1
73．オリーブ黄色荒砂 5Y6/4
74．灰色粘土 10Y4/1
75．青灰色粘質土 10BG6/1

第５図　亀井北遺跡Ｄ・Ｅトレンチ縦断土層断面図

量に含み、厚さ約0.05m～0.1mで堆積している。

第Ⅹ層（暗緑灰色粘土　10G4/1）　この層は、D・E地区全面で検出され、古墳時代中期の水田と推定される古墳時代第3遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、D地区では、古墳時代第2遺構面を被い、E地区では、古墳時代第1遺構面を被っている。遺物は、古墳時代前期の土器を少量包含している。

第Ⅺ層（暗青灰色砂質土　10BG4/1）　この層は、D地区全面で検出され、えぶりが出土した溝状遺構が検出された古墳時代第2遺構面のベースとなっている。厚さ約0.1m～0.3mで堆積し、古墳時代前期の遺物を多量に包含している。

第Ⅻ層（オリーブ黄色粘土　5Y6/4）　この層は、D地区中央部で検出され、古墳時代第1遺構面と弥生時代第7遺構面のベースとなっているが、北側では、青灰色シルトが上層に堆積し、両遺構面が分かれる。厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。

第XIII層（青灰色粘土　5BG5/1）　この層は、E地区で検出され、厚さ約0.05m～0.1mで堆積している。層中には、僅かに植物遺体を含み、弥生時代第6遺構面を被っている。

第XIV層（黄色シルト　5Y7/6）　この層は、D地区中央部で検出され、弥生時代第6遺構面のベースとなっている。厚さ約0.4mで堆積している。

第XV層（灰オリーブ粘質シルト　7.5Y6/1）　この層は、D地区で検出され、自然流路が検出された弥生時代第5遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2m～0.3mで堆積している。

第XVI層（緑灰色粘土　10GY5/1、暗青灰色粘土　10BG3/1）　この層は、Eトレンチ北端部で検出され、水田畦畔等が検出された弥生時代第4遺構面のベースとなっているが、Eトレンチ南側では、暗青灰色粘土に変化する。E地区の中においても中央部以北では、北東端を除いてほとんどこの層の堆積が認められず、弥生時代第4遺構面と弥生時代第3遺構面を分離することが難しい。厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。

第XVII層（オリーブ黒色粘土　10Y3/1）　この層は、D・E地区全面で検出され、弥生時代後期の水田面である弥生時代第4遺構面と弥生時代中期の遺物が出土した溝状遺構が検出された弥生時代第3遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2m～0.3mで堆積し、遺物を僅かに包含されている。

第XVIII層（黒色粘土　10Y2/1）　この層は、E地区X220より南側で検出され、厚さ約0.05m～0.1mで堆積し、弥生時代第2遺構面のベースとなっている。弥生時代前期の遺物を少量包含している。

第XIX層（緑灰色粘土　5G5/1）　この層は、D・E地区全面で検出され、弥生時代第1遺構面のベースとなっている。厚さ約0.3m～0.6mで堆積し、間層に厚さ約0.05m～0.2mの暗灰色粘土（705GY4/1）を挟む。遺物は、全く包含されていない。

第XX層（黒色粘土　N1.5/0）　この層は、D・E地区全面で検出され、厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。遺物は、全く包含されていない。

第XXI層（緑灰色シルト～粘土質　10ＧＹ5/1）　この層は、Ｄ・Ｅ地区全面で検出され、縄文時代遺構面を被っている。厚さ約0.05ｍ～0.7ｍで堆積し、縄文時代遺構面の自然流路０２のオーバーフローと考えられ、自然流路０２から北に離れるとシルトが、次第に粘質土に変化していく。

第XXII層（黒色粘土　7.5Ｙ2/1）　この層は、Ｄ・Ｅ地区全面で検出され、溝状遺構や自然流路が検出された縄文時代遺構面のベースとなっている。厚さ約0.2ｍで堆積し、遺物は、全く包含されていない。

第XXIII層（緑灰色粘土　5Ｇ6/1）　この層は、Ｄ地区全面と、Ｅ地区北半部で検出され厚さ約0.2ｍ～0.5ｍで堆積している。

最後に、第５図に示すＤ・Ｅトレンチ縦断土層断面図中に亀井北遺跡その１調査区、その３調査区との遺構面の相互対応を示すため、幅10ｍの土層図を併載しておいたが、その３調査区と接続するにあたって、道路幅約20ｍ開いているため断面図においては、約６ｍ分を削除した。（山上）

第Ⅳ章　調査の概要

第1節　縄文時代

亀井北遺跡３調査区の中で、縄文時代の遺構面が検出されたのは、その２調査区のみである。遺構としては、若干の溝状遺構と２本の自然流路を検出したのみであったが、自然流路内からは、縄文時代後期の磨滅していない土器が出土しており、付近に遺構が広がっているものと考えられる。（山上）

縄文時代遺構面　後期　（付図１、図版１，２）

縄文時代遺構面は、調査区全域で検出された第XXⅢ層（黒色粘土7.5Y2/1）をベースに＋3.5m～＋3.9mのレベルに存在する。上層には、自然流路０２のオーバーフローと考えられる緑灰色シルト及び粘土が厚さ約0.1m～0.2mで堆積しているが、遺物は、含まれていない。遺構としては、溝状遺構、自然流路、落ち込み等検出されている。遺物は、自然流路０２の流路内に堆積した淡黄灰色荒砂と淡黄灰色砂から出土している。（山上）

ＳＤ０１～ＳＤ０８　ＳＤ０１～ＳＤ０８は、Ｄ地区において検出された溝状遺構である。断面の形状は、浅いＵ字状を呈し、埋土は全て上層の堆積層である緑灰色粘土層（５Ｇ5/1）である。幅約0.5m～0.8m、深さ約0.05m～0.06mを測る。遺物は、全く出土しなかった。溝は不定方向に延びているものが多いが、特にｄ－８区に存在するＳＤ０４、０５、０６、の３本の溝は、東西幅約３ｍ、南北幅約4.2mの間を、方形周溝状にまわる。（奥）

ＳＤ０９　ＳＤ０９は、Ｅトレンチｇ－９区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.1mを測り、埋土は、緑灰色シルトである。

ＳＤ１０　ＳＤ１０は、Ｅトレンチｇ－８区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.4m～0.5m、深さ約0.1mを測り、両端は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色シルトである。

ＳＤ１１　ＳＤ１１は、Ｅトレンチｊ－８区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.4m、深さ約0.05mを測り、両端は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。

ＳＤ１２　ＳＤ１２は、Ｅトレンチｊ－８区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m、深さ約0.05m、長さ約２ｍを測り、南側は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。この溝状遺構は、ＳＤ１１と同一直線上に幅約0.4m開けて存在し、本来同一遺構である可能性が高い。

ＳＤ１３　ＳＤ１３は、Ｅトレンチｊ－８区で検出された南西から北東方向に直線的に走る溝

状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.4m、深さ約0.１m、長さ約２mを測り、埋土は、緑灰色粘土である。

ＳＤ１４　ＳＤ１４は、６Ｅピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、北側は、調査区外に延びる。埋土は、緑灰色粘土である。

ＳＤ１５　ＳＤ１５は、６Ｅピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.2m～１m、深さ約0.05mを測り、南側で幅を広げてＳＤ１７に続く。埋土は、緑灰色粘土である。

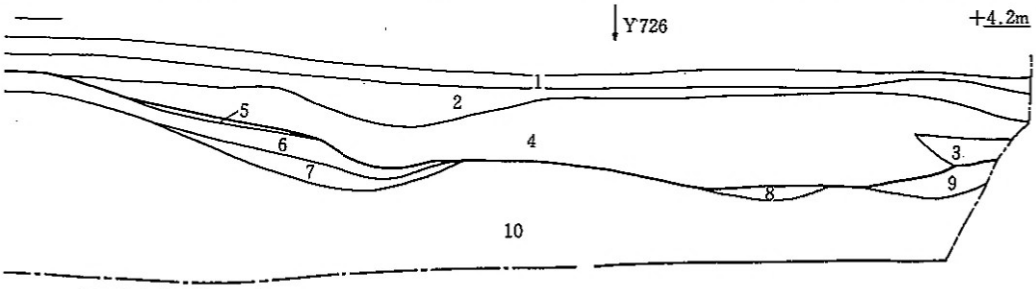
ＳＤ１６　ＳＤ１６は、６Ｅピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.6m、深さ約0.1mを測り、北側でＳＤ１７に続く。埋土は、緑灰色粘土である。

ＳＤ１７　ＳＤ１７は、６Ｅピットで検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、東側でＵ字状を呈し、西側でほぼ垂直に落ち、底部は平坦である。幅約1.4m～2.7m、深さ約0.1m～0.4mを測り、埋土は、黄灰色砂である。遺構中央部で南側に大きく広がっており、これは、流水による浸食と思われる。ＳＤ１７は、西側でトレンチ部の自然流路０２に流れ込むが、矢板打設時のプレボーリングによる攪乱で自然流路０２への取りつき部は不明である。遺物は、出土しなかった。　(山上)

落ち込み０１　ａ－８，９区にはさまれて存在する不定形な落ち込みである。埋土は、上層の緑灰色粘土層（５Ｇ5/1）であり、深さは約0.2mを測る。遺物は全く出土しなかった。　(奥)

自然流路０１　自然流路０１は、１Ｅピットで検出された南北方向にＳ字状に流れ、幅約1.6m～２m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色砂である。遺物は、出土しなかった。

自然流路０２（第６図）　自然流路０２は、Ｅトレンチ南半部で検出されトレンチを軸にほぼ南北に流れ北端で西方向に約90度屈折する。幅約9.5m～11mを測る。深さは、トレンチ部の調査の時点では、設計深度Ｇ．Ｌ．－4.5m超えたため測り得なかったが、切拡げ部の調査において、

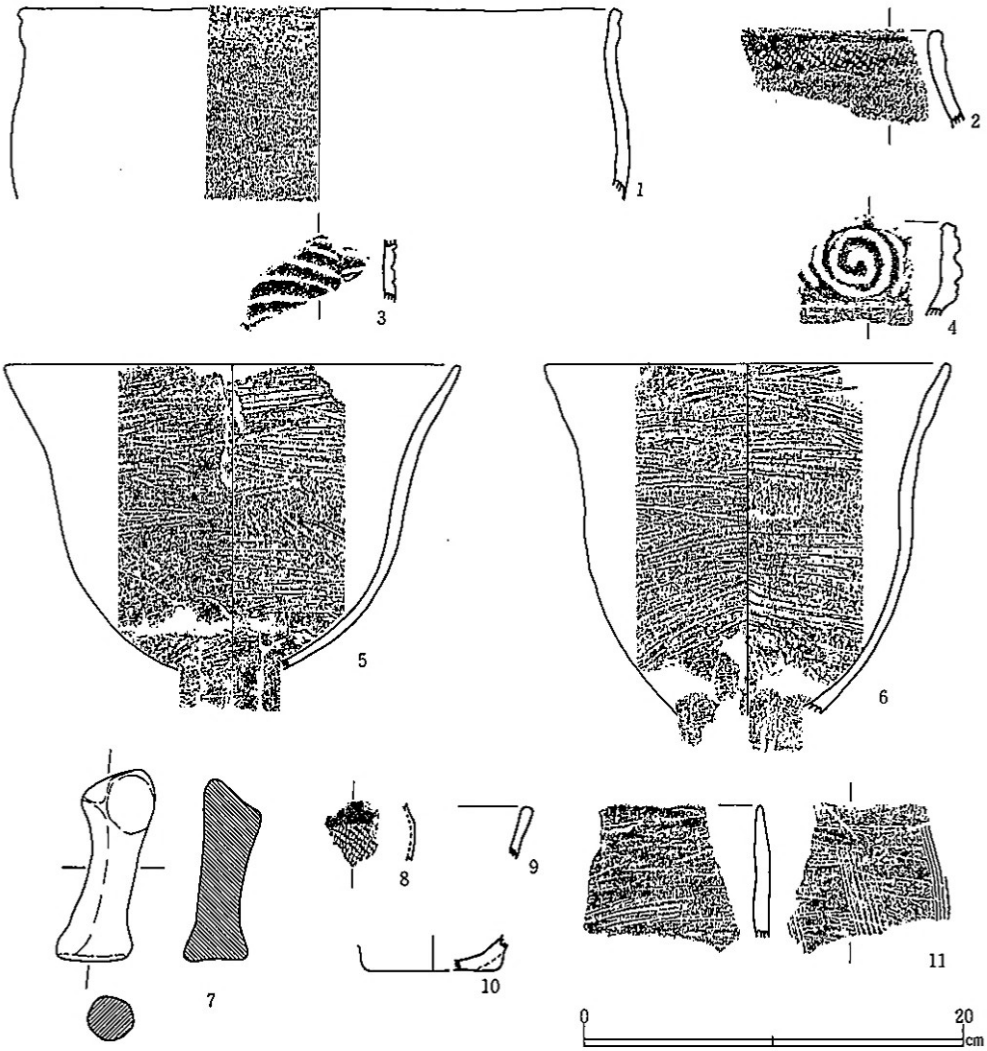


1．黒色粘土層（第ＸＸ層）
2．緑灰色シルト層（第ＸＸＩ層）
3．灰オリーブ粘質土層 7.5Y4/2
4．灰白色砂層 7.5Y7/2
5．灰色粘土層 10Y4/1
6．黒色粘土層 7.5Y2/1（第ＸＸⅡ層）
7．黒褐色粘質土層 10YR3/1
8．暗青灰色粘質土層 5B3/1
9．青灰色シルト層 5B5/1
10．浅黄色シルト層 7.5Y7/3と青灰色シルト 5BG6/1の互層（最下層は灰オリーブ色粗砂 7.5Y6/2）

第６図　縄文時代遺構面自然流路０２土層断面図

設計深度を５Ｅピット及び８ＥピットでＧ．Ｌ．－6.5mにまで深くしたため、ようやく流路底部を確認し得た。深さ約1.0m、最深部のＴ．Ｐ．値は、＋2.4mを測る。埋土は、淡黄灰色荒砂である。縄文時代遺構面のベースである黒色粘土を除去すると右岸は、青灰色粘質土となり、左岸は、青灰色シルトとなる。また、自然流路０２の川底の下層には、黄灰色砂が堆積しており、川幅、方向共に不明ではあるがかなりの大きな流路があるものと推定される。この流路の底は、８Ｅピットで検出され、西に向かって下がる地形であるため最深部とは考えられないがＴ．Ｐ．値は、＋1.6ｍを測る。従って、層序から考えると、自然流路０２は、この下層の流路の最終の小さな流れであり、左岸の堆積層である青灰色シルトは、下層の流路の中洲状のものと考えられる。

遺物は、上下両方の砂層から出土している。下層の黄灰色砂からは、第７図に示す１～４の土器と、上層の淡黄灰色荒砂からは、５，６，８～11の土器と、７の土偶が出土した。　　（山上）



第７図　縄文時代遺構面自然流路０２出土遺物実測図

第2節　弥生時代

弥生時代と推定される遺構面は、約＋4.2m前後に存在する第XIX層上面から約＋5.4m前後に存在する第XII層上面まで約1.2mの間に7面のベース面を確認した。

前期に相当すると思われる遺構面は、1面存在し、第XIX層上面（弥生時代第1遺構面）にピット群及び溝などが検出されている。中期（弥生時代第2、3遺構面）、弥生時代第3遺構面には、XVII層上面に南北に長い溝が造られる。後期の遺構面は、4面存在しており、第XVI層上面に水田が造られ、それに水を供給したと推定されるしがらみを伴う溝が検出された（弥生時代第4遺構面）。次の段階になると、北流する自然流路が出現し、その流路からの洪水を防ぐために流路西側に土堤が築かれる（弥生時代第5遺構面）。そしてこれらが砂層及びシルト層によって埋った段階で南北に平行して走る溝4本（弥生時代第6遺構面）、そしてその上面に第XII層が堆積し東西方向の溝3本、自然流路2本などが検出された（弥生時代第7遺構面）。そしてそれらの溝、流路が砂層によって埋った時点において、その上面に古墳時代前期の方形周溝墓、建物などが造られている。（奥）

1）弥生時代第1遺構面　前期　（付図2、図版3－1）

弥生時代第1遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第XIX層（緑灰色粘土5G5/1）をベースに＋4.2m～＋4.4mに存在する。上層は、有機質層である黒色粘土が、厚さ0.05m～0.1mで堆積しているが、X222以北では認められず、オリーブ黒色粘土が堆積している。遺構としては、溝状遺構、土壙、ピット、落ち込み等が検出されている。遺物は、溝状遺構から、弥生時代前期の土器と石器が出土している。（山上）

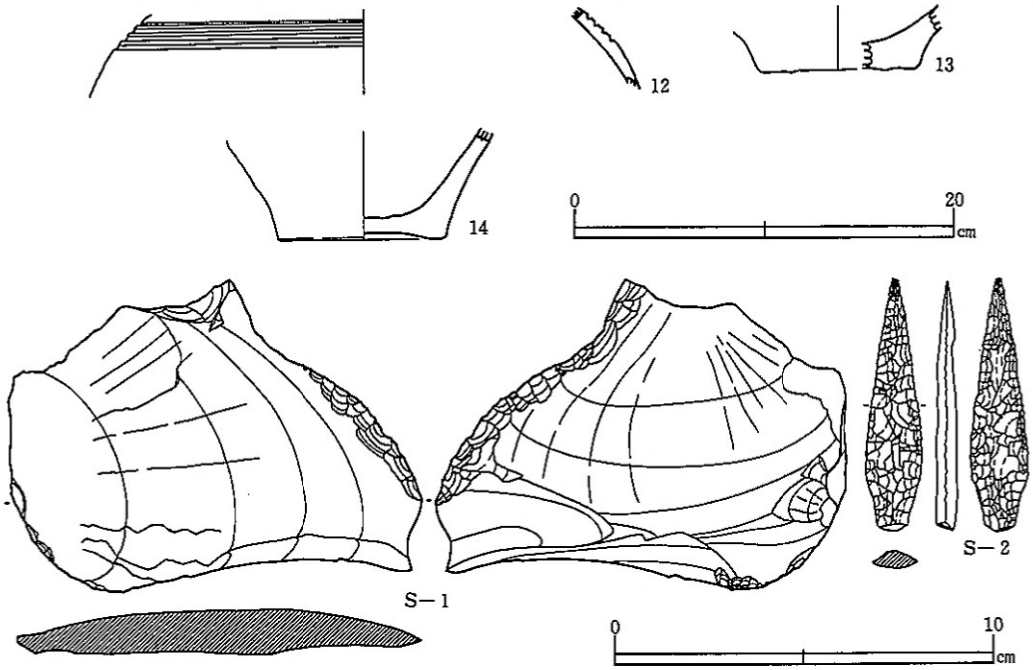
ＳＤ０１　ＳＤ０１は、３Ｄピットｄ－８区に存在し、東側の肩部のみ検出した。西側の肩部は、調査区外であるため確認はできなかった。埋土は、上層からオリーブ黒色粘土（５Ｙ2/2）、灰オリーブ色粘土（５Ｙ4/2）、オリーブ黒色粘土（7.5Ｙ3/2）、暗灰黄色（2.5Ｙ5/2）、黒灰色粘土（N3/0）の５層がレンズ状に堆積し、深さ約0.5mを測る。この溝は３Ｄピットのみに存在しており、他調査区では検出されなかったため、土壙の可能性もある。遺物は全く出土しなかった。

ＳＤ０２　ＳＤ０２は、Ｄトレンチのｅ－９区に存在し、北側の肩部のみ検出し、南側の肩部は調査区外であるため、確認できなかった。溝の埋土は、暗オリーブ灰色粘土（2.5ＧＹ4/1）の単一層である。ｅ－９区のみに存在し、他では検出されなかったため、ＳＤ０１同様、土壙の可能性もある。遺物は全く出土しなかった。（奥）

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、Ｅトレンチ北側ｇ－８，９区で検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.2m～0.3m、深さ約0.05m、長さ約2.4mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０４　ＳＤ０４は、Ｅトレンチ南側ｃ－７，８～ｅ－７，８区で検出されたほぼ南東から北

西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、ゆるやかなU字状を呈する。幅約10m～10.5m、深さ0.3mを測り、埋土は、黒色粘土である。遺物は、埋土中より、第８図に示す４条のヘラがき沈線を施す壺形土器の肩部の破片（12）と、これと同一土器と思われる底部（13）が出土し、また、基部の欠損した有茎式石鏃（Ｓ－２）と二次加工のある剥片（Ｓ－１）が出土している。



第８図　弥生時代第１遺構面ＳＤ０４他出土遺物実測図

ＳＤ０５　ＳＤ０５は、Ｅトレンチ南側ｆ－７，８区西側で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m～0.3m、深さ約0.05m、長さ約６ｍを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＤ０６　ＳＤ０６は、７Ｅピット南西側で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m、深さ約0.02m、長さ約0.8mを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＤ０７　ＳＤ０７は、Ｅトレンチ南東端ｆ－８区で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いU字状を呈する。幅約0.9m～1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＤ０８　ＳＤ０８は、Ｅトレンチ南東端から８Ｅピット北西端で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.3m～0.4m、深さ約0.05mを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＤ０９　ＳＤ０９は、８Ｅピット南東側で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約0.2m、深さ約0.03m、長さ約1.6mを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＤ１０　ＳＤ１０は、８Ｅピット東側で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。

断面は、U字状を呈する。幅約0.1m～0.2m、深さ約0.04m、長さ約0.6mを測り、埋土は、黒色粘土である。

ＳＫ０１　ＳＫ０１は、Ｅトレンチ北端ｇ－８，９区で検出された土壙である。径約1.2m～1.5m、深さ約0.3mを測る楕円形を呈し、断面は、直線的に落ち、底部は、平坦である。土壙内からは、東側壁に張りついた状態で木片が出土している。　(山上)

Ｐ０１～１３　Ｐ０１～１３は、Ｄ地区のｃ－９、ｄ－８，９、ｅ－８，９区で検出されたピット群である。幅約0.2m、深さ約0.1mを測る。平面形では、ほぼ円形もしくは、楕円形を呈する。埋土は、暗オリーブ灰色粘土（2.5ＧＹ4/1）の単一層であり、断面形状は擂鉢形を示している。平面土層および断面を観察した結果、柱跡が認められないので柱穴の可能性は薄い。　(奥)

Ｐ１４～１７　Ｐ１４～１７は、Ｅトレンチ北側中央から西側にかけて検出されたピットである。径約0.3m～0.5m、深さ約0.05mを測る楕円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

Ｐ１８　Ｐ１８は、４Ｅピット北西端で検出されたピットである。径約0.4m、深さ約0.2mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

Ｐ１９　Ｐ１９は、３Ｅピット中央部で検出されたピットである。径約0.3m、深さ約0.1mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

Ｐ２０～２４　Ｐ２０～２４は、６Ｅピットで検出されたピットである。径約0.2m～0.4m、深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。Ｐ２１～２４は、南東から北西にかけて直線に並ぶ。

Ｐ２５～５８　Ｐ２５～５８は、Ｅトレンチｅ－７，８区～ｆ－７，８区及び７Ｅピットで検出されたピットである。いずれも径約0.2m～0.4m、深さ約0.03mを測るほぼ円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、黒色粘土である。これらのピットは、不規則に配置する。　(山上)

落ち込み０１～０４　落ち込み０１～０４は、Ｄ地区のｃ－９、ｄ－８、ｅ－８，９区で検出された落ち込みである。幅約１m～1.2m、深さ約0.1m～0.15mを測る。平面形では、円形もしくは、楕円形を呈する。埋土は、暗オリーブ灰色粘土（2.5ＧＹ4/1）の単一層であり、断面形状は擂鉢形を示している。　(奥)

落ち込み０５　落ち込み０５は、１Ｅピット北西端で検出され、円弧を描く平面形を呈するが、全体の形は、調査区外に広がるため不明である。深さは、現状では約0.1mを測る。断面は、緩やかに弧を描いて下がり、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み０６　落ち込み０６は、３Ｅピット北側で検出され、径約0.8m×1.5m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、擂鉢状を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み０７　落ち込み０７は、３Ｅピット中央部で検出され、径約1.3m、深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈する。断面は、擂鉢形を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み０８　落ち込み０８は、８Ｅピット中央部で検出され、一辺約0.5m、深さ約0.04m

を測る三角形を呈する。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み０９　落ち込み０９は、８Ｅピット中央部で検出され、径約0.4m×1.4m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み１０　落ち込み１０は、８Ｅピット南西側で検出され、径約0.7m×1.0m以上、深さ約0.06mを測る楕円形を呈し、南側で、調査区外に延びる。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み１１　落ち込み１１は、８Ｅピット南西端で検出され、径約0.8m、深さ約0.06mを測る円形を呈する。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、黒色粘土である。

落ち込み１２　落ち込み１２は、７Ｅピット西側で検出され、径約0.8m×2.5m、深さ約0.03mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黒色粘土である。　(山上)

２）弥生時代第２遺構面　中期　（第９図、図版３－２）

弥生時代第２遺構面は、Ｅトレンチ南側Ｘ222以南でのみ検出された第Ⅷ層（黒色粘土10Ｙ2/1）をベースに、＋4.4m～＋4.5mに存在する。上層は、オリーブ黒色粘土が厚さ0.2m～0.3mで堆積している。遺構としては、溝状遺構、ピット、落ち込み等が検出されている。遺物は、出土していない。　(山上)

ＳＤ０１　ＳＤ０１は、Ｅトレンチｄ－７区～ｅ－７区にかけて検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.6m～0.7m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。この溝は、北側で北西に向きを変え、調査区外に延びる。

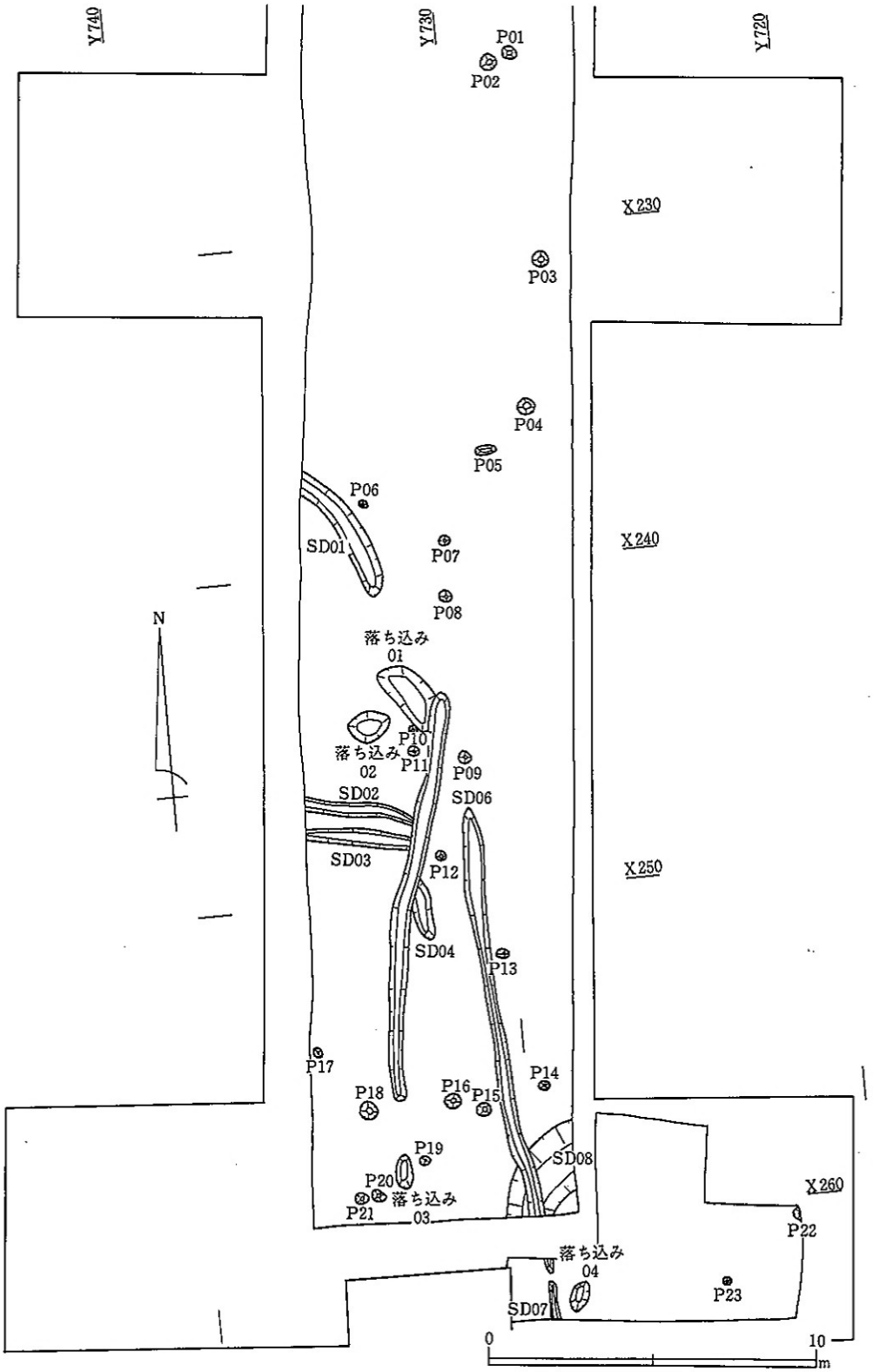
ＳＤ０２　ＳＤ０２は、Ｅトレンチｅ－７区南側で検出された東西方向にやや蛇行して走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.05mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、Ｅトレンチｅ－７区南側、ＳＤ０２の約0.4m南側で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.06mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０４　ＳＤ０４は、Ｅトレンチｆ－７区北側で検出された、ほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.6m、深さ約0.07mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０５　ＳＤ０５は、Ｅトレンチｅ－７区～ｆ－７区で検出された南北方向にやや蛇行して走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０６　ＳＤ０６は、Ｅトレンチｅ－７区南端からｆ－７区にかけて検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.6m、深さ約0.06mを測



第９図　弥生時代第２遺構面平面図

り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

ＳＤ０７　ＳＤ０７は、８Ｅピット南西端で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.2m～0.3m、深さ約0.04mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。この溝は、ＳＤ０６の延長線上に位置し、本来同一の遺構であるものと考えられる。

ＳＤ０８　ＳＤ０８は、Ｅトレンチ南東端ｆ－８区で検出された南西から北東方向に走る溝状遺構である。幅約1.4m～2.0m、深さ約0.1mを測り、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

Ｐ０１～２３　Ｐ０１～２３は、ｃ－７，８区～ｇ－８区にかけて検出されたピットである。径約0.2m～0.6m深さ約0.1mを測るほぼ円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

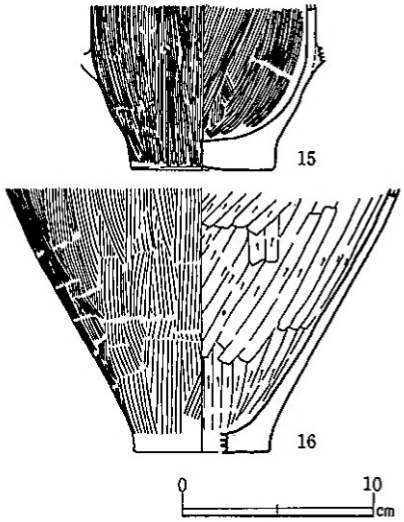
落ち込み０１　落ち込み０１は、ｅ－７区で検出された径約1.1m×2.1m、深さ約0.07mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み０２　落ち込み０２は、ｅ－７区で検出された径約1.0m×1.3m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。

落ち込み０３、０４　落ち込み０３、０４は、いずれも、径約0.5m×1.0m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、オリーブ黒色粘土である。　(山上)

３）弥生時代第３遺構面　中期　（付図３、図版４）

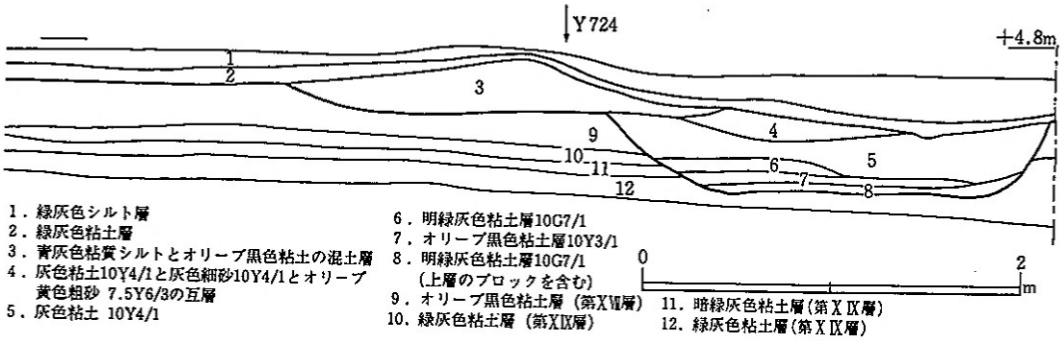
弥生時代第３遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第Ⅶ層（オリーブ黒色粘土10Ｙ3/1）をベースに＋4.3m～＋4.6mに存在する。上層は、黄灰色砂及びこれが変化したものと考えられる緑灰色粘質土が厚さ0.1m～0.2mで堆積している。遺構としては、Ｄトレンチ南端からＥトレンチ中央部にかけて溝状遺構が１本及び自然流路、ピット、落ち込み等が検出されている。遺物は、この溝状遺構内から土器、木製品が出土し、ベース層であるオリーブ黒色粘土からも（第10図16）出土している。　(山上)



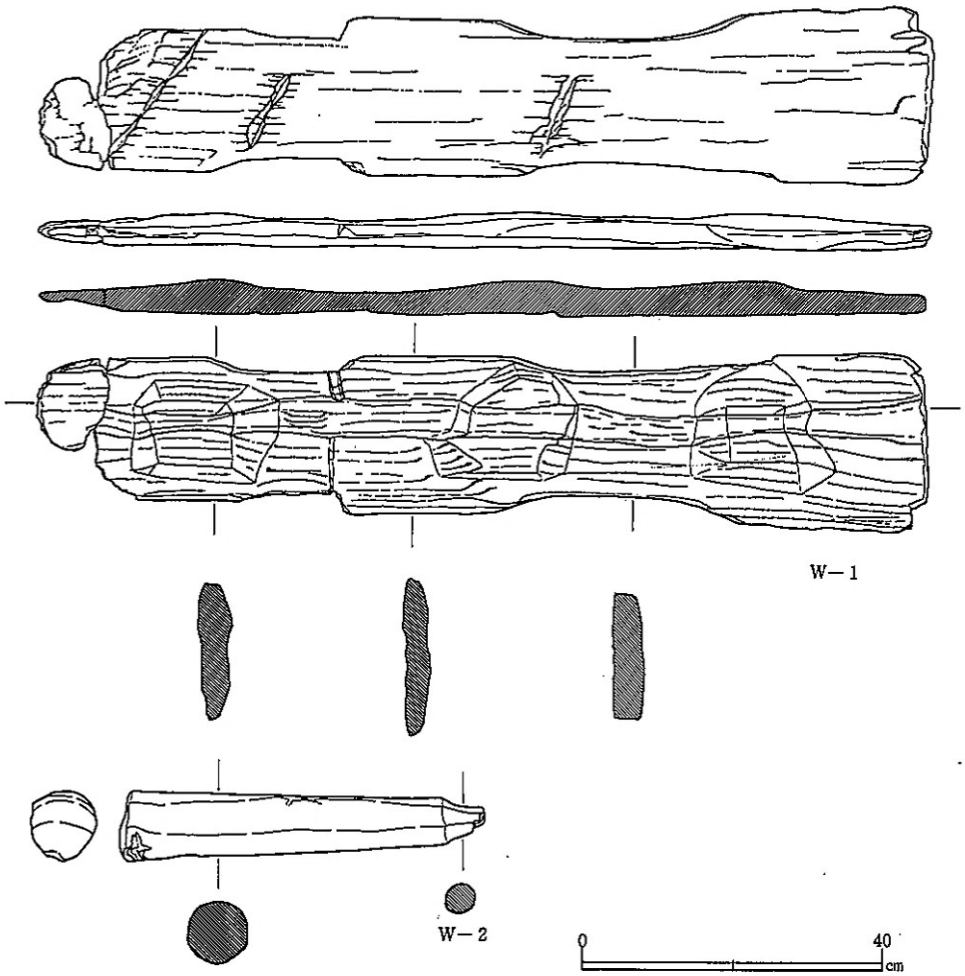
第10図　弥生時代第３遺構面
出土遺物実測図

ＳＤ０１（第11図）　ＳＤ０１は、３Ｄピット、Ｅトレンチｇ－８区及びｊ－８区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約1.4m～3.5m、深さ約0.1m～0.3mを測り、埋土は、第11図土層断面図に示すように基本的には灰色粘土（10Ｙ4/1）である。遺物は、Ｅトレンチｊ－８区でこの埋土中より第10図に示すコップ形土器あるいは鉢形土器と思われる把手の付く土器（15）と鍬の未製品（Ｗ－１）、中央部で折損し半分になった杵（Ｗ－２）が出土している。

自然流路０１　自然流路０１は、Ｅトレンチｄ－７，８区～ｅ－７，８区で検出された南東から北西方向にやや弧を描いて流れ、幅約2.0m～5.5m、深さ約0.1m～0.2mを測る。断面は、Ｕ字状を呈する。幅、深さから見ると一時的な流水があったものと考えられ、南東側に見られる浅い



第11図　弥生時代第３遺構面ＳＤ０１土層断面図

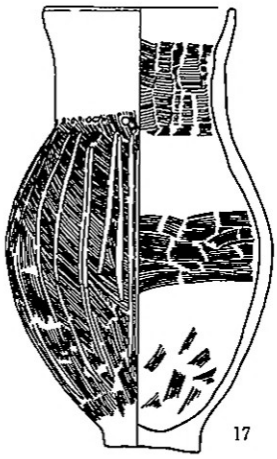


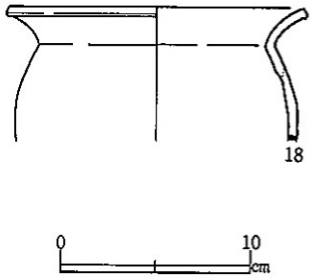
第12図　弥生時代第３遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図

溝状のものも同一の遺構の中で流路を変えた痕跡と考えられる。　(山上)

4）弥生時代第4遺構面　後期
（付図4、図版5，6）

弥生時代第4遺構面は、Eトレンチ北東端と南側で検出された第XVI層（緑灰色粘土10GY5/1、暗青灰色粘土10BG3/1）と第XVII層をベースに＋4.3m～＋4.9mに存在する。遺構としては、これらのベース層上にD地区では、しがらみが検出された溝状遺構と、E地区では、大畦畔、小畦畔が検出され弥生時代後期の水田面と考えられる。遺物としては、Eトレンチ南側で、上層に堆積している浅黄色砂から第13図に示す土器（17、18）が出土している。(山上)



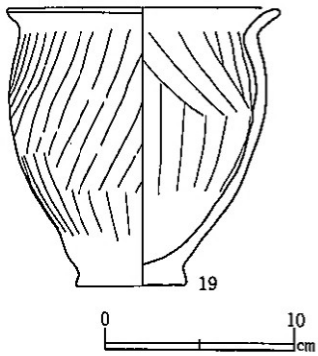


第13図
弥生時代第4遺構面
出土遺物実測図

ＳＤ０１（第16図、図版5）　ＳＤ０１は、Dトレンチの西南端、e－8，9区において検出された溝である。溝は、幅約3.5m、深さ約0.2m～0.3mを測り、溝底のレベル差から、溝は南東から北西方向に流れていたものと推定される。埋土は、オリーブ黒粘質シルト層（10Y3/1）である。またこの溝内においてしがらみを検出した。

しがらみに伴なうと思われる杭列は、約1.5m離れて2列存在する。杭は、粘土上面から約0.2m程度残存しており、粘土に打ち込まれた杭の深さは、約0.05m～0.35m程度で、杭は2列とも溝とほぼ直角方向に打ち込まれている。

しがらみ上部の構造は、杭列にそって長さ約1m前後、径約0.03m～0.05mの小枝を横にならべて水を堰き止めている。これにより堰き止められた水は、分水路が検出されていないのでどの方向に延びていったかは不明であるが、この付近の水田に供給されたことは間違いない。また遺物は西側の杭列付近から甕（第14図19）が出土している。



第14図　弥生時代第4遺構面
ＳＤ０１出土遺物実測図

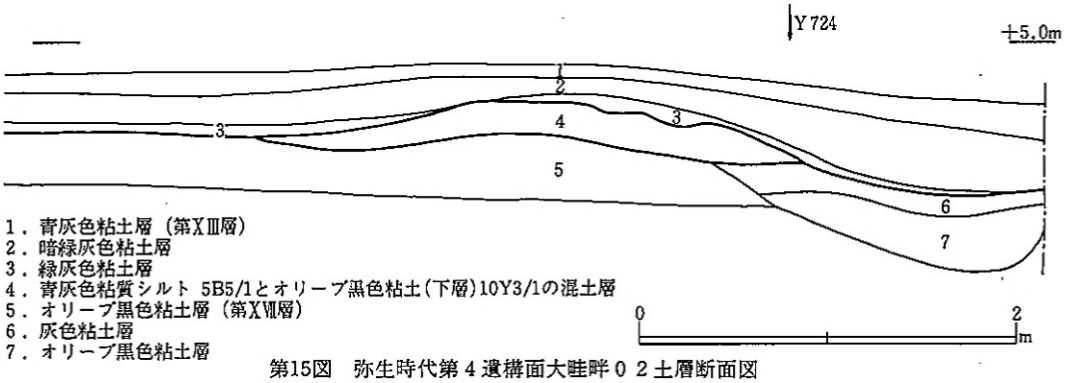
D地区においてこの遺構面は、ほとんどが上面の自然流路によって破壊されているため、不明な点が多いが、E地区の状況から水田面であった可能性が高い。　(奥)

ＳＤ０２　ＳＤ０２は、Eトレンチe－7，8区で検出されたほぼ東西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約2.0m、深さ0.3mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、Eトレンチ南西端f－7区で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈する。幅約1.0m、深さ0.1mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

大畦畔０１　大畦畔０１は、１Ｅピット東側で南北方向に検出され、幅約2.5m以上、高さ約0.2mを測る。長さ約６ｍに渡って検出され、両端は、調査区外に延び、東側は、トレンチ調査部の土層観察用畦として残していたため検出できなかった。南側では、方形周溝墓保存地区を隔てて方向は少しずれるが、大畦畔０２と接続して同一遺構になる可能性がある。

大畦畔０２（第15図、図版６－１）　大畦畔０２は、Ｅトレンチｊ－８区で南北方向に検出され、幅約1.4m～2.0m、高さ約0.2mを測る。長さ約12mに渡って検出され、南側は、方形周溝墓保存地区に延びる。西側で、小畦畔０１と直交して接続している。この大畦畔は、青灰色シルトと第Ⅷ層の混土の盛土である。



1．青灰色粘土層（第ⅩⅢ層）
2．暗緑灰色粘土層
3．緑灰色粘土層
4．青灰色粘質シルト 5B5/1とオリーブ黒色粘土(下層)10Y3/1の混土層
5．オリーブ黒色粘土層（第ⅩⅦ層）
6．灰色粘土層
7．オリーブ黒色粘土層

第15図　弥生時代第４遺構面大畦畔０２土層断面図

小畦畔０１　小畦畔０１は、Ｅトレンチｊ－８区中央部で東西方向に検出され、幅約0.7m～0.9m、高さ約0.05mを測る。長さ約4.5mに渡って検出されたが、西側で小畦畔０２に向かって延びるが約１ｍ程度のずれがあり、土層観察用畦内に南北方向に延びる畦畔が想定される。

小畦畔０２　小畦畔０２は、３Ｅピット中央部東側で東西方向に検出され、幅約0.7m～0.9m、高さ約0.1mを測る。長さ約4.5mに渡って検出され、西側で直交して小畦畔０４、０５に接続し、約0.5m南側にずれて小畦畔０３に接続する。

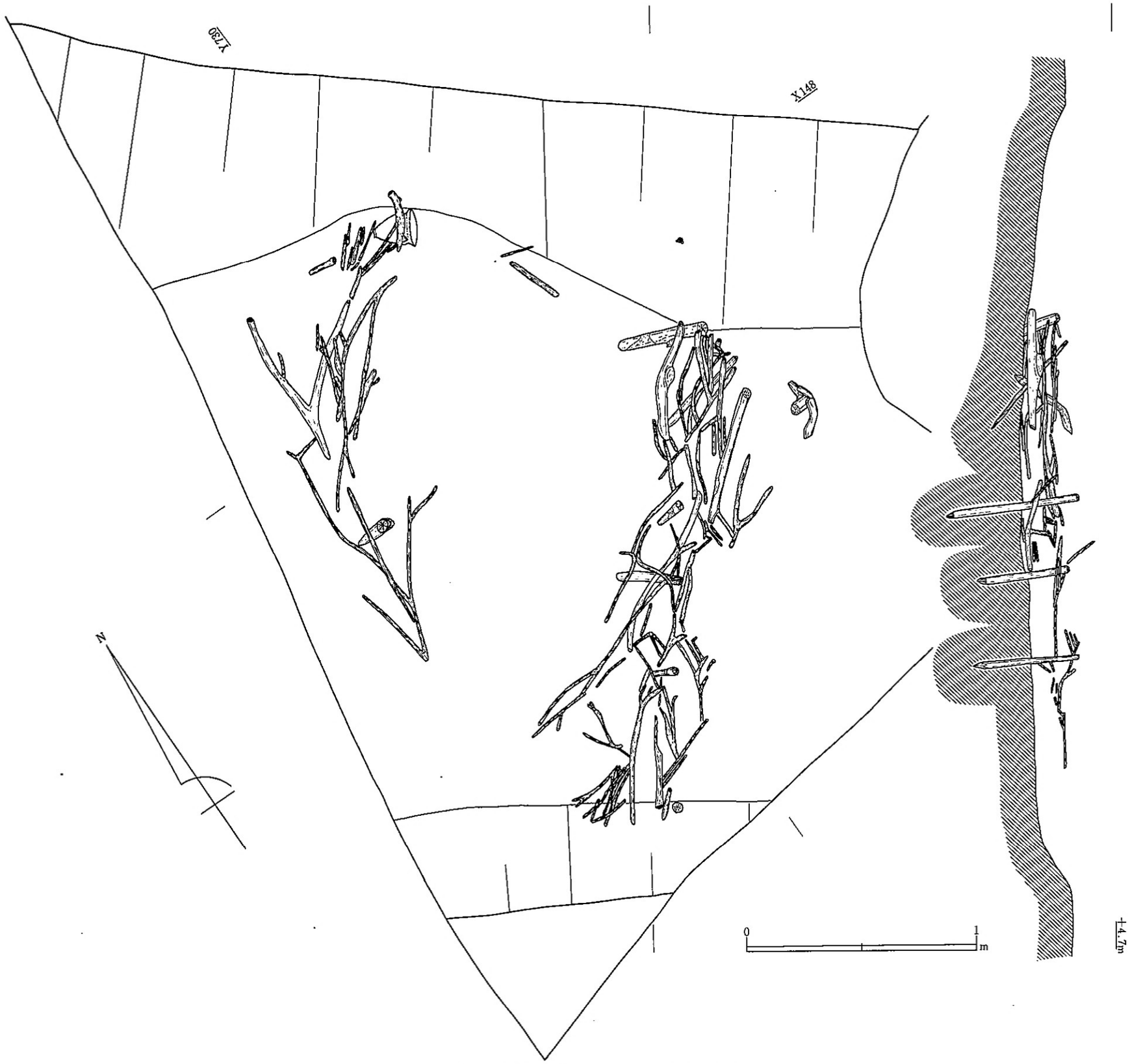
小畦畔０３　小畦畔０３は、３Ｅピット中央部西側で東西方向に検出され、幅約0.7m～1.0m、高さ約0.05mを測る。長さ約２ｍに渡って検出され、西側は、調査区外に延びる。

小畦畔０４　小畦畔０４は、３Ｅピット中央部北側で南北方向に検出され、幅約0.7m～0.8m、高さ約0.05mを測る。長さ約４ｍに渡って検出され、北側は、調査区外に延び、南側は、小畦畔０５と直線的に接続する。

小畦畔０５　小畦畔０５は、３Ｅピット中央部南側で南北方向に検出され、幅約0.6m～0.7m、高さ約0.1mを測る。長さ約６ｍに渡って検出され、南側は、調査区外に延びる。

小畦畔０６　小畦畔０６は、Ｅトレンチｃ－８区で南北方向に検出され、幅約0.4m～0.5m、高さ約0.04mを測る。長さ約６ｍに渡って検出され、南側で小畦畔０７と直交して接続する。北側は、流水によって削平を受けている。

小畦畔０７　小畦畔０７は、ｃ－７，８区南側で東西方向に検出され、幅約0.4m～0.7m、高さ約0.04mを測る。長さ約8.5mに渡って検出されたが、その両端は、流水による削平を受け、



第16図　弥生時代第４遺構面ＳＤ０１平面、立面図

検出できなかった。

小畦畔の盛土を構成する土は、すべてベース層であるオリーブ黒色粘土である。　　(山上)

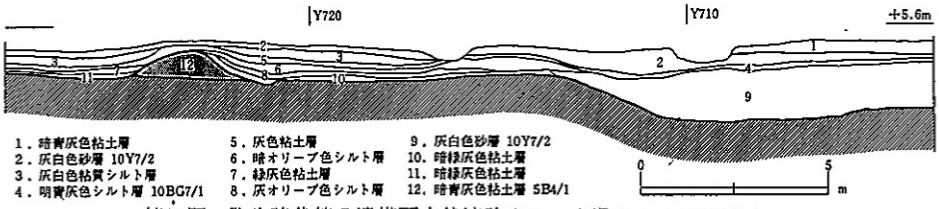
5）弥生時代第5遺構面　後期　（付図5、図版7）

弥生時代第5遺構面は、D地区では約＋4.6m前後に存在する第XV層の灰オリーブ粘質シルト層（7.5Y6/1）を遺構面とする。上層は、自然流路01よりオーバーフローしたシルト層が約0.4m堆積している。そのシルト層内において第19図44、45に示す土器が出土している。

E地区においては、古墳時代第1遺構面に存在する方形周溝墓を保存したため、それ以下土層の対応が困難であることと、遺構が切拡げ部の2E、4Eピットのみで検出されたため、E地区南側で堆積している約＋4.8mに存在する黄灰色砂が変化したと考えられる約＋4.05mにある緑灰色粘土上面に土堤が築かれていることを確認したのみである。遺構は、自然流路とそれに伴うと推定される土堤状遺構である。　　(奥)

土堤01（第17図）　土堤01は、3Dピット、Dトレンチe－8区、Eトレンチg－8区西側、4Eピットで検出されたほぼ南北に延びる土堤状遺構である。3Dピットでは、幅約2.8m～3.4m、高さ約0.8mを測る。Dトレンチe－8区では、土堤の東側の一部を検出したのみで大半は、調査区外に延びる。現状では、幅約2.2m以上、高さ約0.6mを測る。D地区では、長さ約16mを測り、その両端は、調査区外に延び、南側でE地区の土堤01に続くものと考えられる。Eトレンチg－8区では、幅約2.5m～3.0m、高さ約0.8mを測り、南側は、弥生時代第7遺構面の自然流路01によって削平されている。4Eピットでは、幅約2.2m～3.8m、高さ約0.5mを測る。4Eピット以南では、調査区外に延び、6Eピットより東側へ方向を変える。盛土は、下層のオリーブ黒色粘土、緑灰色粘土の混土により構成されている。

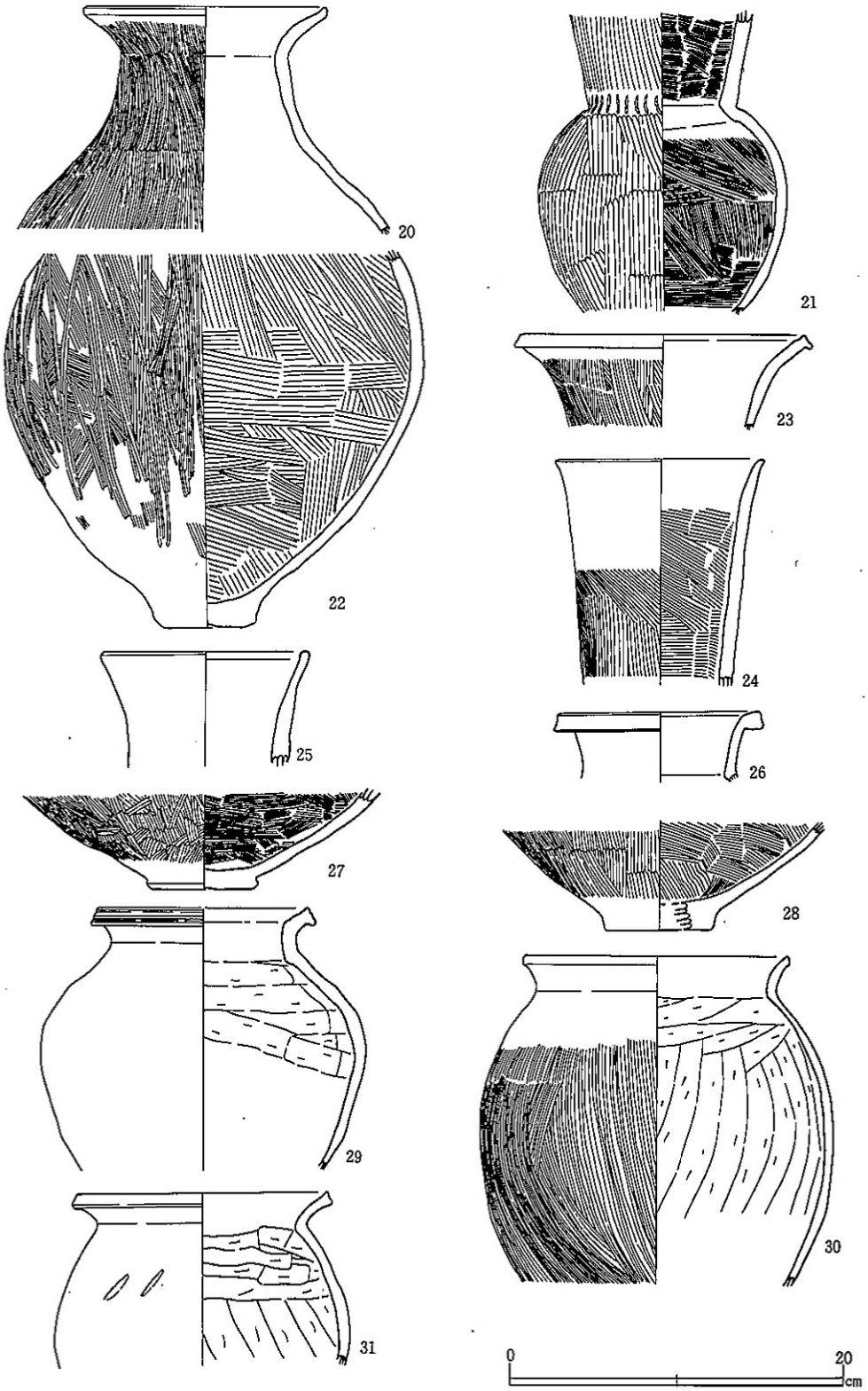
土堤01は、同一遺構面の東側に流れる自然流路01と1m～5mの間隔を開けて平行して構築されている。これは、自然流路の左岸に対する護岸と考えられ、当時の生活遺構は、西側に広がる可能性が高い。　　(山上)



第17図　弥生時代第5遺構面自然流路01、土堤01土層断面図

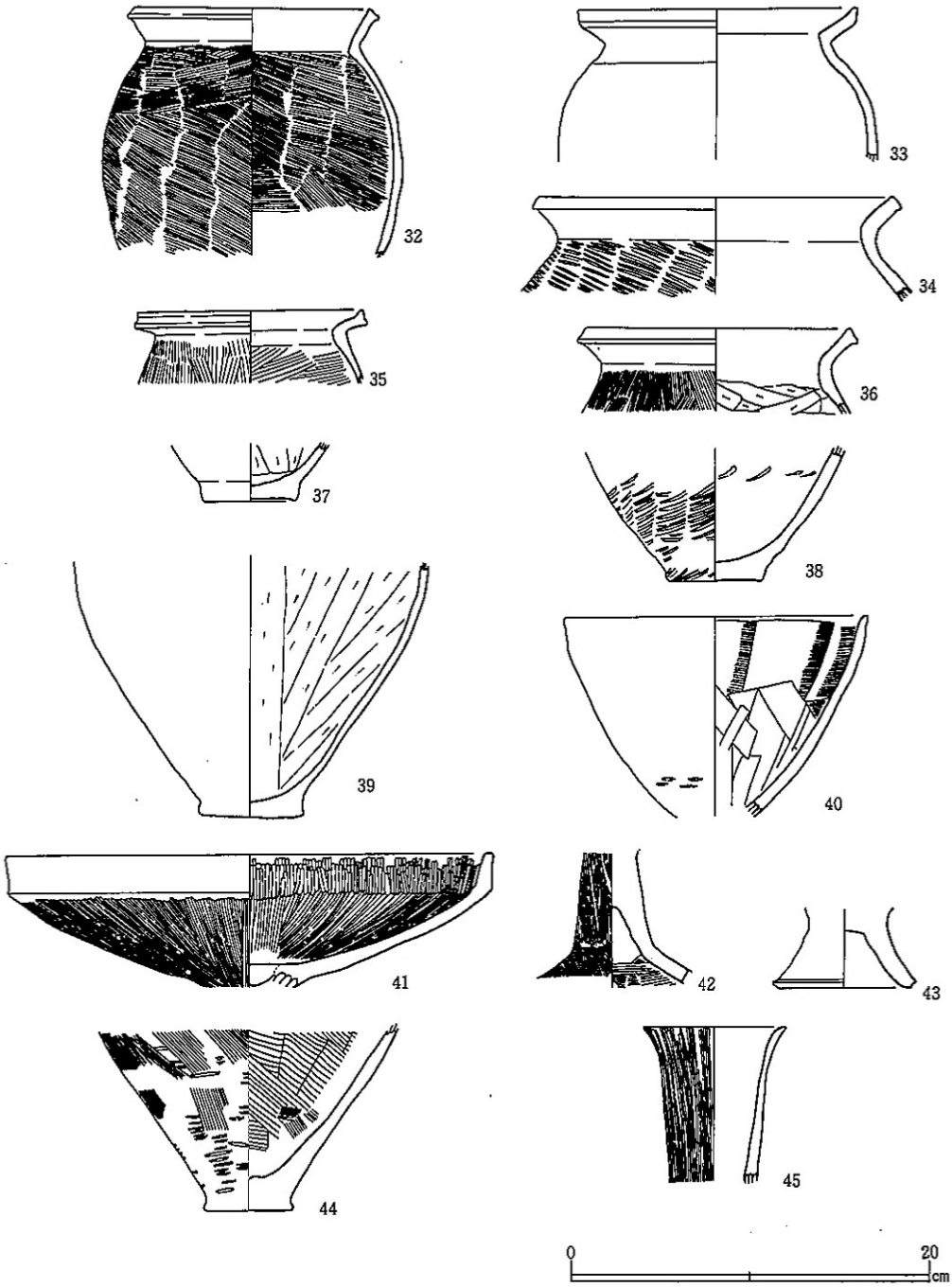
自然流路01　自然流路01は、Dトレンチ、1Dピット、4Dピット及び2Eピット、4Eピットにおいて検出された。自然流路01の西岸部は、D地区南半部、2Eピット、4Eピットで検出されているが、東側部は、4Dピットの北端部で一部が検出されたのみである。流路の幅はそれらより推定して19m前後と推定され、深さは西岸部から約1.2mを測る。

流路は、二度の画期があり、流水堆積により、遺構面の上層約0.3mをシルト層が堆積し、自

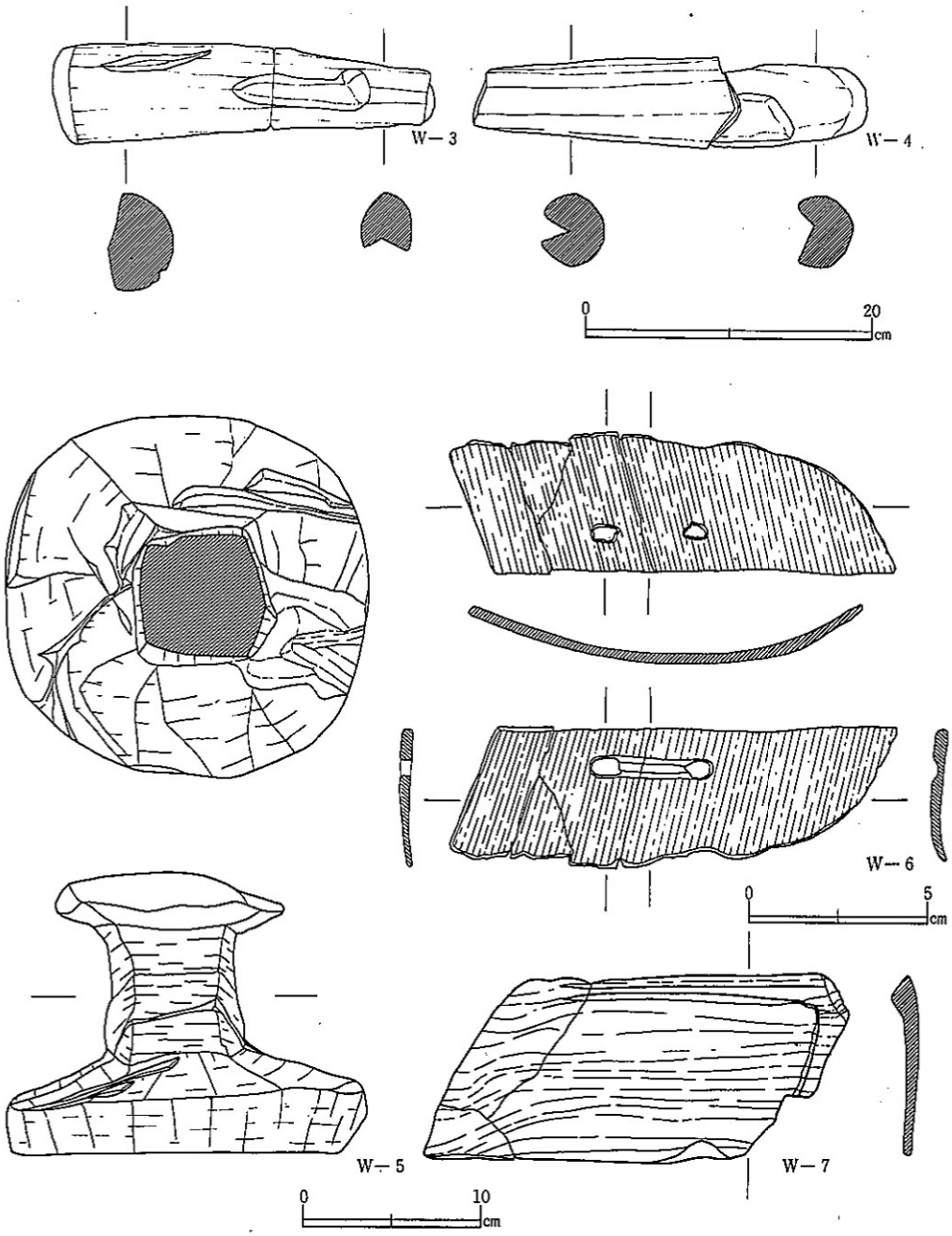


第18図　弥生時代第５遺構面自然流路０１出土遺物実測図

然流路については、砂層が堆積した後、流路の形を残した状態で約0.1m～0.2mの暗青灰色粘土層（10BG4/1）がその上面を被う。その後にまた砂層が堆積し、最後の流路の流れを流路中央部において南北に流れているのを確認している。また自然流路は、南から北に向って流れていたものと推定される。



第19図　弥生時代第５遺構面自然流路０１他出土遺物実測図



第20図　弥生時代第５遺構面自然流路０１出土遺物実測図

出土遺物（第18～20図）は、自然流路堆積下層の黄灰色砂層中より、壺形土器（20～28)、甕形土器（29～39)、高坏形土器（42～43)、鉢形土器（40）の土器と、木製品として杵（Ｗ－３、４）高坏状木製品（Ｗ－５)、木包丁（Ｗ－６)、不明木製品（Ｗ－７）などが出土している。上層に堆積する灰白色砂層中より高坏形土器が出土したのみで他はなかった。 自然流路内より出土した遺物は、 ローリングを受けているものは少なく、 近接他に居住域があったものと推定さ

れる。　(奥)

6）弥生時代第6遺構面　後期　（付図6、図版8－1）

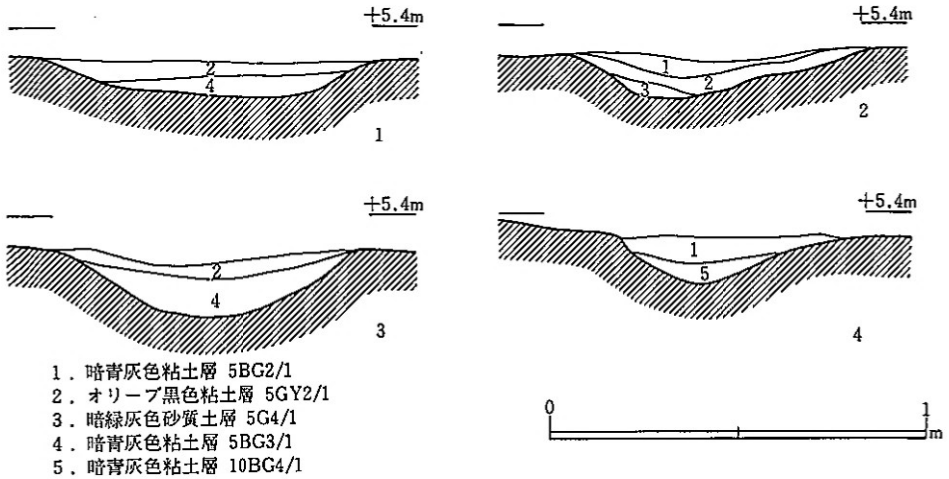
弥生時代第6遺構面は、D地区では＋6.2m前後に存在する。第X層黄灰色シルト層上面を遺構面とする。上層には、上面が弥生時代第7遺構面と古墳時代第1遺構面のベース面となる第XI層のオリーブ黄色粘土層（5Y6/4）が存在する。E地区においては、＋5.0m前後に存在する緑灰色粘土がベース面と推定されるが、大半が削られ、遺構が検出できたのは、4Eピット、6Eピットのみである。遺構は、D地区においては、近接してほぼ南北方向に延びる溝4本と、落ち込み3基、E地区では、溝4本を検出した。　(奥)

ＳＤ０１（第21図１）　ＳＤ０１は、D地区のX118、Y710の付近で収束し、そこからほぼ南に延びる溝である。幅約1.8m、深さ約0.1mを測る。4Dピット付近で幅約0.7m、深さ約0.05mと急激に細くなっている。埋土は暗青灰色粘土層（5BG2/1）とオリーブ黒色粘土層（5GY2/1）が凹レンズ状に堆積している。

ＳＤ０２（第21図２）　ＳＤ０２は、Dトレンチの北西端X103.5、Y712の付近からほぼ東南へ延びていたものが、X115、Y109.5の付近で屈曲し西南に向きを変え、大きく西にカーブを描き、また南へ向きを変えて延びていく。幅約1.5m、深さ約1.2mを測り、埋土は上層に暗青灰色粘土層（5BG3/1）とオリーブ黒色粘土層（5YG2/1）の2層が堆積している。

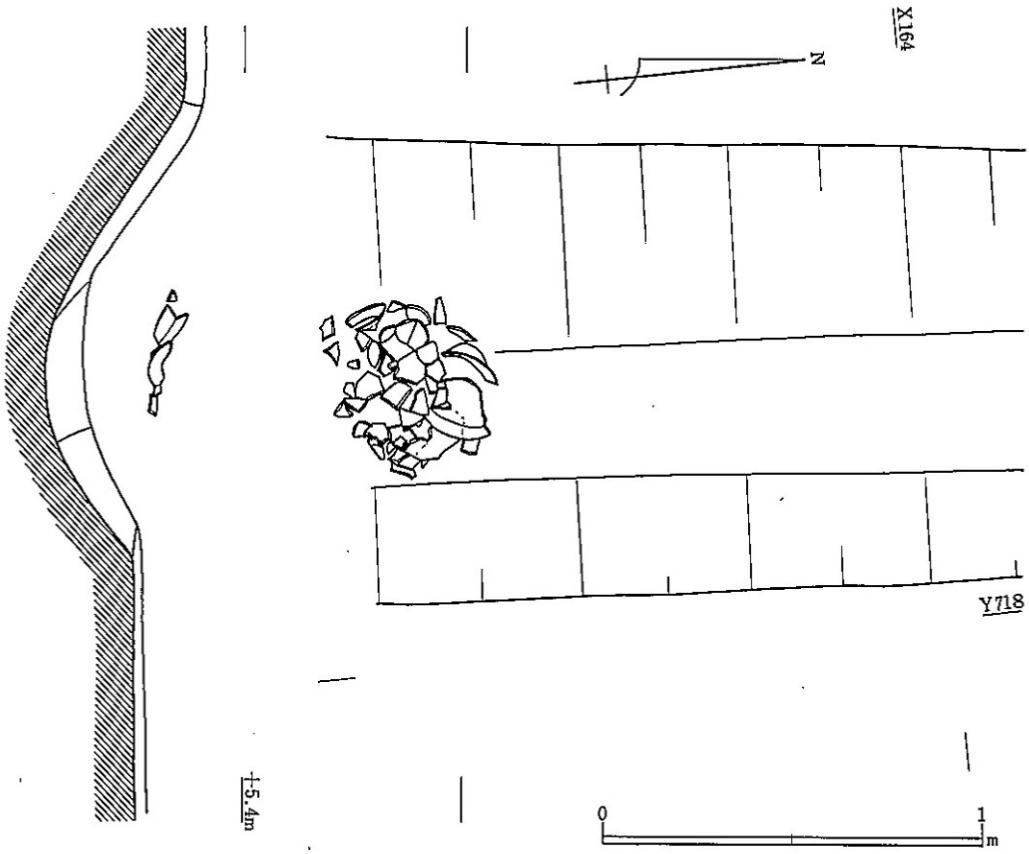
ＳＤ０３（第21図３）　ＳＤ０３は、D地区のa－8，9、c－9、d－9、e－8区で検出された。北西より、東南に延びる溝である。溝の断面の形状は、ゆるやかなU字状を呈し、幅約0.8m、深さ約0.12mを測る。埋土は、暗青灰色粘土層（5BG3/1）の上に、オリーブ黒色粘土（5GY2/1）が、ほぼ水平堆積している。Y140付近で上層の溝により切られている。e－8区で、溝が狭くなっている。遺物の出土は、見られなかった。

ＳＤ０４（第22図、図版8－2）　ＳＤ０４は、D地区のa－8，9、c－9、d－9、e－8、



第21図　弥生時代第6遺構面ＳＤ０１～ＳＤ０４土層断面図

E地区のｇ－９区で検出された。D地区においては、ＳＤ０３とほぼ平行に存在し、北西より東南に延びる溝である。溝の断面の形状は、U字状を呈し、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土（第21図）は上面から暗青灰色粘土層（５ＢＧ2/1)、暗青灰色粘土層（10ＢＧ4/1）がレンズ状に堆積している。 (奥)



第22図　弥生時代第６遺構面ＳＤ０４遺物出土状況図

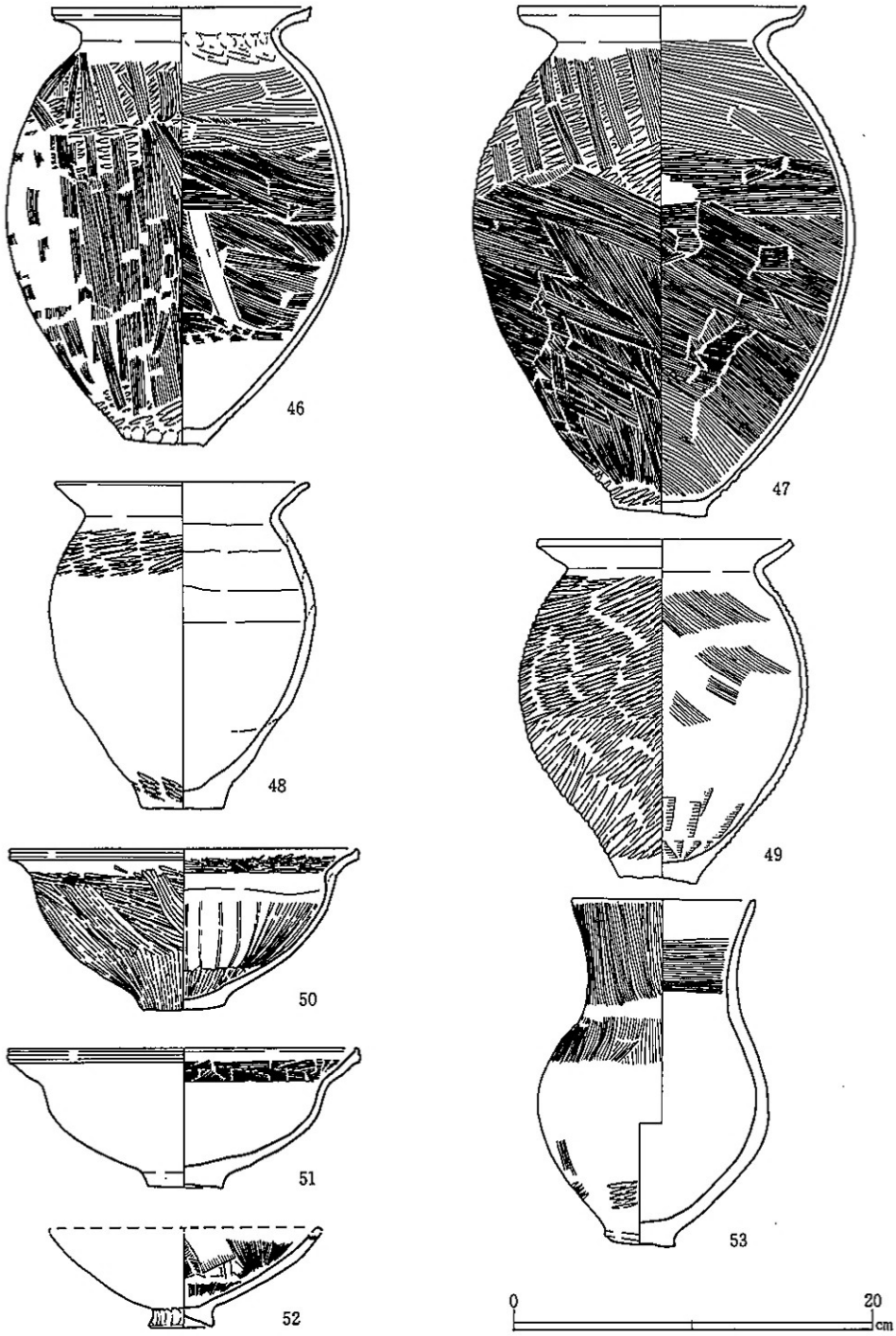
E地区においては、幅約1.2m、深さ約0.4mを測り、断面はU字状を呈する。Eトレンチ北側より約４mのみ残存し、そこから南側は、上層の自然流路０１によって削平されている。埋土は、暗青灰色粘土である。遺物は、溝状遺構中央部から第23図に示す甕形土器（46～49)、鉢形土器（50～52）が溝状遺構の底から第22図遺物出土状況図に示すようにやや浮いた状態で一括して出土した。 (山上)

ＳＤ０５　ＳＤ０５は、４Ｄピットにおいて検出された溝である。溝は４Ｄピットのほぼ中央部において収束しほぼ南方向へと延びるが、E地区では検出されなかった。幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。埋土は２層に分けることが出来、上層から暗青灰色粘土層（５BG3/1)、オリーブ黒色粘土層（５ＧＹ2/1）がレンズ状に堆積している。 (奥)

ＳＤ０６　ＳＤ０６は、４Ｅピット東側で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、U字状を呈し、両端は、調査区外に延びる。幅約0.6m～1.0m、深さ約0.1mを測り、埋

土は、暗青灰色粘土である。

ＳＤ０７　ＳＤ０７は、４Ｅピット中央部で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。南側は、調査区外に延び、北側は、やや東側に広がって収束する。幅



第23図　弥生時代第６遺構面ＳＤ０２、０４出土遺物実測図

約1.1m～1.5m、深さ約0.3mを測り、埋土は、暗青灰色粘土である。

ＳＤ０８　ＳＤ０８は、４Ｅピット西側で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈し、東側でＳＤ０７に続く。幅約0.8m～1.7m、深さ約0.2mを測り、埋土は、暗青灰色粘土である。

ＳＤ０９　ＳＤ０９は、６Ｅピットで検出された南東から北西方向に直線的に走る溝状遺構である。幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。埋土は、上層から暗緑灰色粘土、暗オリーブ灰色粘土、緑灰色シルトの順である。遺物は、出土しなかった。　（山上）

落ち込み０１　４Ｄピットに存在する落ち込みである。西側は調査区外にあり、形状は楕円形を呈し、断面は、ゆるやかなＵ字状を示す。埋土は２層で、暗青灰色粘土層（５ＢＧ3/1）の上にオリーブ黒色粘土（５ＧＹ2/1）がレンズ状に堆積している。長径約4.5m以上、短径約2.5m、深さ約0.2mを測る。

落ち込み０２、０３　Ｄ地区ｅ－８区に存在する落ち込みである。２基並んで存在し、西側は調査区外へと延びる。形状は円形と思われ、径約1.0m、深さ約0.3mを測る。埋土は２層で暗青灰色粘土層（５ＢＧ3/1）の上にオリーブ黒色粘土（５ＧＹ2/1）がレンズ状に堆積している。（奥）

７）弥生時代第７遺構面　後期　（付図７、図版９－１）

弥生時代第７遺構面は、ベース面の起伏が激しくＤトレンチ北半部では、約＋5.5mに存在する第Ⅻ層のオリーブ黄色粘土層であるが、Ｄ地区南側より徐々に下がり、Ｅ地区北側では約＋5.２m前後に存在する暗オリーブ灰色粘土層（５ＧＹ4/1）がベース面となる。

Ｅ地区中央部付近からベース面は、約＋5.4mと上昇するが、Ｘ240付近からまた下がりはじめ、Ｅ地区南端では約＋5.1mに存在する緑灰色粘土上面となっている。

上層には、Ｄトレンチ北側ではＳＤ０１、０２のオーバーフローした白灰色シルト層（10Ｙ8/2）が堆積し、この上面が古墳時代第１遺構面のベース面となるが、Ｄ地区南半部からは白灰色シルト層が消滅し、第Ⅻ層が共通のベース面となる。

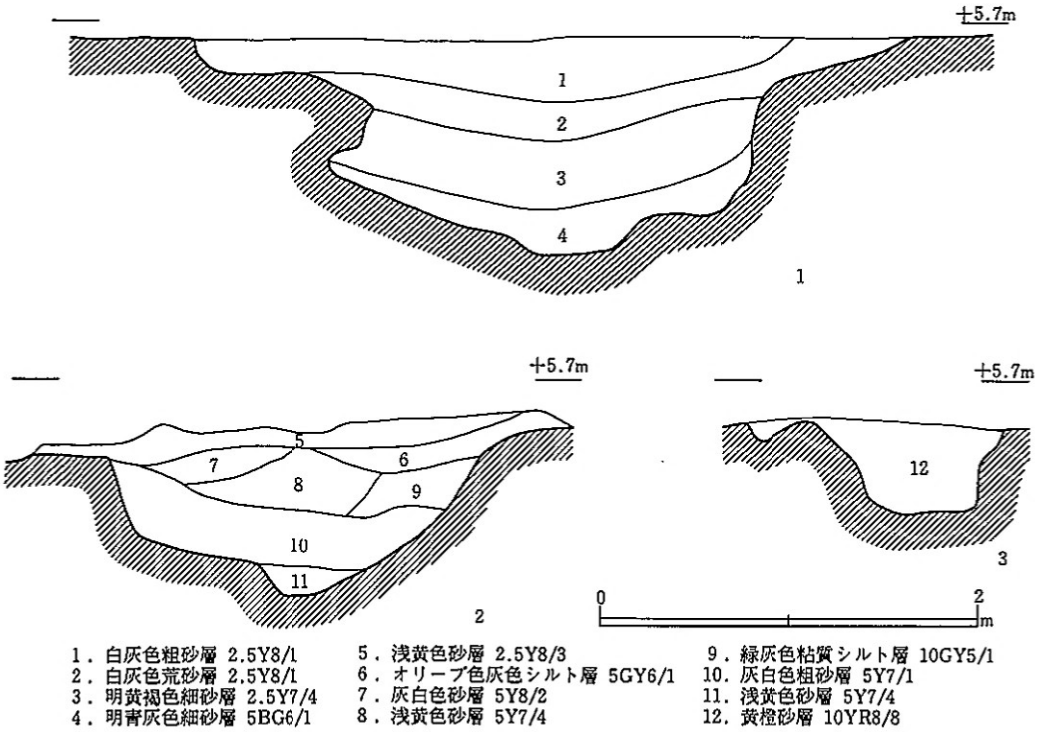
Ｅ地区北側においては、ベース面が下がり、自然流路０１のオーバーフローした青灰色シルト層が上層に約0.5m前後堆積している。南側になると、自然流路０１のオーバーフローした黄灰色砂層約0.2mが上層に存在し、その上に青灰色粘土が約0.2m前後、その上面が古墳時代第１遺構面となっている。

遺構は、Ｄ地区では溝３本、落ち込み５基、Ｅ地区では自然流路２本、溝２本、ピット２個、落ち込み２基を検出した。　（奥）

ＳＤ０１（第24図１）　ＳＤ０１は、Ｄ地区の北側端、ａ－８，９，10，１区で検出された東南から北西に延びる溝である。溝の断面の形状はＵ字状を呈し、幅約3.7m、深さ約1.1mを測る。埋土は、砂層と粘土がレンズ状に堆積している。遺物（第25図55）は土器の破片がまばらに入っているだけで図化できるものは１点だけであった。

ＳＤ０２（第24図２）　ＳＤ０２は、Ｄトレンチｂ－９，10区中央部付近で検出された東南から北西に延びる溝である。溝の断面の形状は、五角形に近い形を示し、幅約2.1m、深さ約0.9mを測る。埋土は、砂層、シルト及び粘土層が互層状に堆積している。遺物は溝西側上層より甕（第25図54）が出土している。

ＳＤ０３（第24図３）　ＳＤ０３は、Ｄ地区ｄ－８，９区で検出された溝である。溝はＤトレンチと４Ｄピット北西コーナー部付近からほぼ西方向に延びていたものが、ｄ区のほぼ中央部Ｘ140、



第24図　弥生時代第７遺構面ＳＤ０１～ＳＤ０３土層断面図

Ｙ720上で、北西方向に向きを変えている。そのためコーナー部が水圧のため丸く削り取られている。断面は、Ｕ字状を呈し幅約1.3m、深さ約0.5mを測り、３Ｄピットでは両肩部上面から約0.15m、深さ約0.2m程度水圧のため削り取られている。埋土は黄橙色砂層（10ＹＲ8/8）である。遺物は全く出土しなかった。（奥）

ＳＤ０４　ＳＤ０４は、Ｅトレンチｆ－７区～８Ｅピット南西端で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。幅約0.8m～1.0m、深さ約0.3mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

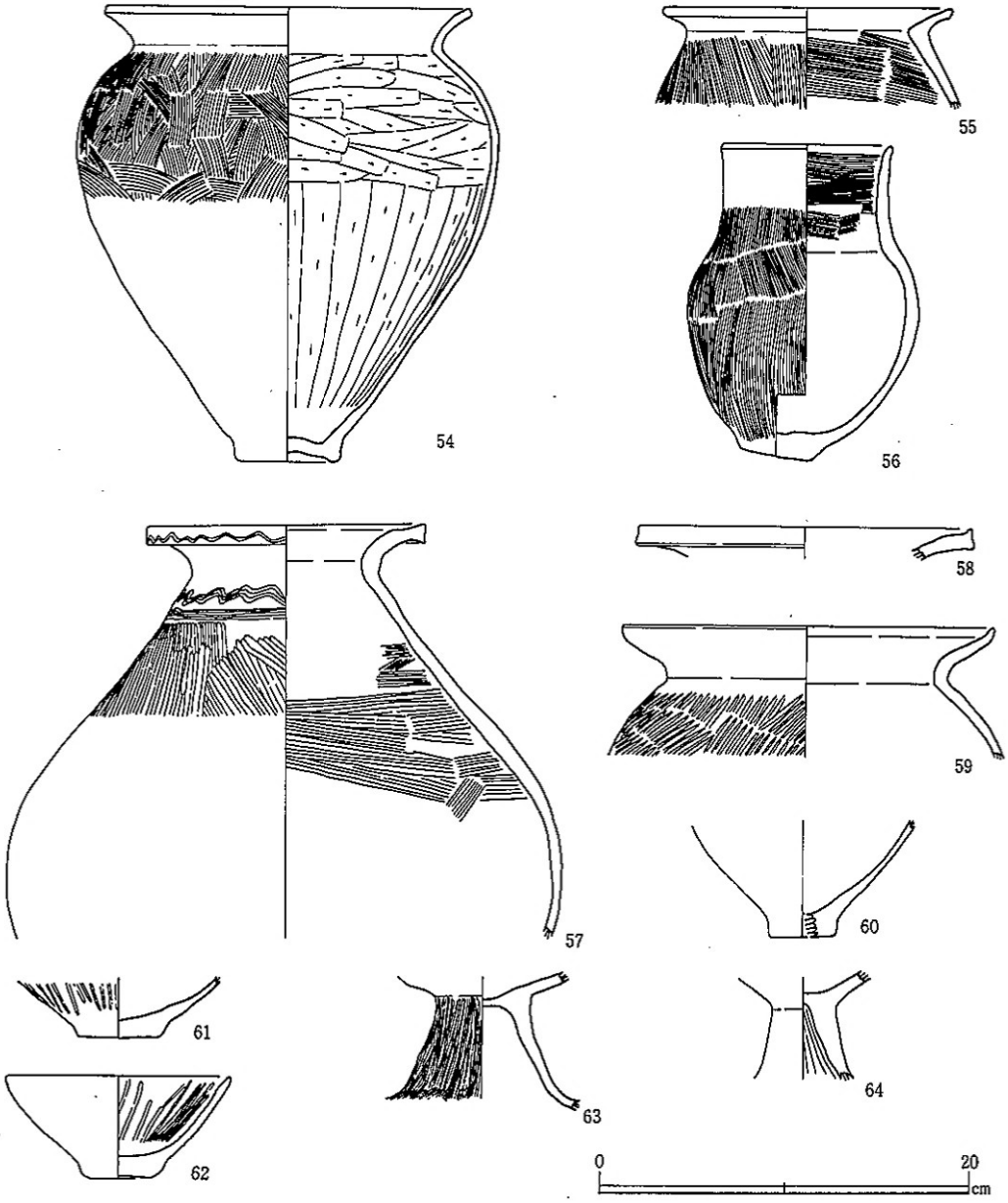
ＳＤ０５　ＳＤ０５は、７Ｅピット北東側で検出された南東から北西方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.8m～1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色砂である。

Ｐ０１　Ｐ０１は、３Ｅピット北東側で検出されたピットである。径約0.6m、深さ約0.3mを

測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、オリーブ灰色粘土である。

Ｐ０２、０３　Ｐ０２、０３は、Ｅトレンチｆ－７区で検出されたピットである。径約0.5mと0.4m、深さ約0.1mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、青灰色粘土である。

自然流路０１　自然流路０１は、Ｅトレンチｇ－８，９区及び１Ｅピット～２Ｅピットで検出されたほぼ東西方向に流れる自然流路である。Ｅトレンチ調査時では、古墳時代第１遺構面で検出された方形周溝墓群を保存するためにＸ171.5以南において古墳時代第１遺構面下を掘削しなかったため、流路部を検出できず、北肩の落ち込みを一部検出しえたのみであり、１Ｅピットと



第25図　弥生時代第７遺構面自然流路０１、０２出土遺物実測図

共に流心部は、調査区外に延びる。２Ｅピットにおいても同様の状況であったが、流路がやや北東に方向を変えるため、良好に流心部まで検出できた。深さ約1.4m以上を測り、埋土は、黄灰色砂である。遺物は、第25図に示す壺形土器（56～58）、甕形土器（59）、鉢形土器（60～62）及び高坏形土器（63）が流路内堆積層である黄灰色砂から出土している。

自然流路０２　自然流路０２は、Ｅトレンチ中央部ｊ－７，８区～ｄ－７，８区及び３Ｅピットで検出された南東から北西方向に流れる自然流路である。流心部は、古墳時代第１遺構面の５号方形周溝墓を保存したため調査することができなかったが、幅約35m以上、深さ約0.4m以上を測り、埋土は黄灰色砂である。遺物は、第25図64のローリングを受けた高坏形土器の脚部が出土している。（山上）

落ち込み０１　落ち込み０１は、Ｄトレンチｂ－９，10区で検出され、径約1.5m×4.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み０２　落ち込み０２は、Ｄトレンチｄ－９区で検出され、径約1.5m×2.4m、深さ約0.2mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み０３　落ち込み０３は、Ｄトレンチｄ－８区で検出され、径約1.9m×1.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み０４　落ち込み０４は、３Ｄピットで検出され、径約1.8m×2.5m以上、深さ約0.1mを測る楕円形あるいは、溝状を呈すると考えられる。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

落ち込み０５　落ち込み０５は、Ｄトレンチｅ－９区で検出され、径約1.8m×3.2m、深さ約0.1mを測る楕円形を呈する。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、黄灰色砂である。

Ｄ地区で検出された落ち込みの埋土は、いずれもＳＤ０１、０２、０３からオーバーフローした砂層が堆積している。（奥）

落ち込み０６　落ち込み０６は、Ｅトレンチｆ－７区北西側で検出され、径約1.8m×1.6m以上、深さ約0.1mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅い擂鉢形を呈し、埋土は、青灰色粘土である。

落ち込み０７　落ち込み０７は、Ｅトレンチｆ－７区南東側で検出され、径約1.5m×4.0m以上、深さ約0.2mを測る楕円形を呈すると考えられる。断面は、浅いＵ字状を呈し、埋土は、青灰色粘土である。（山上）

第3節　古墳時代

亀井北遺跡その２調査区の古墳時代について、前期は、Ｅ地区で方形周溝墓群が形成されている間、Ｄ地区では、総柱建物が建ち、検出されたウネミゾ状遺構から推定するとＶ字状の大溝を隔てて北側で耕作が行なわれていたと思われる。その後、中期になって第Ｘ層が堆積し、Ｄ地区では、大畦畔が構築され、Ｅ地区では、前時代に構築された方形周溝墓群の内１号方形周溝墓と２号方形周溝墓の両マウンド間を埋めて大畦畔に転用している。第Ｘ層の上面に有機質土層が堆積し一時人間の足跡が標されない時期があるが、６世紀に入って再び水田が形成される。この水田も６世紀後半の洪水により第Ⅶ層の砂が１ｍ近く堆積してしまう。間もなくこの砂上面に溝状遺構が掘削されるが、すぐ７世紀初頭には埋没してしまい、やがて歴史時代へと時代は進む。（山上）

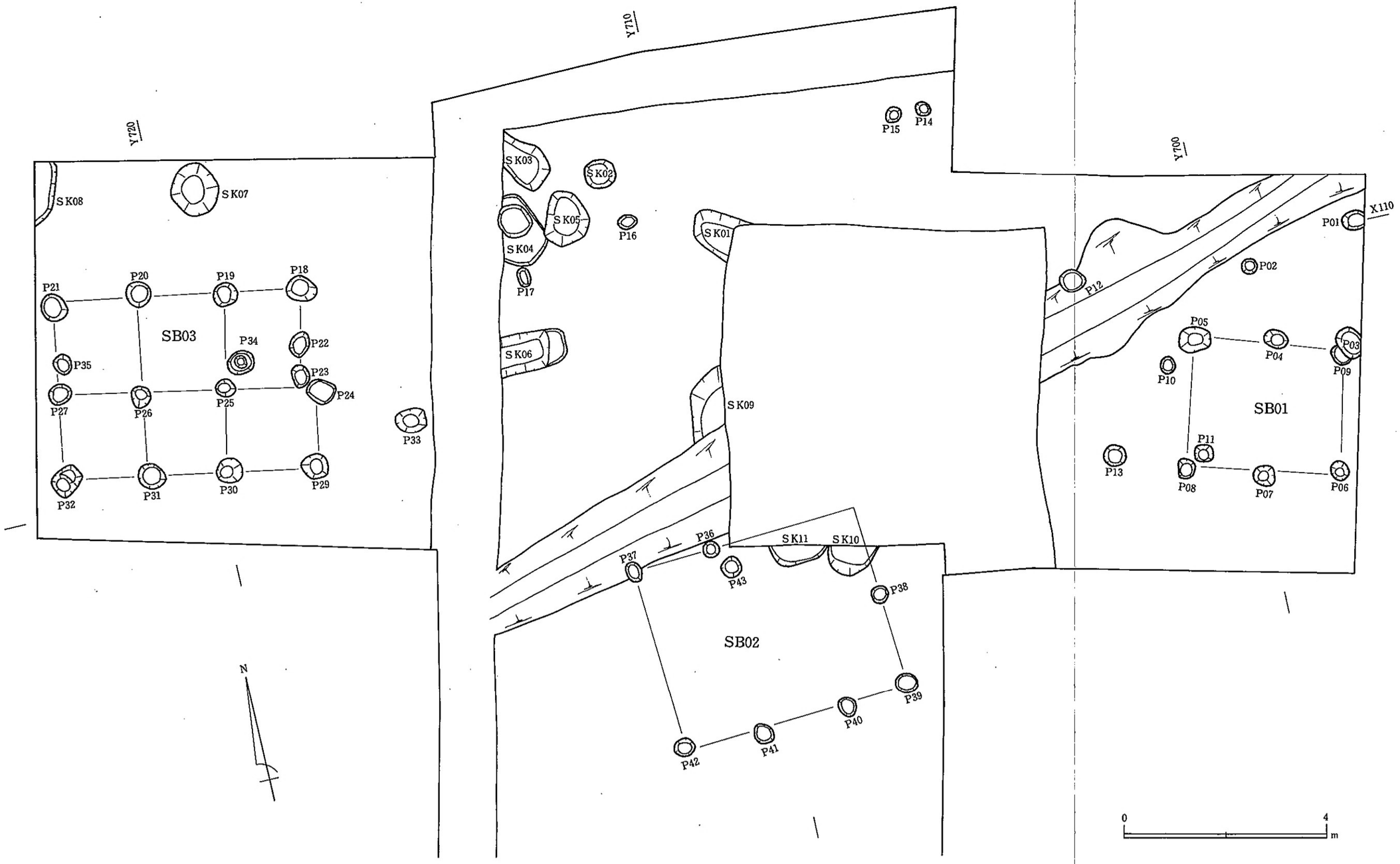
１）古墳時代第１遺構面　前期　（付図８，９、図版10～21）

Ｄ地区の古墳時代第１遺構面は、約＋5.7ｍ～＋5.2ｍに存在し、ベース面は、Ｄ地区北側からｃライン付近までは、弥生時代第７遺構面のオーバーフローした砂層上面に存在し、それより南は砂層が堆積していないため粘土上面となる。上層には、遺構面の遺物包含層が堆積し、ｃラインより北は暗青灰色砂質土層（10ＢＧ4/1）、それより南は、暗青灰色粘土層（５ＢＧ4/1）である。遺物包含層は、北端で厚さ約0.2ｍを測るが、南へ行くに従い徐々に薄くなり南端では約0.1ｍを測る。Ｅ地区においては、遺物包含層は、確認できていないためＤ地区とＥ地区の間で消滅するものと思われる。遺物包含層から出土した土器は、Ｄ地区北半部から出土が多く、特にｂ－９区では、土器溜状を呈して、多量に出土している。また、出土した遺物の中には、第42図109は、東海系、第41図103は、山陽系というように他地方産と推定される土器も含まれている。遺構は、Ｄ地区北半部に多く認められ、北に行くに従い密度が徐々に薄くなっており、建物３棟、土壙13基、ウネミゾ状遺構などを検出した。（奥）

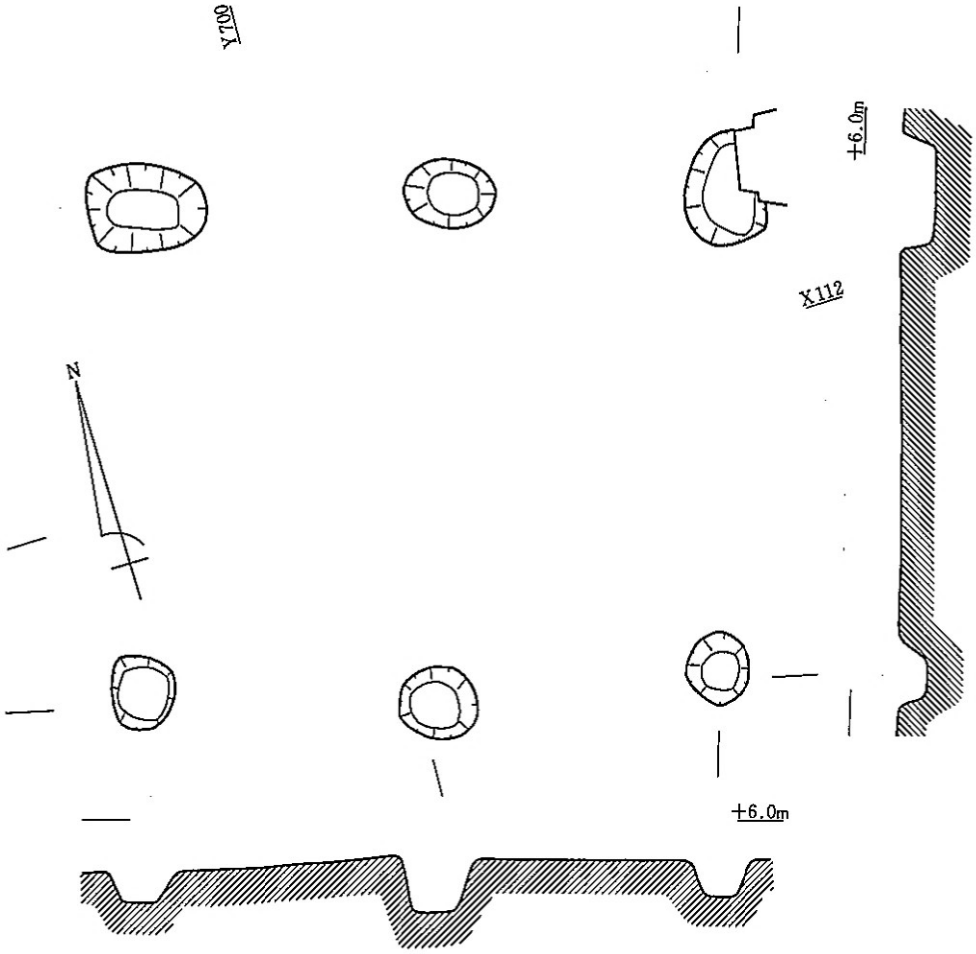
Ｅ地区の古墳時代第１遺構面は、北半部で弥生時代第７遺構面の自然流路０１、０２のオーバーフローした青灰色シルトと黄灰色砂をベースに、南半部では、青灰色粘土をベースに＋5.1ｍ～＋6.1ｍに存在する。上層は、第Ｘ層の暗緑灰色粘土が、厚さ約0.1ｍ～0.3ｍで堆積している。遺構としては、５基の方形周溝墓が弥生時代第７遺構面の自然流路０１、０２によって形成された微高地上に構築され、また、墓域を画する溝状遺構、落ち込みが検出されている。遺物は、方形周溝墓から古式土師器、溝状遺構の埋土からも古式土師器が出土している。（山上）

建物（第26図）

建物は、Ｄ地区の北側１Ｄピットから２Ｄピットにかけて、３棟がほぼ平行して存在している。建物群は、下層に存在する弥生時代第７遺構面ＳＤ０１の流水堆積によりオーバーフローした砂層上面に存在し、Ｄ地区の古墳時代第１遺構面では約＋5.7ｍと高所に位置する。これ以外にも柱穴は、多数検出されているが建物が建つまでには至らなかった。また、Ｄトレンチ北、Ｐ１６



第26図　古墳時代第１遺構面建物、土壙平面図



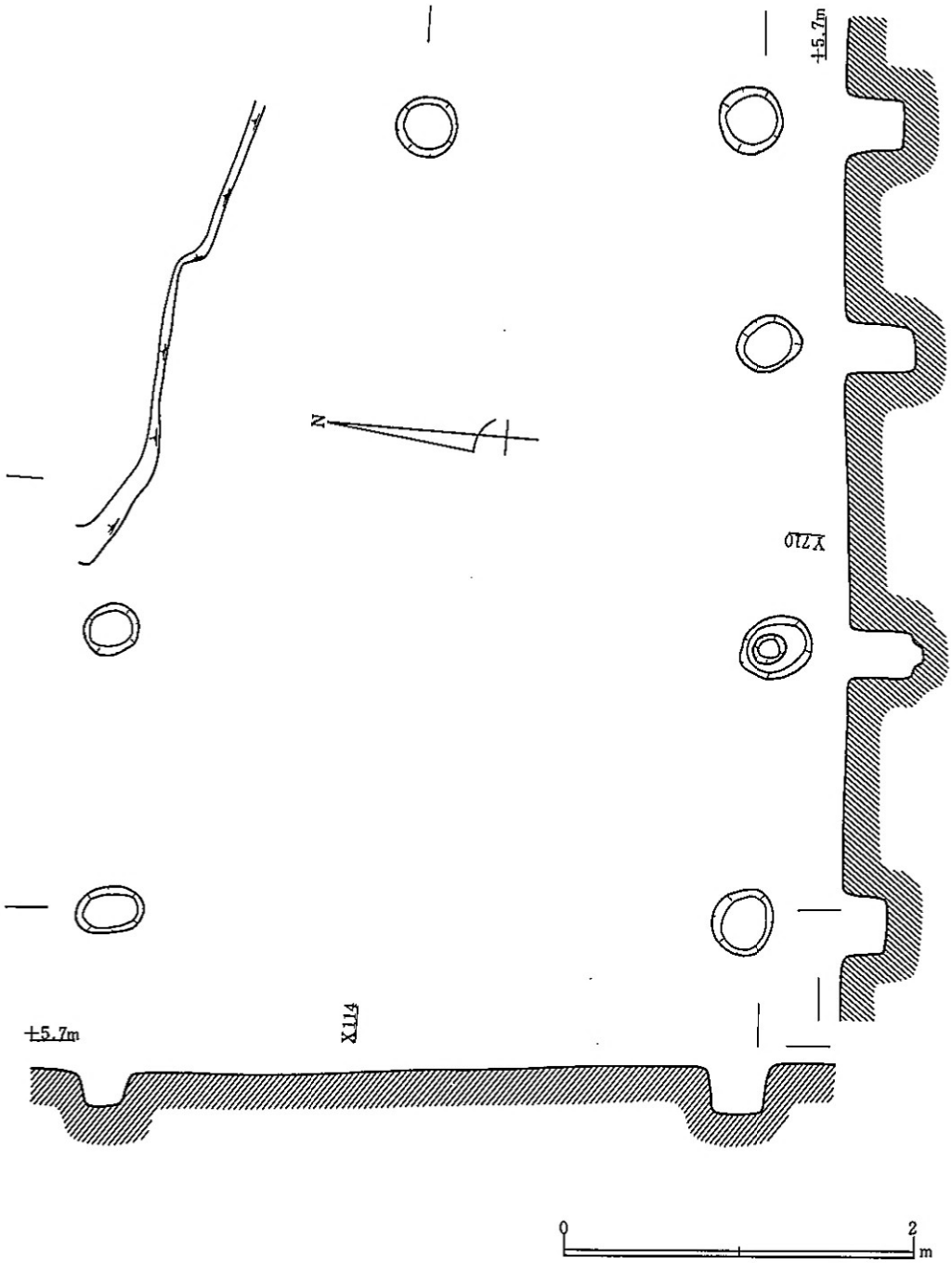
第27図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０１平面図

上層より第40図75の甕が出土している。

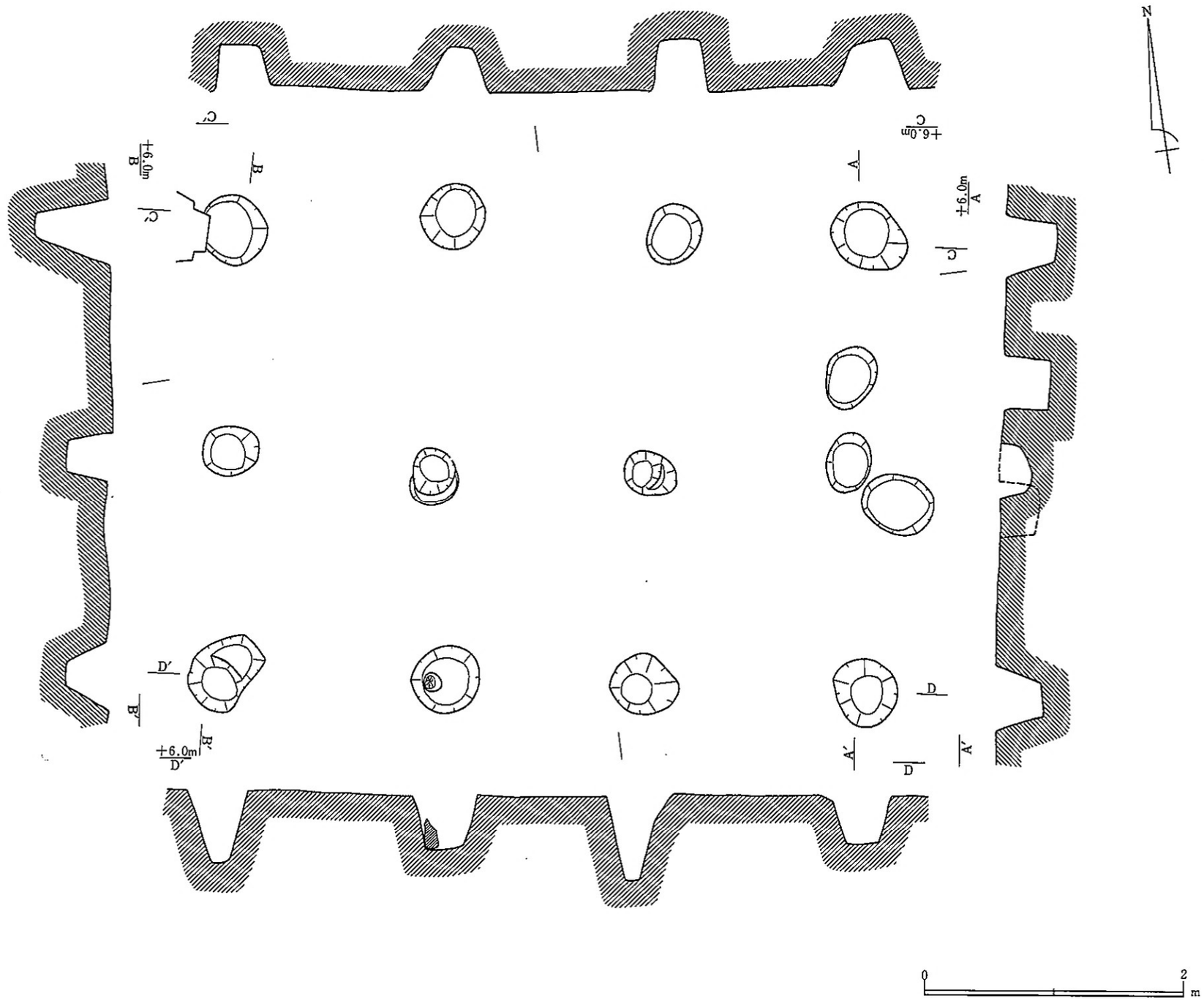
ＳＢ０１（第27図、図版11－１）　ＳＢ０１は、Ｄ地区の北東端２Ｄピットの東側に存在する桁行２間（約3.1m）×梁行１間（約2.5m）を測る東西棟の建物である。柱間は、桁行が約1.5m～1.7m、梁行約2.5m～2.7mで、柱掘形は、平面形では円形ないしは楕円形を呈し、径約0.35m～0.6m、深さ約0.2m～0.3mを測る。

ＳＢ０２（第28図）　ＳＢ０２は、Ｄトレンチの北ｂ－９区付近に存在し、西側梁行中央部の柱穴が検出できなかった点と、北東端の柱穴が試掘坑のため確認できなかったため、建物として多少の疑問の点は残るが、桁行３間（約4.6m）×梁行２間（約3.5m）と推定される東西棟の建物である。柱間は、桁行が約1.4m～1.7m、梁行が約1.9mで、柱掘形は平面形で不整円形を呈し、径約0.3m～0.35m、深さ約0.25m～0.4mを測る。

ＳＢ０３（第29図、図版11－２）　ＳＢ０３は、Ｄ地区１Ｄピットに存在する桁行３間（約５m）×梁行２間（約3.6m）、柱間は、桁行が約1.5m～1.8m、梁行は、約1.7m～1.8mを測る総



第28図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０２平面図



第29図　古墳時代第１遺構面ＳＢ０３平面図

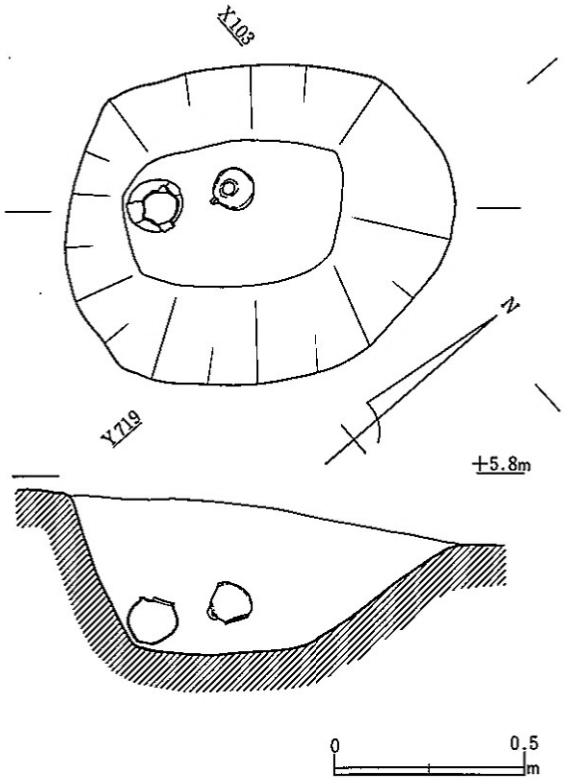
柱の建物である。

建物は、建物東端の梁行の並びが他とは異なり、梁行中央部に３個のピットが近接して存在している。桁行の柱間は、西から２間までは約1.7mであるが、Ｐ18とＰ19の間は約1.5m、Ｐ29とＰ30の間は約1.8mと異なっている。

また、Ｐ18からの梁行の並びは、Ｐ22、Ｐ23に通り、Ｐ29はＰ24に通っている。このためＰ18、Ｐ22、Ｐ23の通りとＰ29、Ｐ24の通りは、中央部でＬ字形に屈曲している状況を示している。

柱の掘形は、約0.4m～0.5mで、深さ約0.35m～0.7mを測るが、Ｐ22は約0.34m、Ｐ23は約0.26m、Ｐ24は約0.28mを測り他に比べて浅い。

総柱の建物は、二階建て、もしくは倉庫の可能性があるため、この付近で上部構造に対して何らかの施設があったものと推定され、現時点においては、建物の入口が存在していたのではないかと考えている。

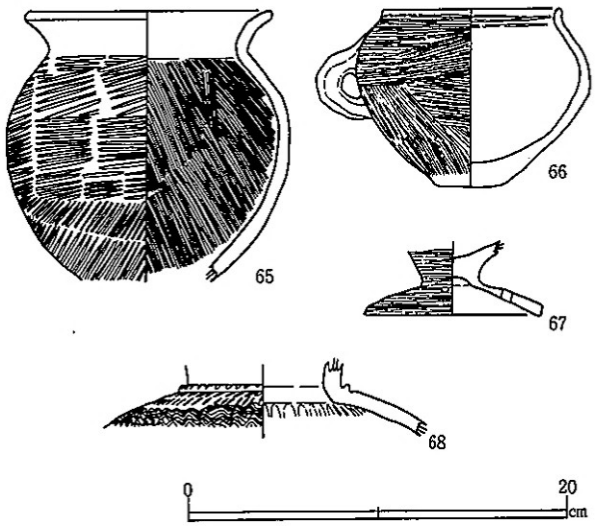


第30図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０７遺物出土状況図

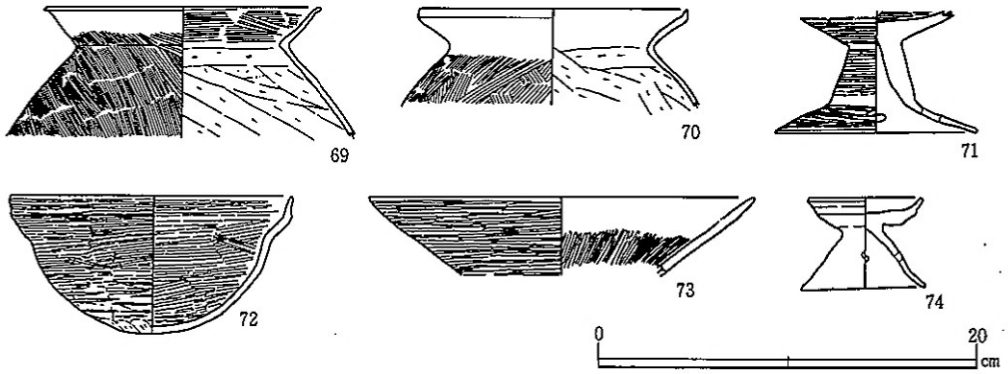
土壙

土壙は、Ｄ地区北半部において13基検出した。この中で、遺物が出土したもの及び形状に特徴があるものを選び以下説明を加える。

ＳＫ０１　ＳＫ０１は、Ｄトレンチの北側Ｘ109、Ｙ709付近に存在し東側は試掘坑によって切られている。形状は、楕円形を呈すると思われ、長径0.8m以上、幅約0.9mを測る。埋土は、黒褐色砂質土（2.5Y3/2）である。



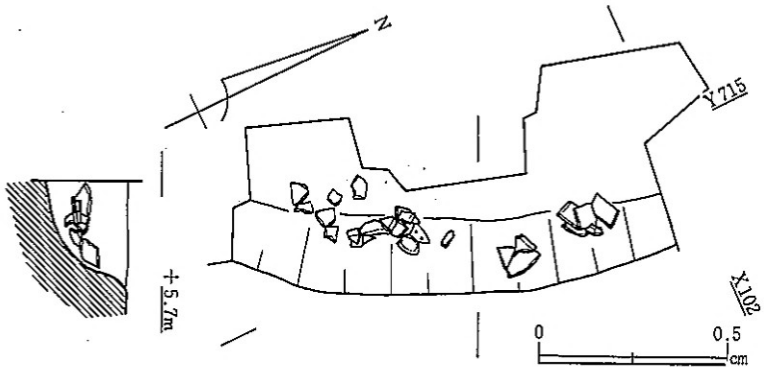
第31図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０７出土遺物実測図



第32図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０８出土遺物実測図

ＳＫ０４　ＳＫ０４は、Ｄトレンチの北側Ｘ105、Ｙ713付近に存在し、西側は調査区外に延びる。形状は、楕円形を呈し、長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約0.15mを測る。埋土は、炭まじりの灰オリーブ砂質土（５Ｙ9/2）である。

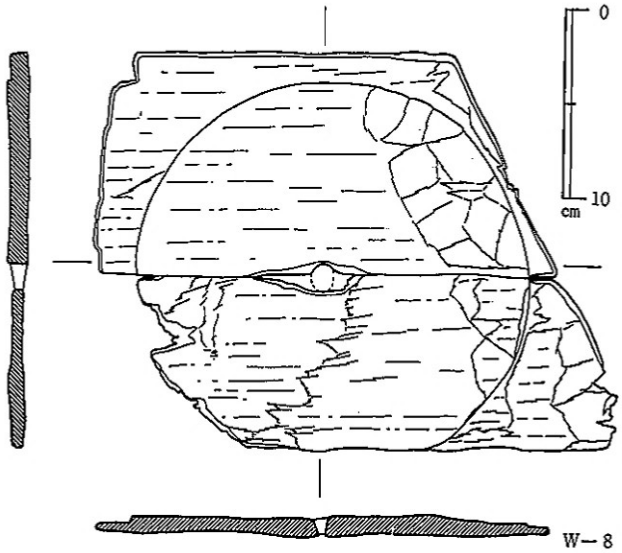
ＳＫ０６　ＳＫ０６は、Ｄトレンチの北側Ｘ107、Ｙ714付近に存在する。形状は、長方形を呈すると推定され、長さ1.3m以上、幅約0.8mを測る。埋土は、暗オリーブ色砂質土（５Ｙ4/3）である。



第33図　古墳時代第１遺構面ＳＫ０８遺物出土状況図

ＳＫ０７（第30図、図版12－１）

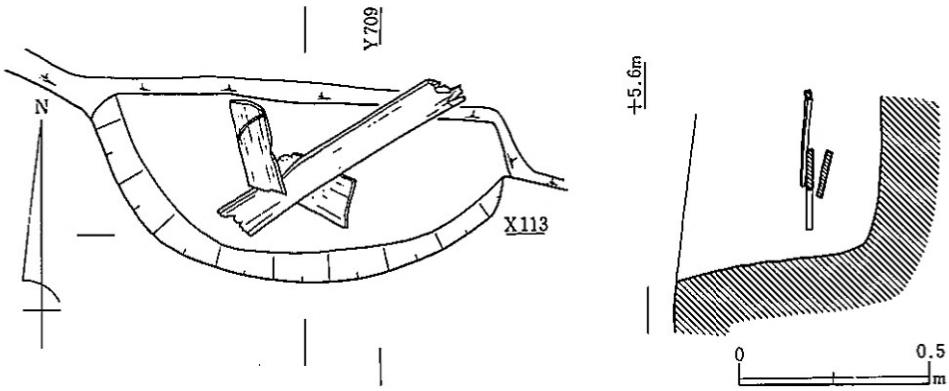
ＳＫ０７は、４Ｄピットの北Ｘ103、Ｙ719付近に存在する土壙である。長径1.2m、短径0.95mの歪な楕円形を呈し、深さ約0.4mを測る。埋土は、にぶい黄橙色砂層（10ＹＲ2/7）である。遺物（第31図）は、土壙底部付近よりほぼ完形の把手付鉢（66）、甕（65）また、他に埋土中より壺（68）、高坏（67）の破片が出土している。



第34図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１０出土遺物実測図

ＳＫ０８（第33図、図版12－１）

ＳＫ０８は、４Ｄピットの北西端Ｘ102.5、Ｙ715付近にあり、大

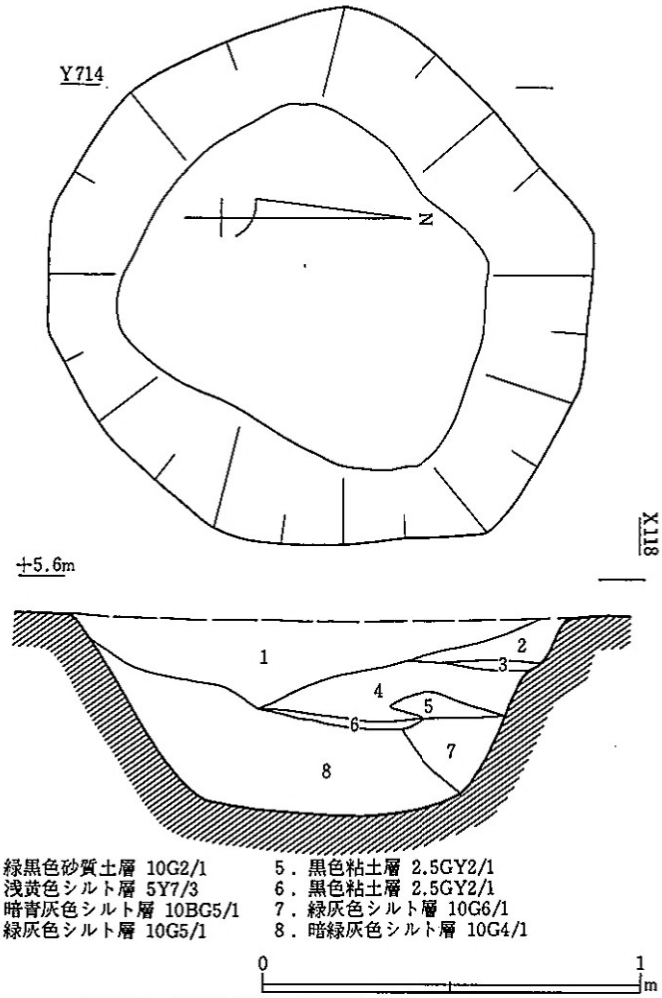


第35図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１０遺物出土状況図

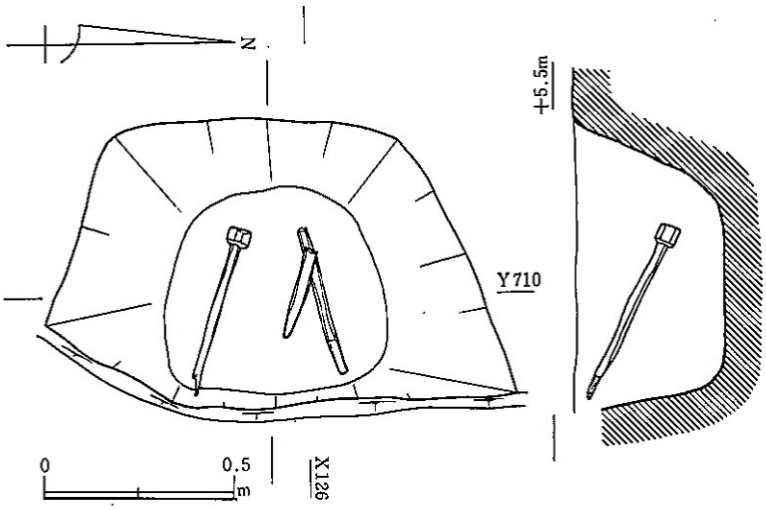
部分は調査区外に存在するため形状及び計測値は不明である。埋土は、褐灰色粘質土層（５ＹＲ4/1）であり炭及び灰がブロック状に存在する。出土遺物（第32図）の中で特に注目されるのはミニチュアの器台（74）が出土していることである。他に甕、壺、高坏、鉢などが出土している。

ＳＫ１０（第35図、図版12－１）　ＳＫ１０は、Ｄトレンチの北ｂ－９区Ｘ113、Ｙ709付近に存在する土壙である。北側は、試掘坑で破壊されているため、形状は不明であるが円形の可能性が強い。径約1.1m以上、深さ約0.5ｍ以上を測る。埋土は、にぶい黄橙色砂層（10ＹＲ7/2）である。遺物は、不明木製品（第34図）が出土している。

ＳＫ１２（第36図、図版12－２）　ＳＫ１２は、Ｄトレンチの中央部北寄りＸ118.5、Ｙ713.5付近

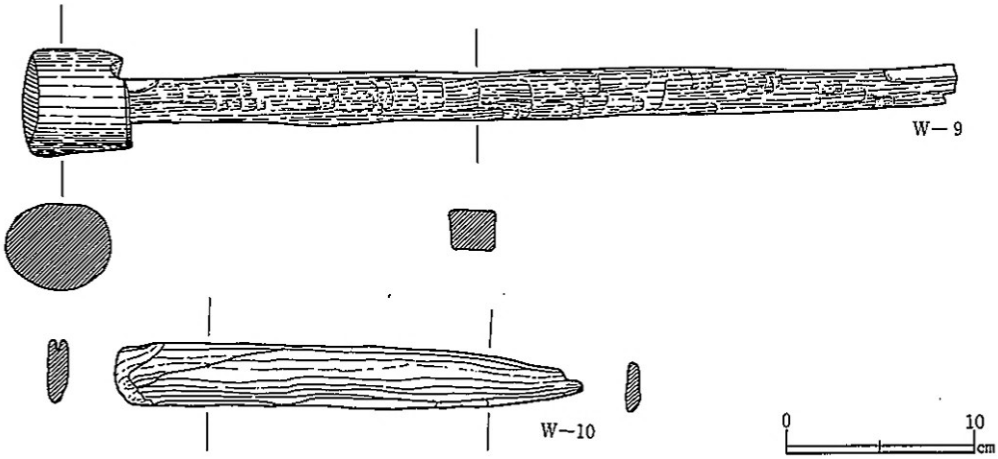


第36図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１２平面図

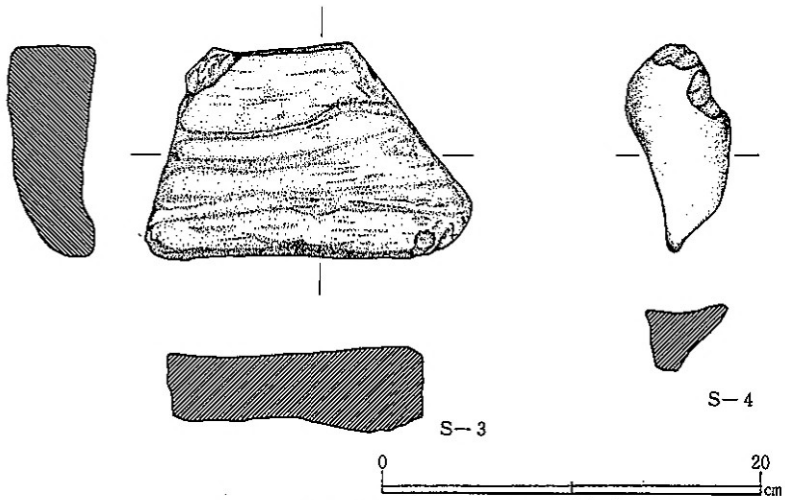


第37図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１３遺物出土状況図

に存在する土壙である。土壙の形状はほぼ円形で断面はＵ字形である。径約1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は、図に示す通りである。遺物は、細片のみで図化できるものはなかった。ＳＫ１２は、ここでは土壙として取り扱ったが、形状から井戸の可能性も存在する。



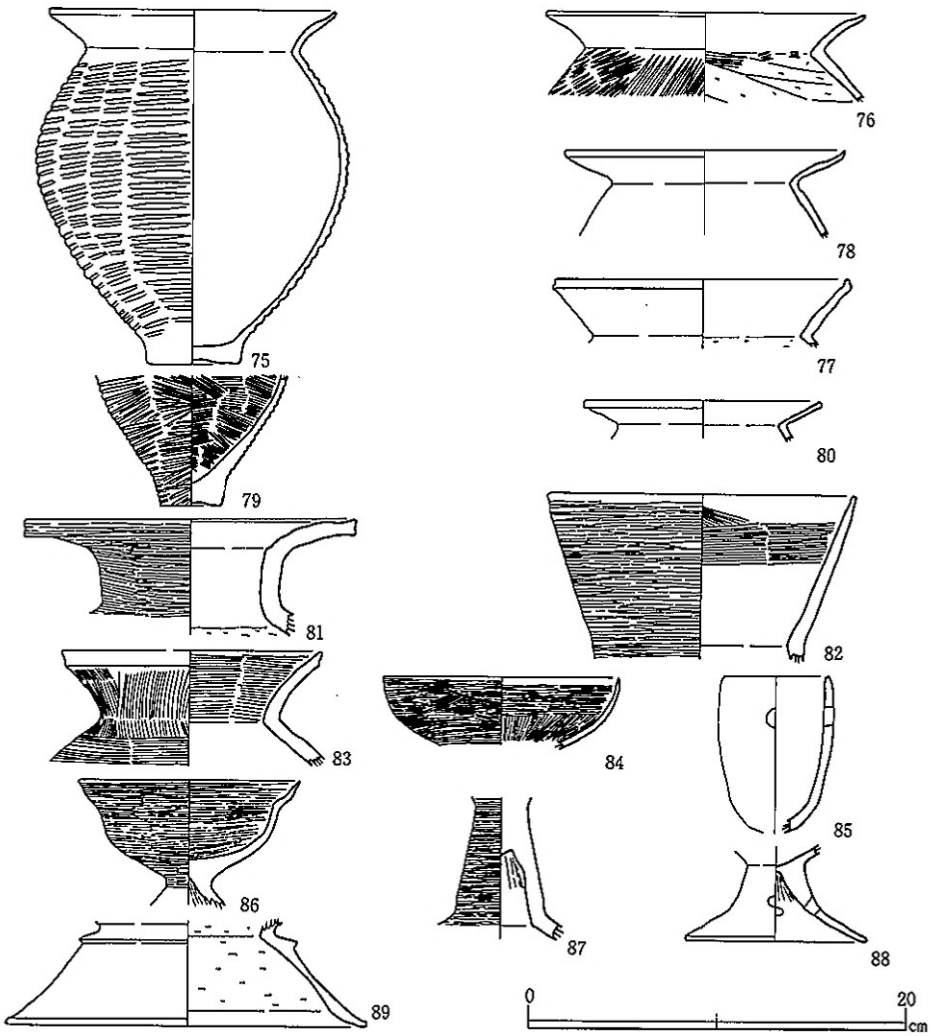
第38図　古墳時代第１遺構面ＳＫ１３出土遺物実測図



第39図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図

ＳＫ１３（第37図、図版12－１）

Ｄ地区のほぼ中央部Ｘ126、Ｙ710付近に存在する土壙である。土壙の形状は、東側土壙上部が排水溝により破壊されたため平面形は不明であるが円形の可能性

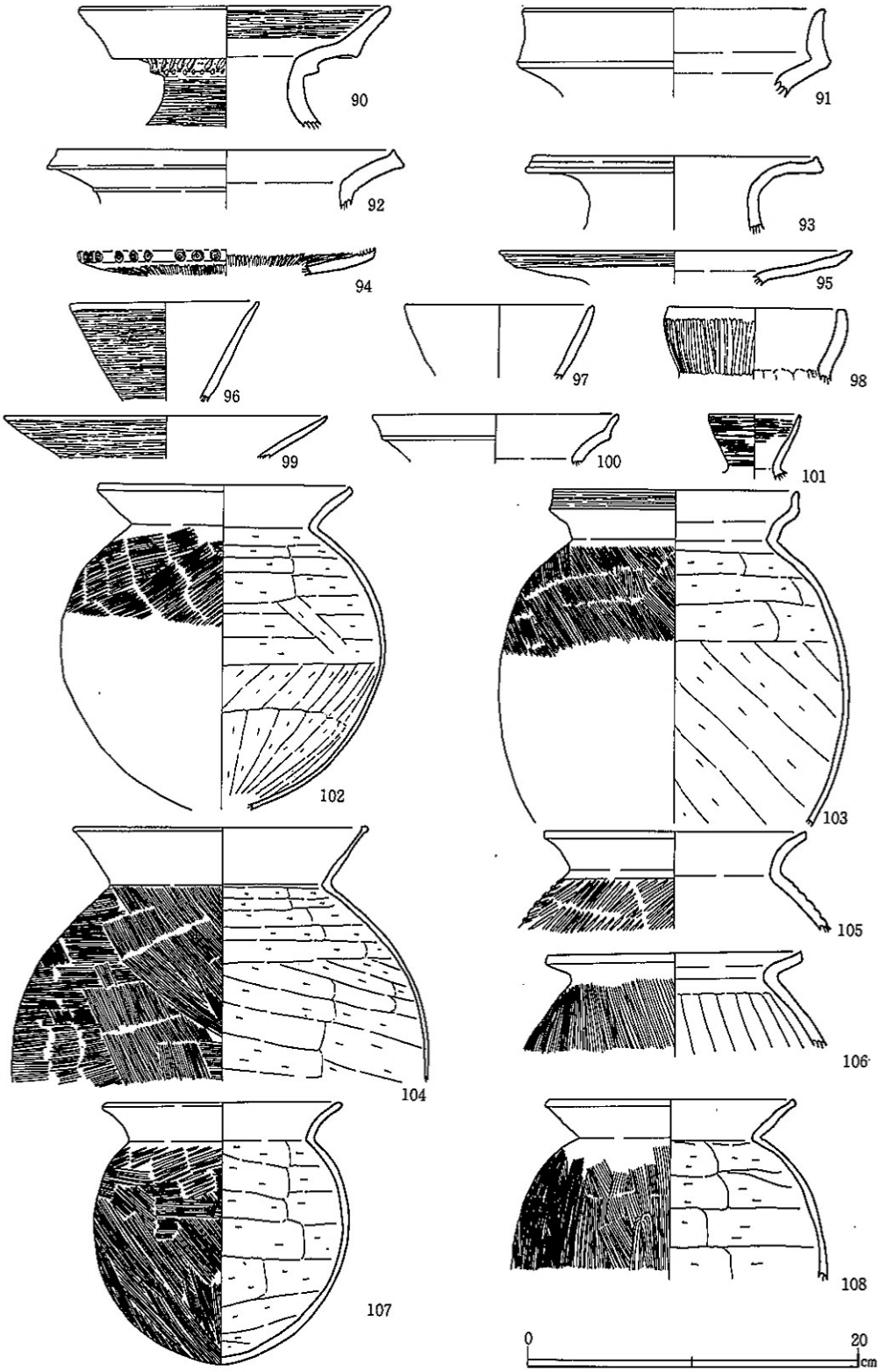


第40図　古墳時代第１遺構面遺構出土遺物実測図

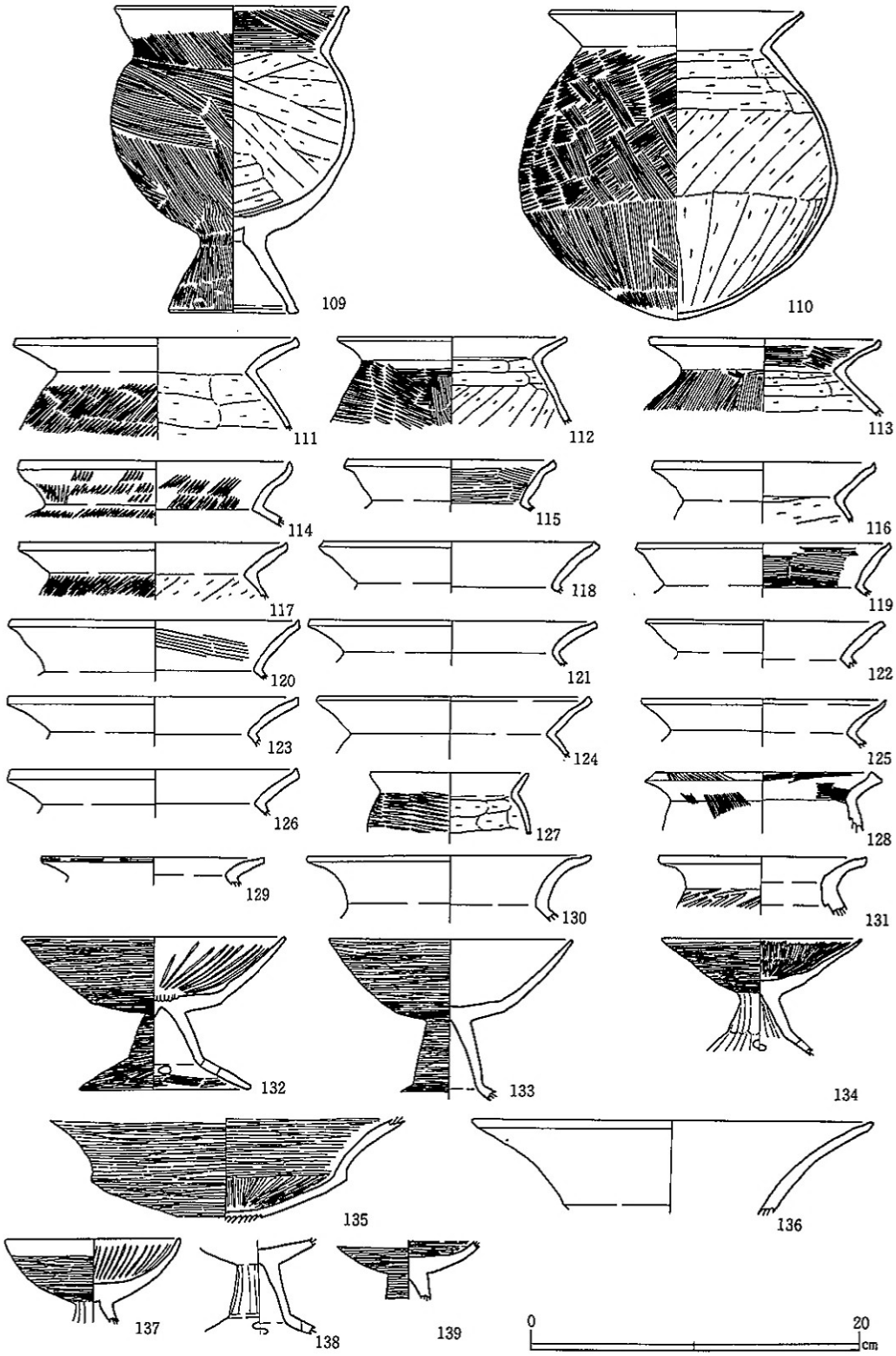
が強い。径は約1.1m、深さ約0.4mを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルト層（５Ｙ3/1）である。遺物は、埋土中より不明木製品（第38図）が出土し、土器はなかった。

ウネミゾ状遺構　Ｄ地区において114本検出した。溝の方向は、南北方向と東西方向及び不定方向に走るものがあり、南北方向の溝は87本、東西方向の溝は21本である。切り合い関係は東西方向の溝が新しいと思われる。溝は、幅約0.2m～約0.8m、深さ約0.05m～約0.15mを測り、埋土は、上層に存在する当遺構面の遺物包含層である暗青灰色砂質土（10ＢＧ4/1）と同色である。

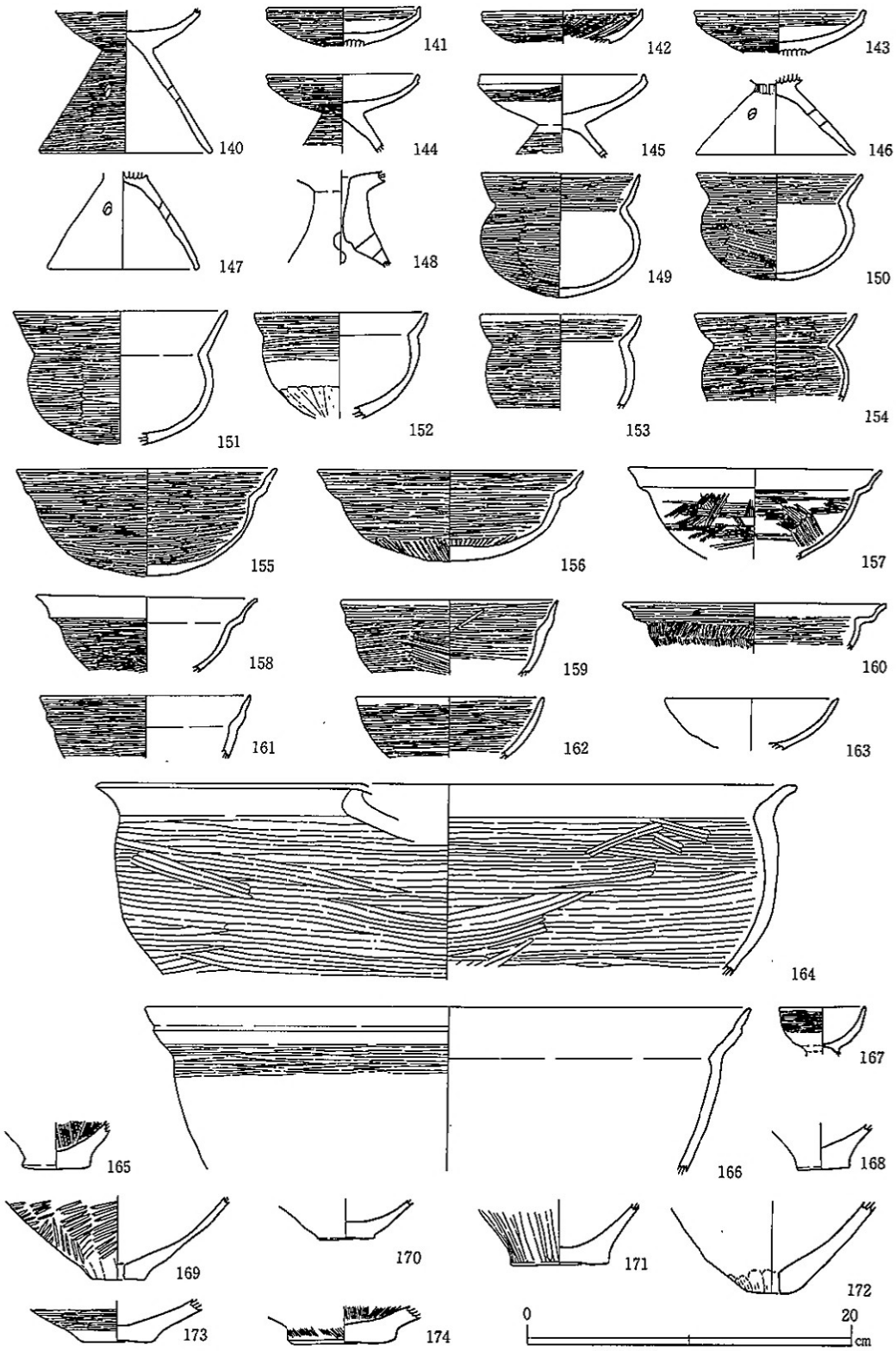
溝内より出土した遺物は、細片が多く図化できるものは14点と少なかった。出土遺物の中で注目に値すると思われるものはウネミゾ108より鼓形器台が出土したことである。ウネミゾは、久宝寺南遺跡より検出された同種のものから、ソバ種子が出土したことより畑耕作により出来た畝の高まりが削平されて溝状になって残存したものと推定される。（奥）



第41図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図



第42図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図



第43図　古墳時代第１遺構面包含層出土遺物実測図

１号方形周溝墓　（第44図～第50図、図版13－２，14，15）　１号方形周溝墓は、Ｅ地区ｇ－７，８，９区～ｈ－７，８区、方形周墓群中北東に位置する。基底部は、+5.8m～+6.1mを測る微高地を形成する黄灰色砂及び青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第７遺構面の自然流路０１の流路内堆積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

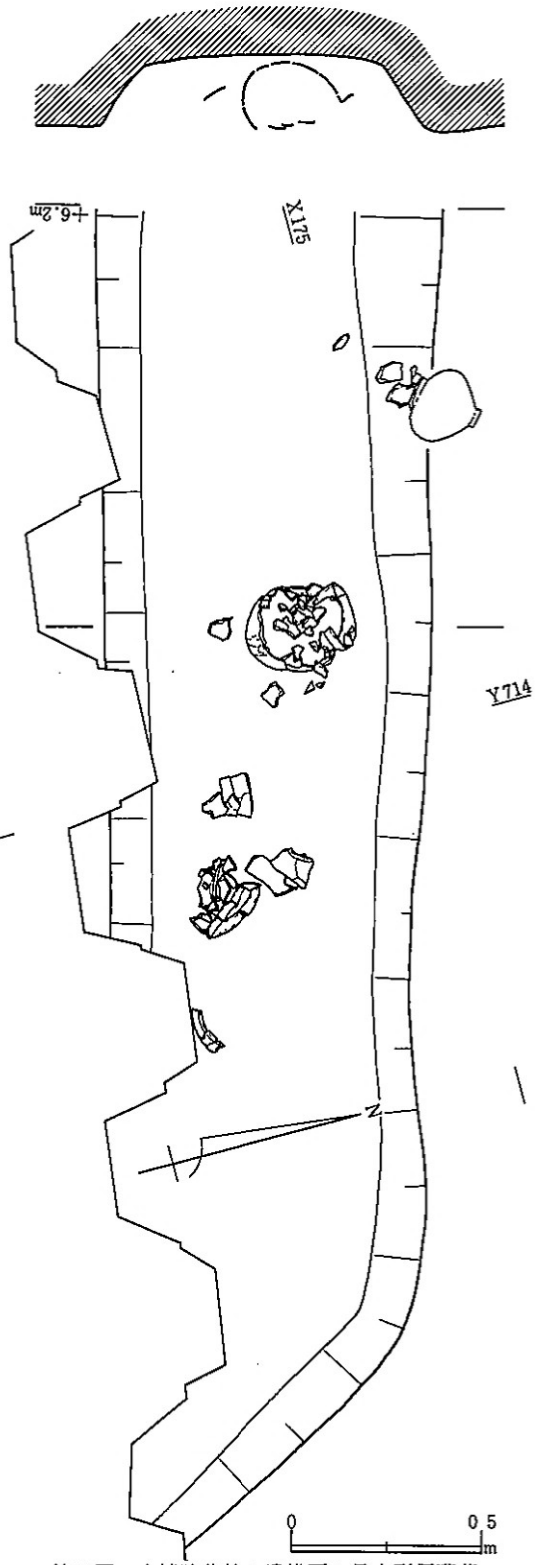
この方形周溝墓は、北周溝、西周溝と南周溝の一部を検出したが、マウンド部の約三分の二と東周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で東西約9.4m、南北約8.0mを測る隅丸の長方形を呈するが、北側約三分の一程度盛土が削平され、北側では、周溝のみ検出された。これは、上層の古墳時代第３遺構面の大畦畔０３構築時にマウンドが利用され、２号方形周溝墓との間を埋めるために不要な部分が削平されたためである。

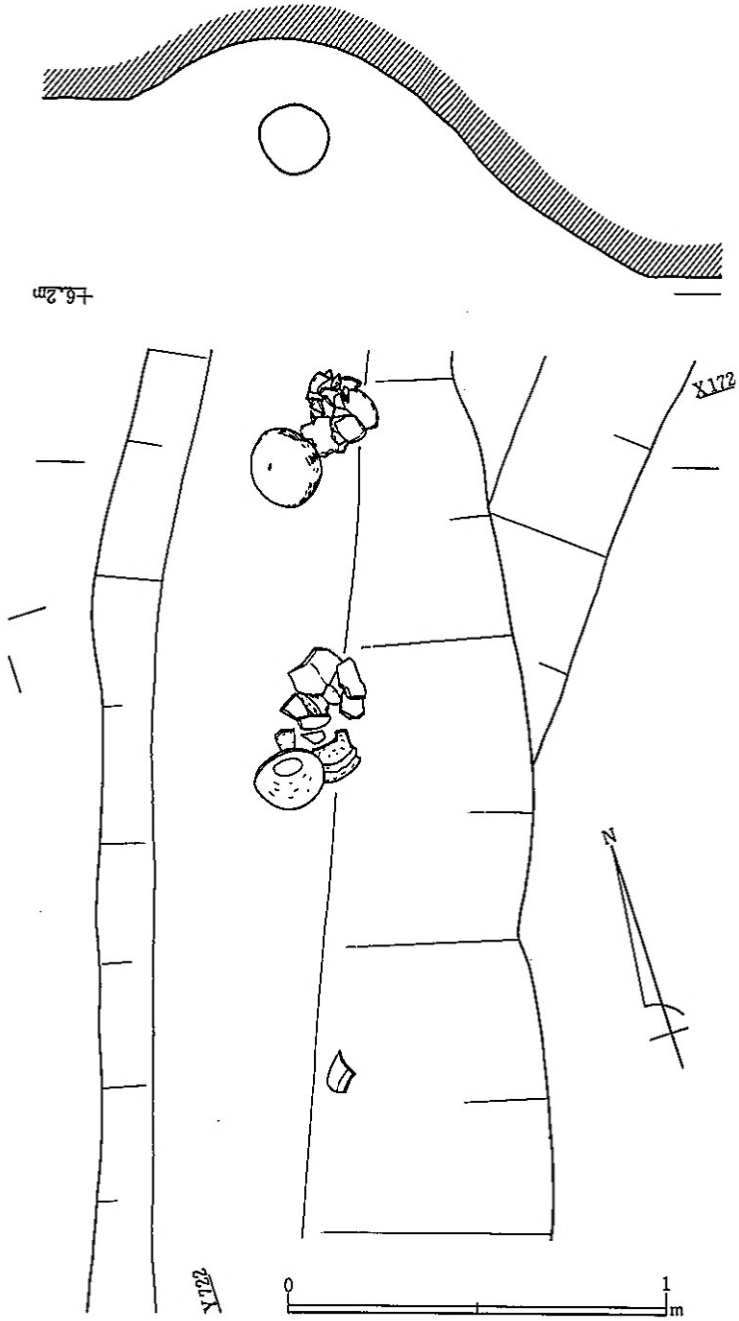
北周溝は、幅約0.7m～1.1m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、Ｕ字状を呈する。埋土は、Ｃ－Ｃ′断面に示すように暗青灰色系のシルト層が堆積するが、マウンドの崩壊土は、認められない。周溝の東端部で、方向を南に変えて調査区外に延びるため、この部分がコーナー部になるものと考えられる。

西周溝は、基底部で、幅約0.8m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、Ｕ字状を呈する。埋土は、下層に青灰色シルト及び暗灰色土が堆積し、周溝がほぼ埋没して痕跡程度になった後にマウンドの崩落と考えられる砂を含んだ灰色系の土層が堆積する。

南周溝は、長さ約３mに渡って検出された



第44図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓　遺物出土状況図

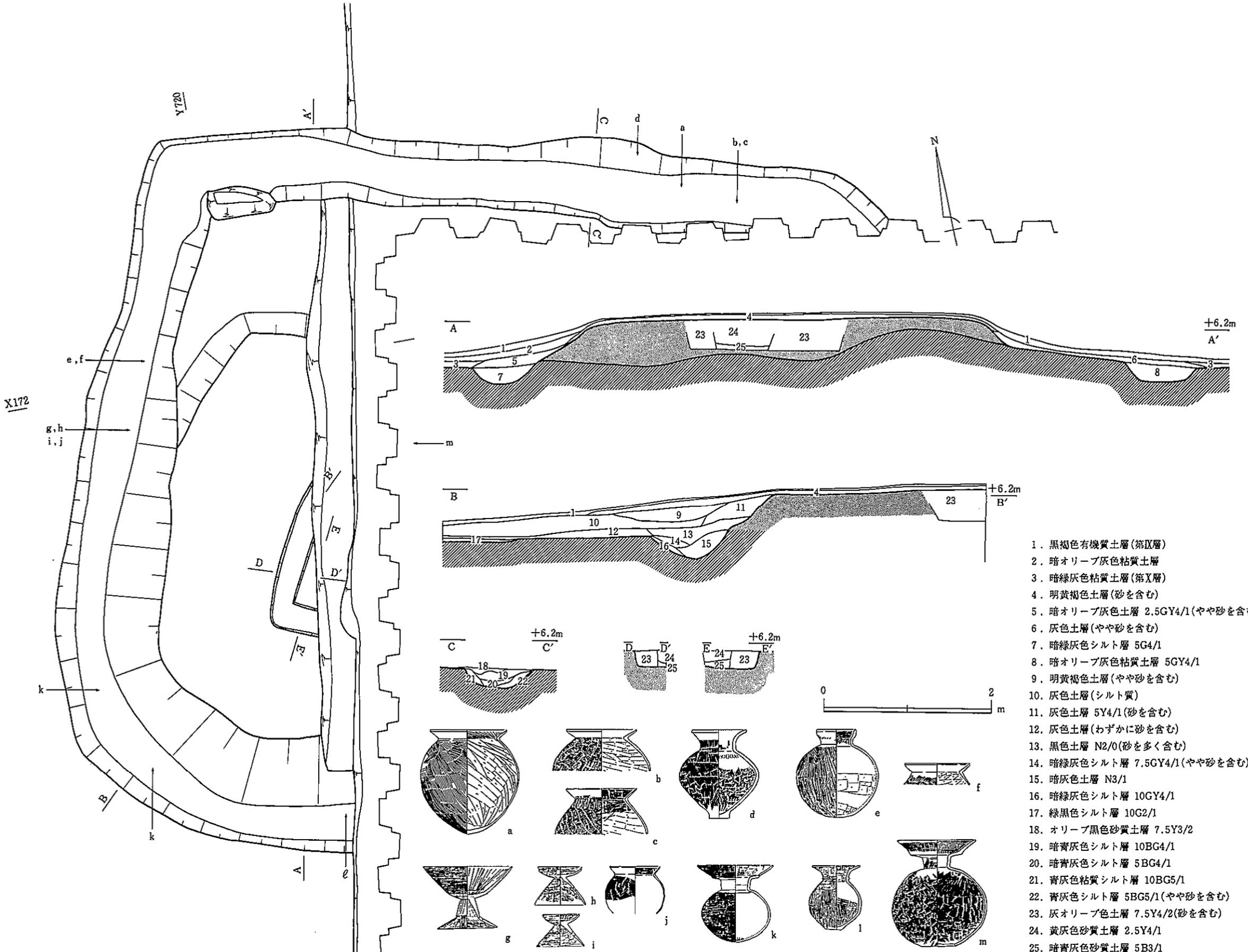


第45図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図

が、東側で調査区外に延びる。基底部で、幅約0.8m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。埋土は、暗緑灰色シルトが周溝内に堆積した後、西周溝と同様マウンドの崩壊土が堆積する。

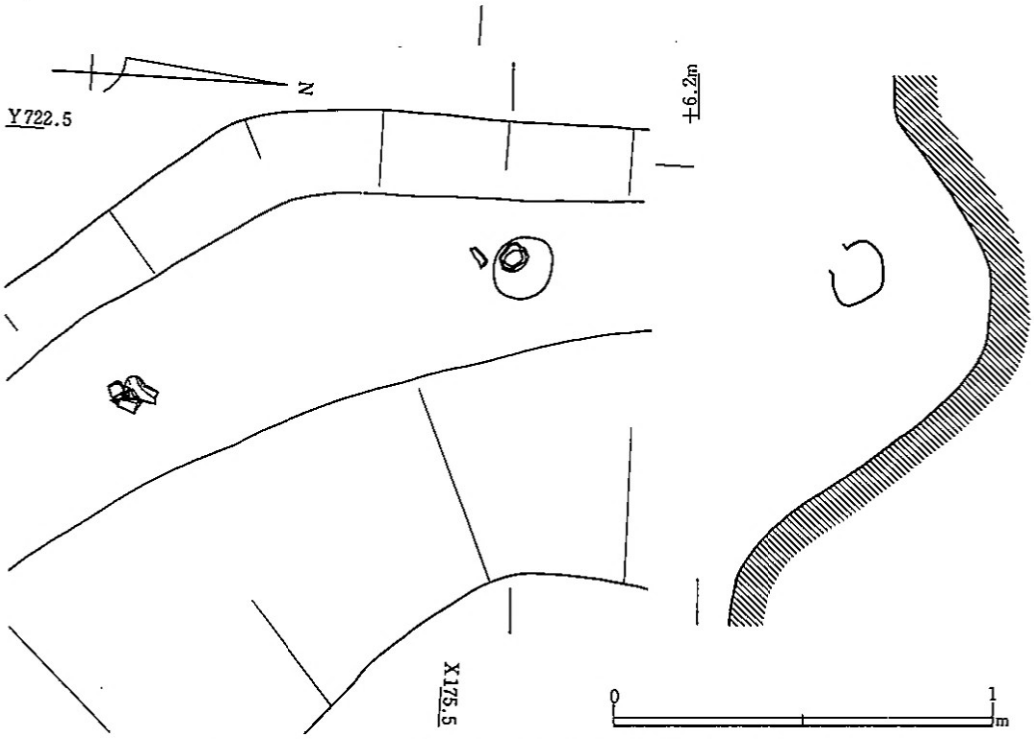
マウンドは、周溝の基底部から高さ約0.7m～0.9mを測る。盛土は、オリーブ灰色～緑灰色系の土に砂を多く混入しており、ベース層の高低に合わせて高さ約0.2m～0.5mの盛り土を行ない、上面を平坦にしている。この土は、周辺のベース層から採取したものと考えられる。

埋葬施設は、マウンド南西側に寄った部分で検出されたが、試掘によって約二分の一程度破壊され、西側の一部と南側の一部を検出したに止まった。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約1.9m以上、短辺約0.6m以上、深さ約0.2mを測る長方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、灰オリーブ色土で均一である。また、木棺痕跡は、側板約0.9m以上、小口板約0.3m、深さ約0.2mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、黄灰色砂質土で、最下層は、暗青灰色砂質土である。木棺痕跡は、残存が良好でなく、構造等は、不明である。



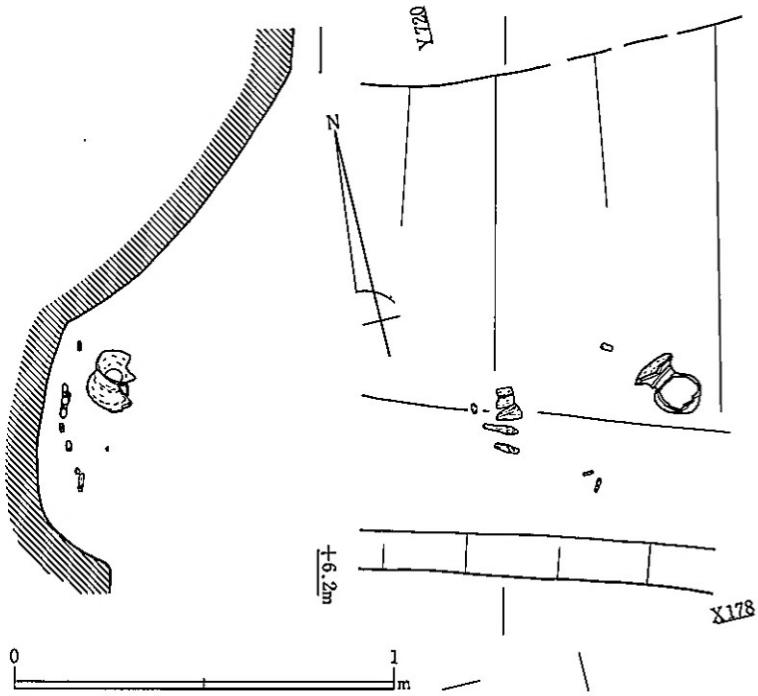
第46図　古墳時代第1遺構面1号方形周溝墓平面、断面図

1．黒褐色有機質土層(第Ⅸ層)
2．暗オリーブ灰色粘質土層
3．暗緑灰色粘質土層(第Ⅹ層)
4．明黄褐色土層(砂を含む)
5．暗オリーブ灰色土層 2.5GY4/1(やや砂を含む)
6．灰色土層(やや砂を含む)
7．暗緑灰色シルト層 5G4/1
8．暗オリーブ灰色粘質土層 5GY4/1
9．明黄褐色土層(やや砂を含む)
10．灰色土層(シルト質)
11．灰色土層 5Y4/1(砂を含む)
12．灰色土層(わずかに砂を含む)
13．黒色土層 N2/0(砂を多く含む)
14．暗緑灰色シルト層 7.5GY4/1(やや砂を含む)
15．暗灰色土層 N3/1
16．暗緑灰色シルト層 10GY4/1
17．緑黒色シルト層 10G2/1
18．オリーブ黒色砂質土層 7.5Y3/2
19．暗青灰色シルト層 10BG4/1
20．暗青灰色シルト層 5BG4/1
21．青灰色粘質シルト層 10BG5/1
22．青灰色シルト層 5BG5/1(やや砂を含む)
23．灰オリーブ色土層 7.5Y4/2(砂を含む)
24．黄灰色砂質土層 2.5Y4/1
25．暗青灰色砂質土層 5B3/1

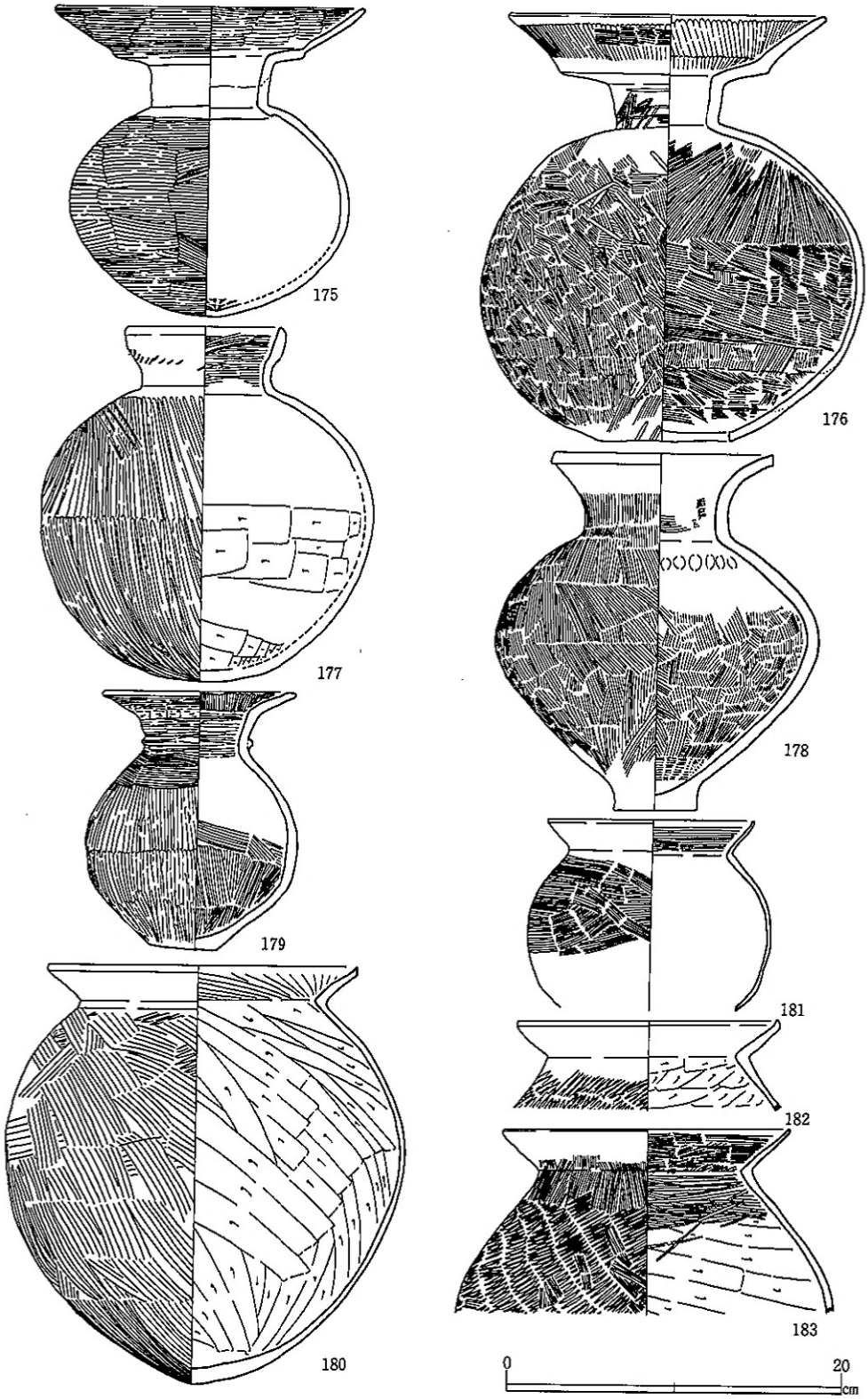


第47図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図

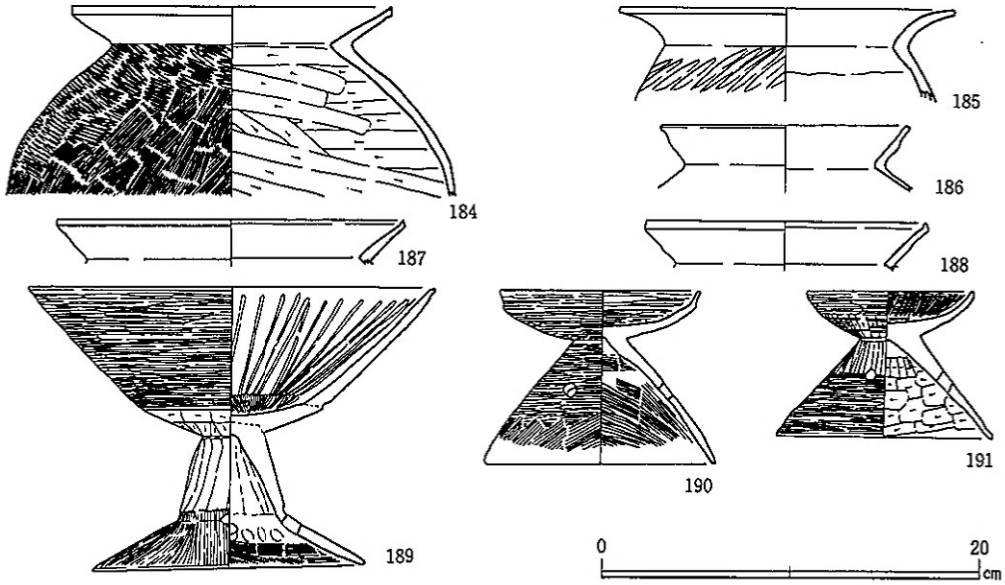
遺物は、北周溝東側より、第44図遺物出土状況図に示すように、ほぼ周溝中央部で底部に張りついた状態で甕（180）が出土し、その西側で周溝の北肩に乗った状態で壺（178）が出土した。また、周溝の底部から約0.05m浮いた状態で甕（183, 184, 187）が出土した。西周溝では、第45図及び第47図遺物出土状況図に示すように周溝の東斜面にマウンドから転落した状態で三群に分れて、いずれも周溝の底部より約0.1m～0.2m浮いた状態で、周溝埋没後のマウンド崩壊土中から出土し



第48図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓遺物出土状況図



第49図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓出土遺物実測図



第50図　古墳時代第１遺構面１号方形周溝墓出土遺物実測図

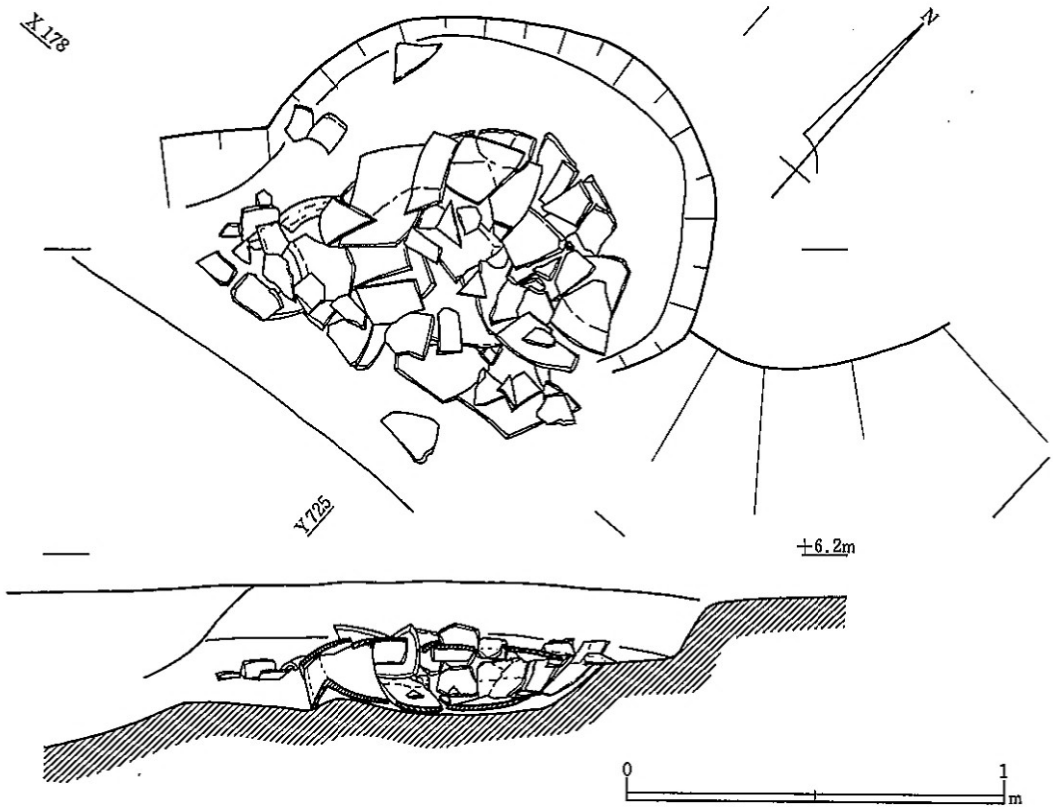
ている。北側の一群は、壺（177）と甕（182）の２点で構成され、中央の一群は、甕（181）、高坏（189）と器台（190,191）の４点で構成され、南側の一群は、二重口縁の壺（175）が単独で出土している。この壺の口縁部は、北側に約２ｍと南側に約１ｍ程度体部から離れて出土している。南周溝では、第48図遺物出土状況図に示すように周溝の底部から約0.1m浮いた状態で壺（179）が出土している。この壺の南側から歯が１本検出され、西側では骨が検出された。平面、断面共に埋葬施設は確認されず、周溝埋没後の埋葬と考えられる。壺（179）は、歯のすぐ横で検出され、枕許にあったこの埋葬に対する供献土器と考えられる。二重口縁の壺（176）は、試掘調査の時点で出土したが、出土状況等は、明確でないが、１号方形周溝墓マウンド上から出土したと思われる。底部穿孔は、焼成後である。

２号方形周溝墓　（第51図～第54図、図版16,17）　２号方形溝墓は、Ｅ地区ｉ－８区～ｈ－８区、方形周溝墓群中北西に位置する。基底部は、＋6.0m～＋6.2mを測る微高地を形成する黄灰色砂及び青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第７遺構面の自然流路０１の流路内堆積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

この方形周溝墓は、東周溝と北周溝及び南周溝の一部を検出したが、マウンド部の約二分の一と西周溝は、調査区外に延びる

平面形は、周溝の中心で南北約9.2m、東西約5.4m以上を測る隅丸の方形或いは長方形を呈するが、北側約三分の一程度盛土が削平され、北側では、周溝のみ検出された。これは、古墳時代第３遺構面の大畦畔０３構築時にマウンドが利用され、１号方形周溝墓との間を埋めるために不要な部分が削平されたためである。

北周溝は、幅約1.3m～1.6m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いＵ字状を呈する。長さ約4.0mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色シルト



第51図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓壺棺出土状況図

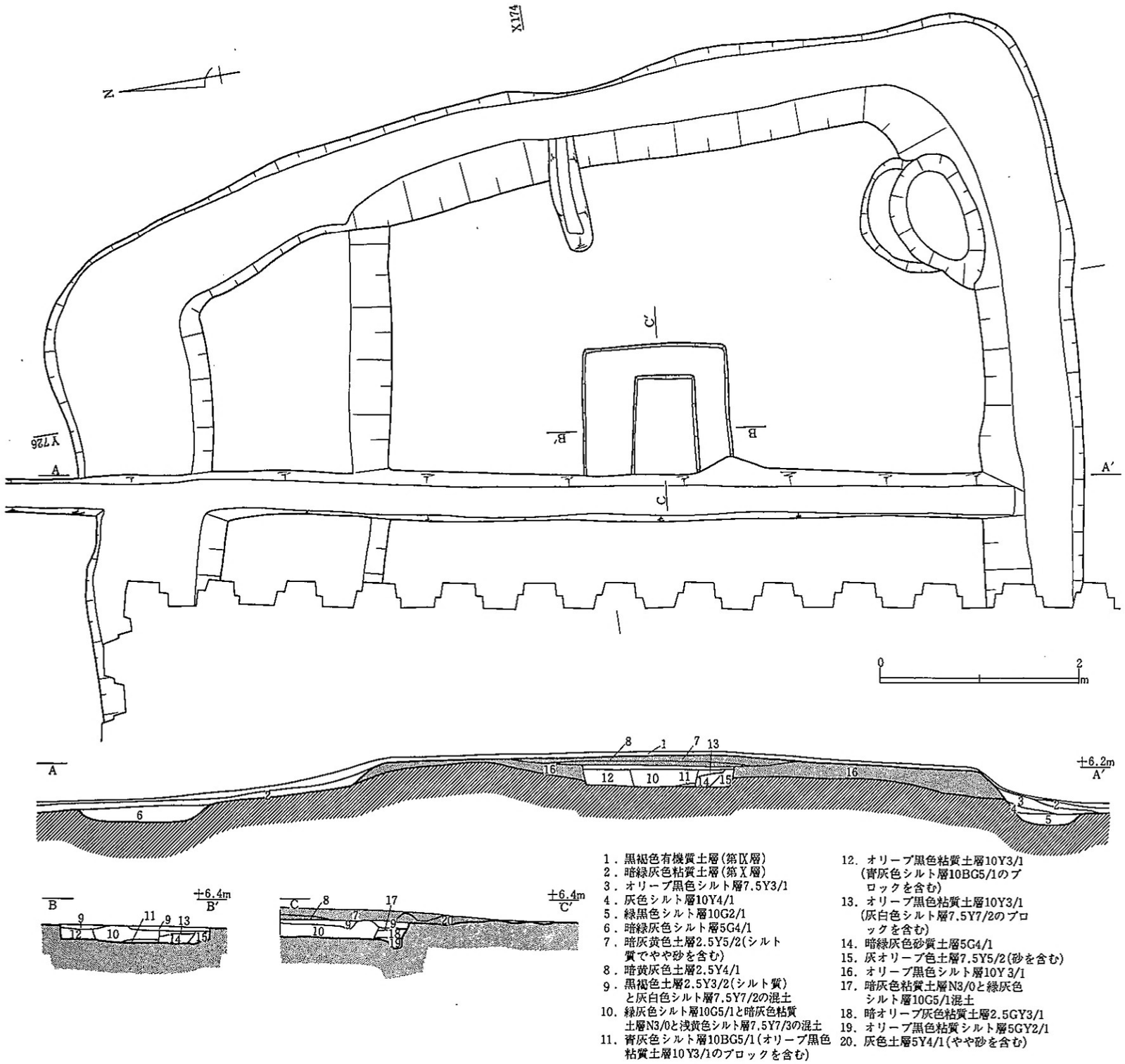
が一層堆積している。

東周溝は、基底部で、幅約0.6m～0.9m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、オリーブ黒色土が堆積し、浅い周溝が埋没した後、マウンドの崩壊土と考えられる灰オリーブ色シルトが堆積する。

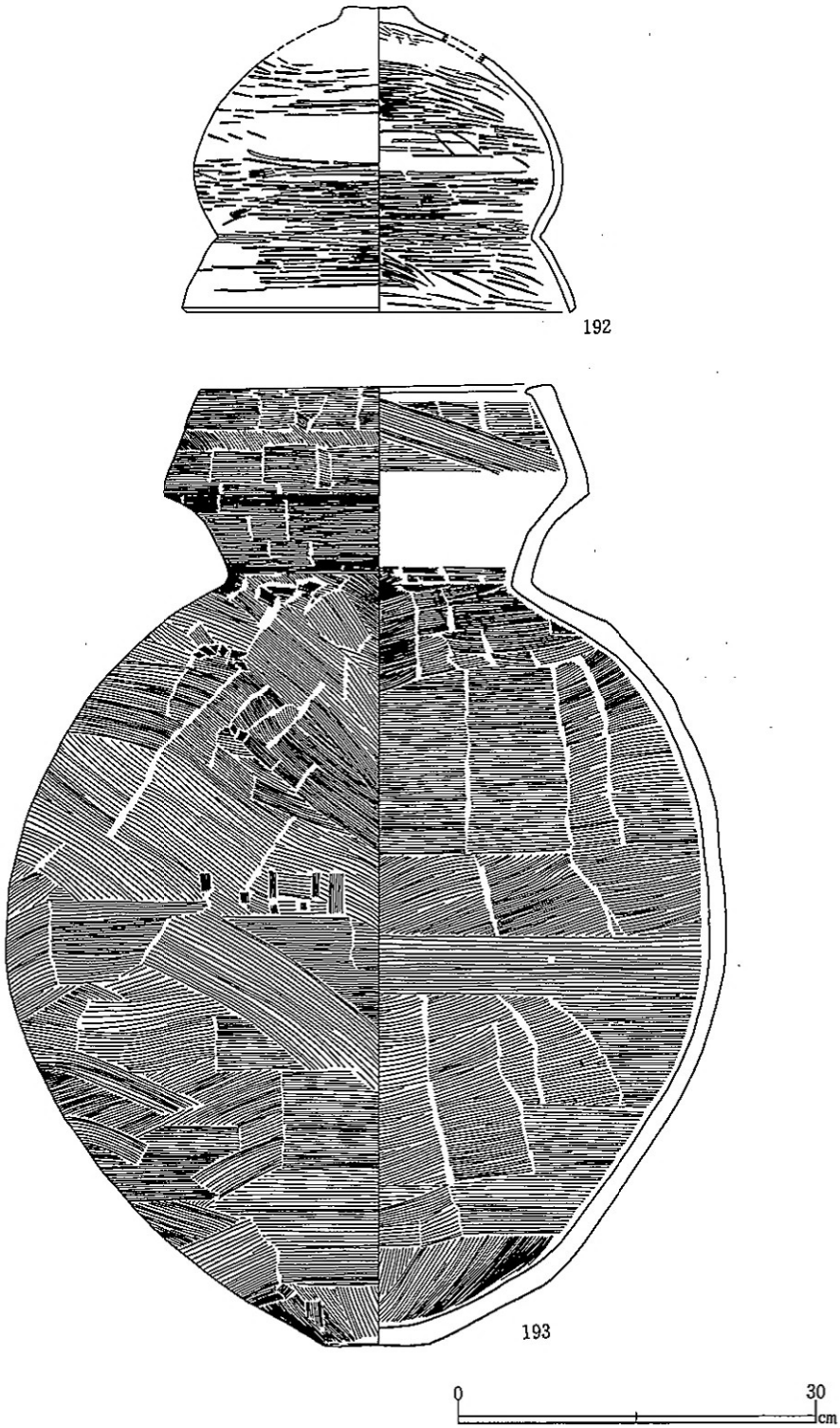
南周溝は、基底部で、幅約0.6m～1.0m、深さ約0.1m～0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約5.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、緑黒色シルトが堆積し、周溝が埋没した後、マウンドの崩壊土と考えられる暗灰色系のシルト層が東周溝と同様に堆積する。

マウンドは、周溝の基底部から高さ約0.5m～0.6mを測る。盛土は、暗黄灰色～オリーブ黒色系のシルト質土を用い、ベース層の高低に合わせて高さ約0.1m～0.3mの盛り土を行ない、上面を平坦にしている。この土は、１号方形周溝墓と違って、砂を混入せず、周辺のシルト質土を採取したものと考えられる。

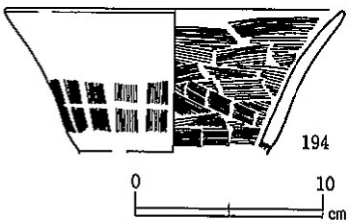
埋葬施設は、マウンドの中央部やや南側で木棺直葬のものと、マウンド南東角で土器棺のものと二基検出された。中央主体部は、マウンド中央部やや南側で検出されたが、西側で矢板と矢板打設時のプレボーリングによる攪乱のため検出できず調査区外に延びる。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約1.3m以上、短辺約1.4m、深さ約0.2mを測る長方形を呈する。断面は、



第52図　古墳時代第1遺構面2号方形周溝墓平面、断面図



第53図　古墳時代第１遺構面２号方形周溝墓出土遺物実測図



第54図　古墳時代第１遺構面
２号方形周溝墓出土遺物実測図

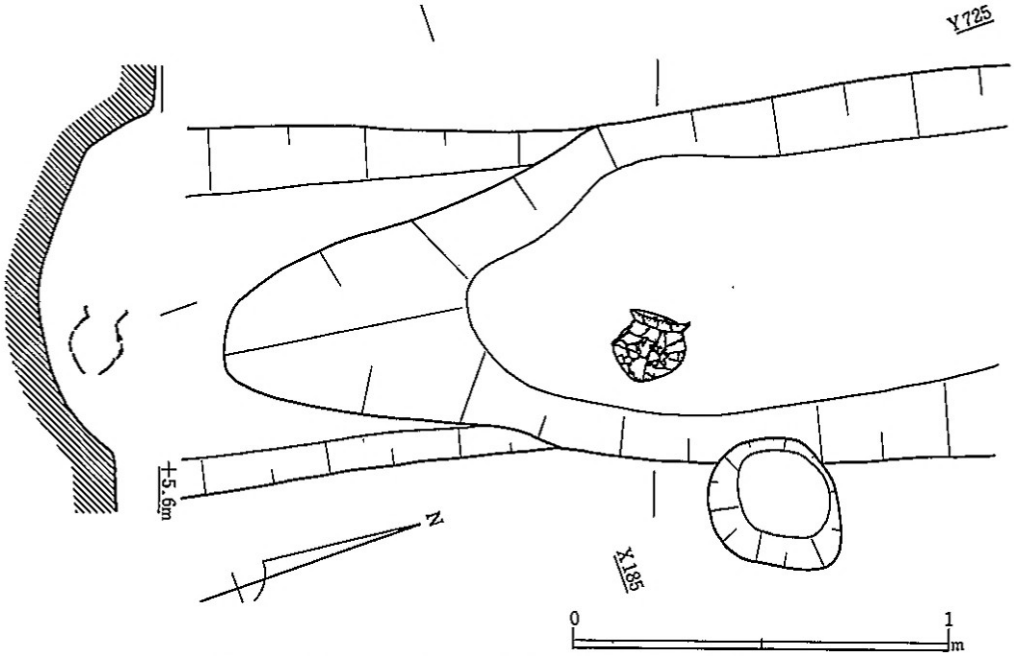
垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、オリーブ黒色～暗灰色系のシルト及び粘質土を埋め戻している。また、木棺痕跡は、側板約1.0m以上、小口板約0.6m、深さ約0.18mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、緑灰色シルトと暗灰色粘質土と浅黄色シルトの混土である。木棺痕跡は、残存状態が良好でなく、構造等は、不明である。

土器棺主体部は、第51図壺棺出土状況図に示すようにマウンド南東角で検出され、大壺を棺に使用し、掘形は、径約1.0m×1.2m、深さ約0.7mを測る楕円形を呈し、この掘形の中の南西側に壺を据えるための二段目の掘形を径約0.8m×1.4m、深さ約0.4mの大きさに掘り下げている。棺に使用されている土器は、第53図193の複合口縁の壺であり、口縁を西側に向けて、開口部に192の鉢形土器を打ち割って蓋としている。土器棺内から歯が１本検出されている。

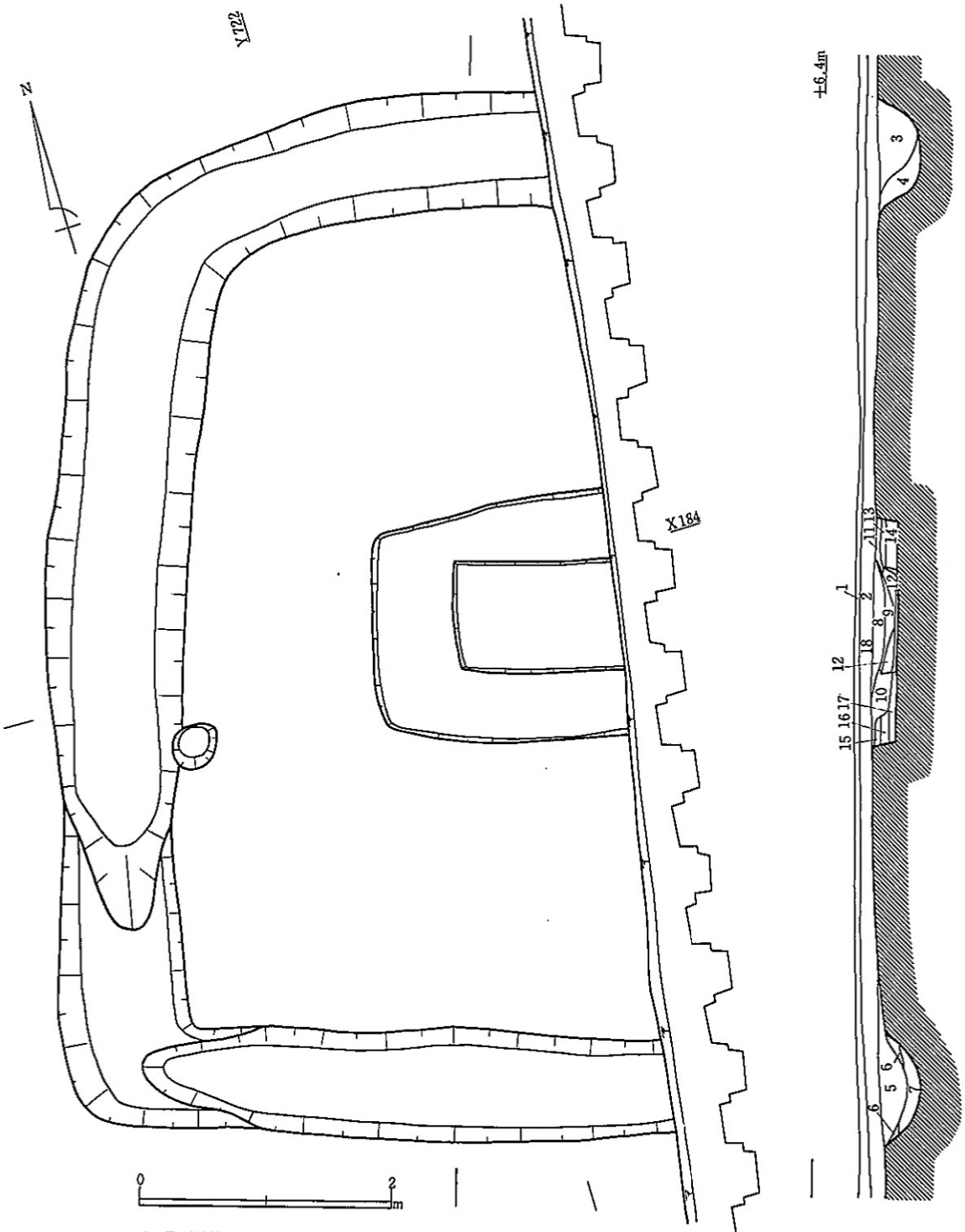
遺物は、土器棺として使用されていた壺および鉢以外にマウンド内から壺口縁部（194）が出土したのみである。　（山上）

３号方形周溝墓　（第55図～第58図、図版18,19,20－１）　３号方形周溝墓は、Ｅトレンチｉ－８，９区に位置する。基底部は、＋5.8mを測る微高地を形成する青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第７遺構面の自然流路０１及び０２のオーバーフローによって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.2m程度である。

この方形周溝墓は、西周溝と北周溝及び南周溝の一部を検出したが、方形周溝墓の約二分の一

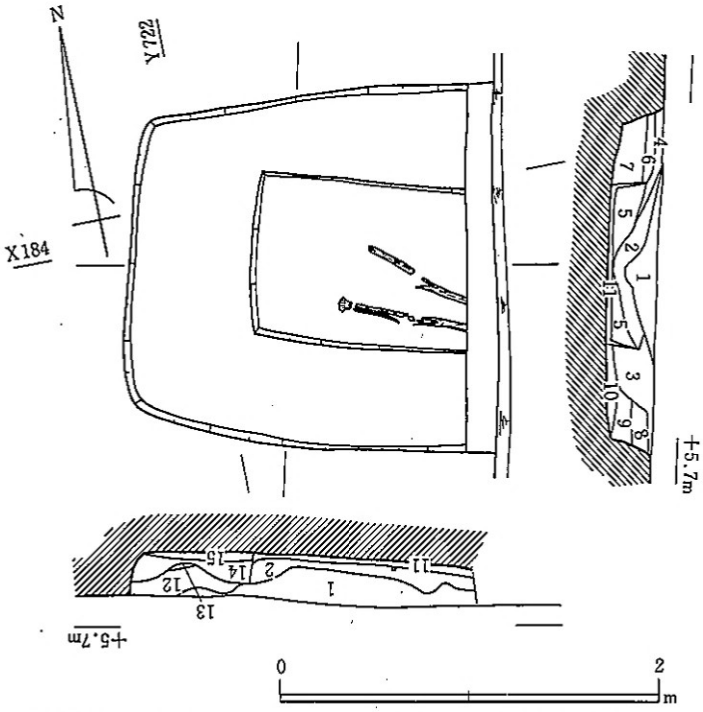


第55図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓遺物出土状況図



1．黒褐色有機質土層（第Ⅸ層）
2．暗緑灰色粘土層（第Ⅹ層）
3．暗緑灰色シルト層 5G3/1
4．暗灰色シルト層 N3/0（多量に細礫を含む）
5．暗青灰色粘質シルト層 10BG4/1
6．緑灰色粘質シルト層 10GY5/1
7．暗青灰色粘質シルト層 5BG4/1
8．青灰色シルト層 5BG6/1（灰白色シルト 10Y7/2のブロックを含む）
9．灰色シルト層 N4/0
10．暗青灰色シルト層 5BG4/04/1
11．暗緑灰色粘質シルト層 10GY4/1
12．緑灰色シルト層 10G5/1
13．緑灰色シルト層 5G5/1
14．緑灰色シルト層 10GY5/1
15．緑灰色粘質土層 10GY5/1
16．緑灰色シルト層 7.5GY5/1
17．暗緑灰色シルト層 7.5GY4/1
18．暗青灰色シルト層 5BG4/1

第56図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓平面、断面図



1．青灰色シルト層 5BG6/1
（灰白色シルト層10Y7/2のブロックを含む）
2．灰色シルト層 N4/0
3．暗青灰色シルト層 5BG4/1
4．暗緑灰色粘質シルト層 10GY4/1
5．緑灰色シルト層 10G5/1
6．緑灰色シルト層 5G5/1
7．緑灰色シルト層 10GY5/1
8．緑灰色粘質土層 10GY5/1
9．緑灰色シルト層 7.5GY5/1
10．暗緑灰色シルト層 7.5GY4/1
11．暗青灰色シルト層 5BG4/1
12．暗緑灰色シルト層 10G4/1
13．暗青灰色シルト層 5BG4/1
14．緑灰色シルト層 10GY5/1
15．緑灰色シルト層 7.5GY5/1

第57図　古墳時代第１遺構面３号方形周溝墓主体部平面、断面図

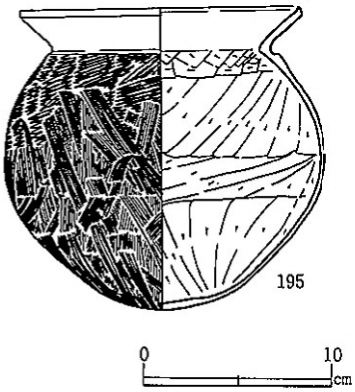
と東周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で南北約6.6m、東西約4.2m以上を測る隅丸の方形或は長方形を呈する。

北周溝は、幅約0.8m～0.9m、深さ約0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。長さ約2.8mに渡って検出され、東側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、方形周溝墓中心部の地山が流れ込んだと考えられる暗灰色シルトが周溝の南肩を埋めた後、１号方形周溝墓のマウンドが崩壊して流れたと考えられる暗灰色シルト（多量に細礫を含む）が周溝を埋没させている。

西周溝は、幅約0.8m～1.1m、深さ約0.1m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。西周溝の南側約1.1m、南西コーナー部まで地山を約0.2m分掘り残し、深さ約0.1mの陸橋部を設けている。埋土は、下層に暗青灰色シルト、上層に灰色シルトが堆積する。

南周溝は、幅約0.7m～0.9m、深さ約0.2m～0.3mを測り、断面は、U字状を呈する。長さ約4.2mに渡って検出され、東側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色～暗青灰色系のシルトが堆積する。



第58図　古墳時代第１遺構面
３号方形周溝墓出土遺物実測図

この方形周溝墓は、周溝を掘削することだけで盛土を行なわず、地山を整形して平坦にしている。

埋葬施設は、方形周溝墓中央部で検出されたが、東側で矢板に切断されて調査区外に延びる。主体部は、木棺直葬であり、掘形は、長辺約2.0m以上、短辺約1.8m、深さ約0.3mを測る長方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。埋土は、第57図主体部平面、断面図に示すように、各方向で違った状況を示し、緑灰色系のシルトを数回に渡って埋め戻している。また、木棺痕跡は、側板約1.3m以

上、小口板約0.8m、深さ約0.2mを測る。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。断面図からは、蓋板が腐朽して上部の土が流れ込んだことが看取される。埋土は、木棺内に緑灰色シルトが堆積し、上部から青灰色シルト、灰色シルトが流れ込んでいる。木棺の底部には、大腿骨以下両足の骨が遺存していた。

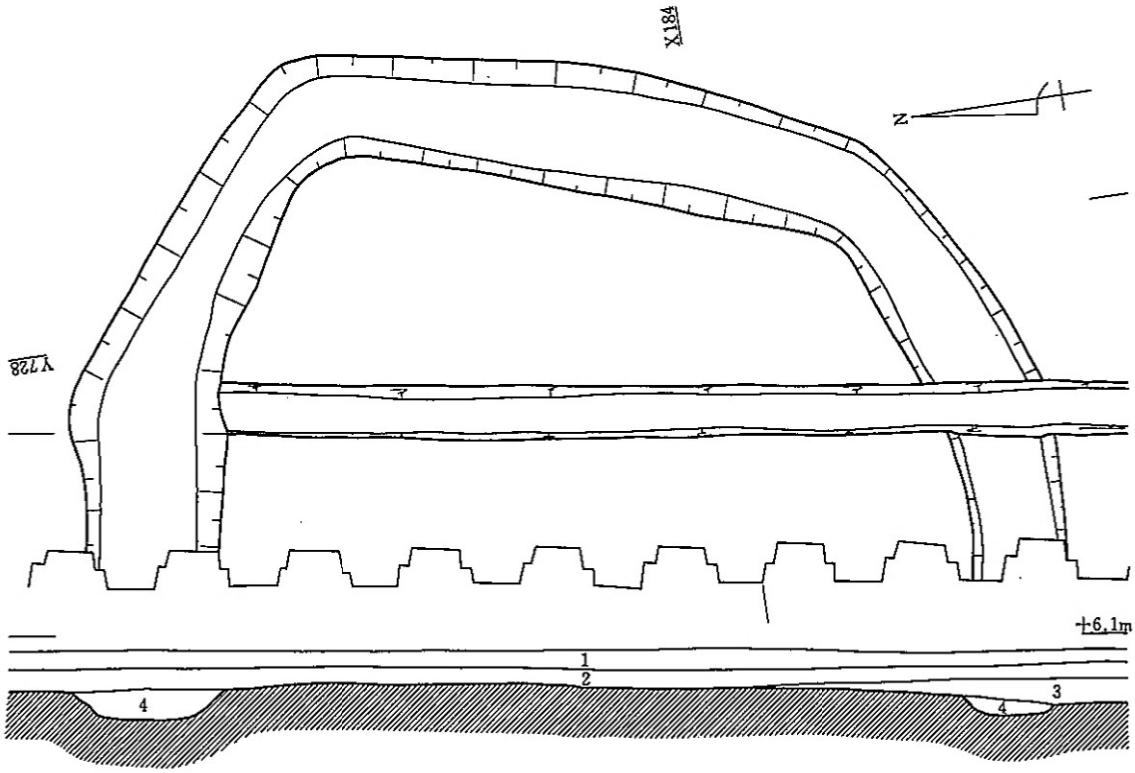
遺物は、第55図遺物出土状況図に示すように、西周溝の陸橋部北側約1.1mの位置で、周溝底から浮いた状態で甕（195）が出土している。他には出土していない。　（山上）

4号方形周溝墓　（第59図、図版20－2）　4号方形周溝墓は、Eトレンチｉ－7区に位置する。基底部は、＋5.9mを測る微高地を形成する青灰色シルトをベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路01、02のオーバーフローによって形成されている。周囲のベース面からは比高は、約0.3m程度である。

この方形周溝墓は、東周溝と北周溝及び南周溝の一部検出したが、方形周溝墓の約二分の一と西周溝は、調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で南北約3.6m、東西約3.4m以上を測る不整形な方形を呈する。

北周溝は、幅約0.6m～1.0m、深さ約0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約3.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗緑灰色粘質土である。



1．黒褐色有機質土層（第Ⅸ層）　3．暗青灰色粘質土層
2．暗緑灰色粘質土層（第Ⅹ層）　4．暗緑灰色粘質土層 10GY3/1

0　2 m

第59図　古墳時代第1遺構面4号方形周溝墓平面、断面図

東周溝は、幅約0.7m～0.9m、深さ約0.2mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、灰色シルトである。

南周溝は、幅約0.6m～0.7m、深さ約0.1mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。長さ約2.4mに渡って検出され、西側の延長方向は、調査区外に延びる。埋土は、暗青灰色粘質土である。

この方形周溝墓は、周溝を掘削するだけで盛土を行なわず、地山を整形して平坦にしている。

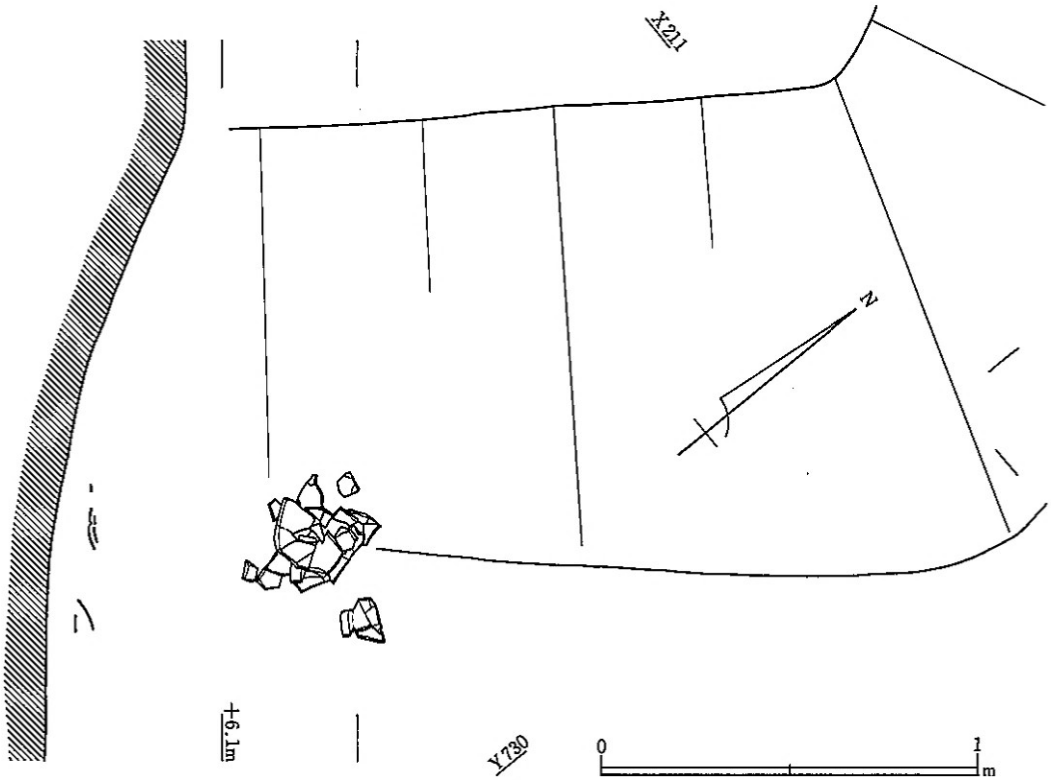
埋葬施設は、検出されず、遺物も出土しなかった。　(山上)

5号方形周溝墓　(第60図～第63図、図版21)　5号方形周溝墓は、E地区ほぼ中央部西寄りに、a－7区～b－7区に位置し、一部a－8区～b－8区に広がり、亀井北遺跡の方形周溝墓群中最南端に位置する。基底部は、+5.8m～+6.0mを測る微高地を形成する黄灰色砂をベースに存在する。この微高地は、弥生時代第7遺構面の自然流路02の流路内堆積砂によって形成されている。周囲のベース面からの比高は、約0.4m程度である。

この方形周溝墓は、北東周溝から、南東周溝にかけて東半部を検出したが、西半部は調査区外に延びる。

平面形は、周溝の中心で北東側一辺約9.0m、南東側一辺約8.0m以上を測る方形を呈する。

北東周溝は、幅約3.6m～4.5m、深さ約0.3m～0.4mを測り、断面は、浅いU字状を呈する。埋土は、周溝外側から砂質土層が流れ込んだ後、周溝底に緑灰色粘土が堆積し、直上層に黒色粘



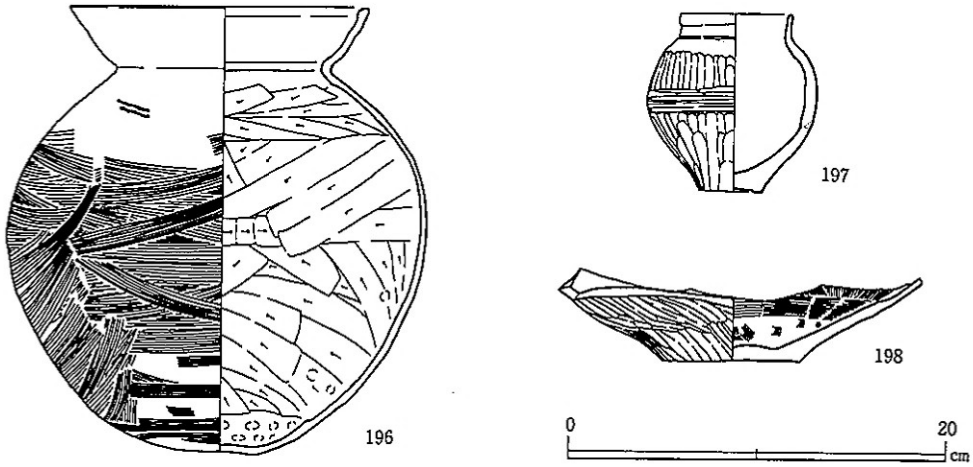
第60図　古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓遺物出土状況図

1．黒褐色有機質土層(第Ⅸ層)
2．暗緑灰色粘質土層(第Ⅹ層)
3．オリーブ灰色砂質土層 2.5GY5/1
4．黒色粘土層 N2/0
5．緑灰色粘土層 10G5/1～10G4/1
6．青灰色シルト層 5BG5/1
7．灰色粘土層 7.5Y4/1
8．灰オリーブ色砂質土層 7.5Y6/2
9．灰白色砂質土層 7.5Y7/2
10．暗緑灰色粘土層 7.5GY4/1
11．オリーブ黒色砂質土層 10Y3/1

第61図　古墳時代第1遺構面5号方形周溝墓平面、断面図

土層が見られることから滞水して周溝が埋没し、植生があったことを示している。その上層にオリーブ灰色砂質土が堆積する。周溝の北側コーナー部は、３Ｅピットで南東隅に向けて地盤がやや落ち込んで行くのが観察されたのみであり、明瞭な周溝は、確認できなかったが、これ以上北西方向に広がる可能性はない。

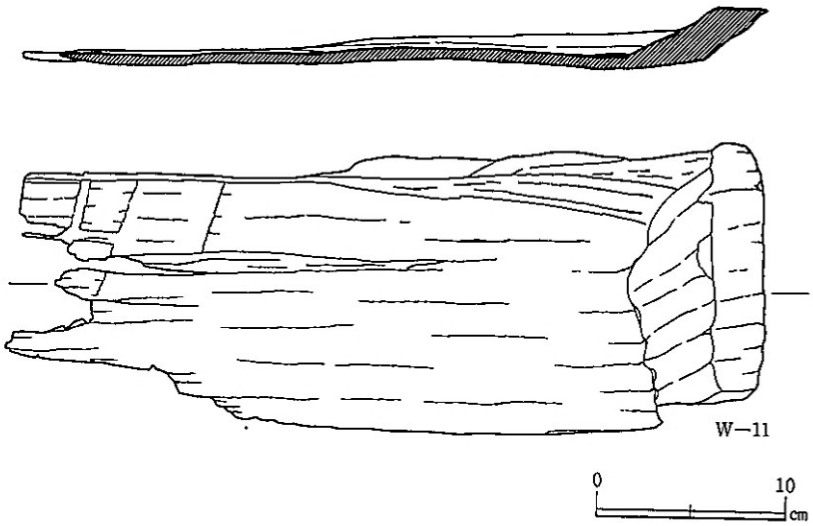
南東周溝は、幅約3.0m～3.8m、深さ約0.3mを測り、断面は、浅いＵ字状を呈する。埋土は、北東周溝と同様の堆積状況を示している。



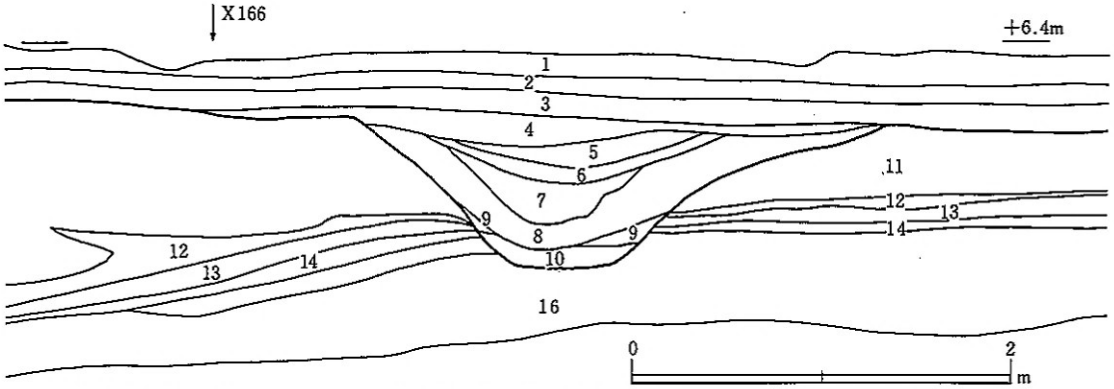
第62図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓出土遺物実測図

埋葬施設は、検出されなかった。

遺物は、周溝東側コーナー部やや南西にあたるａ－７区北東からａ－８区にかけて第62図196の甕が溝底からやや浮いた状態で出土し、197の小型壺が溝底から出土した。また、198の壺底部と第63図ｗ－11の木製品は、北東周溝北端部の溝底からやや浮いた状態で出土した。壺底部（198）は、共伴して出土した土器と全く違った時期の遺物であるが、底部内面には、赤色顔料が付着していたことから、この時期に皿状のものとして使用されたことが考えられる。また、周溝内に径約0.３m程度の立ち枯れた樹木根が検



第63図　古墳時代第１遺構面５号方形周溝墓出土遺物実測図



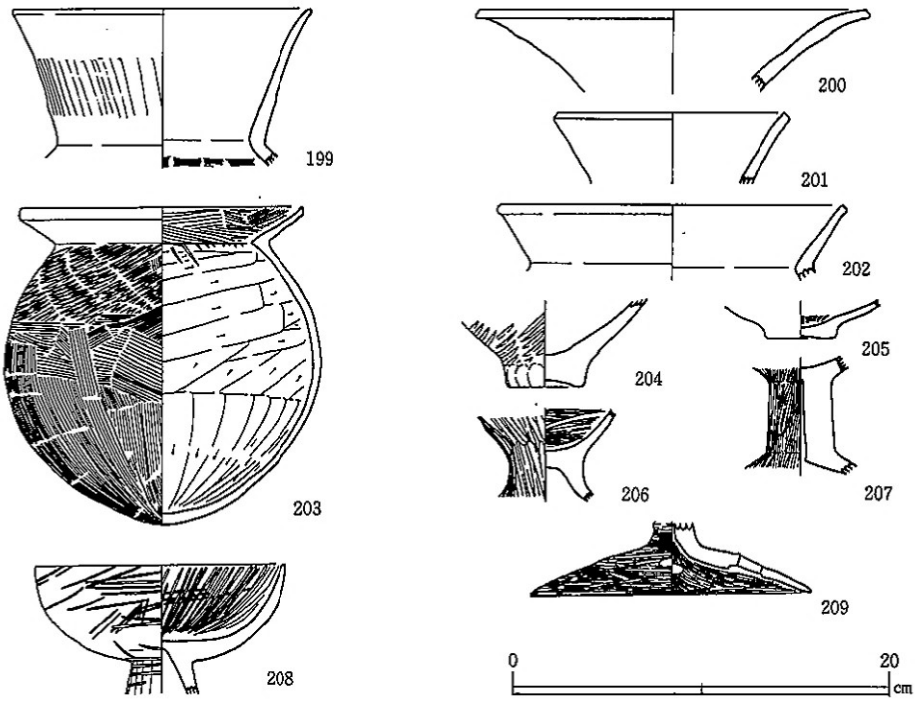
1．暗青灰色粘土層(第Ⅷ層)
2．黒褐色有機質土層(第Ⅸ層)
3．暗緑灰色粘土層(第Ⅹ層)
4．暗灰色砂質土層 N3/0
5．緑灰色粘土層(やや砂を含む)10GY6/1
6．灰色有機質土層 N5/0
7．暗緑灰色粘質土層 7.5GY3/1
8．暗緑灰色砂質土層 7.5GY4/1
9．暗緑灰色シルト層(最下層に粗砂)10GY4/1
10．暗緑灰色粘土層 7.5GY3/1
11．明黄褐色シルトと灰色シルトの互層
12．暗オリーブ灰色粘土層
13．青灰色粘土層(第XⅢ層)
14．黒色粘土層
15．暗緑灰色シルト層
16．暗緑灰色粘質シルト層と緑灰色シルト層と明黄褐色粗砂層の互層

第64図　古墳時代第１遺構面ＳＤ０１土層断面図

出された。　(山上)

ＳＤ０１　ＳＤ０１は、Ｅ地区北端で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｖ字状を呈し、底部は、約0.6m幅で平坦である。幅約1.8m～2.8m、深さ約0.8mを測り、埋土は、第64図に示す層序（１Ｅピット西壁断面）である。

遺物としては、第65図に示す土器が出土しているが、そのほとんどが下層から出土しており、方形周溝墓群と同時期に存在していたものと考えられる。



第65図　古墳時代第１遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図

ＳＤ０２　ＳＤ０２は、１Ｅピットで検出された北西から南東にほぼ直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｖ字状を呈し、底部は、約0.7m幅で平坦である。幅約2.0m、深さ約0.5mを測り、埋土は、基本的にはＳＤ０１と同一である。

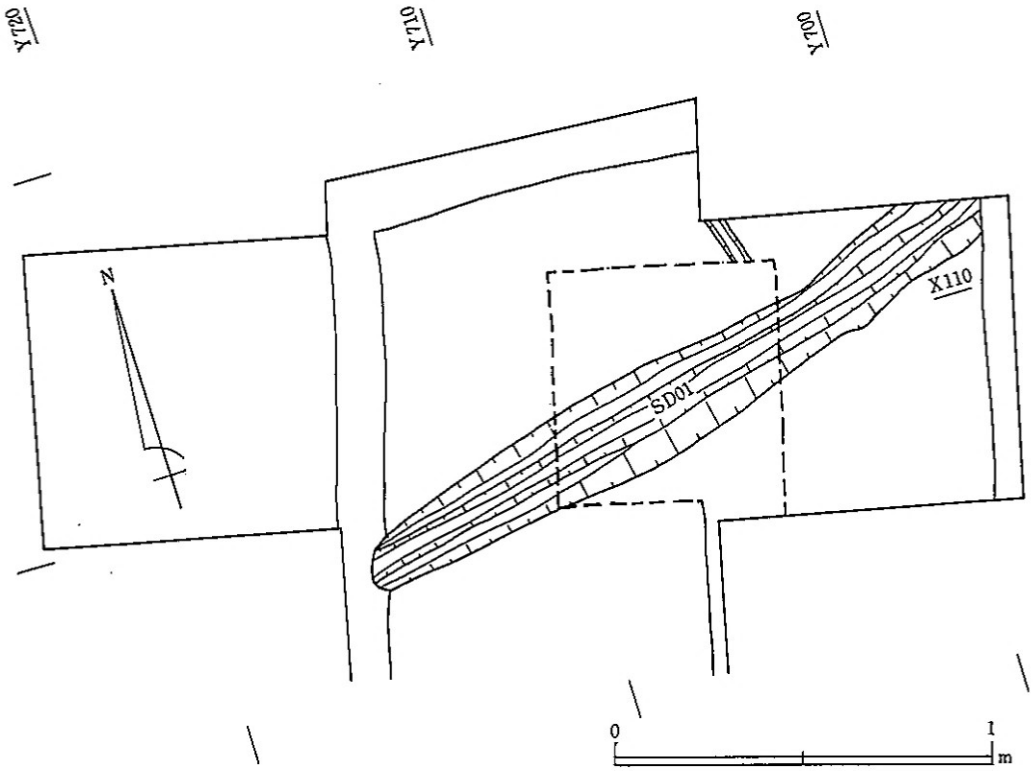
この溝状遺構は、１Ｅピット中央部でＳＤ０１に流れ込み、その合流点でＳＤ０１の南岸を浸食している。また、調査時では、ＳＤ０１とＳＤ０２を同一遺構として掘っていたため、遺物については、ＳＤ０１のものと区別できていないが、層序から見て時間的な前後関係はなく、同時に存在していたものと考えられる。

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、１Ｅピット南側で検出された溝状遺構である。方向は、南北方向からＳＤ０１に当たって東西方向に向きを変える。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約1.2m、深さ約0.3mを測り、埋土は、暗緑灰色粘質土である。

落ち込み０１　落ち込み０１は、Ｅ地区ｊ－８区、３、４号方形周溝墓と５号方形周溝墓の間で検出され、一辺約2.1m、深さ0.2mを測る方形を呈する。断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦である。遺物は、出土しなかった。

以上古墳時代第１遺構面に関して、挿図以外に付図８全体図及び付図９方形周溝墓群のコンター図を作成しているので参照されたい。　（山上）

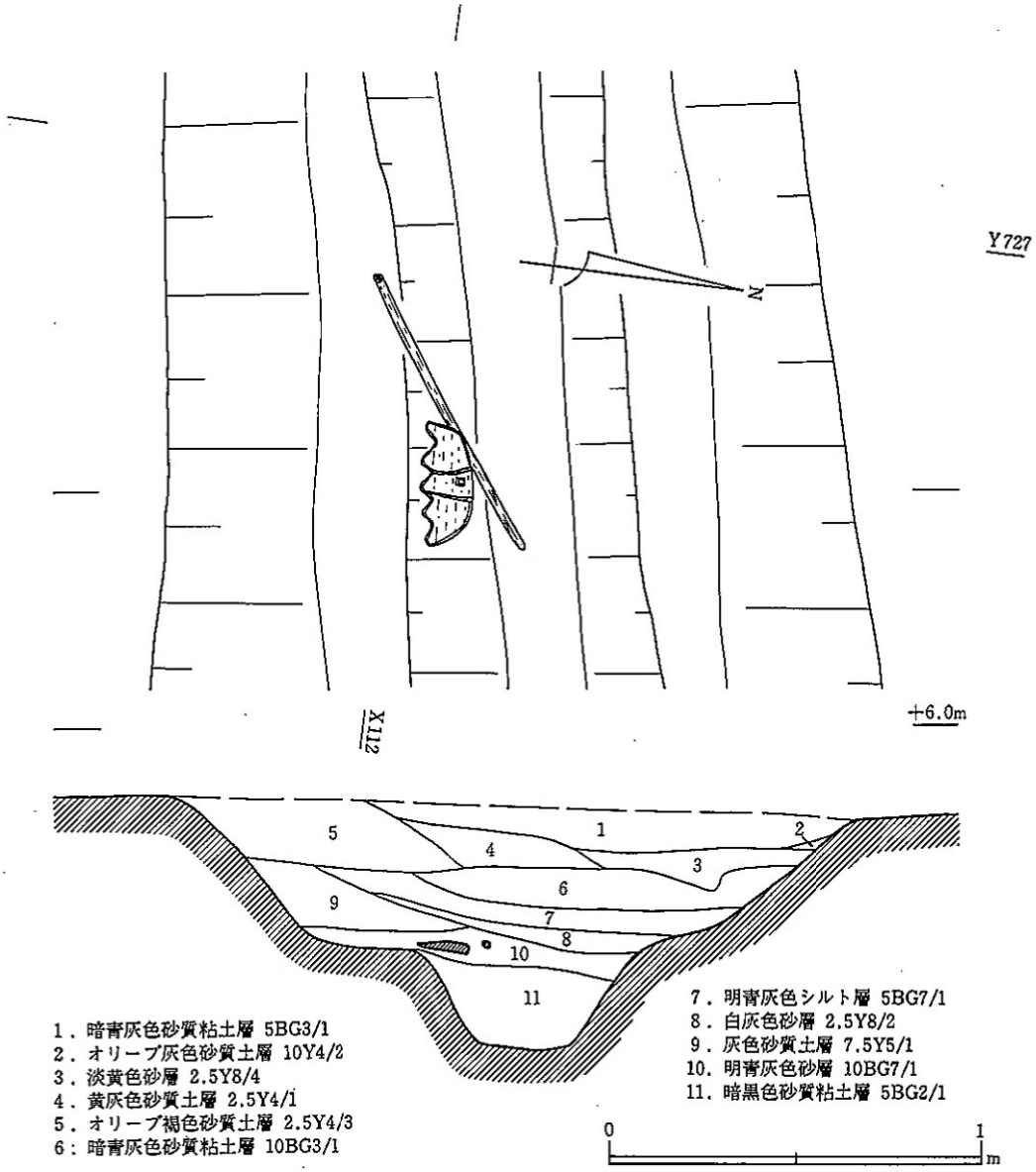
２）古墳時代第２遺構面　前期　（第66図、図版22－１）



第66図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１平面図

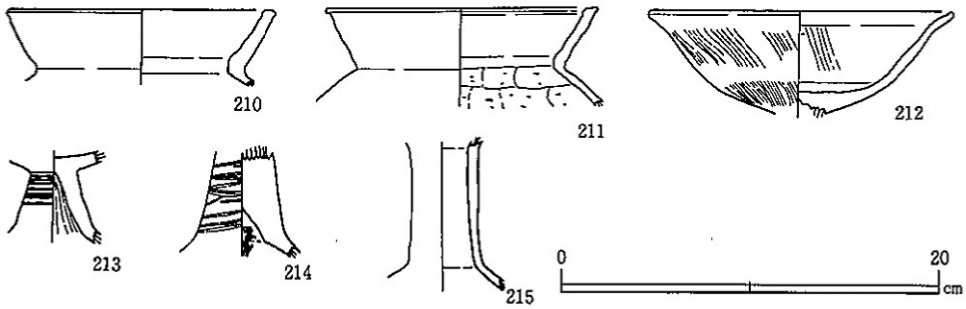
当遺構面は、上面が約＋5.3m～＋5.9mに存在する古墳時代第１遺構面の包含層である第Ⅺ層の暗青灰色砂質土層（10ＢＧ4/1）をベース面とする。上層には、古墳時代第３遺構面の暗緑灰色砂質粘土層が堆積している。

前述したようにベース面である第Ⅺ層は、Ｄ地区北より南に行くに従い徐々に薄くなり、Ｅ地区北端部においては、相当層は確認できなかったため、Ｄ、Ｅ地区の間で消滅し、Ｅ地区においては古墳時代第１遺構面の第Ⅺ層と同一ベース面となるものと思われる。遺構は、Ｄ地区北側で検出した溝１本（ＳＤ０１）のみである。　（奥）

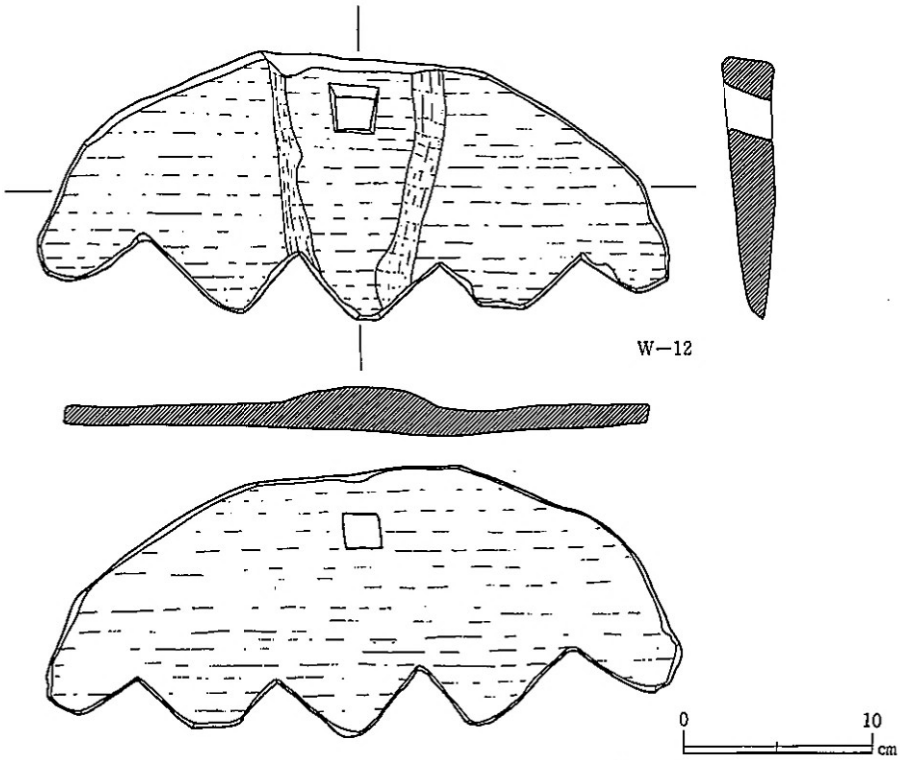


第67図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１木器出土状況図

ＳＤ０１　溝は第Ⅺ層を掘り込んで造られており、ｂライン上をほぼ東西方向に走り、幅約２ｍ、深さ約0.65ｍを測る。溝は、深さ約0.35ｍの地点で二段掘りを行なっている。その地点からの溝の計測値は、幅約0.6ｍ、深さ約0.3ｍを測る。ａ－９区東南部付近で流水により北肩部が削られ、その付近一帯にオーバーフローした砂層約0.1ｍ堆積していた。埋土は、二段掘りの個所には、暗黒色砂質粘土層（５ＢＧ2/1）が堆積し、その上面から溝肩部まで砂層、シルト層及び粘土層が互層状に堆積していた。遺物は（第68、69図）、上層に存在する砂層内から出土し、二段掘りの個所からは出土しなかった。遺物は土器の他に、木器（第67図）としてえぶりが、明青



第68図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図



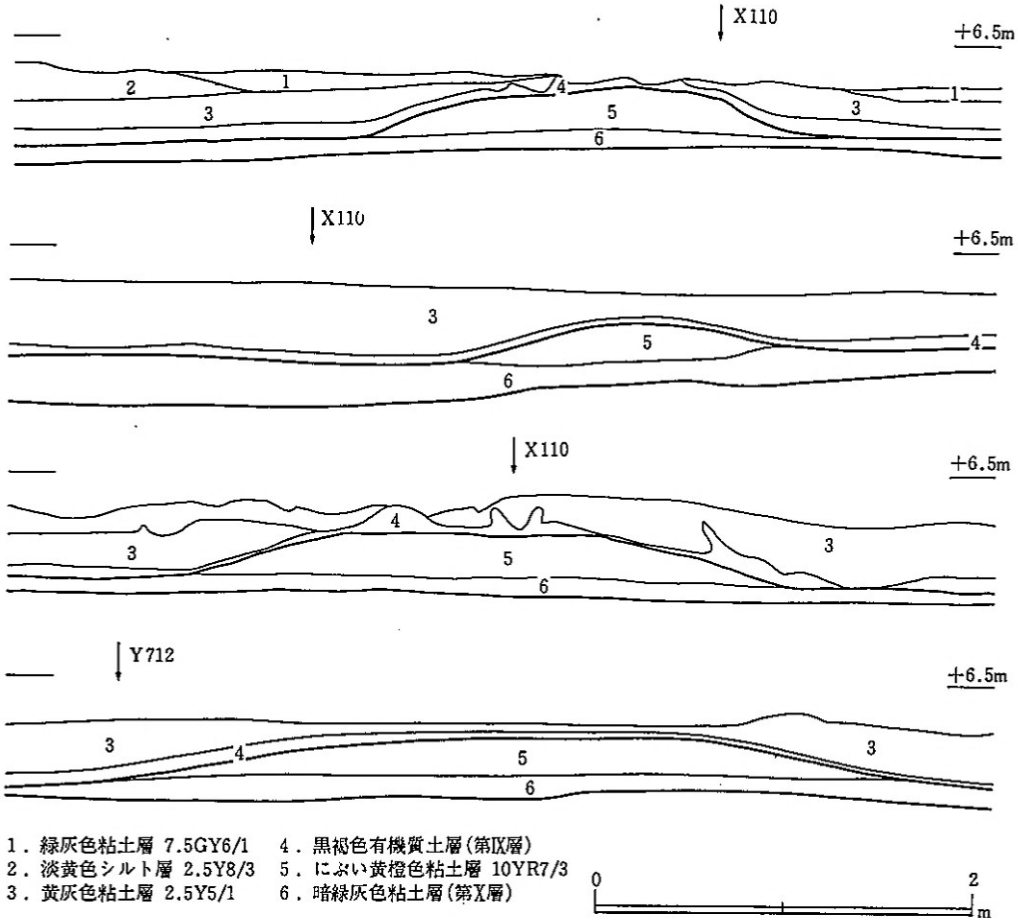
第69図　古墳時代第２遺構面ＳＤ０１出土遺物実測図

灰色砂質層中より出土している。　　(奥)

3）古墳時代第３遺構面　中期　（付図10、図版23－１）

古墳時代第３遺構面のベース面である、第Ｘ層の暗緑灰色粘質土層（10Ｇ4/1）上面は、約＋5.7ｍ～＋5.8ｍ付近に存在する。上層には厚さ約0.12ｍの第Ⅸ層の黒褐色有機質土層（7.5ＹＲ3/1）が堆積する。この層は亀井北遺跡の調査区全域に認められ、三調査区で標準土層を作る上で重要な層となっている。第Ｘ層の厚さは、約0.2ｍであり、下面は、凹凸が認められることから、鋤、鍬などの農耕具を使用した痕跡ではないかと推定される。遺構は、Ｄ地区北側とＥ地区北側で検出した大畦畔３本のみである。小区画は、検出できなかったが、上記の理由により全域が水田の可能性が高いものと推定される。　　(奥)

大畦畔０１、０２（第70図）　Ｄトレンチ掘削中は、上面の有機質土層が盛り上がっているのを確認できず、畦畔の高まりを削平してしまった。その後の、西壁、北壁の土層断面観察の再検討を行なった結果、畦畔状の高まりが、両面に存在することを確認した。また、試掘時の土層断



第70図　古墳時代第３遺構面大畦畔０１、０２土層断面図

面図の再検討及び、１、２Ｄピットの遺構検出時において、東西に走る畦畔を確認したため、畦畔はｂライン上を東西方向に延びる畦畔と、ａ－９区の西南中央部でとりついて北西方向に延びるものの２本の畦畔が存在するということを確認した。

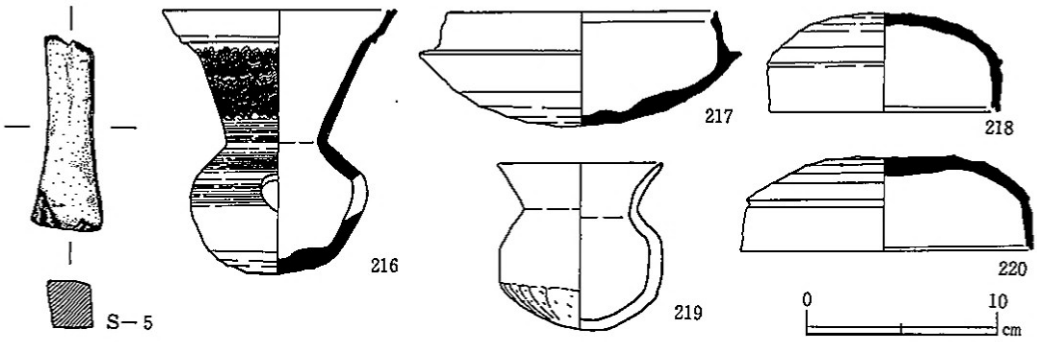
大畦畔０１は、東西方向に延びており、Ｄトンレチ西端では土層断面から幅2.3m、高さ0.2mであるが、試掘時の断面及び２Ｄピット両端では、幅1.7m、高さ0.18mと細くなり、東に延びるに従い徐々に広くなり、２Ｄピット東端付近でもとの形状にもどるものと推定される。盛土はにぶい黄橙色粘土層（10ＹＲ7/3）である。

大畦畔０２は、Ｄトレンチ北の調査区外へと延びるため、上記の理由により、遺構そのものは確認できなかったが、幅2.1m、高さ0.18mと推定され、盛土は大畦畔０１と同種である。

遺物（第71図）は、瑕（216）、坏身（217）、坏蓋（218）、壺（219）が大畦畔０１、０２の盛土と推定される地点より出土している。　（奥）

大畦畔０３　大畦畔０３は、Ｅ地区北側ｈ－７，８区で検出された東西方向に走る畦畔状遺構であり、幅約7.5m～８m、高さ約0.4m～0.5mを測る。長さ約8.5mに渡って検出され、両端は、調査区外に延びる。この畦畔は、古墳時代第１遺構面に構築された１号方形周溝墓と２号方形周溝墓のマウンドを利用して、その上層に約0.1mの盛土を行ない、また、両方形周溝墓のマウンド間においても約0.4mの盛土を行なっている。この盛土を行なうために両方形周溝墓のマウンド北側約４分の１程度地山まで削平し、その土を利用しているが、全ての盛土をまかなうことはできない。

遺物としては、両方形周溝墓のマウンド間の盛土から第71図220に示す須恵器坏蓋が出土している。　（山上）

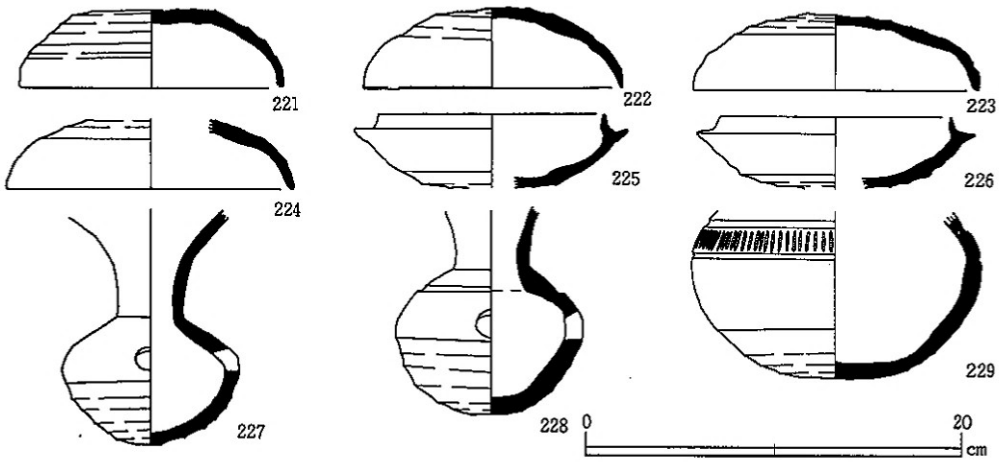


第71図　古墳時代第３遺構面出土遺物実測図

４）古墳時代第４遺構面　後期　（付図11、図版24）

古墳時代第４遺構面は、調査区全域で検出された第Ⅷ層（暗青灰色粘土５ＢＧ4/1）をベースに＋5.7m～＋6.4mに存在する。上層は、第Ⅶ層の淡黄色砂が厚さ約0.5m～1.0mで堆積している。遺構は、大畦畔、小畦畔、足跡が検出されている。遺物は、この面に伴う遺構からは出土していないが、上層の第Ⅷ層から第72図に示す須恵器の坏蓋、坏身、瑕が出土している。　（山上）

Ｄ地区においては、遺構面である暗青灰色粘土層（５ＢＧ4/1）は、下層に存在する古墳時代第３遺構面の大畦畔０１、０２に影響されて、ａ－８，９，10区において約0.3m程度盛り上がっているために、上層堆積層である第Ⅶ層の淡黄色砂層（５Ｙ8/3）は、これから北へは堆積していない。Ｅ地区の状況から水田と推定されるが、暗青灰色粘土層（５ＢＧ4/1）上面は、凹凸が



第72図　古墳時代第４遺構面出土遺物実測図

激しく、上層の激しい砂層の流水堆積の状況を示しているため水田畦畔は検出されなかった。流水堆積の方向は、第Ⅷ層が東へ行くほど高くなる傾向を示し、流水堆積によってできた溝状の落ち込みが東から西へと低くなっていることから、東からと推定される。　（奥）

大畦畔０１　大畦畔０１は、Ｅ地区北側ｈ－７，８区で検出された東西方向に走る畦畔状遺構であり、幅約８ｍ～10m、高さ約0.3m～0.6mを測る。長さ約7.5mに渡って検出され、両端は、調査区外に延びる。この畦畔は、古墳時代第３遺構面の大畦畔０３の盛土の高まりを利用しているが、この遺構面のベース層である暗青灰色粘土（第Ⅷ層）が、古墳時代第３遺構面大畦畔０３の上層を黒褐色有機質土（第Ⅸ層）と共に厚さ約0.3mで被い、層序から見る限り盛土構築を行なった痕跡が認めれず、景観としては、畦畔状に高まっていただけの可能性もある。

小畦畔０１　小畦畔０１は、Ｅトレンチｊ－８区北西端で東西方向に検出され、幅約0.6m～1.0m、高さ約0.1mを測る。長さ約３ｍに渡って検出され、東側は、流水による削平を受け、西側は、調査区外に延びる。

小畦畔０２　小畦畔０２は、３Ｅピット東側で南北方向に検出され、幅約0.7m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約６ｍに渡って検出されたが、北側では、流水による削平を受けている。西側で小畦畔０３と直交して接続し、東側でトレンチ部の小畦畔０５と接続する可能性が高いが、土層観察用断面を設定したため、検出できなかった。

小畦畔０３　小畦畔０３は、３Ｅピット中央部で東西方向に検出され、幅約0.6m～0.8m、高さ約0.3mを測る。長さ約６ｍに渡って検出され、東側で小畦畔０２、西側で小畦畔０４と直交して接続する。

小畦畔０４　小畦畔０４は、３Ｅピット西側で南北方向に検出され、幅約0.6m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約5.5mに渡って検出され、東側で小畦畔０３と直交して接続する。

小畦畔０５　小畦畔０５は、Ｅトレンチｊ－７，８区南側で東西方向に検出され、幅約0.6m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約３ｍに渡って検出されたが、東側では、流水による削平を受けていて、東側での小畦畔０６との接続は、不明である。

小畦畔０６　小畦畔０６は、Ｅトレンチｊ－８区中央部南端からａ－８区中央部で南北方向に検出され、幅約0.7m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約８ｍに渡って検出されたが、北側では、流水による削平を受け、南側では、試掘調査ピットによって破壊されている。この畦畔中央部東側で小畦畔０７と直交して接続し、南端西側で小畦畔０８と直交して接続する。

小畦畔０７　小畦畔０７は、Ｅトレンチａ－８区ほぼ中央部で東西方向に検出され、幅約0.4m～0.5m、高さ約0.1mを測る。長さ約3.5mに渡って検出されたが、これ以上東側では、検出されず、ここで終わるものと考えられる。

小畦畔０８　小畦畔０８は、Ｅトレンチａ－８区南側からａ－７区にかけて東西方向にかけて検出され、幅約0.6m～0.7mを測る。長さ約５ｍに渡って検出され、南側で小畦畔０９と直交して接続し、西側は、調査区外に延びる。

小畦畔０９　小畦畔０９は、Ｅトレンチａ－８区からｂ－８区にかけて南北方向に検出され、幅約0.6m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約６ｍに渡って検出され、中央やや北寄りで畦畔が途切れる部分があり、水口にあたるものと考えられる。南側では、一段高くなっており、畦畔は、検出できなかった。

小畦畔１０　小畦畔１０は、Ｅトレンチｃ－７区からｄ－７区にかけて南北方向に検出され、幅約0.7m～1.2m、高さ約0.1mを測る。長さ約15mに渡って検出され、北端部では、畦畔の方向を北西に向け、調査区外に延びる。

小畦畔１１　小畦畔１１は、５Ｅピットで南東から北西方向に検出され、幅約0.5m～0.8m、高さ約0.1mを測る。長さ約７ｍに渡って検出され、北西側で小畦畔１２と直交して接続する。この畦畔は、両端共に調査外に延びて行くが、小畦畔１３と方向から考えて同一の畦畔である可能性もある。

小畦畔１２　小畦畔１２は、５Ｅピット北西端で北東から南西方向に検出され、幅約0.6m、高さ約0.05mを測る。長さ約0.8mに渡って検出されたが、南西側は、調査区外に延びる。

小畦畔１３　小畦畔１３は、Ｅトレンチｄ－７区南端からｅ－７区にかけて南東から北西方向に検出され、幅約0.7m～0.9m、高さ約0.2mを測る。長さ約４ｍ渡って検出され、北西側でやや角度をもって北西方向に向きを変えて調査区外に延びる。

小畦畔１４　小畦畔１４は、Ｅトレンチｅ－７，８区中央部で東西方向に検出され、幅約0.6m～1.2m、高さ約0.2mを測る。長さ約8.5mに検出され、両端で調査区外に延びる。

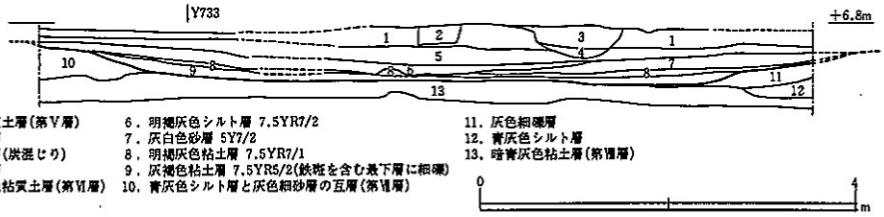
当遺構面で検出された水田は、以上に述べた畦畔が検出されているが、上層に堆積している砂

の原因である流水によって遺構面が荒れており、遺構の検出状況は、良好ではなかったが、ある程度の水田の単位の復元はｊ－７，８区～ａ－７，８区付近で可能である。水田１枚あたり約６ｍ×９ｍ、約54㎡の広さを持つ単位が推定される。この広さの水田が周辺に広がっていたと考えるには、調査面積が狭く、今後の周辺の調査によって判明するものと考える。　(山上)

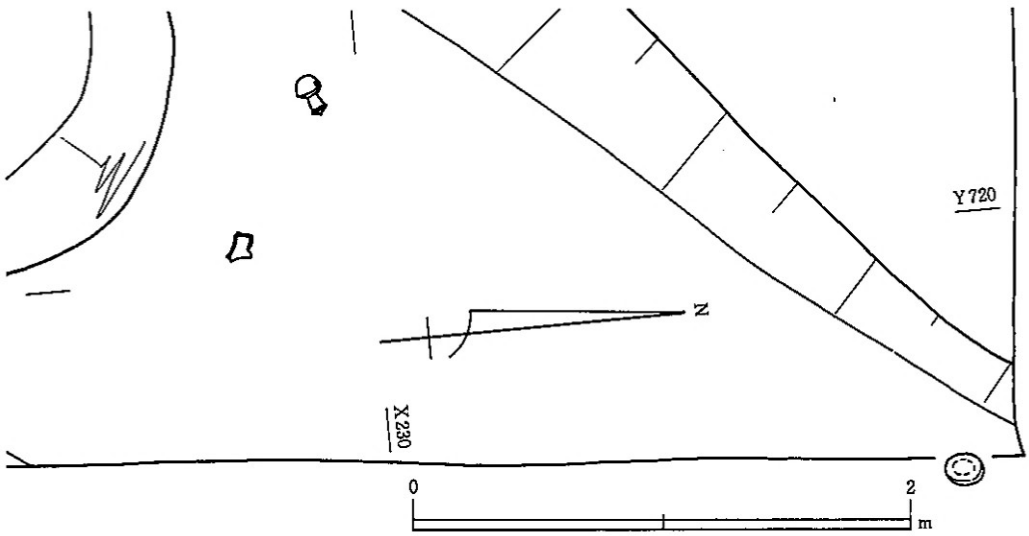
５）古墳時代第５遺構面　後期　(第75図)

古墳時代第５遺構面は、調査区ほぼ全域で検出された第Ⅶ層（淡黄色砂５Ｙ8/3）をベースに+6.5m～+6.8mに存在するが、遺構が検出された範囲は、Ｘ211以南である。上層は、第Ⅵ層（にぶい褐色粘質土）や灰褐色シルトが厚さ約0.1m～0.2mで堆積している。遺構としては、溝状遺構２本が検出されている。遺物は、溝状遺構から出土している。　(山上)

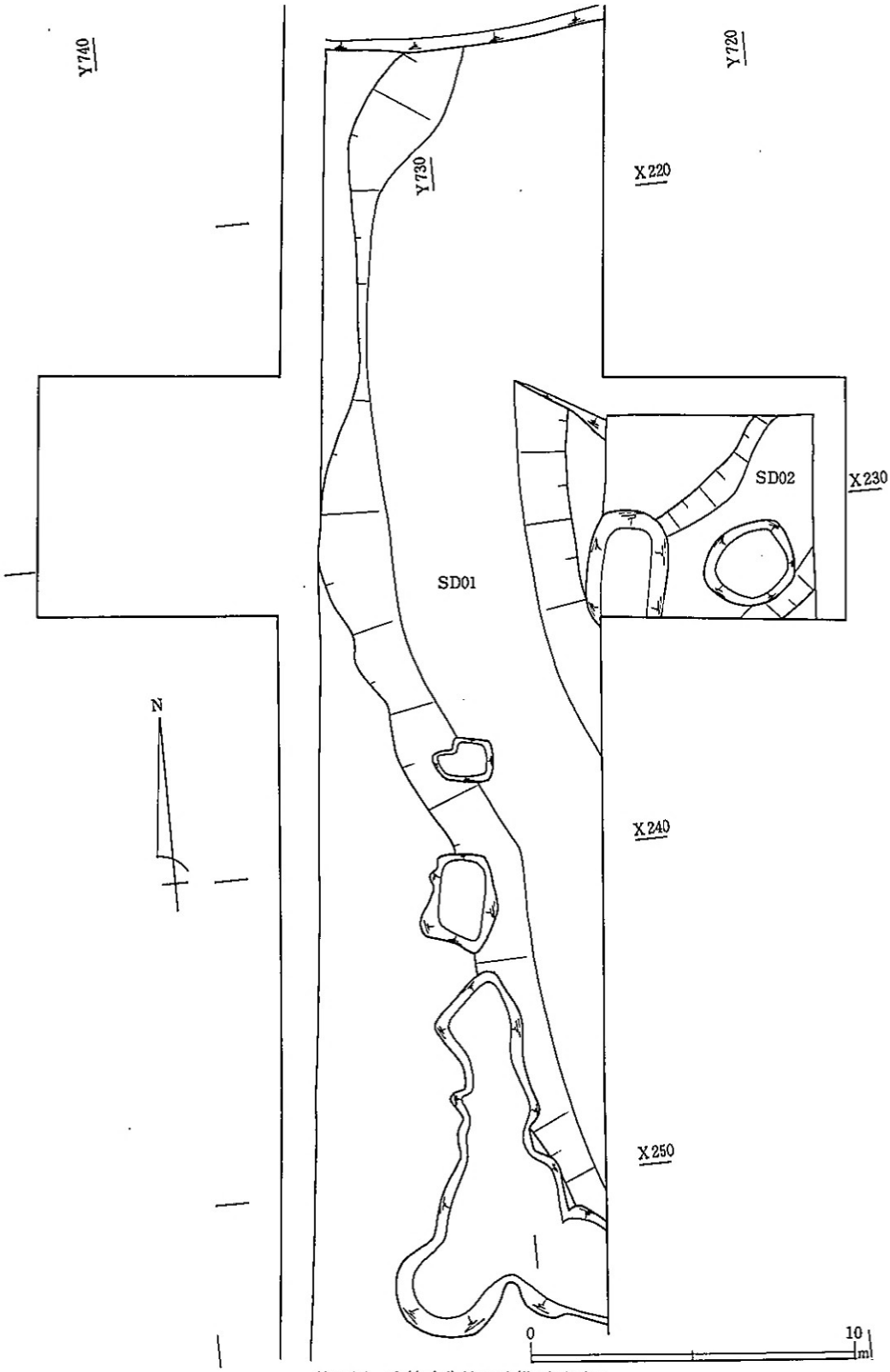
ＳＤ０１（第73図、図版25－１）　ＳＤ０１は、ＥトレンチＸ211以南で検出された南北方向に大きな円を描いて走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を示す。幅約7.0m～8.0m、深さ約0.3m～0.5mを測るが、溝の東肩は、北半部で現代の攪乱によって破壊され、南側では、調査区外に延びて行くため、約６ｍに渡って検出されたのみである。また、８Ｅピットにおいても検出されたが、そのほとんどが近世・近代第２遺構面のＳＥ０１の掘形によって破壊され、北壁東壁断面によってのみ確認しえた。埋土は、第73図土層断面図（Ｘ230での土層観察）で示すよう



第73図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０１土層断面図



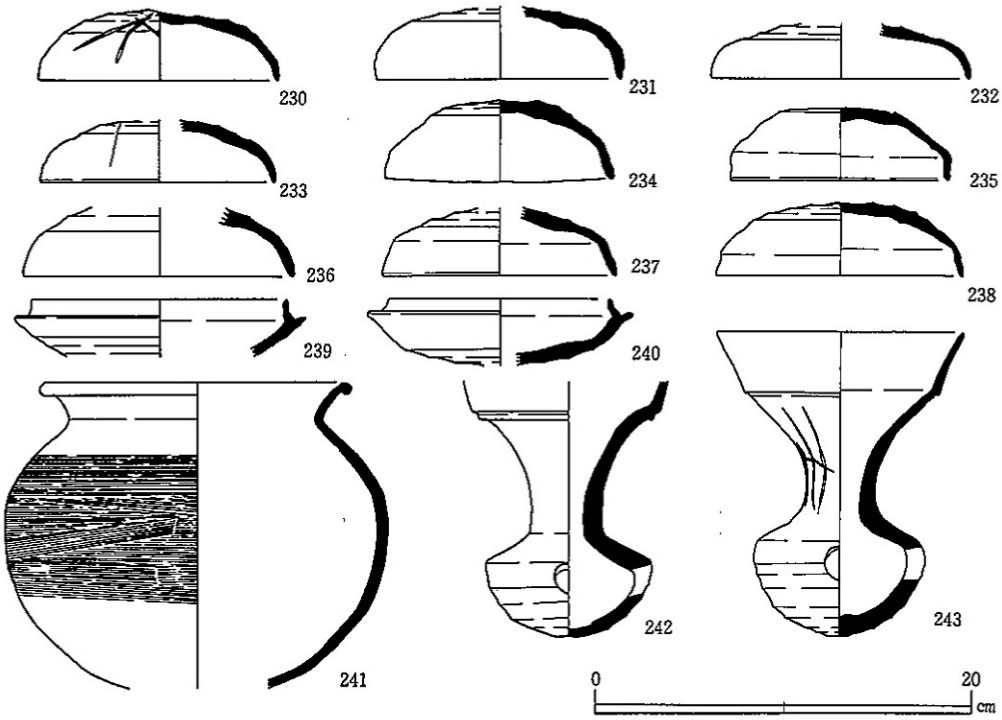
第74図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０２遺物出土状況図



第75図　古墳時代第５遺構面平面図

に上層から明褐灰色シルト（7.5ＹＲ7/2）、明褐灰色粘土（7.5ＹＲ7/1）、灰褐色粘土（7.5ＹＲ5/2）の順である。遺物は、第76図230～235に示す須恵器の坏蓋、坏身が出土している。

ＳＤ０２（第74図、図版25－２）　ＳＤ０２は、６Ｅピットで検出された南西から北東にほぼ直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を示す。幅約4.6m～4.8m、深さ約0.3m～0.4mを測るが、６Ｅピット南東側に寄って検出されたため南東肩は、約１m検出しえたのみであり、正確な幅等は不明である。ＳＤ０２は、西側でトレンチ部のＳＤ０１に取りつくが、この部分に現代の工場の基礎が深く入っていたためその取りつき部は不明である。遺物は、第74図の遺物出土状況図に示すようにＳＤ０２溝底に張りついた状態で、須恵器の坏蓋（238）、瑕（242）が出土している。また、溝内堆積層から第76図236～243の坏蓋、坏身、壺、瑕が出土し、土師器については、破片が出土しているが図化しえなかった。（山上）



第76図　古墳時代第５遺構面ＳＤ０１、０２出土遺物実測図

第４節　奈良・平安時代遺構面

亀井北遺跡その２調査区の奈良・平安時代は、遺構面が２面あり、第１遺構面では、柱穴がまばらに配置する。また、第２遺構面は、柱穴が密に存在する。両遺構面共に隅丸方形の掘形を持つ柱穴が存在し、かなりの建物が建っていたと考えられるが、まとまりを持って柱穴を結びつけることはできなかった。両遺構面は、Ｅ地区南側でのみ検出されたが、これは、中世においてこの部分のみ畦あるいは道路状に高まっており耕作による削平から残されたものと考えられる。

１）奈良・平安時代第１遺構面　（第77図、図版26－１）

奈良・平安時代第１遺構面は、Ｅ地区Ｘ223付近で第Ⅵ層（にぶい褐色粘質土7.5ＹＲ5/4)、それ以南では、第Ⅶ層（淡黄色砂５Ｙ8/3)をベースに＋6.4m～＋6.7mに存在する。上層は、Ｘ223付近で第Ｖ層の灰褐色粘質土が、それ以南では、灰褐色シルトが厚さ約0.2mで堆積している。遺構としては、隅丸方形の柱穴、溝状遺構が検出されている。遺物は、第78図245,248に示す土器が上層の第Ｖ層から出土し、柱穴から土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。

ＳＤ０１　ＳＤ０１は、Ｅトレンチｃ－８区で検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色粘質土である。

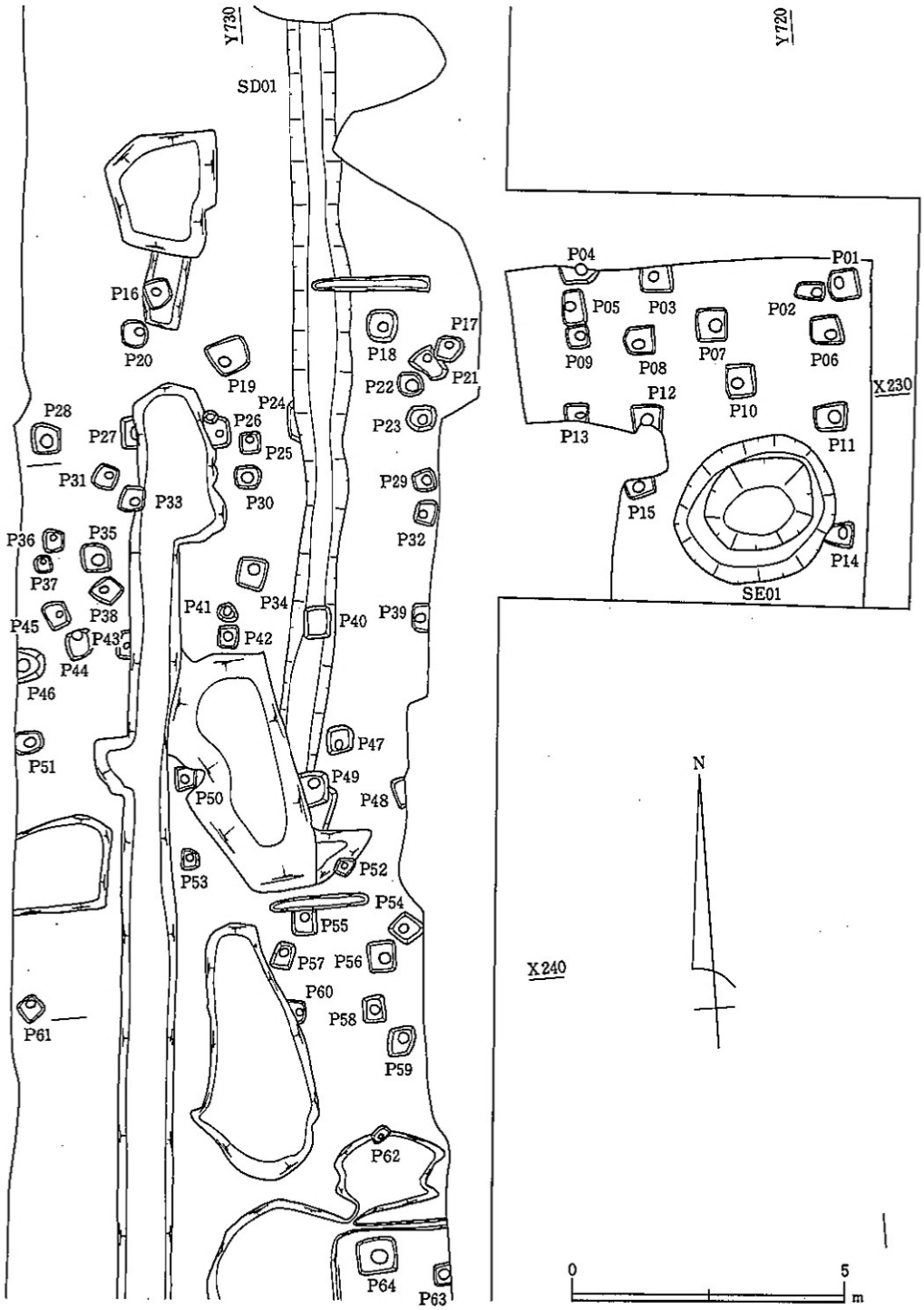
ＳＤ０２　ＳＤ０２は、６Ｅピットで検出されたほぼ南北方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.2m～0.4m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色砂質土である。

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、６Ｅピットで検出されたほぼ南西から北東方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.1m～0.3m、深さ約0.1mを測り、南西側で方向を西に変えて折れる。埋土は、灰褐色砂質土である。

ＳＤ０４　ＳＤ０４は、６Ｅピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.1m～0.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、灰褐色砂質土である。

Ｐ０１～０７　Ｐ０１～０７は、６Ｅピット西側で検出された柱穴である。一辺約0.3m～0.4m、深さ約0.1mを測る隅丸方形の掘形を持ち、径約0.15m～0.2mを測る円形を呈する柱痕が検出された。掘形の断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦であり、埋土は、それぞれ柱穴によって異なるが、基本的にはベース層であるにぶい褐色砂質土を埋め戻している。遺物は、土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。

Ｐ０８～１８　Ｐ０８～１８は、Ｅトレンチｃ－７，８区～ｄ－７，８区で検出された柱穴である。一辺約0.3m～0.5m、深さ約0.2mを測る隅丸方形の掘形を持ち、径約0.1m～0.2mを測る円形を呈する柱痕が検出された。掘形の断面は、ほぼ垂直に落ち、底部は、平坦であり、埋土は、それぞれ柱穴によって異なるが、基本的にはベース層である第Ⅵ層にぶい褐色粘質土を埋め戻している。遺物は、土師器の破片が出土しているが図化しえなかった。



第79図　奈良・平安時代第２遺構面平面図

第5節　中　　世

亀井北遺跡その２調査区の中世は、Ｄ地区で全面に足跡が検出される遺構面が薄い砂層で被われた後、調査区全面に遺構が検出されるようになる。上層の第２遺構面は、13世紀前半にＥ地区南半部では耕作が行なわれ、曲物を井戸枠に使った井戸が５基掘られている。この近くには、円形の柱穴が疎らに存在し、簡単な掘立小屋があったものと推定される。Ｅ地区北側では、浅い大溝が南北方向に走り、Ｄ地区では、瓦器の入ったピットを１基検出したのみであった。　（山上）

１）中世第１遺構面　（第80図、図版27－１）

中世第１遺構面は、Ｄ地区においてのみ検出されており、上面が約＋6.6m前後に存在する厚さ約0.1mの明褐灰色粘質シルト層（7.5ＹＲ7/1）をベース面とする。Ｅ地区においては遺構面である明褐灰色粘質シルト層は全く確認できなかったため、Ｄ地区とＥ地区の間で消滅したと思われる。層位関係から、Ｅ地区北側での相当層は、古墳時代第４遺構面を被っている淡黄色砂層（５Ｙ8/3）上面と推定される。遺構面上層には、約0.02mから0.03m程度の浅黄色砂層（５Ｙ7/4）が堆積し、この砂層が部分的に厚くなっている個所に多数の足跡が検出されている。足跡は、歩行を示しているものが全く認められず、規則性はなかった。

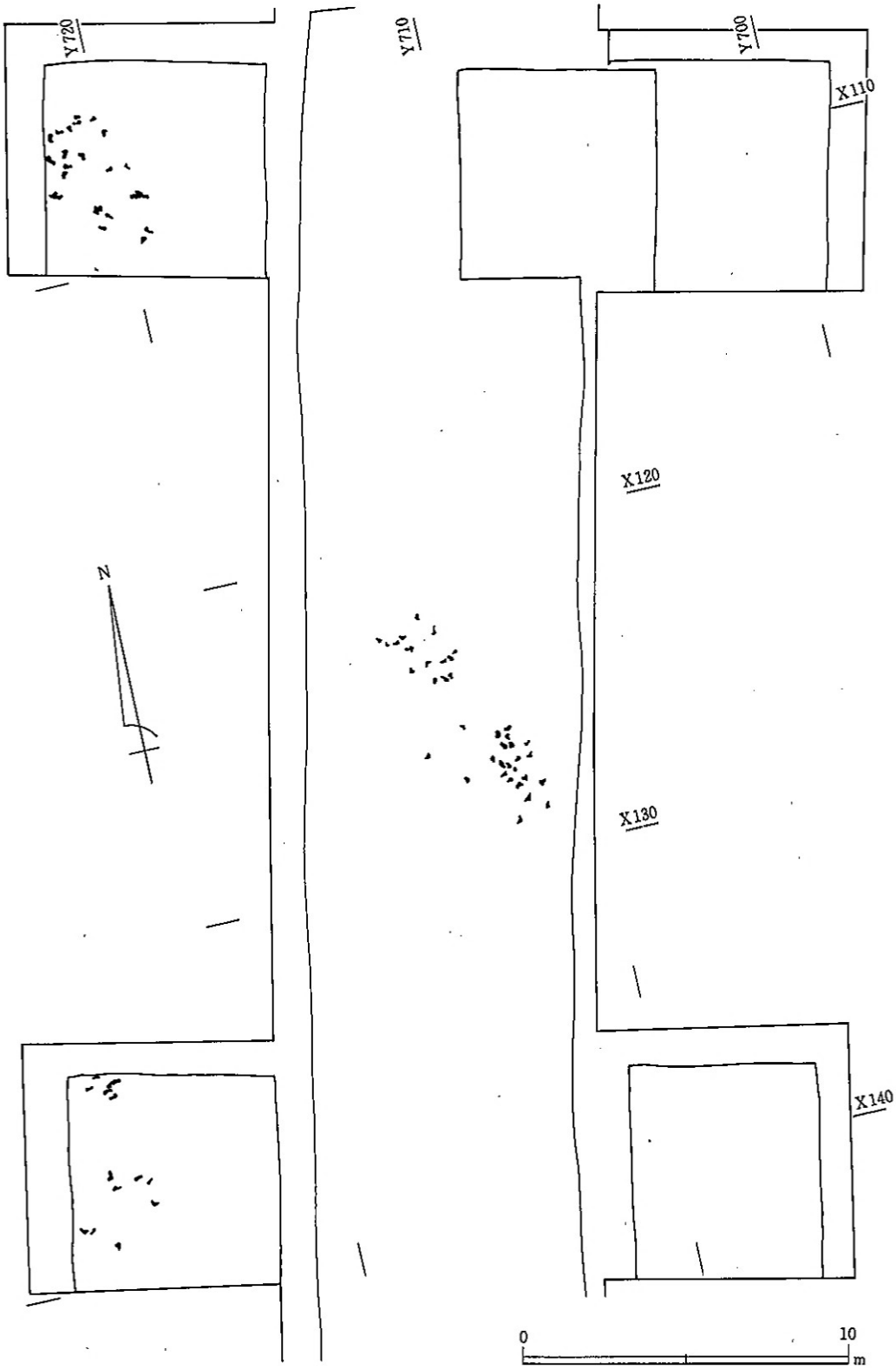
明褐灰色粘質シルト層上面は、ほぼフラットな面である点と、上面が酸化し赤褐色を呈していたため、当初水田と考えていたが、明褐灰色粘質シルト層の厚さが約0.1mほどであることと、畦畔が検出されず、ベース面が粘質シルトであるため耕作ができるかという点で、現在の所、水田の可能性は薄いのではないかと思われる。

遺物は、遺構面である明褐灰色粘質シルト層、及び上面の浅黄色砂から全く出土しなかったため、時期は不明であるが、上面の浅黄色砂を掘り込んで中世の遺構が存在するため、一応中世面としたが、Ｅ地区南側では、層位が奈良・平安時代遺構面と同一面となるため、その時代の可能性もありうる。　（奥）

２）中世第２遺構面　（付図12、図版28～30）

中世第２遺構面は、Ｄ地区では、第Ⅲ層（浅黄色砂５Ｙ7/3）をベースに、Ｅ地区北側では、第Ⅶ層（淡黄色砂５Ｙ8/3）、南側では、第Ⅳ層（褐灰色土10ＹＲ5/2）をベースに＋6.5m～＋6.9mに存在する。上層は、Ｄ地区では、明褐灰色砂質土、Ｅ地区北側では、第Ⅱ層のオリーブ灰色粘質土、南側では、同じく第Ⅱ層の黄灰色砂質土が厚さ約0.1m～0.3mで堆積している。遺構としては、井戸、溝状遺構、ピットが検出されている。遺物は、これらの遺構から土師器、瓦器、陶磁器が出土している。　（山上）

ＳＤ０１　ＳＤ０１は、Ｅトレンチｇ－９区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.3m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。



第80図　中世第１遺構面平面図

ＳＤ０２　ＳＤ０２は、Ｅトレンチｇ－８区～ｊ－８区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約3.0m～4.0m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。

ＳＤ０３、０４　ＳＤ０３、０４は、Ｅトレンチｇ－８区～ｈ－８区で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.3m～0.4m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色粘質土である。

ＳＤ０５　ＳＤ０５は、１Ｅピットで検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.4m～1.2m、深さ約0.1mを測り、埋土は、暗黄灰色粘質土である。

ＳＤ０６、０８、１０　ＳＤ０６、０８、１０は、Ｅトレンチｉ－７区～ｊ－８区で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、黄灰色土である。

ＳＤ０７、０９、１１　ＳＤ０７、０９、１１は、Ｅトレンチｊ－８区で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.4m～0.9m、深さ約0.2mを測り、埋土は、黄灰色土である。

ＳＤ１２　ＳＤ１２は、３Ｅピット西側で検出された南北方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約1.1m～1.2m、深さ約0.2mを測り、埋土は、暗青灰色粘質土である。

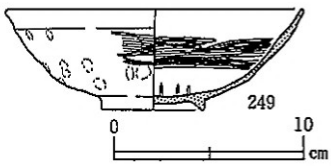
ＳＤ１３～１６　ＳＤ１３～１６は、Ｅトレンチａ－７，８区～ｂ－７，８区で検出された南北方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.5m～1.1m、深さ約0.3m、埋土は、青灰色粘土である。

ＳＤ１７　ＳＤ１７は、5、6Ｅピット及びＥトレンチｃ－７，８区で検出された東西方向に直線的に走る溝状遺構である。断面は、Ｕ字状を呈する。幅約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測り、埋土は、明黄褐色粘質土である。

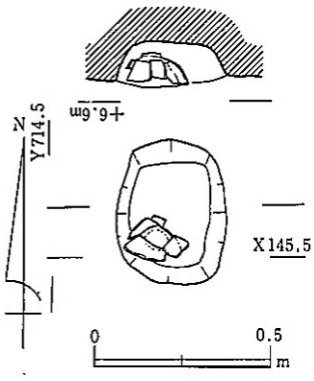
ＳＤ１７は、幅約3.5m～4.5m、高さ約0.2mを測る東西方向に延びる大畦畔状遺構上に掘削されており、この遺構に伴う溝状遺構と考えられる。

ＳＤ１８　ＳＤ１８は、Ｅトレンチｃ－７，８区で検出された東西方向に走る溝状遺構である。断面は、浅いＵ字状を呈する。幅約0.6m～1.4m、深さ約0.1mを測り、埋土は、明褐色粘質土である。

Ｐ０１（第81図、図版27－２）　X145.5、Y714.2付近で検出したピットである。Ｐ０１は第Ⅲ層の浅黄色砂層（５Ｙ7/3）上面より掘り込んでいる。平面形は、不整楕円形を呈し、長径約0.4m短径約0.3m、深さ約0.1mを測る。埋土は明オリーブ灰色砂質土層（2.5GＹ7/1）である。遺物（第81図）は、ピット南側より瓦器埦がピット底より約0.05m上で



第81図　中世第２遺構面
Ｐ０１出土遺物実測図



第82図　中世第２遺構面
Ｐ０１遺物出土状況図

正立した状態で出土している。また、遺構上面、及び土層断面観察の結果、柱痕は検出できなかったため、柱穴の可能性は薄い。Ｄ地区においては、これ以上にはこの面での遺構は検出されなかった。（奥）

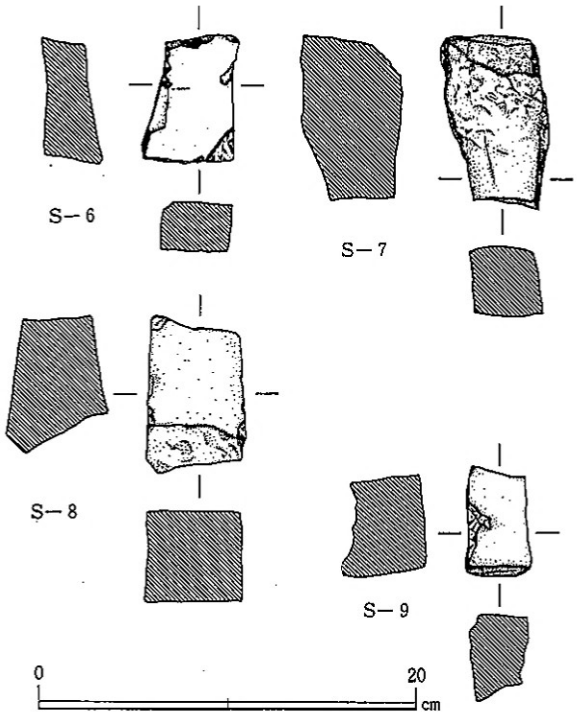
Ｐ０２～０７　Ｐ０２～０７は、４Ｅピットで検出されたピットである。径約0.4m～0.5m、深さ約0.2mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、青灰色粘質土である。

Ｐ０８　Ｐ０８は、Ｅトレンチｂ－７区で検出されたピットである。径約0.6m、深さ0.1mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、黄灰色粘質土である。

Ｐ０９～１６　Ｐ０９～１６は、Ｅトレンチｅ－７区～ｆ－７，８区で検出されたピットである。径約0.3m～0.5m、深さ約0.1mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、埋土は、黄灰色土である。

落ち込み０１～１３　落ち込み０１～１３は、Ｅトレンチｊ－８区～ａ－８区及び４Ｅピットで検出され、不整円形を呈する。断面は、浅い擂鉢形で、埋土は、基本的に黄灰色土である。

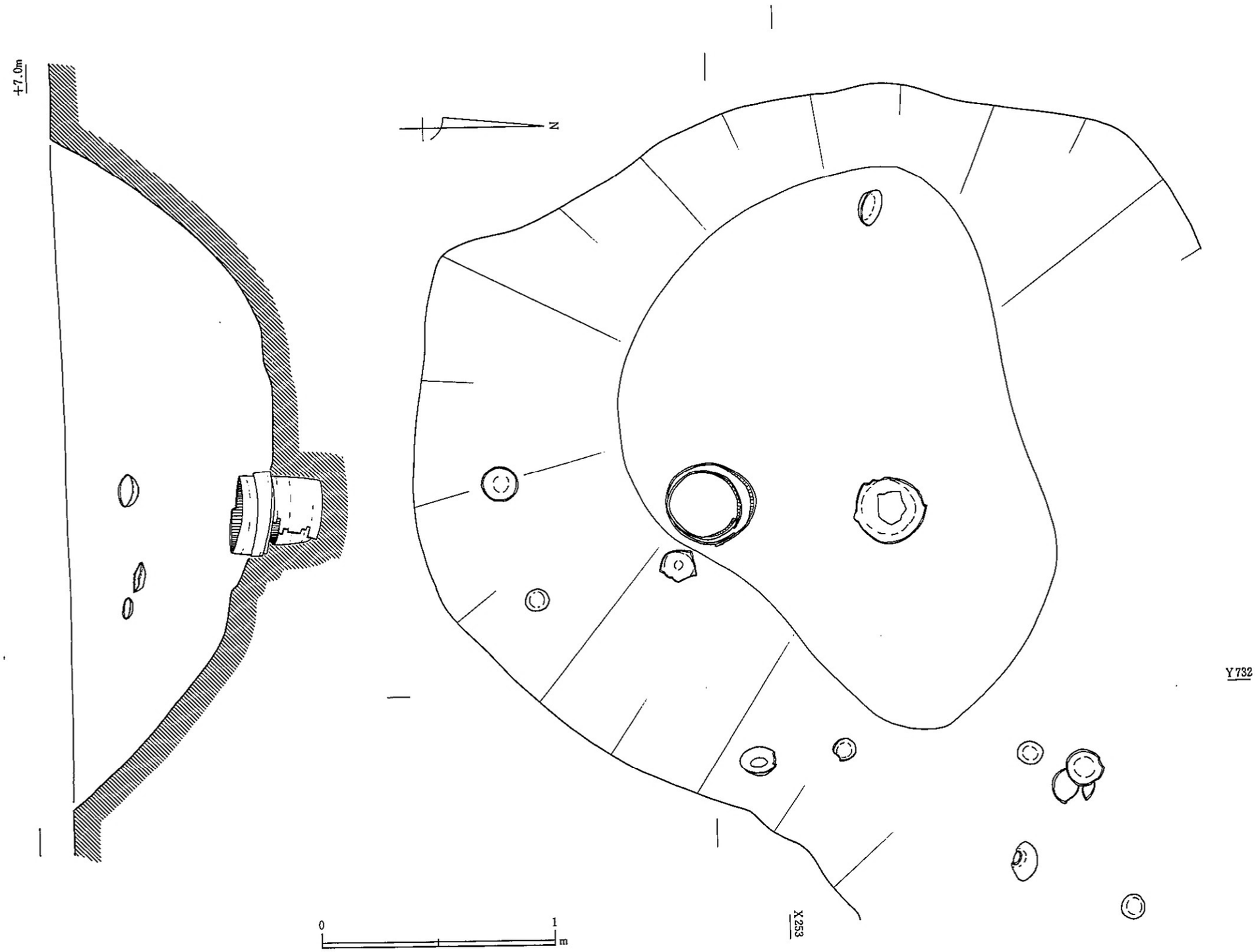
ＳＥ０１（第84図、図版29－１、30－１）　ＳＥ０１は、Ｅトレンチｆ－７区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。径約3.5m、深さ約0.9mを測るほぼ円形を呈する掘形を持ち、断面は、擂鉢形で古墳時代の砂層を掘り抜き、井戸枠の底部は、古墳時代第４遺構面のベース層である暗青灰色粘土にまで達している。井戸枠を設置するに際して、井戸枠の大きさに砂層を掘り下げているため僅かな堆積の変化が観察されたのみである。埋土は、下層に灰色粘土、上層に暗赤灰色土（やや砂を含む）が堆積している。



第83図　中世第２遺構面ＳＥ０１出土遺物実測図

井戸枠は、曲物を二段に積み上げており、上段の曲物は、径約0.4m、高さ約0.15mを測り、下部の外側に高さ約0.05mの曲物を巻いている。下段の曲物は、径約0.3m、高さ約0.2mを測る。

遺物は、井戸枠内上層より第86図に示す瓦器埦（260）、土師器小皿（264）が出土し、また掘形内から第84図の平面図に示すようにほぼ底部、壁面に接して瓦器埦（250～254）、瓦器小皿（263）、土師器皿（269）、土師器小皿（265～267）、東播系片口鉢（273）が出土している。

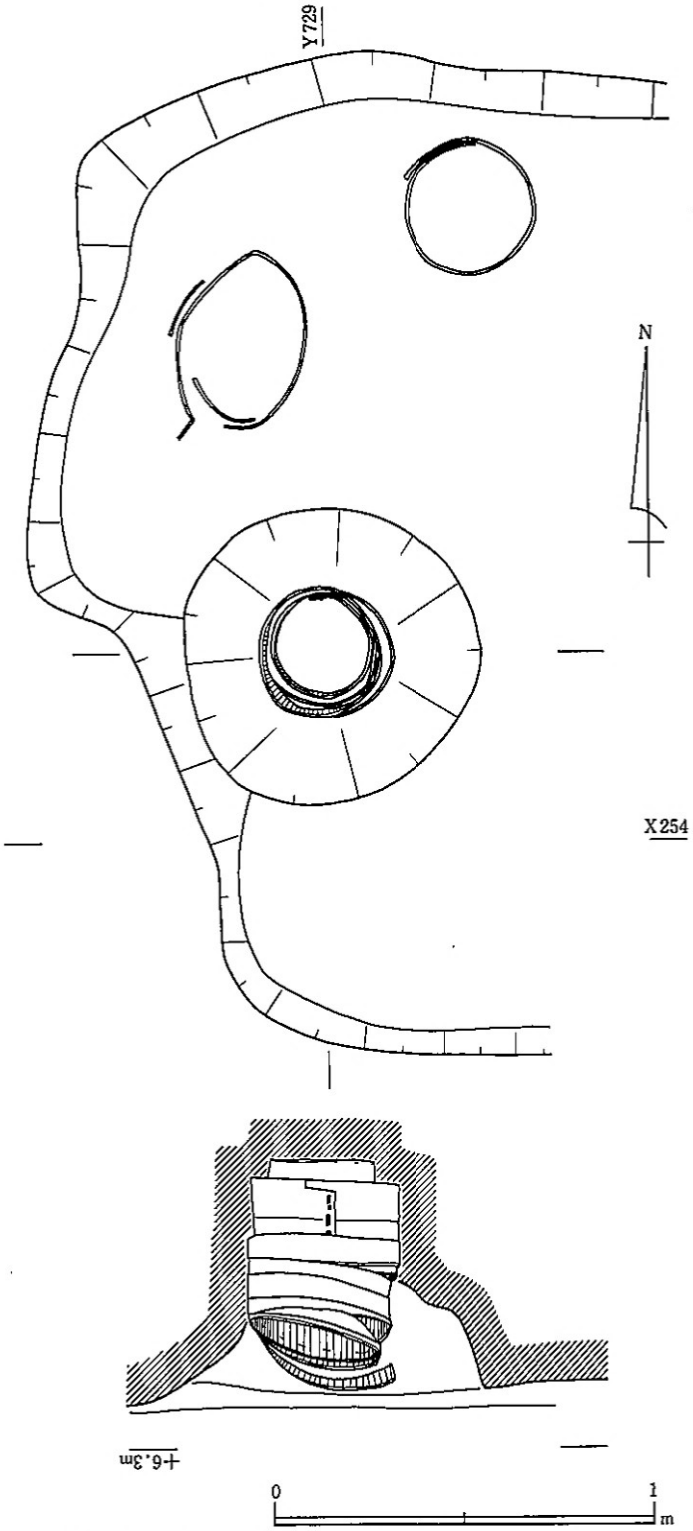


第84図　中世第２遺構面ＳＥ０１遺物出土状況図

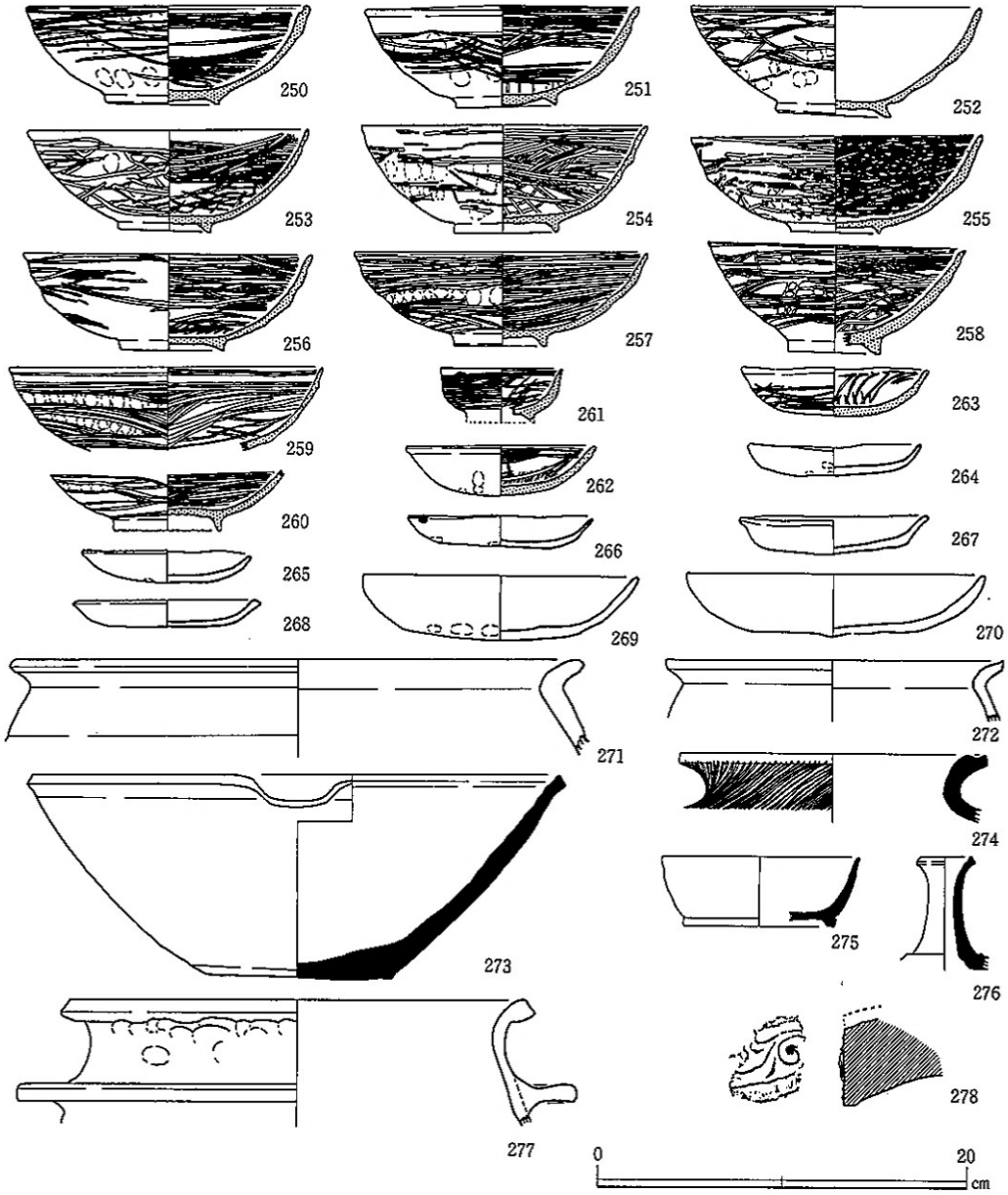
掘形埋土である灰色粘土及び暗赤灰色土より多量の瓦器、土師器が出土しいてるが、図化しえたものとして瓦器椀（255～259）、瓦器小椀（261）、瓦器小皿（262）、土師器皿（270）、土師器小皿（268）、土師器羽釜（271、272）、東播系須恵器甕（274）、須恵器（275、276）、瓦当（278）がある。また、第83図に示すように砂岩系の砥石も数点出土している。

ＳＥ０２（第85図、図版29－１、30－１）　ＳＥ０２は、Ｅトレンチｆ－８区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。南北2.6m、東西1.6m以上を測る方形を呈する掘形をＳＥ０３、０４と共有して持ち、この掘形の内部にＳＥ０２の掘形が存在する。径約0.8m、深さ約0.6mを測る円形を呈し、断面は、擂鉢形で、古墳時代の砂層を掘り抜いている。埋土は、最上層に暗灰色粘土が堆積し、下層は、井戸枠の大きさに砂層を掘り下げているため、僅かな堆積の変化が観察されたのみである。井戸枠は、曲物を九段以上積み上げており、径約0.4mの曲げ物を使用している。最下段のみ径約0.3mの曲物を使用している。

遺物は、井戸枠内より第86図277の羽釜が出土している。



第85図　中世第２遺構面ＳＥ０２～０４平面、立面図



第86図　中世第２遺構面ＳＥ０１、０２出土遺物実測図

ＳＥ０３、０４（第85図）　ＳＥ０３、０４は、Ｅトレンチｆ－８区で検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。掘形は、ＳＥ０２と共有し、井戸枠は、径約0.4m程度の曲物が一段残存しいる。遺物は、出土していない。

ＳＥ０５　ＳＥ０５は、８Ｅピットで検出された曲物を井戸枠に使用する井戸である。掘形は、近世・近代第２遺構面のＳＥ０１によって破壊されており不明である。井戸枠は、径約0.4mの曲物が一段残存している。遺物は、井戸枠内より平瓦の破片が１点出土している。　（山上）

第6節　近世・近代遺構面

近世・近代遺構面は、第Ⅱ層上面及び第Ⅲ層上面において２面確認したが、近世・近代第１遺構面は、Ｄ地区のみ存在する。遺構は、両面ともスキミゾと推定される溝状遺構が大半を占めるが、Ｅ地区８Ｅピットにおいて井戸が近世・近代第２遺構面において検出されている。　（奥）

１）近世・近代第１遺構面　（第88図　図版30－２）

近世・近代第１遺構面は、第87図に示すように＋6.62m前後に存在する第Ⅲ層の浅黄色砂層（５Y7/3）上面をベース面とする。この遺構面は、Ｅ地区においては、検出されていないため、上面に存在する近世・近代第２遺構面に、無数に存在するスキミゾ状遺構によって、遺構面が消滅したものと推定される。

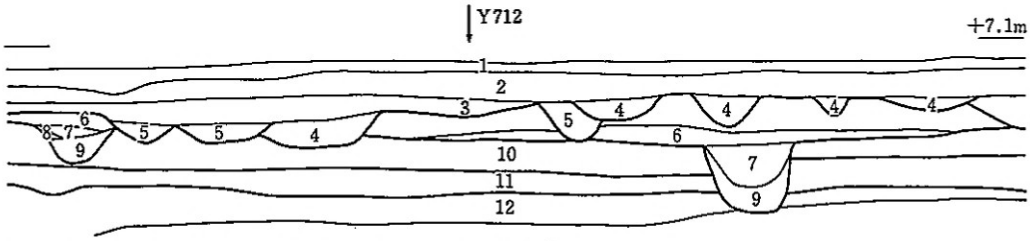
遺構は、スキミゾと推定される溝状遺構４本を検出したが、本来はこれより多かったと思われ、上面の近世・近代第２遺構面に存在する無数のスキミゾ状遺構により大部分が破壊され、深く掘り込まれた溝のみが残ったものと推定される。溝の方向は全て南北方向に走る。

ＳＤ０１　ＳＤ０１は、Ｄトレンチのａ－９、ｂ－９、ｃ－９区で検出された、北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、Ｕ字状を呈し、幅0.5m、深さ0.35mを測る。また、４Ｄピットで検出された溝に続くものと推定される。埋土は、褐灰色砂質粘土層の単一層である。

ＳＤ０２　ＳＤ０２は、Ｄトレンチのｂ－９、ｃ－９、ｄ－９区で検出された。北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、Ｕ字状を呈し、幅0.35m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は、褐灰色砂質粘土層（10ＹＲ4/1）である。

ＳＤ０３　ＳＤ０３は、Ｄ地区ａ－８，９で検出され、ｃ－９、ｄ－９、ｅ－９区に続く、北西より南東に延びる溝である。溝の断面形状は、Ｕ字状を呈し、幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝の埋土は、灰オリーブ色砂質土層（7.5ＹＲ5/2）単一層である。

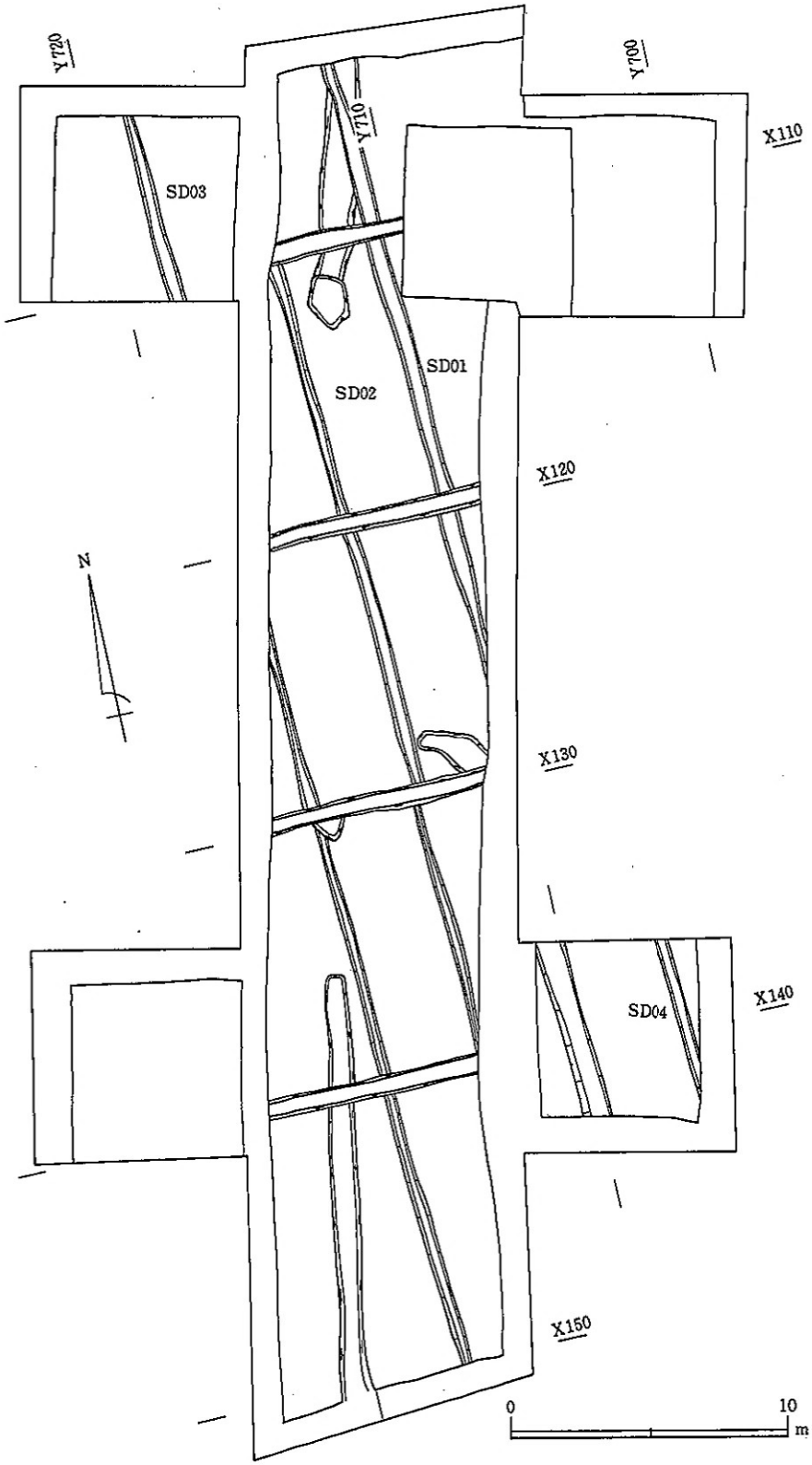
ＳＤ０４　ＳＤ０４は、４Ｄピットで検出された、北西より南東に延びる溝である。断面形状は、Ｕ字状を呈し幅0.45m、深さ0.35mを測る。埋土は、上よりオリーブ色砂質土層（５Y5/4）、



1．黒色粘土層（第Ⅰ層）
2．浅黄色砂質土層 5Y7/4
3．にぶい橙色砂質土層 2.5YR 7/3
4．浅黄色砂質土層 5Y7/3
5．オリーブ黄色砂質土層 5Y6/3
6．にぶい黄色粘土層 2.5Y6/4
7．褐灰色砂質粘土層 7.5YR6/1
8．灰オリーブ色砂質粘土 5Y6/2
9．褐色砂質土層 7.5YR4/6
10．浅黄色砂層（第Ⅲ層）
11．明褐灰色粘質シルト層 7.5YR7/1
12．暗青灰色粘質土層 5PB4/1

0　1 m

第87図　中世・近世スキミゾ土層断面図

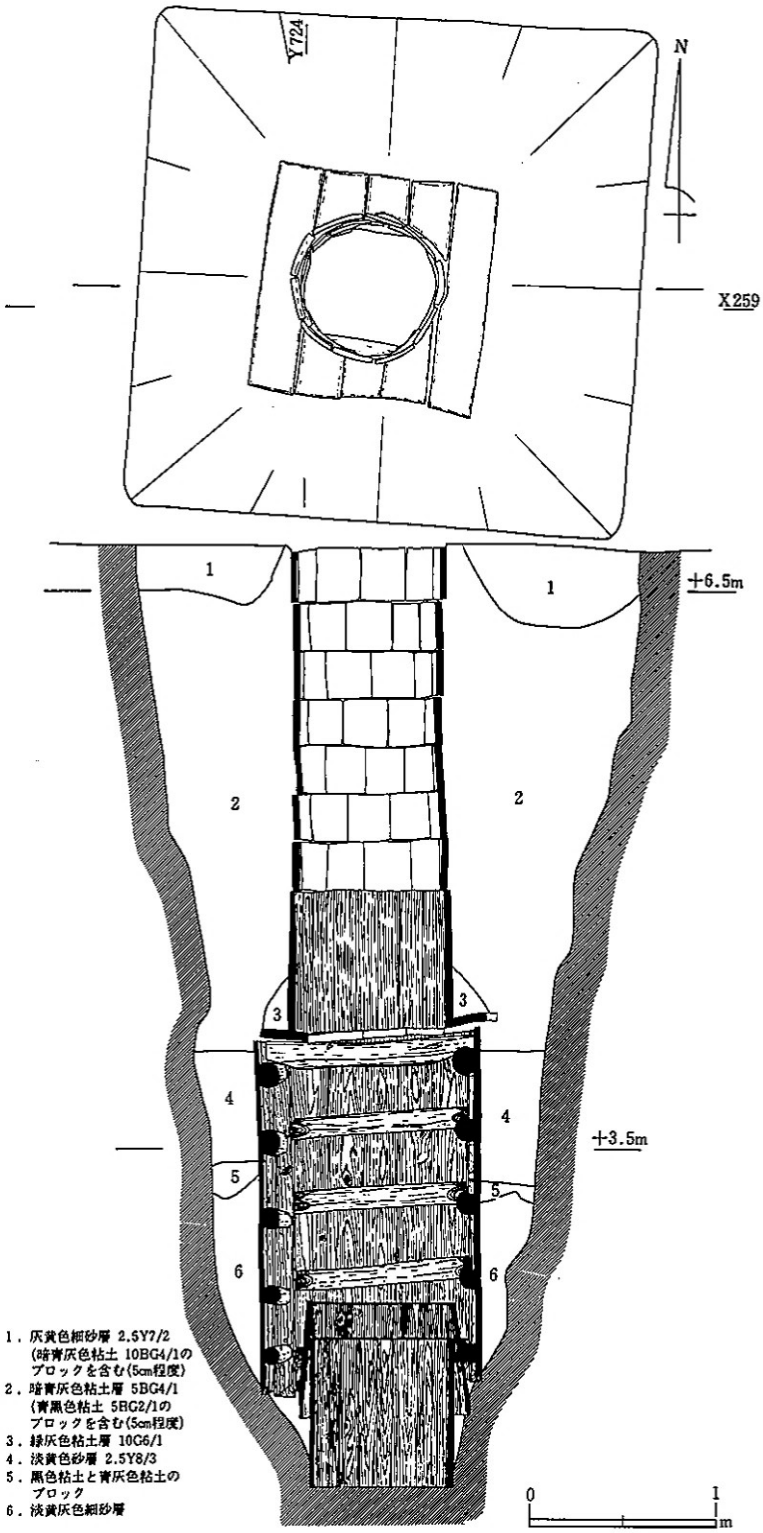


第88図　近世・近代第１遺構面平面図

明黄褐色砂質土層（10ＹＲ5/6）、灰黄褐色砂質土層（10ＹＲ6/2）、灰黄褐色シルト層（10ＹＲ6/2）が、レンズ状に堆積している。　（奥）

２）近世・近代第２遺構面　（付図13、図版31）

近世・近代第２遺構面は、Ｄ地区で、第Ⅱ層（明褐灰色砂質土５ＹＲ7/2）をベースに、Ｅ地区北側では、第Ⅱ層（オリーブ灰色粘質土５ＧＹ5/1）、南側では、第Ⅱ層（黄灰色砂質土2.5Ｙ5/3）をベースに＋6.7m～＋7.1ｍに存在する。上層は、Ｄ地区では、浅黄色砂質土、Ｅ地区北側では、オリーブ灰色砂質土、南側では、旧耕土である第Ｉ層（黒色粘質土）が厚さ約0.1m～0.3mで堆積している。遺構としては、調査区全域で耕作痕であるスキミゾ状遺構と井戸が検出されている。遺物は、スキミゾ状遺構から土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の破片が出土しているが、いずれも図化できなかった。また、井戸

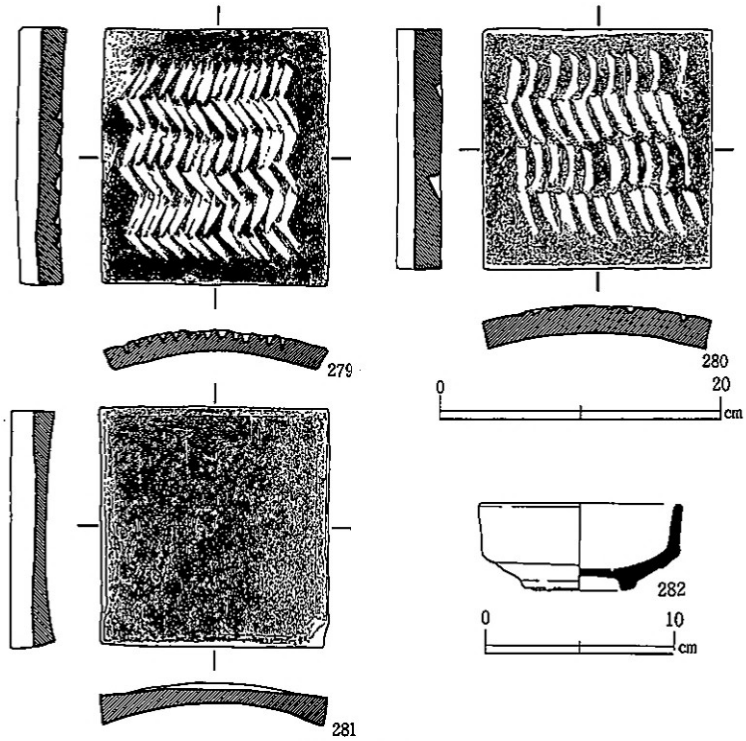


第89図　近世・近代第２遺構面ＳＥ０１平面、立面図

からも若干の遺物が出土している。　(山上)

ＳＥ０１（第89図）　ＳＥ０１は、８Ｅピットで検出された瓦を井戸枠に使用する井戸である。一辺約2.7m、深さ約5.0mを測る隅丸方形を呈する掘形を持ち、断面は、擂鉢形で全遺構面を掘り抜き、底部は、縄文時代の砂層まで達している。

井戸枠は、最下段に径約0.75m、高さ約0.8mを測る木桶状の木筒を用い、その上段に一回り大きな木筒を重ねている。木筒を据えた後、上部に一辺約1.2m、高さ約1.8mを測る屋台組を設置する。この屋台組の上部に南北方向に板材を並べ、その上部に径約0.85m、高さ約0.8mを測る木桶状の木筒を置く。この木筒を安定させるために第89図の断面図に示す３の緑灰色粘土で固定している。これらの作業を行なった後、平瓦を一段につき10枚用いて径0.8mの井戸枠を七段以上積み上げているのが検出されたが、井戸枠内に10枚程度瓦が転落しており、少なくともあと一段以上は、積まれていたものと考えられる。



第90図　近世・近代第２遺構面ＳＥ０１出土遺物実測図

遺物は、最上層より現代の遺物が出土するが、最下層からは、第90図282陶器の埦が出土している。また、井戸枠に使用されていた平瓦は、三種類に分類でき、使用されていた比率は、いずれも同程度である。　(山上)

スキミゾ　Ｄ地区において検出されたスキミゾは、ベース面上面を全て埋める状況で溝同士切り合いながら無数に存在し、スキミゾの方向は、ほぼ南北方向に走る。溝の幅は約0.2m～0.5m、深さ約0.1m～0.2mを測る。Ｅ地区北半部で検出されたものより幅、深さ共規模が小さい。(奥)

Ｅ地区においても全面で検出され、耕作痕と推定される。Ｘ200以北では、南北方向に高頻度で検出され、数本程度畦畔状に残る部分がある。また、Ｘ200以南では、基本的に東西方向に疎らに検出され、畑として使用されていたものと考えられる。

遺物は、スキミゾ内から陶磁器、瓦器、土師器、須恵器の破片が出土しているが、図化しえなかった。　(山上)

第 V 章 遺　　物

今回の調査では、遺物がコンテナ約80箱出土し、そのうち、実測可能なものをすべて図化（計約350点）し、その内301点を掲載した。木製品・石器・金属器以外は、観察表で一括掲載した。観察表を作成するにあたっては、後述する凡例に従った。また、木製品・石器・金属器については、観察表とは別に記述した。遺物番号は、土器を番号のみとし、土器と区別するために、木製品・石器・金属器については、それぞれW・S・Bの記号を頭に付けた。

1）木製品

W－1　全長111.3㎝、最大幅21.1㎝、厚さ約4.5㎝を測る鍬の未製品である。舟形隆起が、三個削り出され、側面にくびれを施していることから、三個の鍬を製作する途中であったものと推定できる。舟形隆起は、幅約17㎝、高さ約1㎝を測り、明瞭な形を整える前に、側面を削り始めている。原材より、板状に切り出し、削り始めた段階であると推定される。右端部は、人為的に切断されているが、左端部は、切断面が不明瞭であり欠損しているものと思われる。板目材である。

W－2　現存長47.8㎝、最大径9.1㎝を測る堅杵である。先端部は10㎝を測り、把握部へ向って約4㎝細くなり、把握部はさらに約2㎝細く仕上げられている。断面形状は、円形を呈している。先端部凸面には、使用痕が認められる。木取りは、中心を避けている。　（泉谷）

W－3　長さ16.4㎝、最大幅6.7㎝、厚さ4.6㎝を測る堅杵である。把握部方向に向って細くなる円筒状の加工が施されている。左端部は、使用により丸く磨滅しており、長軸方向に1/2の欠損が見られる。また人為的に2つに切断されたことが断面の状況からうかがえる。心持材である。

W－4　長さ27.4㎝、最大幅6.3㎝、厚さ4.2㎝を測る堅杵である。把握部方向に向って細くなる円筒状の加工が施されている。右端部は、使用により磨滅している。心持材である。

W－5　未完成の木製高坏で、高さ15.4㎝を測る。坏部は、欠損しており、脚柱部は垂直に下がり、脚部で広がり、脚端部は、2.5㎝～3㎝の厚さをもつ。脚柱部は、方形、脚部も方形であるが、やや丸味を帯びている。脚柱部は、一辺6.5㎝、脚部は、径20.2㎝を測る。鉄斧状の鉄製品による荒削り工程の途中らしく、多数の削り跡があり、表面の状態より、脚部をさらに円形に近づけようとする加工の痕跡が見受けられる。杯部から脚部まで一本の心持材を使用し、側面方向に水平に木目が見られる。

W－6　長さ12.3㎝、幅4.9㎝、厚さ0.4㎝を測る木包丁である。左端部は欠損しており、右端部は円弧を描き底辺に接する。紐孔として、幅3.6㎝で2孔を穿っており、表面では2孔間に幅1.2㎝の溝を施している。柾目木材を切断対象物に対して斜めに当るように木取りし、強度を増していたものと考えられる。表面側から刃が施され、中央部付近で使用による磨滅が見られる。

W－7　長さ43.6cm、幅10.4cm、厚さ0.4cmを測る板状木製品であるが、用途は不明である。上端部で急激に逆V状に厚みを増し、1.4cmの厚さを測る。板目材である。　(中川)

W－8　長さ27.6cm、幅21.0cm、厚さ約1cmを測る用途不明の板状木製品である。表面は、径約21cm、高さ0.4cmの円盤状の高まりを削り出している。円盤の中央部には、径1.3cmの円孔を施していると推定されるが下半部は欠損している。製品下半部の保存状態が悪く、欠損が見られる。柾目材である。　(泉谷)

W－9　長さ50.1cmを測るが、右端部は欠損している。用途不明の棒状木製品で、直径約5cmの円筒状の木材を左端部5.5cm残し、そこから1.2cm垂直に切り込み、残りの部分を角柱状にヤリガンナ状の鉄製品で削った形跡が見受けられ、一辺1.2cmを測る。左端部はやや丸味を帯びるが、何かに使用して磨滅したものか、加工途中であるのかは不明である。木取りは中心を避けている。　(中川)

W－10　長さ24.8cm、幅3.4cm、厚さ約1cmを測る用途不明の木製品である。左上部に、断面V字状の溝を施し、先端部へ向って細くなっている。表面には、削った跡が見られる。板目材である。　(泉谷)

W－11　長さ40cm、幅14.5cmを測る用途不明の板状木製品である。右端部は上反するが、木目の状況より、本来約3cmの厚みを持つ板状の木材を削ったものと考えられる。中央部では、0.7cmの厚みを持ち、左方へ行くにつれて薄くなり、左端部はかなりの欠損が見られる。木目に垂直方向に長さ7cm、幅5cmの溝が見られるが、用途は不明である。

W－12　長さ33.5cm、幅13.5cm、厚さ1.2cmを測るえぶりである。下端部を斜めに削る加工が施されているが、端部が丸く磨滅するような使用痕が観察される。中央部は一段高くなり2.3cmの厚さを持つ。柄壺は、上端部中央付近に表面から裏面に向って穿たれており、表面では、上辺2.6cm、下辺2.1cm、幅2.5cmの逆台形、裏面では、一辺1.8cmの方形を呈している。　(中川)

2）石製品

S－1　二次加工のある剥片で、石材はサヌカイトを用いる。縦長剥片を素材とするが、実測図の裏面は、横長の剥離面を持つ。スクレイパーとするには、両面に打敲面があり、石サジの未製品とするには、石の取り方が不適当であるため、スクレイパーと石サジの未製品のどちらとも考えにくい。長さ10.8cm、幅8.1cm、厚さ1.1cmを測る。

S－2　サヌカイトを素材とする石鏃である。基部は、欠損し、両面に押圧剥離による調整を施している。長さ6.7cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。　(泉谷)

S－3　素材は片岩系で、構成鉱物に粗い石英、黒雲母等が含まれ、変成を受けている。使用面は上面のみで、横方向に使用したと考えられる条痕が見られ、特に中央部を中心に使用されていたらしく、数本の深い条痕が残っている。長さ17.3cm、幅11.3cm、厚さ3.5cmを測る。

S－4　砂岩製で全体的に丸味を帯びている。上面のみに使用痕跡が見られ、中央部を縦方向

に強く使用している。また、上部～右上部に欠損が見うけられるが使用時に欠損したものと推定され、それにより廃棄されたものと考えられる。長さ11cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmを測り、断面は逆三角形である。

S－5　素材は砂岩系の石であり、上部端面を除く5面を使用している。上面が大きく弯曲し、特に使用頻度が高かったと思われる。裏面に欠損部分が見られるが、欠損後もその部分を使用した形跡がうかがえる。使用方向は一定していない。長さ10.6cm、幅2.4cm、厚さ2.6cmを測る。

S－6　砂岩製で、両端面を除く4面に使用の形跡がうかがえる。下面には、深さ0.1cm、長さ3cm程度のV字状の傷がある。上面上部、上面端部及び右側面上部には、熱変を受けススが付着している。使用方向は、長軸に平行である。長さ6.8cm、幅4.1cm、厚さ1.6cm測る。

S－7　砂岩製で両端面を除く4面を使用している。使用方向は不明瞭であるが、上面に長軸方向に2cm程度の傷があり、長軸方向に使用していたのではないかと考えられる。また、使用面が短く、上端面の状況から使用時に折れ、廃棄されたものと考えられる。長さ9.2cm、幅5.3cm、厚さ3.8cmを測る。

S－8　砂岩製で、使用面は両端面を除く4面で特に左右側面に長軸方向の条痕が多数見受けられる。下面下端部は欠損している。上端面から折損して廃棄されたものと考えられる。長さ8.6cm、幅5.1cm、厚さ4.8cmを測る。

S－9　砂岩製で両側面、下面を除く3面を使用している。使用方向は、条痕より短軸方向と考えられる。下端面は熱変を受けススが付着している。ススの付着や断面の状況より両側面で折損したものと考えられる。長さ5.9cm、幅3.2cm、厚さ4.3cmを測る。　(中川)

3）金属器

B－1　径3.1cmを測る表面に銀箔をはった青銅製の銀環である。上部に幅0.4cmの玦状部を有し、断面形状は、円形を呈し0.6cmを測る。表面の銀箔の大部分は剥離し、青銅面が露出し、緑青が吹いている。　(泉谷)

4）遺物観察表

遺物観察表凡例

〔土器番号〕　本文・写真を統一し、遺物は1/10で掲載した。(192、193)については、1/16で掲載した。

〔器種・器型〕一般的な分類・名称を用いた。

〔法量〕　第91図　各器種の部分名称による。単位はcmで表示し、各部分の表示は、口径－A、器高－B、底部径－C、頸部径－D、脚部径－E、体部最大径－F、高台径－G、受部径－Hの記号を使用した。

〔胎土〕　肉眼による識別で全体の粗密度合と最大径を測る含有物とその法量を記した。

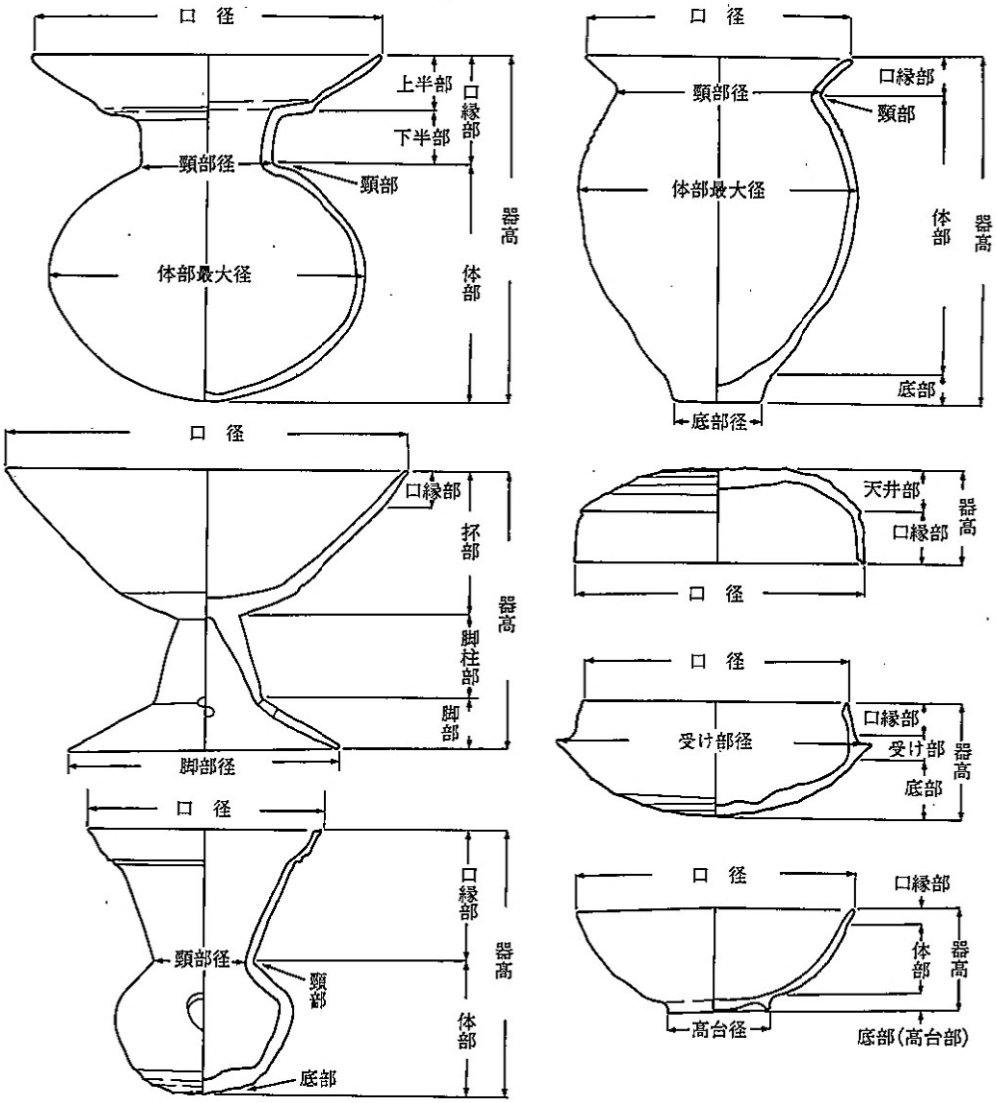
〔色調〕　土器は、その断面観察によれば、外面と内面では相当異なる色調を呈することが多いので、内面－a、外面－b、断面－cとして記載した。色調同定には標準色帖(註)を使用し、土色名とそのＪＩＳnotationも併記した。

〔形態の特徴〕第91図による各土器の部分名称を用いて表現した。

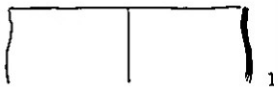
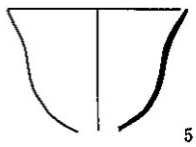
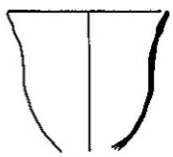
〔手法の特徴〕実測図の一定の法則に従って表記した。

〔出土地点〕　遺構面・遺構名（包含層）・第２図地区割図に基づき、記載した。

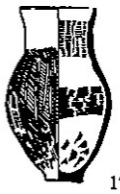
（註）小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』　財団法人日本色彩研究所

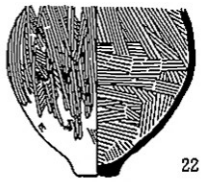
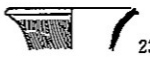


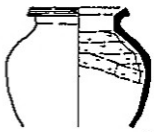
第91図　各器種の部分名称

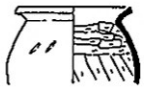
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 1	縄文土器	深鉢	A31.3 B10.1	5mm以下の長石・3mm以下の石英を多量に含む	a にぶい黄橙色 10Y R6/4 b 黄灰色 2.5Y5/1 c にぶい橙褐色 7.5Y R5/4	最大径が胴部にあり、口縁部は一但内寄した後、やや外反して上方に延びる。	口縁端部からやや下ったところを肥厚させ、その上と口縁端部に横位のRLの縄文を施す。胴部外面は繊維束によるケズリの後、軽いナデ、胴部内面は繊維束によるケズリを施す。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存10%
2	縄文土器	深鉢	B 5.1	1～4mmの長石・石英・雲母を含む	a 灰黄褐色 10Y R5/2 b 黒灰色～灰黄褐色 10Y R5/2 c 黒褐色 2.5Y3/1	最大径が胴部にあり、口縁部は一但内寄した後やや外反して上方に延びる。	口縁端部からやや下ったところを肥厚させ、その上と口縁端部に横位のRLの縄文を施す。胴部外面は繊維束によるケズリの後、軽いナデ、胴部内面は繊維束によるケズリを施す。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存 口縁部20%
3	縄文土器	深鉢	B 3.3	3mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b 灰黄褐色 10Y R6/2 c 灰黄褐色 10Y R6/2	有文深鉢の胴部	弧状の沈線を同心円状に多く重ねた後、縄文を施す。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存 5%
4	縄文土器	深鉢	B 4.9	5mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む	a 灰～オリーブ黒色 7.5Y6/1～3/1 b 明褐灰色 7.5Y R7/2 c 明褐灰～灰色 7.5Y R7/2～N6/0	波状口縁を呈する有文深鉢。口縁部は帯状に肥厚させ、頸部との境に段をなす。	口縁部文様帯は波頂下に太い沈線で渦文をいれ、さらにその外側に同心円状の弧文をいれる。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存 10%
 5	縄文土器	深鉢	A23.5 B16.2 F18.1	1～4mmの長石・石英を含む	a 黒褐色 2.5Y3/1 b 黒褐色 2.5Y3/1 c 黒褐色 2.5Y3/1	胴部でやや屈曲し、口縁部が外上方に開く粗製の深鉢。口縁部は肥厚せず、端部は丸く収める。	外面は巻貝条痕・内面は二枚貝条痕。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存 40%
 6	縄文土器	深鉢	A21.4 B18.6 F17.4	1～4mmの長石・石英を含む	a 黒色～黒褐色 2.5Y2/1～2.5Y3/1 b 黒色～黒褐色 10Y R2/1～2.5Y3/1 c 黒褐色 2.5Y3/1	胴部でやや屈曲し、口縁部が外上方に開く粗製の深鉢。口縁部はほとんど肥厚せず、端部は丸く収める。	外面は巻貝条痕、内面は二枚貝（？）条痕。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存 40%

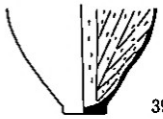
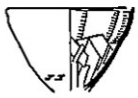
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
7		土偶	B 9.7	1mm以下の長石・石英を含む	b 青灰色 5BG6/1	土偶の足と考えられるもの。底面は平坦。	外面に縄文あり。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存20%
8	縄文土器	深鉢	B 3.0	1～3mmの長石・石英・雲母を含む	a 暗褐色 10YR3/3 b 黒褐色 10YR2/2 c 暗褐色 10YR3/3	深鉢もしくは鉢の胴部片で頸部との境目と考えられる。	胴部にRLの縄文を施す。頸部はナデ。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存5%
9	縄文土器	深鉢	B 2.8	5mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む	a 黄灰色 2.5Y5/1 b 黄灰色 2.5Y5/1 c 黄灰色 2.5Y5/1	やや肥厚する口縁部。口縁端部は丸く収める。	内外面ともナデ。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存5%
10	縄文土器	深鉢	B 1.4 C 7.4	2mm以下の長石・石英を多量に含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 灰黄色 2.5Y6/2 c 灰黄色 2.5Y6/2	深鉢もしくは鉢の底部。底面は平坦。	剥離のため調整は不明である。	縄文時代遺構面 自然流路02 d－7	残存底部20%
11	縄文土器	深鉢	B 6.9	1mm程度の長石・2mm以下の雲母を含む	a 褐灰色 7.5YR4/1 b 黒色 7.5YR2/1 c 黒褐色 7.5YR3/1	粗製の深鉢で砲弾形を呈する単純な器形のもの。口縁端部はやや尖る。	外面は繊維束のケズリの後、8条1単位の集合条線を間隔をおいて施す。内面は繊維束によるケズリ。	縄文時代遺構面 自然流路02 c－6,7	残存5%
12	弥生土器	壺	B 4.3	3～5mm大のチャート・石英・長石・雲母・黒色粒を含む	a 灰色 5Y5/1 b 灰色 5Y5/1 c 灰色 5Y5/1	体部の一部のみ残存している。体部は内弯気味に立ち上がり、頸部・口縁部へと続くものと思われるが、頸部・口縁部は欠損している。	体部外面上半部はヘラガキの沈線を施し、下半部・内面は横ナデ調整を施している。	弥生時代第1遺構面 SD04 d－7,8	残存10%

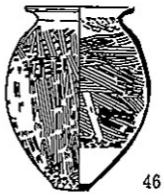
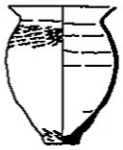
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
13	弥生土器	壺	B 3.3 C 6.4	3～5mm程度のチャート・石英・長石・黒色粒をやや多く含む。	a 灰色 5Y5/1 b 灰色 5Y5/1 c 灰色 5Y5/1	底部のみ残存し、底部は平底のものを有し、体部は外側に開くが、大部分は欠損している。	体部・底部の内外面ともに剥離のため、調整は不明であるが、体部の一部に横ナデ調整が施されている。	弥生時代 第1遺構面 SD04 d－7,8	残存 底部 30%
14	弥生土器	甕	B 5.8 C 8.6	1～5mm程度の石英・長石・雲母・チャート・クサリ礫を含む	a オリーブ黒色 10Y3/2 b にぶい橙色 にぶい赤褐色 2.5YR6/4 5YR4/4 灰黄褐色 10YR5/2 c 灰色・にぶい橙色 5Y5/1 2.5YR6/4	底部より、体部は外側に開くが、体部の大部分は欠損している。底部は平底のものを有する。	体部・底部の内外面ともに剥離のため、調整は不明である。体部外面に黒斑が見られる。	弥生時代 第1遺構面 g－9,10	残存 底部 70%
15	弥生土器	壺	B 8.7 C 7.6	1mm以下の長石を多量に含む	a 褐灰色 10YR5/1 b 明褐色 5YR5/6 c 褐灰色 10YR5/1	底部より、体部は内弯気味に立ち上り、体部外面に、断面方形のハリツケの把手を有する。底部は平底のものを有する。	体部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面は1cmあたり6本程度の縦方向のハケメ調整を施している。体部外面にヘンガラを全面に施し、その後下半部にウルシと思われる黒色のものを施している。	弥生時代 第3遺構面 SD01 j－7,8	残存 40%
16	弥生土器	甕	B14.0 C 6.8	0.1～0.2mmの石英・1mm大の小石を含む	a 灰色 7.5Y4/1 b 青黒色 5BG2/1 c 灰白色 7.5Y7/1	底部と体部の一部のみ残存し、底部は平底のものを有し、底部中心部は欠損している。体部は外側に傾いて延び、体部の1/2以上は欠損している。	体部外面は横ナデ調整の後、縦方向の1cmあたり5本程度のハケメ調整を施している。体部内面は横ナデ調整の後、縦方向のヘラケズリ調整を施している。底部は横ナデ調整を施している。	弥生時代 第3遺構面 第Ⅹ層層 g－7,8	残存 40%
 17	弥生土器	壺	A 9.9 B23.2 C 5.1 D 9.1 F14.1	3mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	a にぶい褐色 7.5YR6/3 b にぶい褐色 7.5YR6/3 c にぶい褐色 7.5YR6/3	頸部より口縁部は上方に延び、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面は1cmあたり9本程度のハケメ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面は1cmあたり10本程度のハケメ調整を施している。口縁端部・底部は横ナデ調整を施している。	弥生時代 第4遺構面 上層堆積砂 e－7,8	残存 75%
18	弥生土器	甕	A15.6 B 7.0 D12.5	0.5mm以下の長石・石英を含む	a にぶい褐色 7.5YR5/3 b 灰褐色 7.5YR4/2 c 灰黄褐色 10YR5/2	頸部より口縁部は外側に開き口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より体部は内弯気味に下がるが、体部の1/2以上は欠損している。	体部外面はスス付着のため、調整は不明で、内面はヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第4遺構面 上層堆積砂 d－7	残存 20%

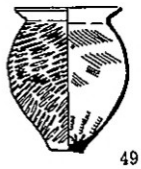
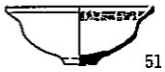
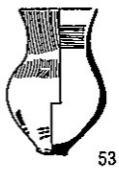
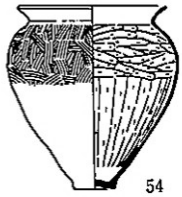
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
19	弥生土器	壺	A14.4 B15.0 C 5.8 F13.6 F14.1	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい黄橙色 10Y R6/4 b 黒褐色 7.5Y R3/1 c 褐灰色 7.5Y R5/1	頸部より口縁部は外側に開き口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部内外面ともに、皮状の工具で強いナデ調整を施している。口縁部・底部は横ナデ調整を施している。	弥生時代 第4遺構面 SD01 e－8	残存 95%
20	弥生土器	壺	A14.1 B13.5 D10.0	3mmの長石チャート 1mm以下の雲母を含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 黄灰色 2.5Y6/1	頸部より外反気味に立ち上り口縁部に至る。口縁部は丸味を帯びている。体部は外反気味に下がり、体部の3/5は欠損している。	口縁端部は強いヨコナデ調整を施している。口縁部・頸部・体部・外面はヨコナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施している。内面はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8,9	残存 口縁部 90%
21	弥生土器	壺	B17.9 D 8.9 F15.0	0.1mm程度の礫を含む	a 灰褐色 7.5Y R6/2 b 明褐灰色 7.5Y R7/2 c 明褐灰色 7.5Y R7/1	口縁部は外上方に直立し口縁端部を欠損する。体部は球状を示し、体部最大径はやや上方で測る。底部は欠損している。頸部にはツメガタ紋を上下2列に配列し全周する。	口縁端部外面はヘラミガキ調整を施し、体部外面は上から下にヘラミガキ調整を施している。口縁端部内面は1cmあたり12本のハケメ調整を横方向に施し、体部内面は1cmあたり12本のハケメ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 g－9 h－9	残存 20%
 22	弥生土器	壺	B22.5 C 5.9 F26.4	1mm以下の長石・石英を含む	a 黄灰色 2.5Y6/1 b 浅黄色 2.5Y7/3 c 灰白色 2.5Y7/1	底部より体部は内弯気味に立ち上がり、体部最大径に至る。頸部・口縁部は欠損している。底部は平底のものを有する。	体部外面は1cmあたり8本程度のハケメ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面は1cmあたり4本程度のハケメ調整を施している。底部は摩滅のため調整は不明である。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8,9	残存 70%
 23	弥生土器	壺	A 8.8 B 5.5	1mm程度の石英・1mm以下の細礫を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 明赤褐色 5Y R5/6 c 灰黄色 2.5Y6/2	口縁部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は凸部を有し、全体に丸味を帯びている。	口縁部外面は縦方向のタタキメ調整を施している。口縁端部・口縁部内面はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 g－9,10	残存 30%
24	弥生土器	壺	A12.4 B13.6	1mm以下の長石・石英・チャートを含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/2 b にぶい橙色 7.5Y R7/4 c にぶい橙色 7.5Y R7/4	口縁部のみ残存し、口縁部は上方に延び、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。	口縁部外面上半部はヨコナデ調整を施し、下半部は1cmあたり6本程度のハケメ調整を施している。口縁部内面は1cmあたり6本程度のハケメ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 口縁部 30%

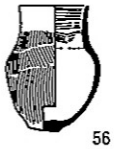
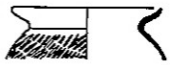
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
25	弥生土器	壺	A12.4 B 6.9	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	a 浅黄色 2.5Y7/4 b 灰白色 5Y7/2 c 灰白色 2.5Y8/1	口縁部のみ残存し、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 口縁部 100%
26	弥生土器	壺	A12.6 B 3.9	1mm以下の石英・長石を含む	a 橙色 5YR6/6 b 灰黄色 2.5Y6/2 c 灰白色 10Y7/2	口縁部のみ残存している。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は外側につまみ出され、肥大し、外面に凹部を有して丸味を帯びている。	口縁部外面は剥離のため調整は不明で、内面・口縁端部は板状工具によるナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 口縁部 100%
27	弥生土器	壺	B 5.7 C 6.0	1mm以下の長石を含む	a 黒褐色 5YR3/1 b 黄灰色 2.5Y4/1 c 灰黄色 2.5Y6/2	底部より体部は外側に開くが、体部の大部分は欠損している。底部は平底のものを有する。	体部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面は1cmあたり11本程度の横方向のハケメ調整を施している。底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 b－9、10	残存 底部 30%
28	弥生土器	壺	B 6.5 C 6.6	0.5mm以下の石英を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 黄灰色 2.5Y4/1 c 灰白色 10Y7/2	底部と体部の一部のみ残存し、底部は平底のものを有し外側に開き、体部に至る。底部端部は丸味を帯びている。	体部外面はヨコナデ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。体部内面は右下がりの1cmあたり6本程度のハケメ調整を施している。底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 30%
 29	弥生土器	甕	A12.8 B15.4 D11.2 F19.6	2mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 暗赤褐色 5YR3/6 b 明黄褐色 10YR7/6 c 明黄褐色 10YR7/6	頸部より口縁部は上方にのび、凸部を有して、口縁端部に至る。口縁端部外面には、凹部を有して、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面は剥離のため調整は不明で、内面上半部は横方向のヘラケズリ調整を施し、下半部は縦方向のヘラケズリ調整と思われるが、剥離のため調整は不明である。口縁部はヨコナデ調整を施し、口縁端部外面に沈線紋を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存 20%
30	弥生土器	甕	A16.1 B19.6 D14.4 F21.4	1mm程度の礫を含む	a 紫黒色 5RP2/1 b 暗青灰色 10BG3/1 c オリーブ灰色 5GY6/1	頸部より口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より内弯気味に下がり、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面は1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 25% 外面の一部にススが付着

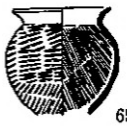
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 31	弥生土器	甕	A15.0 B10.4 D12.6 F17.6	2mm以下の長石・石英・チャートを少量含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形で、やや丸味を帯びている。頸部よりやや球形をなして体部最大径に至り、それより下は欠損している。	体部外面はタタキメ調整の後、ヨコナデ調整を施している。体部内面上半部は横方向のヘラケズリ調整、下半部は縦方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部は内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存40% 外面の一部にススが付着
32	弥生土器	甕	A14.8 B14.1 D12.6 F15.6	1mm以下の長石・石英をやや多く含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 暗灰色 N3/0 c 灰黄色 2.5Y7/2	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は凹部を有し、丸味を帯びている。頸部より体部は内寄気味に下がり、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面は1cmあたり6本程度のハケメ調整を施し、内面も同一ハケによるハケメ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存20%
33	弥生土器	甕	A15.6 B 8.5 D12.6	3mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 褐灰色 7.5Y R5/1 b 黒色 7.5Y R2/1 c 褐灰色 7.5Y R5/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凹部を有し、丸味を帯びている。	口縁部・体部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 a－9	残存25%
34	弥生土器	甕	A20.5 B 6.8 D17.8	1mm以下のチャートを含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/3 b にぶい橙色 7.5Y R7/3 c にぶい橙色 7.5Y R7/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より体部は外側に開くが、体部の大部分は欠損している。	体部外面は左上がりのタタキメ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 b－9	残存10%
35	弥生土器	壺	A12.6 B 4.0 D10.7	2mm以下の長石・石英・チャートを含む	a 浅黄色 2.5Y7/3 b 黒色 N2/0 c 黄灰色 2.5Y4/1	頸部より「く」の字状に口縁部は開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凹部を有し全体に丸味を帯びている。	体部外面は1cmあたり4本程度の縦方向のハケメ調整を施し、体部内面は1cmあたり5本程度の右上がりのハケメ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施し、特に口縁端部外面の凹部は強いヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存 口縁部100%
36	弥生土器	甕	A15.8 B 4.7 D13.9	1mm～3mm以下の細礫を含む	a 浅黄橙色 10Y R8/3 b 淡黄色 2.5Y8/3 c にぶい黄橙色 10Y R7/2	口縁部は外反気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は凸部を有し、丸味を帯びている。	口縁部外面は1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施している。口縁部内面はヘラケズリ調整を施している。口縁端部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 口縁部30%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
37	弥生土器	甕	B 3.1 C 5.4	1mm以下の長石・石英・雲母・チャートを含む	a 灰オリーブ色 5Y6/2 b 灰オリーブ色 5Y6/2 c 灰色 5Y5/1	底部と体部の一部のみ残存し、底部は平底であり、底部端部は丸味を帯びている。体部は外反気味に立ち上がると思われるが、体部のほとんどは欠損している。	体部外面はスス付着のため、調整は不明である。内面はヨコナデ調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。底部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存 底部 50% 外面にスス付着
38	弥生土器	甕	B 7.4 C 5.3	2mm以下の長石・石英・チャートを含む	a 褐灰色 5YR5/1 b 褐灰色 5YR5/1 c 褐灰色 5YR5/1	底部と体部の一部のみ残存し、底部は平底のものを有している。底部より凹部を有して体部へ至り、体部はやや外側に傾き、体部の2/3以上は欠損している。	残存する体部外面上半部はヨコナデ調整を施し、下半部はヨコナデ調整の後、タタキメ調整を施している。体部内面上半部はヨコナデ調整を施し、下半部は板ナデ調整の後、ヨコナデ調整を施している。底部は内外面ともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 j－8、9	残存 30%
 39	弥生土器	甕	B14.1 C 5.9	0.5mm以下の長石を少量含む	a 黒褐色 2.5Y3/1 b 黒色 N2/0 c 灰白色 2.5Y7/1	底部より体部は内弯気味に立ち上がるが、体部の1/2以上は欠損している。底部は平底のものを有している。	体部外面はハケメ調整と思われるが、全面にススが付着しているため調整は不明で、内面はヘラケズリ調整を施している。底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 40%
 40	弥生土器	鉢	A17.0 B11.3	1mm以下のチャート・長石を含む	a 明褐灰色 7.5YR7/2 b 明褐灰色 2.5YR7/2 c 褐色 7.5YR4/4	体部は内弯気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	体部外面上半部はヨコナデ調整を施し、下半部はタタキメ調整の後、ナデ調整を施している。体部内面は板ナデ調整の後、ナデ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 a－9、10	残存 50%
41	弥生土器	高坏	A27.2 B 7.5	1mm以下の長石・石英を少量含む	a 灰オリーブ色 5Y6/2 b にぶい黄褐色 10YR5/4 c オリーブ黒色 5Y2/2	坏部のみ残存し、坏部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は上方に延び、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。	体部内外面ともに、縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 b－9	残存 坏部 90%
42	弥生土器	高坏	B 7.5	1mm以下の長石・石英を含む	a 褐灰色 7.5YR6/1 b 橙色 5YR6/6 c 灰白色 2.5Y8/2	脚柱部のみ残存し、脚柱部は下方に下がり、一度外側に開き脚部に至るものと思われるが、脚部の大部分は欠損している。	脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部内面上半部はしぼり痕が見られ、下半部は1cmあたり7本程度の横方向のハケメ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 脚部 70%

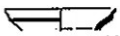
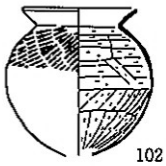
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
43	弥生土器	高坏	B 4.3 E 8.0	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい黄色 2.5Y6/3 b 明赤灰色 7.5R7/1 c 赤灰色 7.5R5/1	脚部のみ残存し、脚部は外側に開き、脚端部に至る。脚端部は断面方形のものを有している。	脚部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 d－9	残存 脚部 100%
44	弥生土器	壺	B10.1 C 5.2	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	a 灰褐色 7.5Y R5/2 b 灰褐色 5 Y R6/2 c 灰色 7.5Y6/1	底部より体部は外側に開くが、体部の1/2以上は欠損している。底部は平底のものを有する。	体部外面はタタキメ調整の後、1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、内面は板ナデ調整の後、同一ハケによるハケメ調整を施している。底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 b－9	残存 25% 外面にスス付着
45	弥生土器	壺	A 7.9 B 8.7	1mm以下のチャートを含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/3 b 黒褐色 7.5Y R3/2 c 灰白色 2.5Y7/1	口縁部はわずかに外側に開き、口縁端部付近で外反する。口縁端部はやや尖り気味である。	口縁部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第5遺構面 自然流路01 b－9	残存 口縁部 85%
 46	弥生土器	甕	A14.5 B24.4 C 4.7 D11.2 F19.1	5mm以下の石英・1mm以下の長石・チャートを含む	a 灰オリーブ色 5 Y5/2 b 暗灰黄色 2.5Y5/2 c 黄灰色 2.5Y5/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。頸部より内弯気味に下がり、体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面上半部はタタキメ調整の後、1cmあたり6本程度の縦方向のハケメ調整を施し、下半部は1cmあたり12本程度の縦方向のハケメ調整を施している。体部内面上半部は横方向の1cmあたり6本程度のハケメ調整を施し、下半部は1cmあたり12本程度のハケメ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。底部外面は指オサエ整形を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD01 g－9	残存 80%
47	弥生土器	甕	A16.1 B28.7 C 5.3 D11.8 F21.3	3mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	a 橙色 5 Y R6/6 b 黄褐色 2.5Y5/3 c 黄褐色 2.5Y5/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げ、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面上半部は右上りのタタキメ調整の後、1cmあたり6本程度のハケメ調整を施し、下半部は1cmあたり12本程度のハケメ調整を施している。体部内面上半部は1cmあたり6本程度のハケメ調整を施し、下半部は1cmあたり12本程度のハケメ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－9	残存 80%
 48	弥生土器	甕	A14.3 B18.2 C 4.7 D10.8 F15.0	5mm以下の長石・石英角閃石を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b にぶい黄橙色 10Y R7/3 c 灰色～オリーブ黄色 N6/0～5Y6/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚して丸味を帯びている。頸部より、内弯気味に下がり、体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面上半部は右上がりのタタキメ調整を施し、下半部はタタキメ調整の後、ヨコナデ調整を施し、内面は不整方向のナデ調整を施している。口縁部と底部ともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－9	残存 40%

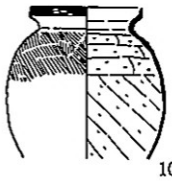
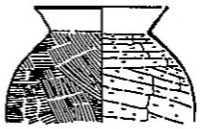
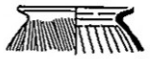
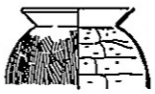
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 49	弥生土器	甕	A14.3 B19.2 C 4.4 D10.9 F16.2	5mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 淡橙色 5YR8/3 b 橙色 5YR6/6 c 淡橙色 5YR8/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、方形のものを有している。頸部より内弯気味に下がり、体部最大径を経て底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面は右上りのタタキメ調整を施し、内面は板ナデ調整を施している。口縁部・底部はともにヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－9	残存80% 外面の一部にススが付着
50	弥生土器	鉢	A19.5 B 9.0 C 4.6	1mm以下の長石・石英・チャートを含む	a 黄褐色 2.5Y5/3 b 黄褐色 2.5Y5/3 c 暗灰黄色 2.5Y5/2	底部より体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に沈線を施し、上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	体部外面はヨコナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施し、内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。底部は不整方向のナデ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－9	残存50%
 51	弥生土器	鉢	A10.5 B 7.8 C 4.2	2mm程度の雲母・石英・長石を含む	a にぶい橙色 5YR6/3 b にぶい橙色 5YR6/3 c 暗灰黄色 2.5Y5/2	底部より体部は内弯気味に立ち上がり、外側に屈折して、口縁端部に至る。口縁端部は外面に沈線を施し、肥厚して、丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	体部外面は指オサエ整形の後、不整方向のナデ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は1cmあたり12本程度のハケメ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－8、9	残存60%
52	弥生土器	鉢	B 5.3 G 3.7	2mm以下の長石・石英・チャートを含む	a 灰黄褐色 10YR6/2 b 灰黄褐色 10YR6/2 c 灰黄褐色 10YR6/2	底部より口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部は欠損している。底部には断面方形の高台を有する。	体部外面はヨコナデ調整を施し、内面は1cmあたり10本程度のハケメ調整と板ナデ調整を施している。高台部外面は指オサエ整形を施し、他はヨコナデ調整である。	弥生時代 第6遺構面 SD04 g－9	残存80%
 53	弥生土器	壺	A10.2 B19.4 C 4.2 D 8.7	3mm以下の長石・石英を含む	a にぶい褐色 7.5YR6/3 b にぶい褐色 7.5YR6/3 c にぶい褐色 7.5YR6/3	頸部より口縁部はわずかに外反し、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有している。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径を経て底部に至る。底部はやや歪んで、平底のものを有する。	体部外面上半部は1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、下半部はタタキメ調整の後、ヨコナデ調整を施している。体部内面はヨコナデ調整を施している。口縁部外面は同一ハケによる縦方向のハケメ調整を施し、内面は同一ハケによる横方向のハケメ調整を施している。口縁端部・底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第6遺構面 SD02 a－9	残存70%
 54	弥生土器	甕	A20.0 B24.5 D16.8 F23.0	1mm以下の長石・石英を含む	a 暗灰黄色 2.5Y5/2 b にぶい褐色 10YR5/3 c 暗灰黄色 2.5Y5/2	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径を経て、底部に至る。底部は平底のものを有する。	体部外面上半部は1cmあたり6本程度のハケメ調整を施し、下半部はヨコナデ調整を施している。体部内面上半部は横方向のヘラケズリ調整を施し、下半部は縦方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部・底部はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 SD02 c－9	残存65%

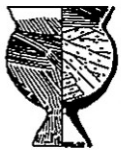
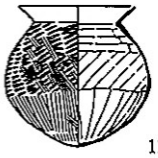
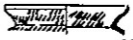
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
55	弥生土器	甕	A15.4 B 5.5 D13.1	3mm以下の長石・細礫を含む	a にぶい赤褐色 2.5Y R5/3 b にぶい赤褐色 2.5Y R5/3 c にぶい赤褐色 2.5Y R5/3	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味下がるが、体部の2/3以上は欠損している。	体部外面はタタキメ調整の後、1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、内面は同一ハケによる横方向のハケメ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 SD01 a－9	残存 15%
 56	弥生土器	壺	A 9.2 B17.1 C 4.0 D 9.6 F12.6	1mm以下の長石を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b 灰黄褐色 10Y R6/2 c 灰黄褐色 10Y R6/2	頸部より口縁端部はまっすぐ立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部はやや球形を帯び、体部最大径を経て、底部へ至る。底部は歪んでおり、平底のものを有する。	頸部より体部外面は1cmあたり9本程度の縦方向のハケメ調整を施している。口縁部外面・端部はヨコナデ調整を施し口縁部内面は1cmあたり9本程度の横方向のハケメ調整を施している。体部内面は指ナデ調整を施している。底部外面はヨコナデ調整を施し、内面は指オサエ整形を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 45%
57	弥生土器	壺	A15.1 B22.5 D10.2 F29.8	1mm以下の長石・石英・雲母・チャートを含む	a 淡橙色 5Y R8/3 b 橙色 7.5Y R7/6 c 橙色 7.5Y R7/6	頸部より口縁部は大きく外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に面を有して、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面上半部は縦方向のヘラミガキ調整を施し、下半部はヨコナデ調整を施している。体部内面上半部は1cmあたり6本程度の横方向のハケメ調整を施し、下半部はヨコナデ調整を施している。頸部外面には波状紋と直線紋を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部外面には波状紋を施し、他はヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 50%
58	弥生土器	壺	A17.6 B 1.7	2mm以下の長石・石英・チャート・雲母の微粒を含む	a 浅黄橙色 10Y R8/3 b にぶい橙色 7.5Y R7/4 c 浅黄橙色 10Y R8/3	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は凸部を有し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 口縁部 20%
 59	弥生土器	甕	A20.0 B 7.1 D15.2	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/2 b にぶい黄橙色 10Y R7/4 c 灰白色 10Y R8/1	頸部より口縁部は外反気味に立ち上がり、少し屈折して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。体部は内弯気味に下がるものと思われるが、体部の2/3以上は欠損している。	体部外面はヨコナデ調整の後、右上がりのタタキメ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、板ナデ調整を実施ている。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 40%
60	弥生土器	壺	B 6.3 C 3.4	0.1mm以下の長石・石英・雲母を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 灰黄色 2.5Y6/2 c オリーブ黒色 7.5Y3/1	底部は平底のものを有し、外側に開き気味に体部へ続く。体部の2/3以上は欠損している。	底部内面はヨコナデ調調の後、板ナデ調整を施し、他はヨコナデ調整である。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 底部 40%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
61	弥生土器	壺	B 3.3 C 4.4	1mm以下の長石・石英・2mm以下の雲母を多量に含む	a 灰黄褐色 10Y R5/2 b 灰黄褐色 10Y R5/2 c 灰黄褐色 10Y R5/2	底部は平底のものを有し、外側に開き気味に体部へ続く。体部の大部分は欠損している。	体部外面はヨコナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施し、他はヨコナデ調整である。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 底部 100%
62	弥生土器	鉢	A11.9 B 5.5 C 3.8	1mm～7mmの長石・2mm以下の石英・黒雲母・角閃石を含みやや粗である	a 暗灰黄色 2.5Y5/2 b 暗灰黄色 2.5Y5/2 c 暗灰黄色 2.5Y5/2	底部は平底で、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	外面は磨滅のため調整は不明である。内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	完形品
63	弥生土器	高坏	B 7.4	2mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/4 b にぶい橙色 5Y R7/4 c にぶい橙色 7.5Y R7/4	脚柱部より外側に開き、坏部に至る。坏部の4/5以上は欠損している。脚柱部より外側に開き脚部へ至るが、脚部の1/3以上は欠損している。	脚柱部外面はヨコナデ整の後、化粧土を施し、縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部内面・坏部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	弥生時代 第7遺構面 自然流路01 g－9、10	残存 35%
64	弥生土器	高坏	B 5.8	5mm以下の長石・2mm以下の石英・チャートを含む	a にぶい黄色 2.5Y6/3 b にぶい黄色 2.5Y6/3 c にぶい黄色 2.5Y6/3	脚柱部と坏部の一部のみ残存し、脚注部はやや外開きに下がる。坏部は外開きに立ち上がるものと思われるが、坏部の大部分を欠損している。	坏部・脚柱部外面は磨滅のため、調整は不明である。脚柱部内面にはしぼり痕が見られる。	弥生時代 第7遺構面 自然流路02 d－7、8	残存 30%
 65	古式土師器	甕	A12.8 B14.2 D10.5 F14.8	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい褐色 7.5Y R5/3 b にぶい橙色 2.5Y R6/3 c にぶい褐色 7.5Y R5/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形状のものを有する。頸部より球形をなして、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面上半部はヨコナデ調整の後、横方向のタタキメ調整を施し、下半部は右上がりのタタキメ調整を施している。体部内面は左上がりの1cmあたり12本程度のハケメ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SK07 a－8、9	残存 75%
66	古式土師器	把手付鉢	A 9.2 B 9.4 F12.5	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい褐色 7.5Y R5/4 b にぶい褐色 7.5Y R5/4 c にぶい褐色 7.5Y R5/4	底部より球形をなして体部最大径を経て口縁部に続き、やや上方に延び口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。体部外面に幅1.4cmの肥手を有し、底部は平底のものを有する。	口縁部外面・体部外面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は横方向のヘラミガキ調整の後、左上がりのヘラミガキ調整を施している。肥手部・体部内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SK07 a－8、9	残存 95%

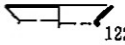
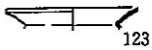
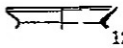
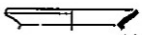
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
91	古式土師器	壺	A18.0 B 5.4	1mm以下の長石を含む	a 灰白色 5Y7/2 b 灰白色 5Y7/2 c 灰白色 5Y7/2	口縁部のみ残存している。口縁部は外側に開き、1度内側に屈折して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9、10	残存 15%
92	古式土師器	壺	A20.4 B 3.5	1mm以下の長石を含む	a 褐灰色 5YR6/1 b 褐灰色 5YR6/1 c 褐灰色 5YR6/1	口縁部は外反気味に立ち上がり、わずかな凸部を有して口縁端部に至る。口縁端部は外側に面を有して、断面方形のものを有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9、10	残存 10%
93	古式土師器	壺	A17.2 B 4.5	1mm以下の長石を含む	a 橙色 5YR6/8 b 橙色 5YR6/8 c 褐灰色 5YR6/1	口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部で大きく外側に開く。口縁端部は外面に凹部を有し、肥厚して丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 口縁部 30%
94	古式土師器	壺	B 1.5	1mm以下の細礫・長石を含む	a 暗赤褐色 2.5YR3/3 b にぶい赤褐色 5YR4/3 c 明褐灰色 7.5YR7/1	二重口縁下半部のみ残存し、口縁部は外側に開いている。	口縁部外面に円形浮紋を施し、他は縦方向のヘラミガキ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 二重口縁下半部 30%
95	古式土師器	壺	A21.3 B 2.1	1mm以下の長石を含む	a 灰白色 5YR8/2 b 灰白色 5YR8/2 c 灰白色 7.5YR8/2	口縁部は外側に大きく開き、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 口縁部 15%
96	古式土師器	壺	A11.3 B 6.0	1mm以下の長石を含む	a にぶい褐色 7.5YR6/3 b にぶい褐色 7.5YR6/3 c にぶい褐色 7.5YR6/3	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9、10	残存 20%

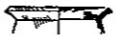
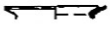
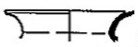
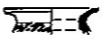
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
97	古式土師器	壺	A11.3 B 4.4	0.1mm以下の白色粒あり	a 灰白色 10Y R8/2 b 浅黄色 2.5Y7/3 c 灰黄褐色 10Y R4/2	口縁部は外側に開き、口端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 口縁部 30%
98	古式土師器	壺	A10.8 B 4.3	1mm以下の長石を含む	a 明褐灰色 2.5Y6/6 b 灰白色 10Y R8/2 c 褐灰色 5 Y R6/1	口縁部は内弯気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。	口縁部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 口縁部 25%
99	古式土師器	壺	A19.6 B 2.5	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/3 b 灰黄色 2.5Y6/2 c にぶい黄橙色 10Y R7/3	口縁部のみ残存し、口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。	口縁部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 a－8、9	残存 口縁部 15%
 100	古式土師器	壺	A14.8 B 2.9	1mm以下の長石・石英・チャートを少量含む	a 灰白色 2.5Y7/1 b 灰白色 2.5Y7/1 c 灰白色 2.5Y7/1	口縁部は外側に傾き、やや内側に屈折し、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9、10	残存 口縁部 10%
101	古式土師器	壺	A 5.6 B 3.5	1mm以下の長石・チャートを含む	a にぶい橙色 5 Y R7/4 b にぶい橙色 5 Y R7/3 c にぶい橙色 5 Y R7/4	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9、10	残存 口縁部 25%
 102	古式土師器	甕	A15.2 B19.5 D11.4 F19.6	3mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b 灰褐色 7.5Y R5/2 c 灰褐色 7.5Y R5/2	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなし、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面上半部は右上がりのタタキメ調整を施し、下半部はスス付着のため、調整は不明である。体部内面上半部は横方向のヘラケズリ調整を施し、下半部は縦方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 e－8	残存 50%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 103	古式土師器	甕	A14.8 B20.0 D12.8 F21.4	1mm以下の石英を含む	a 灰白色 5Y7/1 b 浅黄色 5Y7/3 c. 灰白色 5Y7/1	頸部より口縁部は外側に開き、まっすぐに屈折し、凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり、体部最大径に至る。底部は欠損している。	体部外面上半部は1cmあたり12本程度のハケメ調整を施し、下半部はスス付着のため調整は不明である。体部内面はヘラケズリ調整を施している。口縁端部外面にはハケメ状の沈線紋を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9	残存 40%
 104	古式土師器	甕	A17.6 B15.3 D13.2	3mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a にぶい黄橙色 10YR6/3 b にぶい橙色 5YR6/3 c にぶい黄橙色 10YR6/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がる。体部の1/2以上は欠損している。	体部外面は1cmあたり10本程度のハケメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存 30%
105	古式土師器	甕	A15.8 B 5.9 D13.6	3mm以下の長石・1mm以下の石英を少量含む	a 黄灰色 2.5Y6/1 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部より体部は内弯気味に下がるが、体部の2/3以上は欠損している。	体部外面は右上がりのタタキメ調整を施し、内面はハケメ調整の後、ヨコナデ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 10%
 106	古式土師器	甕	A15.2 B 5.7 D12.6	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰褐色 5YR6/2 b 褐灰色 5YR6/1 c 灰褐色 5YR6/2	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がるが、体部の2/3以上は欠損している。	体部外面はタタキメ調整の後、1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、内面は縦方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8、9	残存 10%
107	古式土師器	甕	A15.7 B15.9 D11.4 F15.4	1mm以下の長石を含む	a 褐灰色 10YR6/1 b 褐灰色 10YR6/1 c 褐灰色 10YR6/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなし、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。	体部外面上半部はタタキメ調整の後、1cmあたり12本程度のハケメ調整を施し、下半部は同一ハケによるハケメ調整を施している。体部内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 e－8	残存 50%
 108	古式土師器	甕	A14.8 B 9.8 D11.0	1mm以下の長石を含む	a 暗赤褐色 5YR3/3 b にぶい褐色 7.5YR5/3 c 暗赤褐色 5YR3/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部はつまみ上げられ、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がるが、体部の1/2以上は、欠損している。	体部外面は1cmあたり8本程度のハケメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9、10	残存 23%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 109	古式土師器	甕	A14.2 B18.6 D 7.9 E12.1	3mm以下の長石を含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/3 b にぶい黄橙色 10Y R7/3 c にぶい黄橙色 10Y R7/3	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より球形をなし、体部最大径を経て底部に至る。底部には脚部を有する。脚部は外側に開き、脚端部は断面方形のものを有する。	体部外面・脚部外面ともに1cmあたり7本程度のハケメ調整を施している。体部内面はヘラケズリ調整を施し、脚部内面はヨコナデ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し内面は1cmあたり7本程度のハケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8,9	残存 70%
 110	古式土師器	甕	A15.4 B18.7 D11.8 F19.4	0.1mm以下の長石・1mm以下の石英を少量含む	a 暗褐色 10Y R3/3 b 明黄褐色 10Y R6/6 c 灰褐色 7.5Y R6/2	頸部より口縁部「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなし、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。	体部外面上半部は右上がりのタタキメ調整の後、1cmあたり7本程度の縦方向のハケメ調整を施し、下半部は同一ハケによる縦方向のハケメ調整を施している。体部内面は、ヘラケズリ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は同一ハケによる横方向のハケメ調整を施し、口縁端部は、ヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 e－8	残存 90%
111	古式土師器	甕	A17.1 B 5.7 D12.0	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰赤色 2.5Y R6/2 b 明褐灰色 5 Y R7/2 c 明褐灰色 5 Y R7/2	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。体部は頸部より内弯気味に下がるものと思われるが、体部の大部分は欠損しいてる。	体部外面はヨコナデ調整の後、右上がりのタタキメ調整を施し、内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 5%
112	古式土師器	甕	A13.8 B 5.2 D10.9	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰褐色 5 Y R6/2 b 褐灰色 7.5Y R6/1 c 褐灰色 7.5Y R6/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚して、丸味を帯びている。体部は内弯気味に下がるものと思われるが、体部の3/2以上は欠損している。	体部外面は左上がりのタタキメ調整の後、1cmあたり6本程度の縦方向のハケメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－10	残存 15%
113	古式土師器	甕	A14.0 B 4.7 D 9.8	1mm以下の長石・チャートを含む	a 暗灰色 N3/0 b にぶい黄橙色 10Y R6/3 c 灰白色 2.5Y7/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に開くが、体部の大部分は欠損している。	体部外面はタタキメ調整の後、1cmあたり9本程度のハケメ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、ヘラケズリ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は同一ハケによるハケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 口縁部 15%
 114	古式土師器	甕	A16.4 B 3.5 D13.3	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰褐色 7.5Y R5/2 b 灰褐色 7.5Y R4/2 c 褐灰色 7.5Y R6/1	頸部より口縁部は「く」の字に開き、内側に口縁端部は折く。口縁端部はやや尖り気味である。	口縁部内外面ともに右上がりのタタキメ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 口縁部 17%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
115	古式土師器	甕	A12.5 B 2.9 D 9.4	1mm以下の長石を含む	a 黒褐色 10YR3/1 b 灰褐色 7.5YR6/2 c 黄灰色 2.5Y4/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面は1cmあたり7本程度の横方向のハケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8,9	残存 口縁部 15%
116	古式土師器	甕	A13.3 B 3.5	1mm程度の石英・長石を含む	a 明褐灰色 5YR7/2 b 黒褐色 7.5YR3/1 c にぶい橙色 5YR6/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ丸味を帯びている。体部は大部分が欠損している。	頸部内面は横方向のヘラケズリ調整を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9	残存 口縁部 80%
117	古式土師器	甕	A16.3 B 3.3 D12.6	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 5YR6/4 b にぶい赤褐色 2.5YR4/3 c にぶい赤褐色 5YR5/4	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚して、丸味を帯びている。体部の大部分は欠損している。	体部の外面は右上がりのタタキメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存 口縁部 10%
118	古式土師器	甕	A16.4 B 2.9 D12.3	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 7.5YR6/4 b にぶい褐色 7.5YR5/4 c にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部のみ残存し、口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9,10	残存 口縁部 25%
119	古式土師器	甕	A15.2 B 3.2 C12.2	1mm以下の長石を含む	a 褐灰色 5YR5/1 b 褐灰色 5YR5/1 c 褐灰色 5YR5/1	頸部より口縁部は少し外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。	口縁端部外面はヨコナデ調整を施し、内面は1cmあたり6本程度の横方向のハケメ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8,9	残存 10%
120	古式土師器	甕	A17.5 B 3.7 D13.5	1mm以下の長石を含む	a 褐灰色 7.5YR6/1 b 褐灰色 7.5YR6/1 c 褐灰色 7.5YR6/1	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。	口縁部内面には1cmあたり5本程度のハケメ調整を部分的に施し、外面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8,9	残存 10%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
121	古式土師器	甕	A17.4 B 2.8 D13.1	1mm程度の長石を含む	a 黒褐色 2.5Y3/1 b 灰白色 7.5Y7/1 c 灰白色 2.5Y8/1	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 10%
 122	古式土師器	甕	A14.2 B 2.9	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰白色 10Y R7/1 b にぶい黄褐色 10Y R4/3 c にぶい黄褐色 10Y R4/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8、9	残存 口縁部 10%
 123	古式土師器	甕	A17.6 B 3.0 D12.6	2mm以下の長石を含む	a 褐灰色 10Y R5/1 b 褐灰色 10Y R5/1 c 褐灰色 10Y R5/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に面を有し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存 5%
124	古式土師器	甕	A 8.0 B 3.7 D12.3	1mm以下の長石・石英・雲母を含む	a 灰白色 10Y R7/1 b 灰黄褐色 10Y R4/2 c 褐灰色 10Y R6/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がるものと思われるが、体部の大部分は欠損している。	体部内外面ともに摩滅のため、調整は不明である。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9、10	残存 口縁部 25%
 125	古式土師器	甕	A14.8 B 3.0 D11.2	0.1mm程度の長石を少量含む	a にぶい橙色 5 Y R6/3 b 橙色 2.5Y R6/6 c 明褐灰色 7.5Y R7/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。体部は欠損している。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－10	残存 口縁部 15%
 126	古式土師器	甕	A17.4 B 2.4 C13.6	1mm以下の長石を含む	a 暗赤褐色 5 Y R3/2 b 暗赤褐色 5 Y R3/2 c 褐灰色 5 Y R5/1	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9、10	残存 口縁部 40%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
127	古式土師器	甕	A 9.6 B 4.7 C 8.3	1mm以下の石英を含む	a 褐灰色 10Y R5/1 b にぶい褐色 7.5Y R6/3 c 黒褐色 7.5Y R3/1	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がるが、体部の1/2以上は欠損している。	体部外面は左上がりのタタキメ調整を施し、内面はヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともに、ヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9,10	残存 20%
 128	古式土師器	甕	A13.2 B 3.5 D11.3	2mm以下の石英・長石を含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/3 b にぶい橙色 7.5Y R7/4 c にぶい橙色 7.5Y R7/4	頸部より口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は外面に平面部を有し、丸味を帯びている。体部は欠損している。	口縁部外面より頸部外面は1cmあたり11本程度のハケメ調整を施し、内面は1cmあたり8本程度のハケメ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 d－9	残存 口縁部 20%
 129	古式土師器	甕	A13.4 B 1.6	1mm以下の長石・チャートを少量含む	a 淡赤橙色 2.5Y R7/3 b にぶい橙色 2.5Y R6/3 c にぶい橙色 10Y R6/4	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凹部を有し、肥厚して丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 口縁部 10%
 130	古式土師器	甕	A17.2 B 3.8	1mm程度の長石・石英・チャートを含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/2 b 黒褐色 10Y R2/3 c 明褐灰色 7.5Y R7/2	口縁部のみ残存し、口縁部は外反気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 口縁部 15%
 131	古式土師器	甕	A12.6 B 3.5 D 9.6	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 5 Y R7/3 b 灰白色 5 Y R8/2 c にぶい黄橙色 10Y R7/2	頸部より口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。頸部内面は凸部を有する。	頸部より残存する体部外面は右上がりのタタキメ調整を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 口縁部 20%
132	古式土師器	高坏	A16.0 B19.3 E10.4	0.1mm以下の長石・1mm以下のチャートを少量含む	a 褐灰色 5 Y R5/1 b にぶい橙色 5 Y R7/3 c にぶい褐色 7.5Y R5/3	坏部は脚柱部より内弯気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。脚柱部は外側に開き、さらに一度大きく外側に開き、脚柱部に至る。脚端部は丸味を帯びている。脚部外面には三方の円孔を施している。	坏部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部・脚部ともに外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、脚柱部内面はヨコナデ調整を施し、脚部内面は1cmあたり10本程度のハケメ調整を施している。口縁端部・脚端部ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存 50%

土・器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
133	古式土師器	高坏	A14.8 B 9.4	1mm以下の長石を含む	a 橙色 2.5Y R7/8 b 橙色 2.5Y R7/8 c 橙色 2.5Y R7/8	坏部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。脚柱部はやや外側に開き、脚部で大きく外側に開くものと思われるが、脚部の大部分は欠損している。	坏部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。脚柱部外面は単位不明のハケメ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9	残存 50%
134	古式土師器	高坏	A12.2 B 6.9	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 b にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 c にぶい赤褐色 10Y R7/3	坏部は脚柱部より外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。脚柱部は外側に開き、さらに外側に屈折し、脚端部に至るものと思われるが、脚端部は欠損している。脚部外面に四方の円孔を施している。	坏部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面はしぼりの跡が見られる。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 40%
135	古式土師器	高坏	B 5.9	1mm程度の長石・石英を含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	坏部のみ残存し、坏部は外側に開き、段を有し、外反して口縁部に至る。口縁端部は欠損している。	坏部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8、9	残存 坏部 70%
136	古式土師器	高坏	A24.5 B 5.7	1mm～2mm程度の鉱石を多量に含む	a にぶい橙色 5Y R7/4 b 淡赤橙色 2.5Y R7/4 c 淡赤橙色 2.5Y R7/4	口縁部のみ残存し、口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 c－9、10	残存 口縁部 30%
137	古式土師器	高坏	A10.6 B 5.0	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 5Y R7/4 b にぶい橙色 5Y R7/4 c にぶい橙色 5Y R7/4	坏部は内寄気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。脚柱部は、外側に開くものと思われるが、脚柱部以下の大部分は欠損している。	坏部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は縦縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 坏部 85%
138	古式土師器	高坏	B 5.5	1mm以下のチャートを少量含む	a にぶい橙色 5Y R7/3 b にぶい橙色 5Y R7/4 c にぶい橙色 5Y R7/4	坏部は脚柱部より外側に開くが、口縁部は欠損している。脚柱部は外側に開き、一度さらに外側に屈折し、脚部に至るものと思われるが、脚部の1/2は欠損している。脚部外面に四方の円孔を施している。	脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整を施し、他は剥離のため、調整は不明である。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 40%

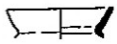
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
139	古式土師器	高坏	B 3.2	0.5mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/4 b にぶい赤褐色 5Y R6/3 c 灰白色 2.5Y7/1	坏部は脚柱部より内弯気味に立ち上がるが、口縁部は欠損している。脚柱部は下方に下がるが、脚部は欠損している。	坏部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－10	残存70%
140	古式土師器	器台	B 8.9 E10.4	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰オリーブ色 7.5Y5/2 b 灰オリーブ色 7.5Y5/2 c 灰オリーブ色 7.5Y5/2	坏部は内弯気味に立ち上がり、口縁部に至るが、口縁端部は欠損している。脚柱部より外側に開き、脚部に至る。脚端部は丸味を帯びている。脚柱部外面に四方の円孔を施している。	坏部内外面ともに横方向のヘカミガキ調整を施している。脚柱部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面上半部にはしぼり痕が見られ、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8、9	残存35%
141	古式土師器	器台	A 9.4 B 2.3	1mm以下の長石を含む	a 橙色 5Y R7/6 b 橙色 5Y R7/6 c 橙色 5Y R7/6	坏部のみ残存し、口縁部は内弯気味に立ち上がり、上方にのび口縁端部に至る。口縁端部は外面に凹部を有し、丸味を帯びている。	体部外面は横方向ヘラミガキ調整を施し、内面は横方向のヘラミガキ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部は丸味を帯びている。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－8、9	残存50%
142	古式土師器	器台	A 9.8 B 2.0	1mm以下の長石を含む	a 橙色 2.5Y R7/8 b 橙色 2.5Y R7/8 c 橙色 2.5Y R7/8	坏部のみ残存し、口縁部は内弯気味に立ち上がり、上方にのび口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は横方向のヘラミガキ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部外面にはヘラミガキ工具による沈線を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8、9	残存25%
143	古式土師器	器台	A10.4 B 2.6	1mm以下の白色粒を含む	a にぶい橙色 5Y R7/3 b 淡赤橙色 2.5Y R7/3 c にぶい橙色 5Y R7/3	坏部のみ残存し、坏部は外側に開き、口縁部に至る。口縁端部は凹部を有して外反し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存坏部95%
144	古式土師器	器台	A 9.4 B 4.9	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 10Y R7/3 b にぶい橙色 10Y R7/3 c にぶい橙色 10Y R7/3	坏部は内弯気味に立ち上がり、口縁部に至り、凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は、丸味を帯びている。脚柱部は外側に開くが、脚部は欠損している。	坏部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は剝離のため調整不明である。坏部と脚柱部の接合部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存45%

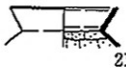
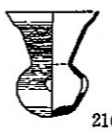
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
145	古式土師器	器台	A10.1 B 4.9	3mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	a 淡赤橙色 2.5Y R7/3 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 褐色 7.5Y R4/4	坏部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は内側に傾き、丸味を帯びている。脚柱部は外側に開くが、大部分は欠損している。	坏部外面の一部は横方向のヘラミガキ調整を施し、他は磨滅のため、調整は不明である。内面もヘラミガキ調整と思われるが、磨滅のため調整は不明である。脚柱部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 b－9	残存 40%
146	古式土師器	器台	B 4.6 C 9.6	1mm以下の長石を含む	a にぶい橙色 7.5Y R6/4 b にぶい橙色 7.5Y R6/4 c にぶい橙色 7.5Y R6/4	脚柱部より外側に開き、脚端部に至る。脚端部はやや尖り気味である。脚柱部外面に四方の円孔を施している。	脚柱部外面は磨滅のため調整は不明で、内面はヨコナデ調整を施している。坏部と脚柱部の接合部の外面に縦方向のヘラミガキ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－9,10	残存 25%
147	古式土師器	器台	B 4.8 E 9.3	1mm以下の長石を少量含む	a 黄褐色 2.5Y5/3 b 黄褐色 2.5Y5/3 c 黄褐色 2.5Y5/3	坏部は欠損している。脚柱部は外側に開き、脚部に至る。脚端部は丸味を帯びている。脚柱部外面に、四方の円孔を施している。	脚柱部外面はヘラミガキ調整と思われるが、剥離のため不明である。内面上半部にはしぼり痕が見られ、下半部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－8	残存 40%
148	古式土師器	器台	B 5.9	1mm以下の長石を含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 灰黄色 2.5Y7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	脚柱部のみ残存し、脚柱部は外側に開く。脚柱部に三方の円孔を施している。	脚柱部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9,10	残存 20%
149	古式土師器	小型丸底壺	A 9.7 B 8.7 D 8.0	1mm以下の白色粒を含む	a にぶい赤褐色 5 Y R5/4 b にぶい赤褐色 5 Y R5/4 c にぶい赤褐色 5 Y R5/4	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなして、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8,9	残存 95%
150	古式土師器	小型丸底壺	A10.4 B 6.6 D 9.5 F 8.4	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい赤褐色 5 Y R5/3 b にぶい褐色 7.5Y R6/3 c にぶい褐色 7.5Y R6/3	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなし、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施し、底部に指オサエ整形を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 c－8,9	残存 45%

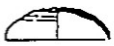
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
151	古式土師器	小型丸底鉢	A13.0 B 8.3 D10.6 F11.4	1mm以下の長石・石英等を少量含む	a 浅黄橙色 10Y R8/3 b にぶい橙色 5 Y R7/3 c 橙色 5 Y R6/6	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなして、体部最大径に至る。底部は欠損している。	口縁部・体部の外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は磨滅のため調整は不明である。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 a－8、9	残存 20%
152	古式土師器	小型丸底鉢	A10.6 B 6.6 D 9.5	1mm程度の長石を含む	a にぶい褐色 7.5Y R6/3 b にぶい褐色 7.5Y R6/3 c にぶい褐色 7.5Y R6/3	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がり、底部は欠損している。	口縁部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。体部外面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。体部内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 a－8、9	残存 20%
153	古式土師器	小型丸底鉢	A 9.5 B 5.9 D 8.4	1mm以下の石英を含む	a にぶい橙色 7.5Y R6/4 b にぶい橙色 7.5Y R6/4 c にぶい橙色 7.5Y R6/4	頸部より口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は内弯気味に下がるが、底部は欠損している。	口縁内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。体部外面はヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 10%
154	古式土師器	小型丸底鉢	A10.0 B 5.4 D 7.5	1mm以下の長石を含む	a にぶい黄橙色 10Y R6/3 b にぶい黄橙色 10Y R6/3 c にぶい黄橙色 10Y R6/3	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなしているが、底部は欠損している。	口縁部・体部ともに内外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 30%
155	古式土師器	鉢	A15.9 B 6.6	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰黄色 2.5Y7/2 b 明褐灰色 7.5Y R7/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	底部より内弯気味に立ち上がり、一度外側に屈折し、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は丸底のものを有する。	口縁部・体部内外面ともに、ヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 95%
156	古式土師器	鉢	A11.4 B 5.7	1mm以下の石英を少量含む	a にぶい橙色 5 Y R6/3 b にぶい橙色 5 Y R6/3 c にぶい橙色 5 Y R6/3	底部より内弯気味に立ち上がり、一度外側に屈折し、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は丸底のものを有する。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。体部外面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9、10	残存 70%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
157	古式土師器	鉢	A15.6 B 5.6	0.1～0.3mmの長石を少量含む	a 灰褐色 5Y R5/2 b にぶい黄橙色 5Y R7/4 c にぶい黄橙色 5Y R7/4	体部は内弯気味に立ち上がり、外側に屈折して、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。底部は欠損している。	体部内外面ともにヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8、9	残存 40%
158	古式土師器	鉢	A13.6 B 4.6	1mm以下の長石・細礫をごく少量含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/4 b にぶい橙色 7.5Y R7/4 c にぶい橙色 7.5Y R7/4	体部は内弯気味に立ち上がり、一度外側に屈折し、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	体部外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8、9	残存 20%
159	古式土師器	鉢	A13.3 B 4.6	1mm以下の雲母を含む	a 明褐灰色 5Y R7/2 b にぶい橙色 5Y R7/4 c 橙色 5Y R6/6	体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は一度屈折し、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部・体部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 10%
160	古式土師器	鉢	A16.0 B 2.8	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 2.5Y R6/4 b にぶい赤褐色 2.5Y R5/4 c 橙色 2.5Y R6/6	口縁部は内弯気味に立ち上がり、外側に屈折し、外反気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部外面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部は、ヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－8、9	残存 口縁部 15%
161	古式土師器	鉢	A12.8 B 4.9	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/4 b にぶい橙色 5Y R6/4 c にぶい黄橙色 10Y R7/4	口縁部は外側に開き、一度屈折して、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は磨滅のため調整は不明である。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 d－9	残存 口縁部 20%
162	古式土師器	器台	A11.4 B 3.7	1mm以下の長石を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 浅黄色 2.5Y7/3 c 灰黄色 2.5Y6/2	口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 包含層 a－9	残存 15%

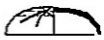
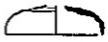
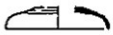
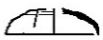
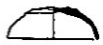
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
199	古式土師器	壺	A15.6 B 7.8 D11.0	1mm以下のチャート・細礫を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b 灰黄褐色 10Y R6/2 c 灰黄褐色 10Y R6/2	頸部より口縁部へ外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は全体に丸味を帯びている。	外面の口縁部中央に板ナデ調整の後、ヨコナデ調整を施している。また、内面頸部下にヨコナデ調整の後、ハケメ調整を施している。わずかなため単位は不明である。他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−7、8	残存 口縁部 10%
200	古式土師器	壺	A20.6 B 4.4	2mm以下の長石を含む	a 淡橙色 5Y R8/3 b 明褐灰色 7.5Y R7/2 c 灰白色 2.5Y7/1	口縁部のみ残存し、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凸部を有し、全体に丸味を帯びている。	口縁端部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−7、8	残存 口縁部 15%
201	古式土師器	壺	A12.0 B 3.7	1mm以下の長石・0.5mm以下の石英・雲母を含む	a 灰白色 10Y R7/1 b にぶい黄橙色 10Y R7/2 c 灰白色 10Y R7/1	口縁部のみ残存し、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形である。	口縁端部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−7、8	残存 口縁部 20%
202	古式土師器	甕	A18.2 B 4.0 D14.0	2mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む	a 灰黄褐色 10Y R6/2 b にぶい黄橙色 10Y R7/2 c にぶい黄橙色 10Y R7/2	頸部より外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形である。	口縁端部内外面はヨコナデ調整を施し、頸部の内面にヘラケズリ調整の跡が見られる。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−7、8	残存 口縁部 20%
203	古式土師器	甕	A14.9 B16.8 D11.3 F21.6	1mm以下の長石を含む	a 赤褐色 5Y R4/6 b 赤褐色 5Y R4/6 c 赤褐色 5Y R4/6	頸部より「く」の字状に口縁部は開き、口縁端部に至る。口縁端部外面には二つの段を有し、全体として丸味を帯びている。頸部よりほぼ球形をなして体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸味を帯びている。	口縁部外面はヨコナデ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、横方向の1cmあたり7本程度のハケメ調整を施している。体部外面上部は縦方向のハケメ調整の後、右上がりのタタキメ調整を施している。体部外面下部は、横方向の1cmあたり7本程度のハケメ調整の後、同一ハケによる縦方向のハケメ調整を施している。頸部内面にわずかなヘラミガキ調整らしきものが見られる。体部内面上部はヨコナデ調整の後、右上がりのヘラケズリ調整を施し、体部内面下部はヨコナデ調整の後、上から下への縦方向のヘラケズリ調整を施している。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−9、10	残存 70% 体部外面下部の一部にススが付着
204	古式土師器	甕	B 4.6 C 2.4	0.5mm以下の石英・長石・チャート・雲母の細粒を含む	a 灰白色 2.5Y7/1 b 灰白色 2.5Y7/1 c 灰白色 2.5Y7/1	体部下半部以下のみ残存し、外反気味に立ち上がっており、底部は突き出し、平底を有する。	底部外面をユビオサエ整形を施している。底部突き出し部よりヨコナデ調整を施している。体部外面は右上がりのタタキメ調整の後、ヨコナデ調整を施しており、内面はヨコナデ調整である。	古墳時代第1遺構面 SD01 g−9、10	残存 底部 100% 体部 10%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
205	古式土師器	鉢	B 1.9 C 3.8	1mm以下の長石・石英を含む	a 暗灰色 N3/0 b 灰褐色 7.5Y R6/2 c 灰黄色 2.5Y7/2	底部のみ残存し、底部は平底のものを有し、体部は外側に開くものと思われるが、体部の大部分は欠損している。	底部内面に板ナデ調整を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SD01 g－8、9	残存 底部 100%
206	古式土師器	高坏	B 4.8	2mm以下の石英・1mm以下のチャートを少量含む	a にぶい褐色 7.5Y R5/3 b にぶい橙色 5 Y R7/4 c 灰褐色 7.5Y R6/2	坏部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は欠損している。脚部はやや外反気味に下がり、脚部の2/3以上は欠損している。	坏部・脚部ともに外面はヨコナデ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。坏部内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、脚部内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SD01 g－9、10	残存 10%
207	古式土師器	高坏	B 6.2	1mm以下の長石を少量含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/3 b にぶい黄橙色 10Y R7/3 c 灰白色 10Y R7/1	脚柱部のみ残存している。	脚柱部外面はヨコナデ調整の後、縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚部へ続くと思われる部分の内面には板ナデ調整を施し、坏部へ続くと思われる部分の内面はヨコナデ調整を施している。脚柱部内面にはしぼり痕が認められる。	古墳時代 第1遺構面 SD01 g－9、10	残存 45%
208	古式土師器	高坏	A13.4 B 6.8	1mm程度の小石を少量含む	a にぶい褐色 7.5Y R5/3 b にぶい褐色 7.5Y R6/3 c にぶい褐色 7.5Y R5/3	脚柱部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。脚柱部はやや開き気味に下がる。脚柱部の2/3程度・脚部は欠損している。	坏部外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整、次に縦方向のヘラミガキ調整を施している。坏部内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整、次に、数多くの縦方向のヘラミガキ調整を施している。脚柱部外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SD01 g－7、8	残存 70%
209	古式土師器	高坏	B 3.8 E15.1	1mm以下の長石を少量含む	a にぶい赤橙色 5 Y R5/4 b にぶい橙色 5 Y R7/3 c 淡橙色 5 Y R8/3	脚部のみ残存し、脚柱部より脚部は下へ大きく開き、脚端部に至る。脚端部は丸味を帯びている。また透し円孔は三つあるものと思われるが、一つしか残存していない。	脚部外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、上部は縦方向のヘラミガキ調整、下部は横方向のヘラミガキ調整を施している。脚端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第1遺構面 SD01 g－7、8	残存 20%
 210	古式土師器	甕	A13.8 B 4.0 D11.0	1mm程度の長石・石英を含む	a 黄灰色 2.5Y6/1 b 黒色 N2/0 c にぶい黄橙色 10Y R7/2	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第2遺構面 SD01 b－9	残存 口縁部 10% 外面にススが付着

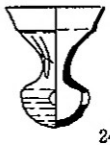
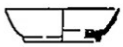
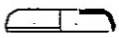
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 211	古式土師器	甕	A14.3 B 5.3 D10.6	1mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 5YR7/3 b にぶい橙色 5YR7/3 c にぶい橙色 5YR7/3	頸部より口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部に至る。口縁端部は外面に凸部を有し、全体に丸味を帯びている。頸部より内弯気味に下がり、体部の大部分は欠損している。	体部外面はスス付着のため調整は不明で、内面は横方向のヘラケズリ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第2遺構面 SD01 b－9	残存 15%
212	古式土師器	高坏	A16.0 B 5.4	3mm以下のクサリ礫・2mm以下の長石・石英・金雲母を含む	a にぶい橙色 5YR6/4 b にぶい橙色 5YR6/4 c にぶい橙色 5YR7/3	坏部のみ残存し、口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部付近で少し外側に傾く。口縁端部は丸味を帯びている。	坏部外面上半部は1cmあたり4本程度のハケメ調整の後、ヨコナデ調整を施し、下半部は同一ハケにより縦方向のハケメ調整を施している。坏部内面上半部は同一ハケにより縦方向のハケメ調整の後、ヨコナデ調整を施し、下半部はヨコナデ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第2遺構面 SD01 b－9	残存 坏部 90%
213	古式土師器	高坏	B 5.4	1mm以下の長石を含む	a にぶい橙色 5YR6/4 b にぶい橙色 5YR6/4 c にぶい橙色 5YR6/4	脚柱部のみ残存し、脚柱部はやや外側に開く。	脚柱部外面上半部には横方向の沈線を施している。内面にはしぼり痕が見られる。	古墳時代 第2遺構面 SD01 b－9	残存 10%
214	古式土師器	高坏	B 5.5	1mm以下の長石を含む	a にぶい橙色 7.5YR7/3 b にぶい橙色 5YR7/3 c にぶい橙色 7.5YR7/3	脚柱部のみ残存し、外側に開き気味に続くものと思われるが欠損している。	脚柱部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はしぼりの後、ハケメ調整を施している。	古墳時代 第2遺構面 SD01 a－10	残存 脚部 70%
215	古式土師器	高坏	B 8.4	1mm以下の雲母を含む	a にぶい褐色 7.5YR5/3 b にぶい褐色 7.5YR5/3 c にぶい褐色 7.5YR5/3	脚柱部のみ残存し、脚部は外側に開くものと思われるが欠損している。	脚柱部内外面ともに剝離のため調整は不明である。	古墳時代 第2遺構面 SD01 a－10	残存 脚部 60%
 216	須恵器	甕	A12.4 B14.1	1mm以下の長石・石英を含む	a 青灰色 5B6/1 b 青灰色 5B5/1 c 青灰色 5B5/1	頸部より口縁部はラッパ状に開き、凸部を有して、口縁端部に至る。口縁端部は段を有して、丸味を帯びている。頸部より体部はやや球形をなして、体部最大径を経て底部に至る。底部はやや平坦である。	底部は回転ヘラケズリ調整を施している。頸部外面に波状紋を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第3遺構面 大畦畔01 a－9	残存 95%

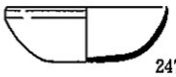
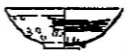
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
217	須恵器	坏身	A14.2 B 6.1	3mm以下のチャートを少量含む	a 灰白色 5Y7/1 b 灰白色 10Y7/1 c 灰白色 5Y8/1	底部より内弯気味に立ち上がり、受け部に至る。受け部は水平にのび、受け端部はやや尖り気味である。口縁部は内側に傾き、口縁端部に至る。口縁端部は段を有して丸味を帯びている。底部は丸味を帯びている。	底部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第3遺構面 大畦畔01 a－9	残存 65%
218	須恵器	坏蓋	A12.1 B 5.3	2mm以下の白色粒を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より内弯気味に下がり、稜を有して、口縁端部に至る。口縁端部は溝を有して、丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第3遺構面 大畦畔01 a－9	残存 80%
219	古式土師器	壺	A 8.5 B 9.8 D 5.9 F 8.5	3mm以下の長石・1mm以下の石英・黒色粒を含む	a 灰白色 5Y7/2 b 灰白色 5Y7/2 c 灰白色 5Y7/2	頸部より口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。頸部より体部は球形をなして、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。	底部外面はヘラケズリ調整を施し、他はヨコナデ調整を施している。	古墳時代 第3遺構面 大畦畔01 a－8	残存 70%
220	須恵器	坏蓋	A15.7 B 4.9	2mm以下の長石・石英を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より内弯気味に下がり段を有して口縁部に至り、まっすぐ下がり口縁端部に至る。口縁端部は段を有し、やや尖り気味である。天井部はやや平坦である。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整である。	古墳時代 第3遺構面 大畦畔03 h－8、9	残存 75%
221	須恵器	坏蓋	A13.9 B 4.1	3mm以下の石英・1mm以下の長石を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	天井部より口縁部は内弯気味に下がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部は平坦である。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第4遺構面 上層堆積砂 c－7、8	残存 98%
 222	須恵器	坏蓋	A15.1 B 4.1	2mm以下のチャート・1mm以下の長石・石英を含む	a 灰色 N6/0 b 灰白色 N7/0 c 灰色 N6/0	天井部より口縁部は内弯気味に下がり、凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第4遺構面 上層堆積砂 c－7、8	残存 75%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
223	須恵器	坏蓋	A13.7 B 4.2	2mm以下の長石・チャート・石英を少量含む	a 灰色' N5/0 b 灰色 N5/0 c 灰色 N6/0	天井部より内弯気味に下がり、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。天井部は丸味を帯びている。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整である。	古墳時代第4遺構面 上層堆積砂 d－7、8	残存80%
224	須恵器	坏蓋	A13.8 B 3.9	2mm以下の長石・石英を含む	a 青灰色 10BG5/1 b 青灰色 10BG5/1 c 青灰色 10BG5/1	天井部より内弯気味に下がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部の1/2程度は欠損している。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代第4遺構面 上層堆積砂 d－7、8	残存30%
225	須恵器	坏身	A11.8 B 3.9 H14.5	1mm以下の長石を含む	a 灰色 N6/0 b 灰白色 N7/0 c 灰色 N6/0	受け部はやや上方に延び、端部は丸味を帯びている。受け部から段を有して口縁部に至り、上方へ立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部はやや平らである。	底部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代遺構面 上層堆積砂 c－7、8	残存30%
226	須恵器	坏身	A12.8 B 4.8 H14.8	3mm以下の長石を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 明褐灰色 7.5YR7/1	底部より内弯気味に立ち上がり、受け部に至る。受け部は水平に延び、受け端部は丸味を帯びている。口縁部はやや内側に傾き、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。	底部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代第4遺構面 上層堆積砂 d－9	残存25%
227	須恵器	瓶	B12.4 D 3.6 F 9.5	3mm以下の石英を含む	a 灰白色 N7/0 b 暗青灰色 5BG4/1 c 明青灰色 5BG7/1	頸部より口縁部はラッパ状に開くが、口縁部は欠損している。頸部より体部は球形をなして、体部最大径を経て底部に至る。底部は丸底のものを有する。体部に一つ円孔を施している。	体部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代第4遺構面 上層堆積砂 d－7	残存80%
228	須恵器	瓶	B11.1 D 4.2 F10.0	3mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 青灰色 5BG5/1 b 青灰色 5BG5/1 c 青灰色 5BG5/1	頸部より外反気味に立ち上がる口縁部は2/3程度欠損している。頸部より体部最大径を経て球形をなして底部に至る。体部に1つ円孔を施している。	体部外面の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。体部内面・口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施している。	古墳時代第4遺構面 上層堆積砂 c－7、8	残存70%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
229	須恵器	壺	B 8.8 F15.4	3mm以下の石英・長石を含む	a 明青灰色 5 B7/1 b 明青灰色 5 B7/1 c 明青灰色 5 B7/1	底部のみ残存し、底部は平底のものを有し、体部は球形をなしているが、体部の1/3以上は欠損している。	底部にヘラケズリ調整を施し、また、体部上半部に列点紋を施している。他は回転ナデ調整である。	古墳時代 第4遺構面 上層堆積砂 d－7	残存 35%
 230	須恵器	坏蓋	A12.7 B 3.6	2mm以下の石英を少量含む	a 暗灰色 N3/0 b 灰色 N4/0 c 暗灰白 N3/0	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部はやや盛んでおり、丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施している。また、天井部外面にはヘラ記号を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 e－7、8	残存 60%
 231	須恵器	坏蓋	A12.9 B 3.8	1mm以下の長石・石英を少量を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰色 N6/0 c 灰色 N6/0	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部はやや薄くなり丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 d－7、8	残存 25%
 232	須恵器	坏蓋	A13.6 B 2.9	2mm以下の長石・1mm以下の石英を含む	a 灰色 N6/0 b 灰色 N6/0 c 灰白色 N7/0	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。天井部の1/2は欠損している。	天井部の2/3以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 e－7、8	残存 30%
 233	須恵器	坏蓋	A12.3 B 3.3	5mm以下の長石を含む	a 灰白色 7.5Y7/1 b 灰白色 7.5Y7/1 c 灰白色 7.5Y7/1	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施している。また、天井部外面にヘラ記号を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 d－7、8	残存 45%
 234	須恵器	坏蓋	A12.2 B 4.4	1mm以下の長石を含む	a 暗緑灰色 7.5G Y4/1 b 青灰色 5 B6/1 c 暗緑灰色 7.5G Y4/1	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施している。天井部の中心付近はヘラ切り調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 e－7、8	残存 90%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
235	須恵器	坏蓋	A11.5 B 3.8	2mm以下の長石を含む	a 青灰色 5BG6/1 b 青灰色 5BG6/1 c 青灰色 5BG6/1	天井部より内弯気味に下がり、口縁部はまっすぐ下がり、わずかな凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部はやや平らである。	天井部の1/2は回転ヘラ切り不調整で、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD01 e－8	完形品
236	須恵器	坏蓋	A14.2 B 3.7	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	天井部より内弯気味に下がり口縁端部に至る。口縁端部はやや外側に開き、丸味を帯びている。天井部は1/2以上を欠損している。	天井部は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整である。	古墳時代 第5遺構面 SD02 c－8、9	残存 5%
237	須恵器	坏蓋	A12.2 B 3.6	3mm以下の長石・1mm以下の細礫を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	天井部より内弯気味に下がり、口縁端部に至る。口縁端部はやや外側に開き、丸味を帯びている。天井部は丸味を帯びている。	天井部の2/3以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整である。	古墳時代 第5遺構面 SD02 c－8、9	残存 10%
238	須恵器	坏蓋	A13.2 B 3.9	2mm以下の石英・長石を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	天井部より内弯気味に下がり、凹部を有してやや外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部はやや丸味を帯びている。	天井部の2/3は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD02 c－8、9	完形品
239	須恵器	坏身	A13.5 B 3.0 H15.5	2mm以下の細礫・1mm以下の長石を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	底部より内弯気味に立ち上がり受け部に至る。受け部は凹部を有してやや上方に延び、受け端部は丸味を帯びている。受け部より外反気味に立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部の2/3以上は欠損している。	底部は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD02 c－8、9	残存 10%
240	須恵器	坏身	A11.6 B 3.5 H14.1	2mm以下の長石・1mm以下の細礫を含む	a 灰色 N5/0 b 灰色 N4/0 c 灰色 N4/0	底部より内弯気味に立ち上がり受け部に至る。受け部は段を有して、端部はやや尖り気味である。口縁部は内側に傾き屈折して上方に延び口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は丸味を帯びている。	底部の2/3以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代 第5遺構面 SD02 c－8、9	残存 30%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
241	須恵器	甕	A16.0 B16.1 D13.4 F20.4	0.1mm～0.2mm程度の長石を少量含む	a 暗青灰色 5BG4/1 b 青灰色 10BG6/1 c 淡黄色 5Y8/3	頸部より「く」の字状に開き、口縁端部は外反して丸味を帯びている。頸部より体部最大径を経て球形をなす。底部は欠損している。	体部外面は横方向のカキメ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代第5遺構面 SD02 c－8、9	残存35%
242	須恵器	瓶	B13.5 D 3.8 F 8.7	2mm以下の長石・石英を含む	a 灰色 N6/0 b 灰色 N6/0 c 灰色 N6/0	頸部はラッパ状に開き、段を有して口縁部に至る。口縁端部は欠損している。体部は外側に下がり、体部最大径より球形をなし底部に至る。体部に1つ円孔を施している。	体部外面の2/3以上は回転ヘラケズリ調整を施している。他は回転ナデ調整を施している。	古墳時代第5遺構面 SD02 c－8、9	残存60%
 243	須恵器	瓶	A13.2 B16.2 D 4.0 E 9.1	3mm以下の長石・石英下を含む	a 青灰色 5BG6/1 b 青灰色 5BG6/1 c 青灰色 5BG6/1	頸部より口縁部はラッパ状に開き、一度屈折し、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。頸部より、体部は球形をなし、体部最大径を経て、底部に至る。底部は丸底のものを有する。体部に1つ円孔を施す。	体部の1/2は回転ヘラケズリ調整を施し、他は回転ナデ調整を施している。頸部外面にヘラ記号を施している。	古墳時代第5遺構面 SD02 C－8、9	残存85%
 244	須恵器	坏身	A15.2 B 4.4 G10.2	0.1mm程度の長石を含む	a 明青灰色 5B7/1 b 明青灰色 5B7/1 c 青灰～暗紫灰色 5B6/1～5P3/1	底部より外側に開き、わずかな凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形の高台を有する。	口縁部・底部ともに、回転ナデ調整を施している。	奈良・平安時代第2遺構面 SD01 e－7、8	残存40%
 245	須恵器	蓋	A14.2 B 3.0	1mm以下の長石を含む	a 灰色 7.5Y6/1 b 灰色 N5/0 c 灰白色 10Y8/1	天井部より内弯気味に下がり口縁部に至り、段を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。天井部は平坦である。	内外面ともに回転ナデ調整を施している。	奈良・平安時代第1遺構面 第V層 e－7	残存20%
246	土師器	高坏	B 5.9	0.5mm以下の長石・石英を含む	a にぶい橙色 5YR6/4 b 橙色 5YR6/6 c にぶい橙色 5YR6/4	脚柱部はやや外側に開き、脚部に続くものと思われるが欠損している。	脚柱部外面には縦方向のヘラケズリを施している。他はヨコナデ調整を施している。	奈良・平安時代第2遺構面 第IV層 f－7、8	残存40%

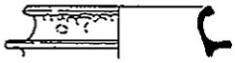
土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 247	土師器	椀	A21.4 B 7.4	0.1mm以下の長石・石英を含む	a 明褐灰色 7.5Y R7/1 b 赤褐色 2.5Y R4/6 c 赤褐色 2.5Y R4/6	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部は内側に傾き丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	体部内外面ともにヨコナデ調整を施している。底部外面はヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施し、内面は不整方向のナデを施している。口縁部は強いヨコナデ調整を施している。	奈良・平安時代第2遺構面第Ⅳ層 c－7	残存80%
248	土師器	皿	A19.0 B 4.6	1mm以下の石英を含む	a 浅黄橙色 7.5Y R8/4 b 橙色 7.5Y R7/6 c 灰白色 7.5Y R8/2	底部より内弯気味に立ち上がり外反して、口縁端部に至る。口縁端部は内面に段を有して丸味を帯びている。底部は平底のものを有している。	体部内面は左上がりのヘラミガキ調整を施している。他はヨコナデ調整を施している。	奈良・平安時代第1遺構面第Ⅴ層 c－7	残存35%
 249	瓦器	椀	A16.0 B 5.3 G 5.7	1mm以下の長石・チャートを含む	a 黒色 N2/0 b 黒色 N2/0 c 灰色 N6/0	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁部へ続き、外側に開いて口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面逆三角形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、ヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、ヘラミガキ調整を施している。口縁端部・高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 P01 c－9	残存90%
250	瓦器	椀	A15.0 B 5.5 G 6.2	1mm以下の長石を少量含む	a 黒色 N2/0 b 黒色 N2/0 c 灰白色 N8/0	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は内面に段を有し、肥厚して丸味を帯びている。底部は断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。底部内面には不整方向のヘラミガキ調整を施し、ヘラ記号が見られる。高台部はヨコナデ調整を施し、口縁端部は強いヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	完形品
251	瓦器	椀	A14.6 B 5.6 G 5.4	0.5mm以下の長石を含む	a 灰色 N6/0 b 灰色 N6/0 c 灰白色 2.5Y8/1	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁部に凹部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部はわずかに歪み、断面逆三角形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。内面上半部は横方向と左上がりのヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部・高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	残存95%
252	瓦器	椀	A15.8 B 5.8 G 6.4	1mm以下の長石をわずかに含む	a 灰色 N5/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N8/0	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は不整方向のヘラミガキ調整を施している。高台部はヨコナデ調整と施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	残存99%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
253	瓦器	椀	A15.2 B 5.6 G 5.2	1mm以下の石英を少量含む	a 灰色 N5/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	体部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツケ高台を有し、やや歪んでいる。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。内面上半部はヨコナデ調整の後、横方向のレコード円状のヘラミガキ調整を施し、下半部はヨコナデ調整の後、格子目状のヘラミガキ調整を施している。口縁端部は強いヨコナデ調整を施している。高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	完形品
254	瓦器	椀	A15.4 B 5.9 G 5.7	1mm以下の長石・石英を含む	a 灰色 N4/0 b 灰色 N4/0 c 灰白色 10Y8/1	底部より体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツケ高台を有する。	体部内面は指オサエ整形の後、ヘラミガキ調整を施し、内面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は格子状のヘラミガキ調整を施している。口縁端部・高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	残存95%
255	瓦器	椀	A15.6 B 5.3 G 4.8	1mm以下の黒雲母を少量含む	a 灰色 N4/0 b 灰色 N4/0 c 灰白色 2.5Y8/1	体部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面逆三角形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。高台はヨコナデ調整を施し、底部は不調整である。底部内面は格子目状のヘラミガキ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存40%
256	瓦器	椀	A14.6 B 5.2 G 5.6	0.5mm以下の長石を少量含む	a 灰色 10Y4/1 b 灰色 10Y4/1 c 灰白色 7.5Y8/1	体部より内弯気味に立ち上がり、わずかな凸部を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面上半部は横方向のヘラミガキ調整を施し、下半部は縦方向のヘラミガキ半調整を施している。底部はヨコナデ調整を施している。口縁部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存40%
257	瓦器	椀	A15.8 B 5.1 G 5.0	1mm以下の長石・石英を少量含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5GY8/1	底部より体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部・高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存40%
258	瓦器	椀	A13.9 B 5.9 G 5.1	1mm以下の長石を少量を含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 N8/0	底部より内弯気味に立ち上がり、わずかな凸部を有し、口縁部へ続き、わずかに外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。内面はヨコナデ調整の後、不整方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部内面はレコード円状のヘラミガキ調整を施している。口縁端部・高台部は、ヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存40%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
259	瓦器	坏	A16.9 B 4.6	1mm以下の長石・石英を含む	a 暗灰色 N3/0 b 灰色 N6/0 c 灰色 2.5GY8/1	体部より口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は欠損している。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存20%
260	瓦器	坏	B 3.1 G 5.8	1mm以下の長石・石英を少量含む	a 暗灰色 N3/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5GY8/1	底部より体部は内弯気味に立ち上がるが、口縁部等は欠損している。底部には断面方形のハリツケ高台を有する。	体部外面は指オサエ整形の後、横方向のヘラミガキ調整を施し、内面はヨコナデ調整の後、横方向のヘラミガキ調整を施している。高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (井戸枠内) f－7	残存30%
261	瓦器	小坏	A 6.6 B 2.9	0.5mm以下の長石・石英を少量含む	a 灰色 N4/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 10Y7/1	体部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。口縁端部はやや尖り気味である。底部にはハリツケ高台を有するが、端部は欠損している。	体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施し、内面は上半部に横方向、下半部は縦方向のヘラミガキ調整を施している。高台部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存20%
262	瓦器	小皿	A10.2 B 2.7	1mm以下の石英を少量含む	a 灰色 N4/0 b 暗灰色 N3/0 c 暗灰色 N3/0	底部より内弯気味に立ち上がり、段を有して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は丸底のものを有する。	体部外面は指オサエ整形の後、部分的にヨコナデ調整を施している。内面は、底部付近は縦方向のヘラミガキ調整を施し、口縁部付近は横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部外面はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存60%
263	瓦器	小皿	A10.2 B 2.6	1mm以下の長石を含む	a 暗灰色 N3/0 b 黒色 N2/0	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。口縁部は少し歪んでいる。底部は平底のものを有する。	体部外面は横方向のヘラミガキ調整を施している。内面は縦方向のヘラミガキ調整を施している。口縁部外面は強いヨコナデ調整を施し、内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。口縁端部はヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	完形品
264	土師器	小皿	A 9.4 B 1.7	1mm以下の長石・金雲母を少量含む	a 灰白色 2.5Y8/1 b 灰白色 2.5Y8/1 c 灰白色 2.5Y8/1	口縁部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は平底のものを有する。	底部・体部外面は指オサエ整形を施し、内面は不整方向のナデ調整を施している。口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (井戸枠内) f－7	残存98%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
265	土師器	小皿	A 9.2 B 1.7	1mm以下の白雲母・2mm以下の長石・石英・チャートを含む	a 浅黄橙色 7.5Y R8/3 b 浅黄橙色 7.5Y R8/3 c 灰白色 7.5Y R8/2	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部は少し外側に開く。口縁端部は少し尖り気味である。口縁端部はわずかに歪んでいる。底部はやや丸味を帯びている。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。体部外面は指オサエ整形を施し、内面は不整方向のナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存85%
266	土師器	小皿	A10.0 B 1.7	2mm以下の長石を含む	a にぶい黄橙色 10Y R7/3 b にぶい黄橙色 10Y R7/4 c にぶい黄橙色 10Y R7/3	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部はやや尖り気味である。底部は平底のものを有する。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。底部外面は指オサエ整形を施し、内面は不整方向のナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	完形品
267	土師器	小皿	A10.2 B 2.0	1mm以下の長石・雲母・石英を含む	a にぶい橙色 7.5Y R6/4 b 灰白色 2.5G Y8/1	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部で少し外側に開き気味である。口縁端部は丸味を帯びている。口縁部は少し歪んでいる。底部はやや丸味を帯びている。	口縁部内外面ともに強いヨコナデ調整を施している。底部外面は未調整か所々に軽いナデ調整を施している。内面は不整方向のナデ調整である。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	完形品
268	土師器	小皿	A10.2 B 1.4	1mm以下の石英を少量含む	a 浅黄橙色 10Y R8/3 b 灰白色 10Y R8/2 c 浅黄橙色 10Y R8/3	底部よりやや外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。底部は平底のものを有する。	内外面ともにヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存50%
269	土師器	皿	A14.6 B 3.5	1mm以下の金雲母・クサリ礫・長石・石英を含む	a にぶい橙色 7.5Y R7/4 b にぶい橙色 7.5Y R7/4 C にぶい橙色 7.5Y R7/4	体部より内弯気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は平底のものを有している。	底部外面は指オサエ整形を施している。他は磨滅のため調整は不明である。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7、8	完形品
270	土師器	皿	A16.0 B 3.4	1mm以下の長石・クサリ礫を含む	a 灰白色 7.5Y R8/2 b 灰白色 7.5Y R8/2 c 灰白色 7.5Y R8/2	底部より内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部は平底で、少し凸部を有している。	内外面ともにヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存25%

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
271	土師器	羽釜	A30.4 B 5.3	2mm以下の長石・石英チャート・雲母の微粒を含む	a 橙色 5YR6/6 b 橙色 5YR6/6 c 橙色 5YR6/6	口縁部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。球形の体部を持つものと思われる。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存20%
272	土師器	羽釜	A18.4 B 3.3 D16.4	2mm以下の長石・石英を含む	a 橙色 7.5YR6/6 b にぶい橙色 7.5YR6/4 c にぶい橙色 7.5YR6/4	頸部より「く」の字状に口縁部は開き、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のものを有する。体部は外側に開き、球形をなすものと思われるが欠損している。	口縁部内外面ともにヨコナデ調整を施している。体部内外面とも磨滅のため調整は不明である。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存口縁部20%
273	須恵質土器	擂鉢	A28.4 B11.0	2mm以下の長石・石英0.5mm以下・の雲母を含む	a 灰白色 N7/0 b 暗灰色 N3/0 c 灰白色 2.5GY8/1	底部より体部は外側に開き、口縁端部に至る。口縁端部は内面に凹部を有して、丸味を帯びている。口縁部に片口を有し、底部は平底のものを有する。	体部外面は回転ナデ調整を施し、内面上半部は回転ナデ調整を施し、下半部擂鉢としての使用痕が見られる。口縁端部は強い回転ナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形内) f－7	完成品
274	須恵器	甕	A16.8 B 3.6	1mm以下の長石・石英を含む	a 明灰色 N8/0 b 明灰色 N8/0 c 明灰色 N8/0	口縁部のみ残存し、口縁部は外反して、口縁端部に至る。口縁端部は凹部を有して、断面方形のものを有する。	口縁部外面はタタキメ調整の後、ナデ調整を施し、内面はナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存10%
275	須恵器	坏身	A10.8 B 3.8 C 8.3	1mm以下の長石・細礫石英を含む	a 明青灰色 10BG7/1 b 明青灰色 10BG7/1 c 明青灰色 10BG7/1	底部より口縁部はわずかに内弯気味に立ち上がり、少し外反して口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のハリツケ高台を有する。	内外面ともに回転ナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存20%
276	須恵器	壺	A 2.8 B 6.1	1mm以下の長石を含む	a 灰白色 N7/0 b 灰白色 N7/0 c 灰白色 N7/0	口縁部は凸部を有して、外反気味に立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部は断面方形のもので、内面に段を有する。	内外面ともに回転ナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存口縁部90%外面の一部に自然釉が付着している

土器番号	器種	器形	法量(cm)	胎土	色調	形態の特徴	手法の特徴	出土地点	備考
 277	土師器	羽釜	A 24.6 B 6.7	0.5mm以下の金雲母・長石・石英を含む	a 灰黄色 2.5Y6/2 b 灰黄色 2.5Y6/2 c 灰黄色 2.5Y6/2	鍔部は水平にのび、鍔端部は断面方形のものを有し、口縁部に続く。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は外側に傾く。口縁端部は厚みを持ち、断面方形のものを有する。	鍔部は回転ナデ調整を施し、口縁部外面は指オサエ整形を施している。口縁部内面上半部は回転ナデ調整を施し、下半部は指オサエ整形の後、ナデ調整を施している。	中世第2遺構面 SE02 (井戸枠内) f－7	残存 口縁部 15%
278	瓦	軒平瓦		3mm以下の長石・石英を含む	b 橙色 5YR6/6 c にぶい橙色 5YR6/4	直線顆を有して、上区は欠損している。	均整唐草文を施し、下区に珠文が認められる。子葉は大きく巻き込まれており、最後は大きく丸く仕上げている。	中世第2遺構面 SE01 (掘形埋土) f－7	残存 10%
282	磁器	椀	A10.6 B 4.6 G 4.4	1mm以下の長石を含む	a 暗赤褐色 2.5YR3/3 b にぶい黄褐色 10YR5/4 c、 青灰色 5BG6/1	底部より外側に開き、段を有し、まっすぐ立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部は丸味を帯びている。底部には断面方形のケズリ出し高台を有する。	体部内外面ともに、釉が施されている。高台部は回転ヘラケズリ調整を施している。	近世・近代第2遺構面 SE01 g－8,9	完成品

(泉谷)

第Ⅵ章　まとめ

近畿自動車道吹田～天理線建設に伴う発掘調査は、昭和51年７月長原遺跡を始めとして、以来近畿自動車道予定地内に存在する15遺跡の調査に着手し、順次終了させてきた。

さて、亀井北遺跡は、当初遺跡として周知されていなかったが、久宝寺遺跡南地区及び亀井遺跡の調査の所見により、それぞれの遺跡が南或いは北に延びることが確認され、昭和58年度に試掘調査を行なった結果、遺構、遺物が検出され、昭和59年３月から近畿自動車道大阪線15遺跡の内最後の調査として着手したものである。

今回の調査によって、これまで不明であった遺跡の概要が明らかになり、河内平野南部における縄文時代から現代に至る人間と自然との関わり、土地開発の過程の一端を捉えることができ、或る程度の歴史像の復元が可能となった。

以下、時代別に調査の成果について述べて「まとめ」としたい。　（山上）

縄文時代　縄文時代は、T.P.＋3.5m付近を遺構面として、自然流路２本と溝状遺構が検出された。この遺構面は、縄文時代後期であり、初めて亀井北遺跡に人間の足跡が標される面である。この遺構面で検出された自然流路は、上下２層に分かれ、下層の流路からは、縄文時代後期前半或いは中期後半と考えられる深鉢形土器、他の土器も後期中葉を下らない深鉢形土器が数点出土している。上層の流路からは、下層と同時期の土器及び後期後半までの土器の小片が二十数点出土している。この遺構面を含めてこれより上層では縄文時代晩期の土器は、出土しておらず、弥生時代前期まで人影は見えない。　（山上）

弥生時代　弥生時代前期の遺構（第１遺構面）は、ピット、溝状遺構、土壙などであるが溝状遺構から弥生時代第Ⅰ様式と考えられる壺形土器及び石鏃、二次加工のある剥片が出土している。

中期の遺構面は、２面存在し、第３遺構面において壺形土器及び木製品として鍬の未製品、堅杵を出土する溝状遺構が検出され、生活のにおいを感じさせる。しかしながら、当初考えていた中期に広大な居住域を持つ久宝寺遺跡及び亀井・城山遺跡の生産基盤である水田址は、全く検出されず、他の地域に求めなければならない。

後期になると第４遺構面において初めて水田が形成される。水田には、しがらみを持つ溝状遺構が伴い、そこから周辺に広がっていたと推定される水田に水を供給したものと考えられる。次の時期（第５遺構面）になると、南北に流れる自然流路が出現し、洪水から生活基盤を守るためと考えられる土堤が西岸に築かれる。このことから調査区より西側に住居域が存在していたものと考えられる。次の第６遺構面では、性格不明の溝状遺構群が南北に走る。そして弥生時代最後の遺構面である第７遺構面になると溝状遺構及び自然流路が検出され、この遺構面全面をオーバーフローで被って古墳時代へと時代は移る。　（奥）

古墳時代　古墳時代前期（第１遺構面）において、亀井北遺跡は、加美・久宝寺遺跡を含めた

長さ約900mにも及ぶ住居域の南端にあたり、そこから南側は、遺構、遺物共殆ど検出されない沼状遺構となっている。

Ｄ地区で建物は、３棟検出されたが、その中でＳＢ０３は、総柱の建物であるが、東側の梁行の並びが他とは異なり、入口が存在したことを窺うことが出来る。その後Ｄ地区は、畑になったものと考えられるウネミゾが多数検出されている。（奥）

Ｅ地区では、Ｄ地区で建物が建ち、畑で耕作が行なわれている間、方形周溝墓群が構築されている。この時期の生活域は、北側に広がり、Ｄ地区で検出されたウネミゾ状遺構は、亀井北遺跡その１調査区から久宝寺遺跡南地区にかけて遺構面を増し、比較的長時間に渡る耕作が行なわれており、同一遺構面において竪穴住居址や掘立柱建物も検出されている。これは、久宝寺遺跡の西側に広がる加美遺跡についても同様の状況を示している。

本調査区で検出された方形周溝墓群は、Ｅ地区北端で検出されたＶ字状の溝状遺構を隔てて、南側で弥生時代第７遺構面の自然流路によって形成された微高地上に構築されている。１号方形周溝墓は、方形周溝墓群中最大の規模を持ち、一辺約8.0m×9.4mを測る長方形を示し、比較的多量に土器が出土している。出土土器の内特筆されるのは、焼成後底部穿孔を施した二重口縁壺であるが、試掘調査でマウンド上から出土したもので正確な位置は不明である。１号方形周溝墓から４号方形周溝墓は、集中して構築されているが、土器による時期差は、出土量が少なく庄内期から布留期の古段階であると考えられるのみである。また、南側の５号方形周溝墓は、典型的な布留式土器が出土する段階に構築され、北側の一群とは一時期時代が遅れる。５号方形周溝墓が構築される時期は、Ｄ地区では、すでに耕作は行なわれておらず、えぶりが出土した溝状遺構１本が検出されるだけである。

古墳時代前期の方形周溝墓は、亀井北遺跡の周辺では、久宝寺遺跡南地区及び加美遺跡で検出されている。亀井北遺跡の方形周溝墓群は、その１調査区で４基、本調査区であるその２調査区で５基検出されている。周辺遺跡の広がりから考えると、久宝寺・加美遺跡に関連する方形周溝墓群であると考えられ、住居域及び生産域周辺に存在する墓地の一部が検出されたものと考えられる。（山上）

古墳時代中期（第３遺構面）から後期（第４遺構面）にかけては、２面の水田址が検出される。中期（第３遺構面）の水田は、亀井北遺跡全域に及ぶと推定されるが、大畦畔のみがその２、その３調査区で検出され、小畦畔は、検出されていない。この水田址が植物遺体を多量に含む黒褐色有機質土で被われた後、後期（第４遺構面）になって再び水田が経営される。この水田址は、Ｄ地区北側を北限として南側に向かって亀井北遺跡その２、その３調査区全域に広がり、小畦畔が多数検出されているが、本調査区では、上層に堆積する砂層によってかなり遺構面が荒れ、遺構の残存状況も不良である。７世紀初頭の第５遺構面は、調査区全面に堆積した砂層上面で検出され、大きな円弧を描く大溝が検出され、溝内から須恵器坏、瑞等が出土している。（奥・山上）

奈良・平安時代　奈良・平安時代は、亀井北遺跡全体で検出されているが、中世の耕作による

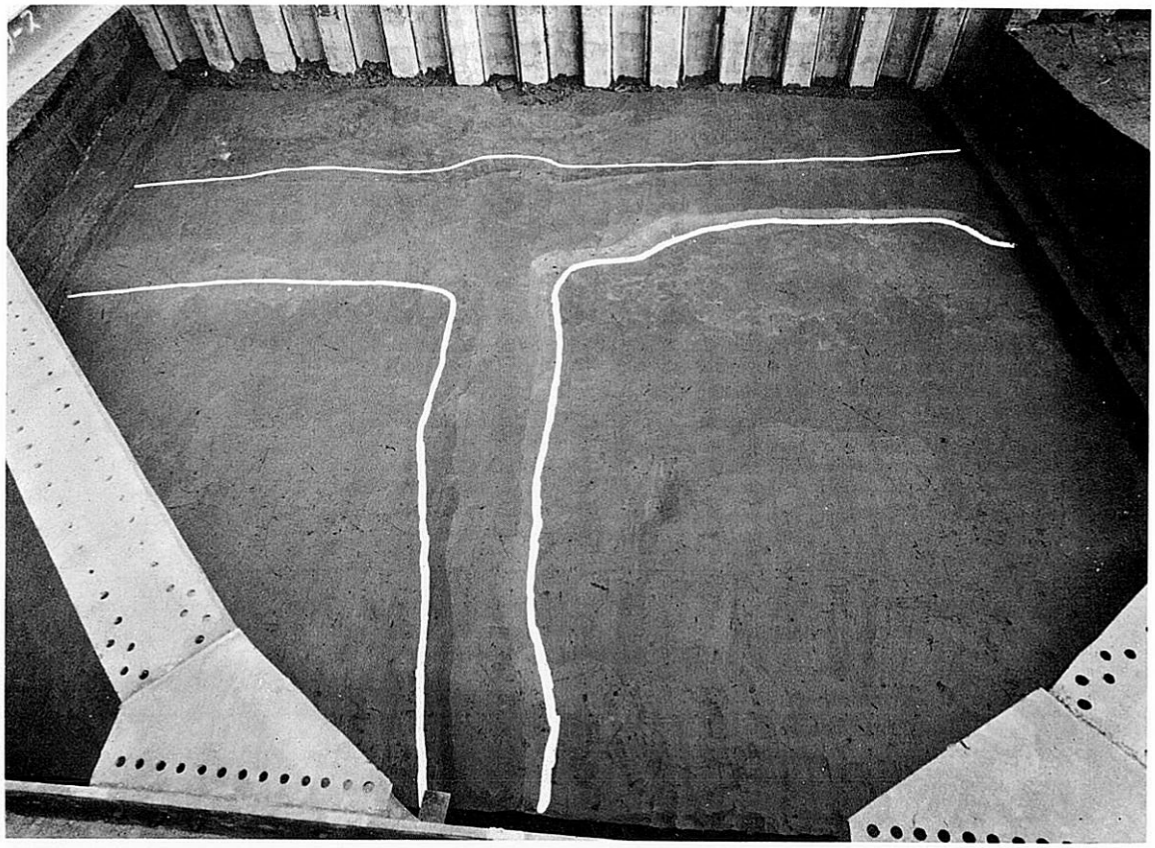
削平が激しく、遺構面は、点在して存在し、本調査区ではE地区南側で検出されたのみである。遺構面は、2面存在するが、遺物の出土量が少なく、時期差は、明瞭でない。第1遺構面は、疎らに方形の柱穴が検出され、第2遺構面は、遺構面全面に方形の柱穴が検出されるが建物等の復原は、不可能であったが、自然堤防上に存在する奈良街道にも近いことから官衙的遺構も想定することができる。この遺構面は、その3調査区へ向かって広がり、ほぼ同程度の遺構が検出されている。 (山上)

中世 第1遺構面は、D地区で全面に足跡が検出されたのみで、遺構は、検出されていない。この遺構面上に薄い砂層が堆積した後、調査区全面に遺構が検出される第2遺構面となる。第2遺構面は、E地区南端で曲物を井戸枠に使用した井戸が5基検出され、掘形内に瓦器、土師器等が廃棄されていた。井戸周辺には、円形の柱穴が疎らに検出され、簡単な掘立小屋が建てられ、耕作が行なわれていたと考えられる。井戸の時期は、中世前期であるが、耕作は、ほぼ中世を通して行なわれていたと推定される。この時期の集落は、その3調査区で一段高く整地され、現亀井集落の下に広がるものと考えられる。 (山上)

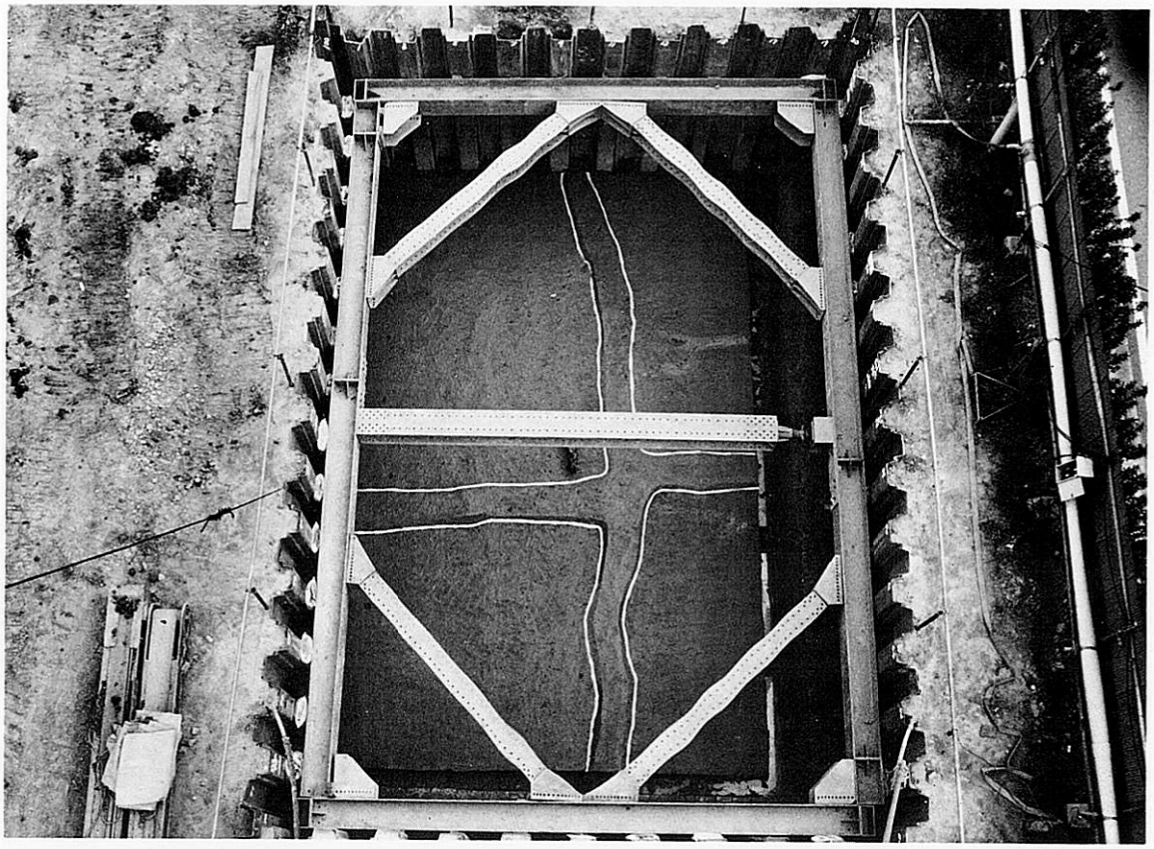
近世・近代 中世に引き続き耕作が行なわれていたと考えられる耕作痕が調査区全面に渡って検出され、用水用の井戸も1基検出された。近世から現代に至るまで一貫して農業用地としての土地利用が成されていたと考えられる。 (山上)

図　　版

図版六　弥生時代第四遺構面

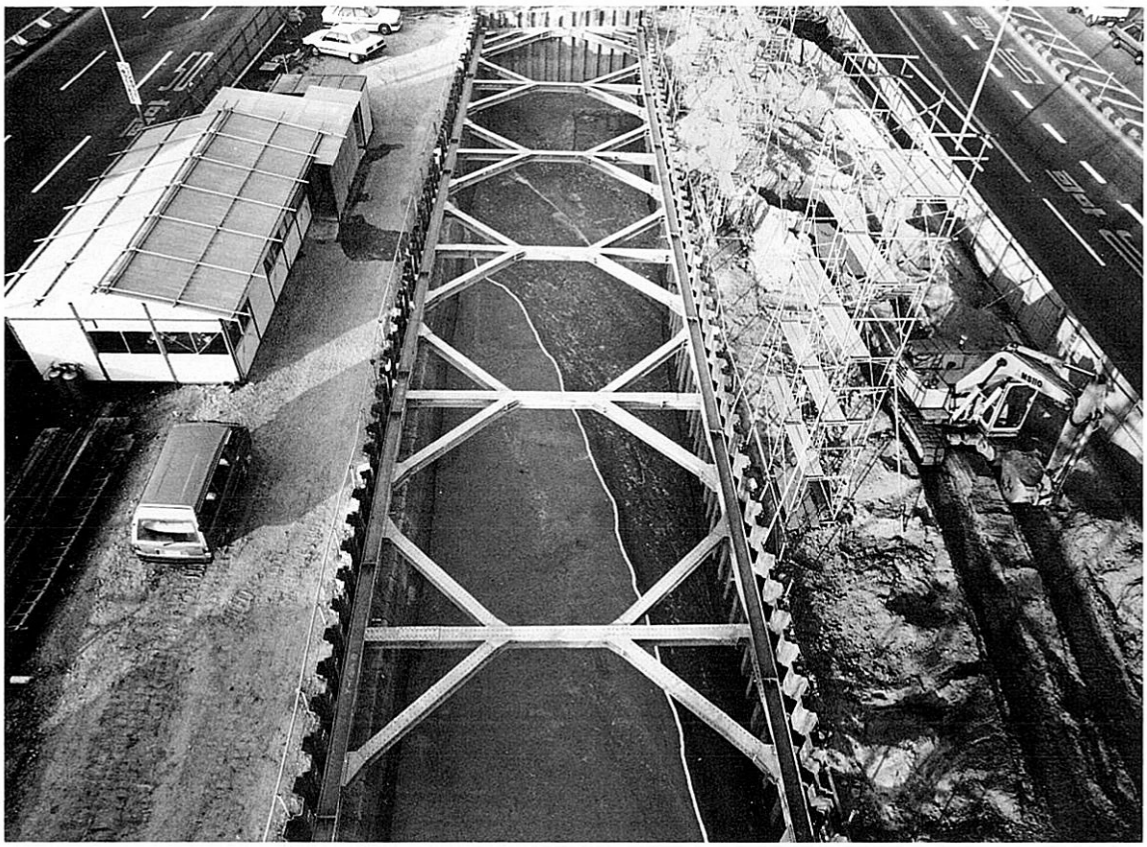


1．E、水田大畦畔、小畦畔（西から）

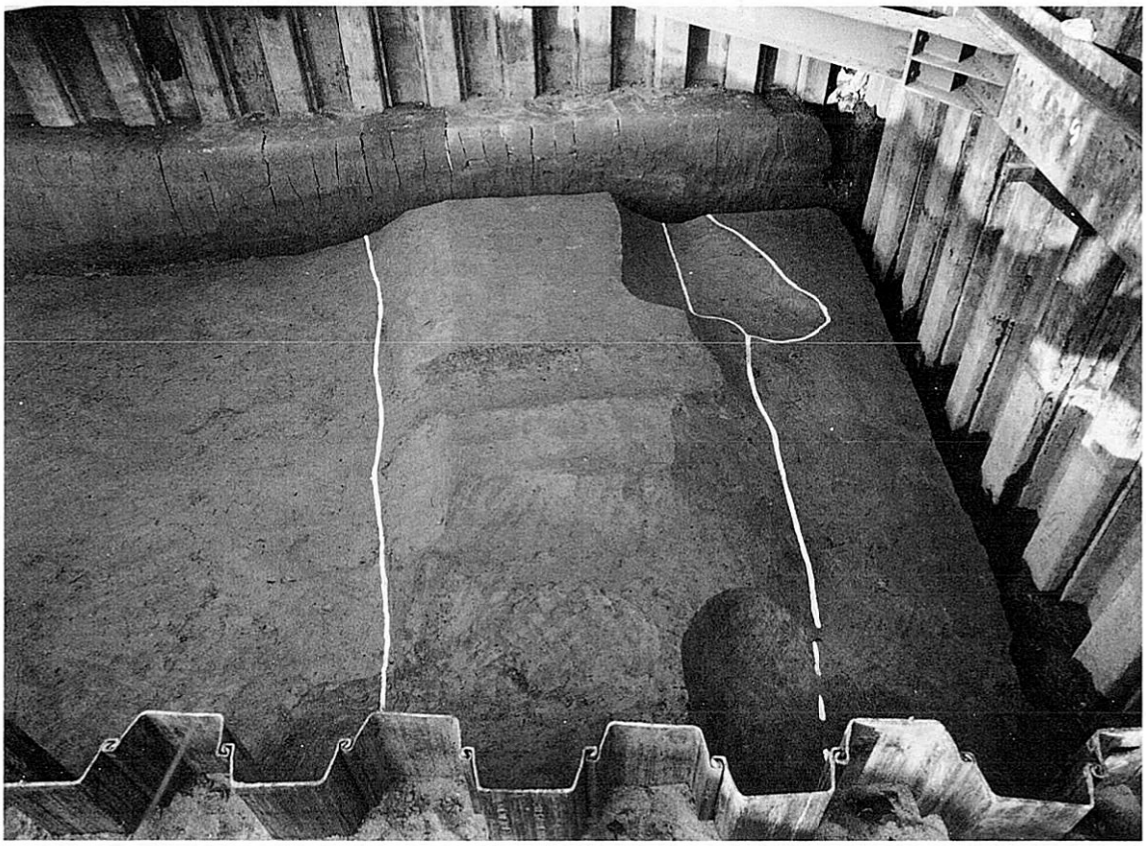


2．3E、水田小畦畔（北から）

図版七　弥生時代第五遺構面

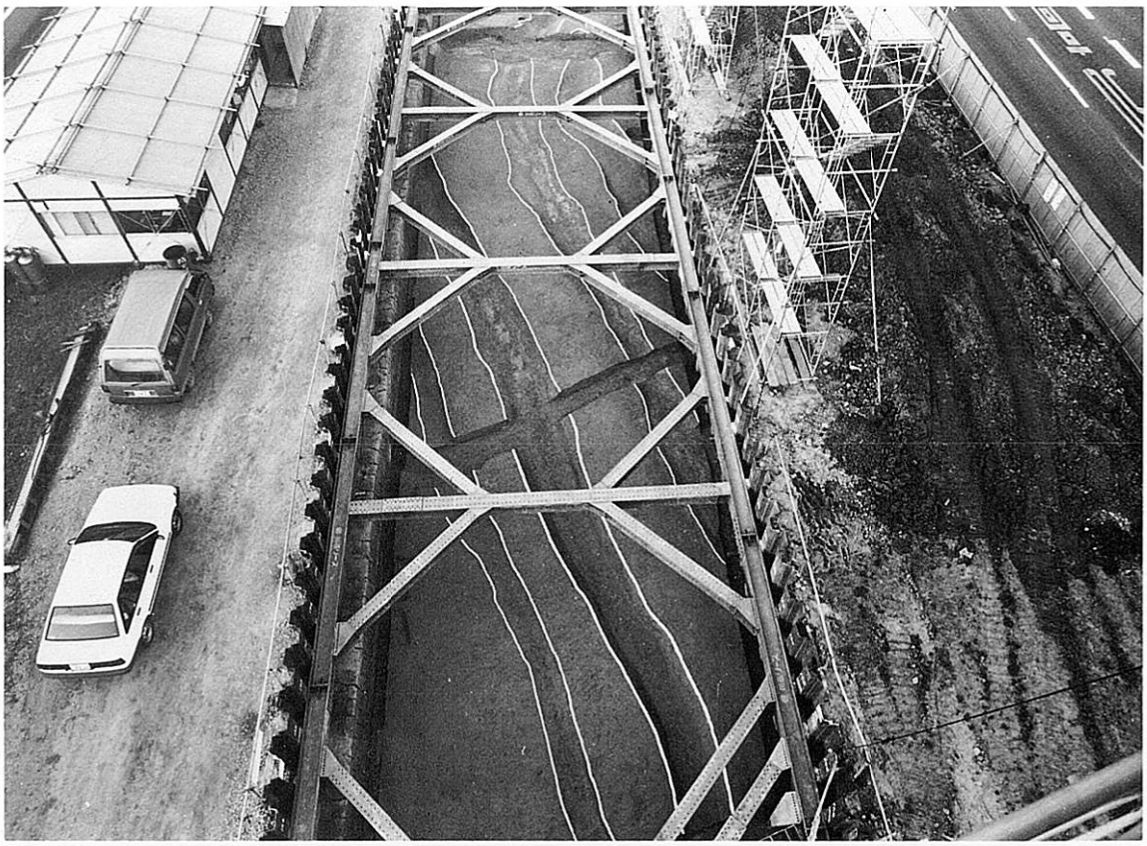


1．D、自然流路０１（南から）

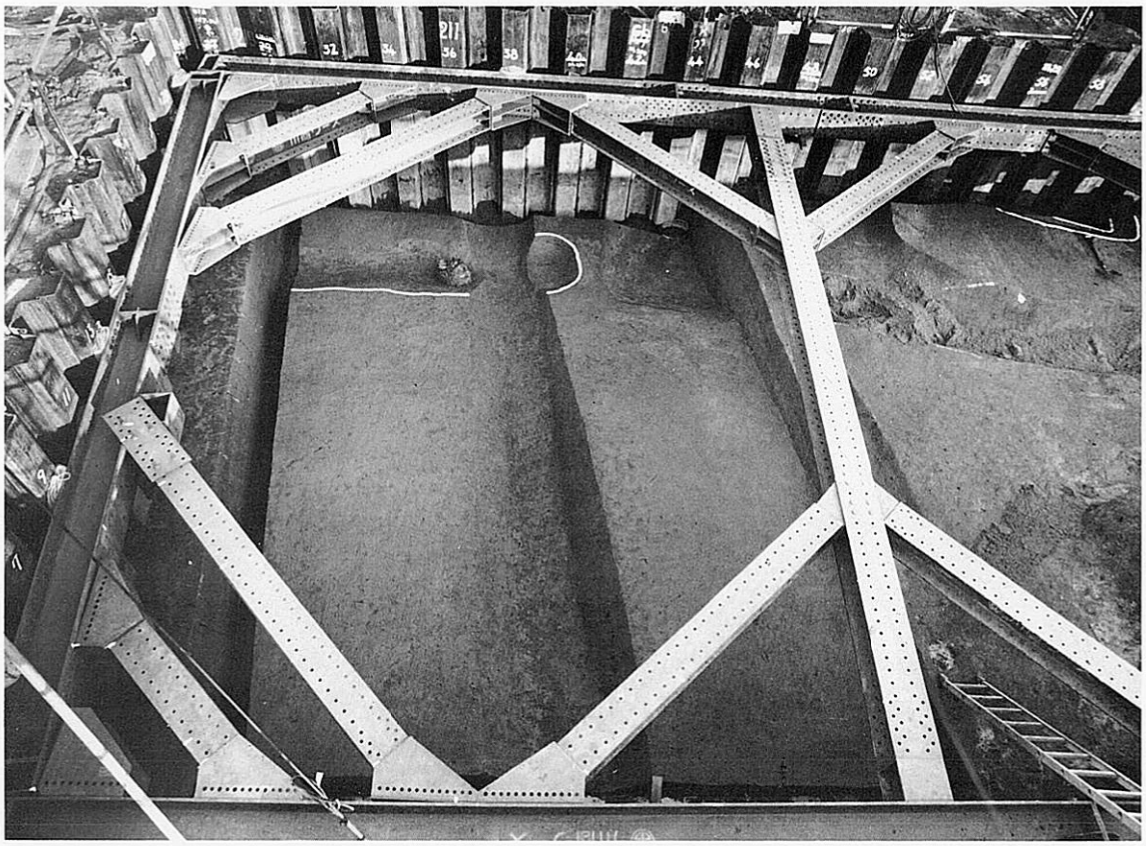


2．E、土堤０１（南から）

図版八　弥生時代第六遺構面



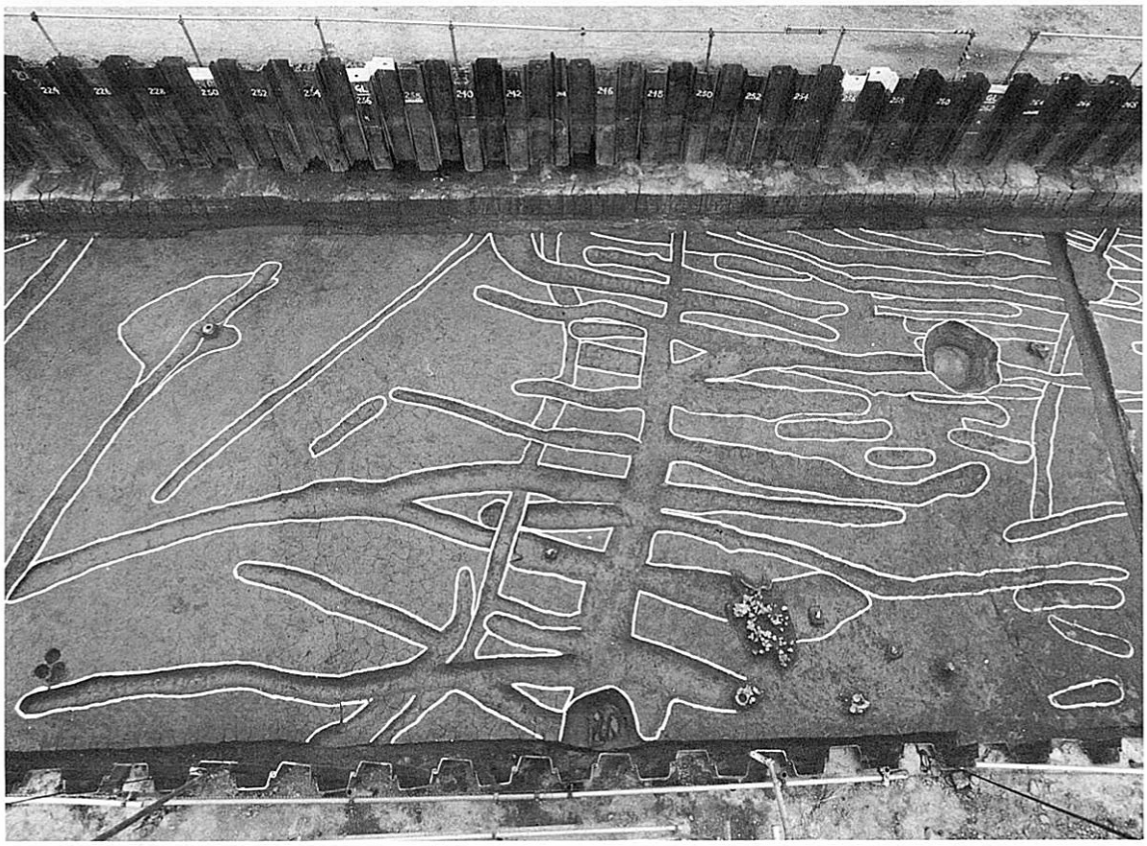
1．D、溝状遺構（南から）



2．E、SD０４遺物出土状況（西から）

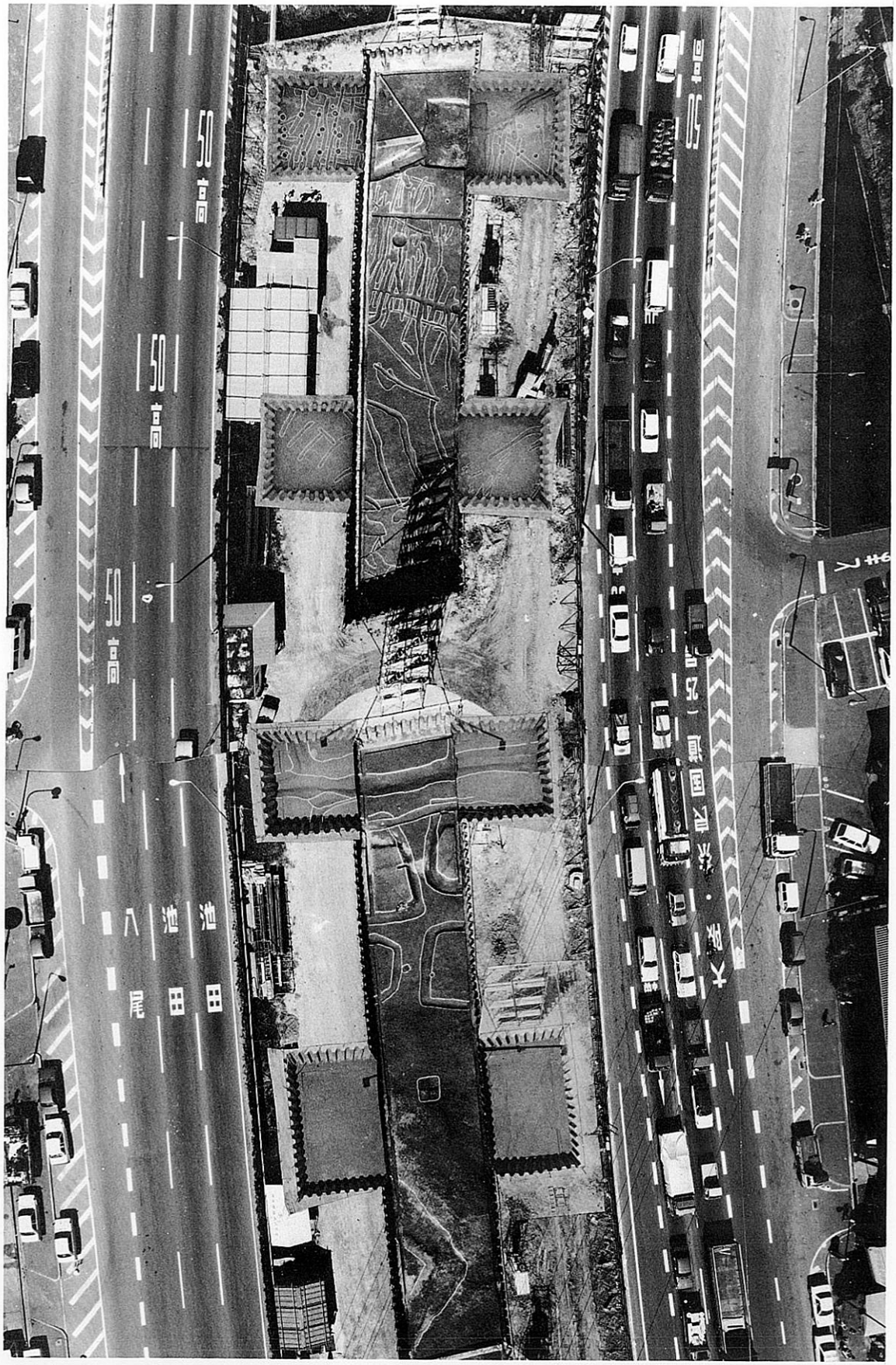
図版九　弥生時代、古墳時代遺構面

1．D、弥生時代第７遺構面 溝状遺構他（北から）



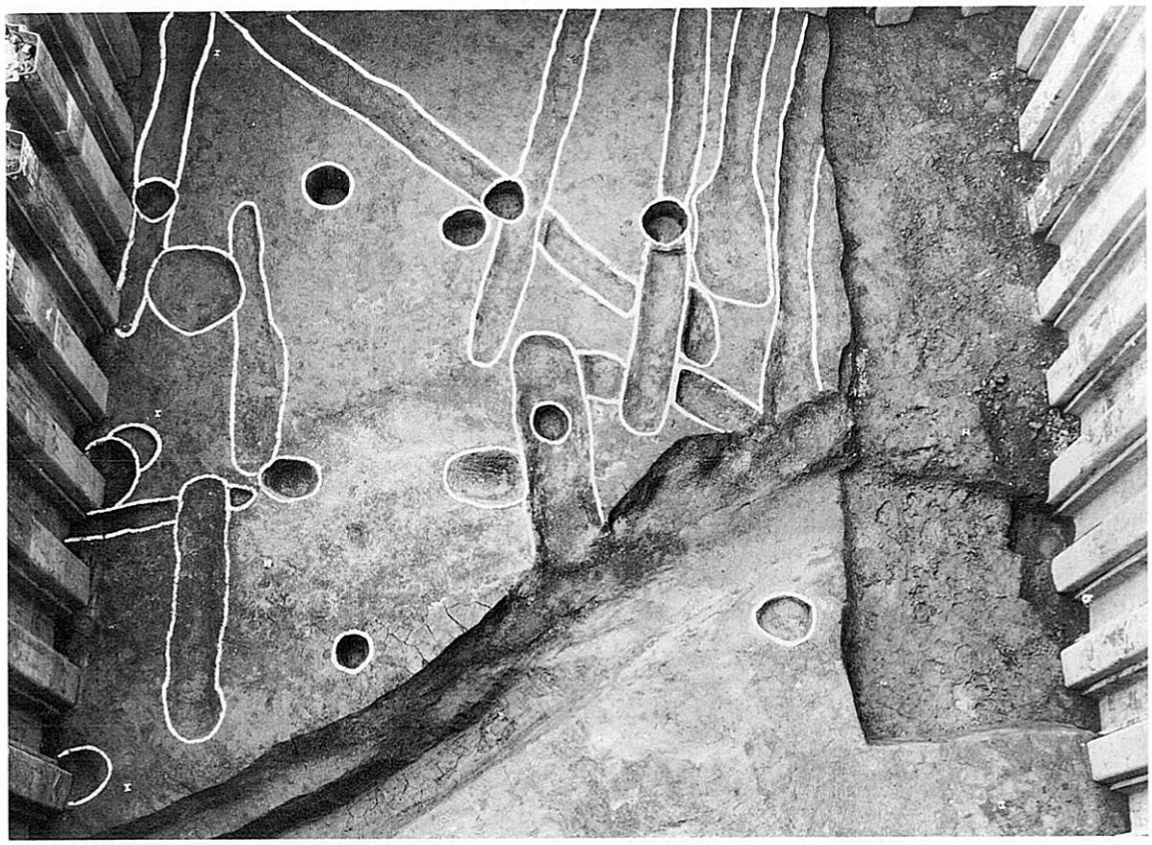
2．D、古墳時代第１遺構面 ウネミゾ他（東から）

図版一〇　古墳時代第一遺構面

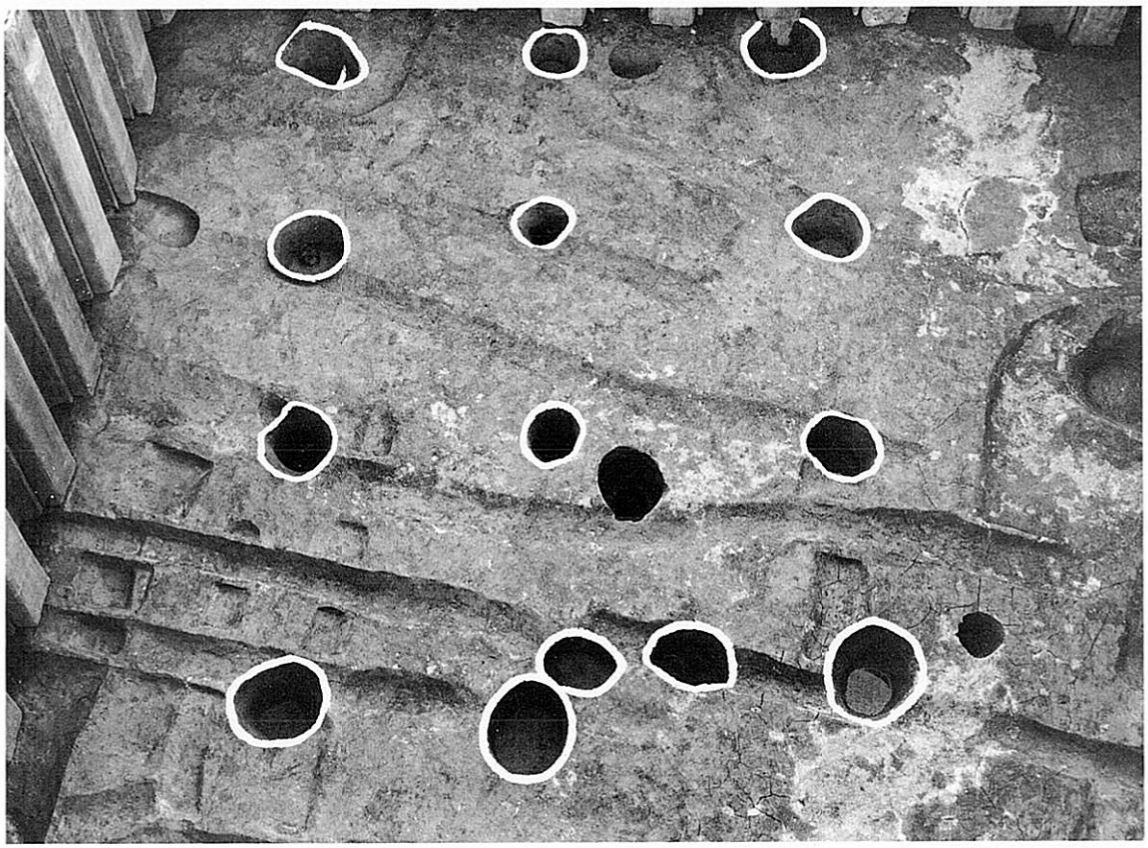


全景（垂直）1:550Ca

図版一一　古墳時代第一遺構面



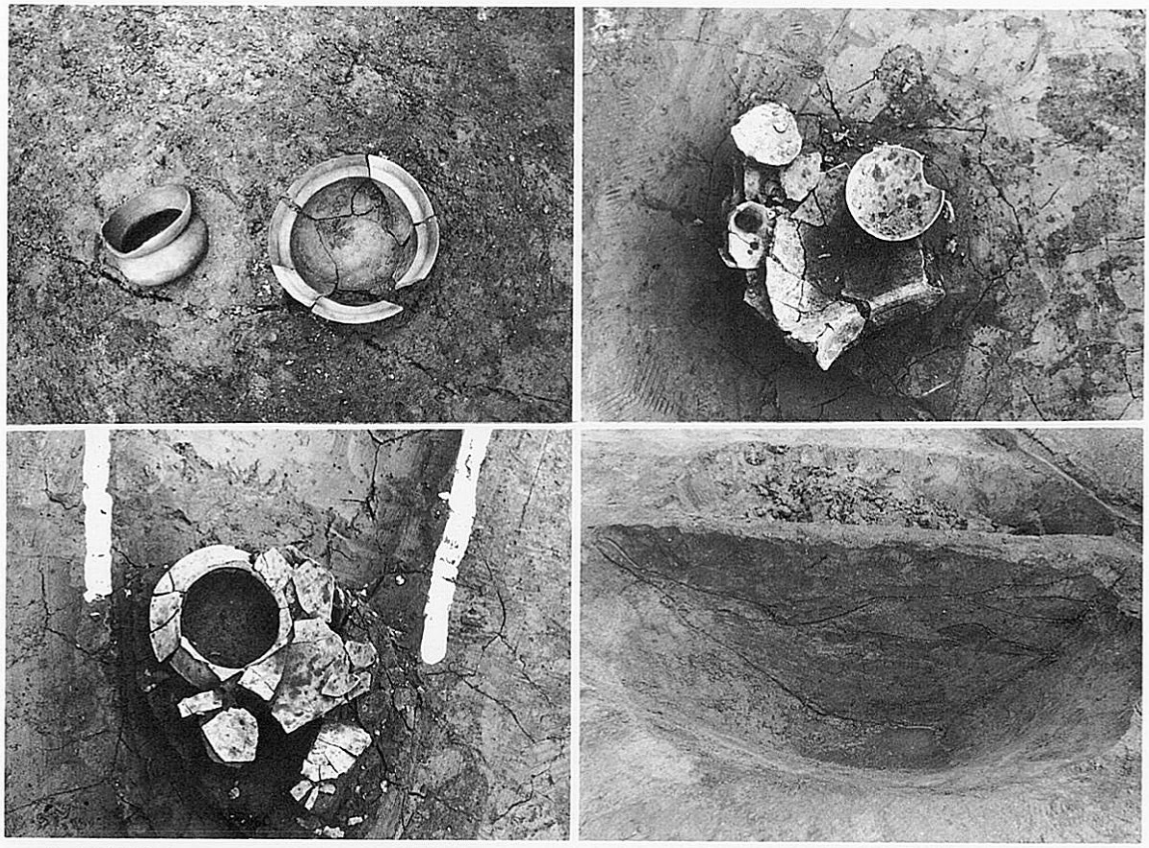
1．2D、SB01（北から）



2．1D、SB03（東から）

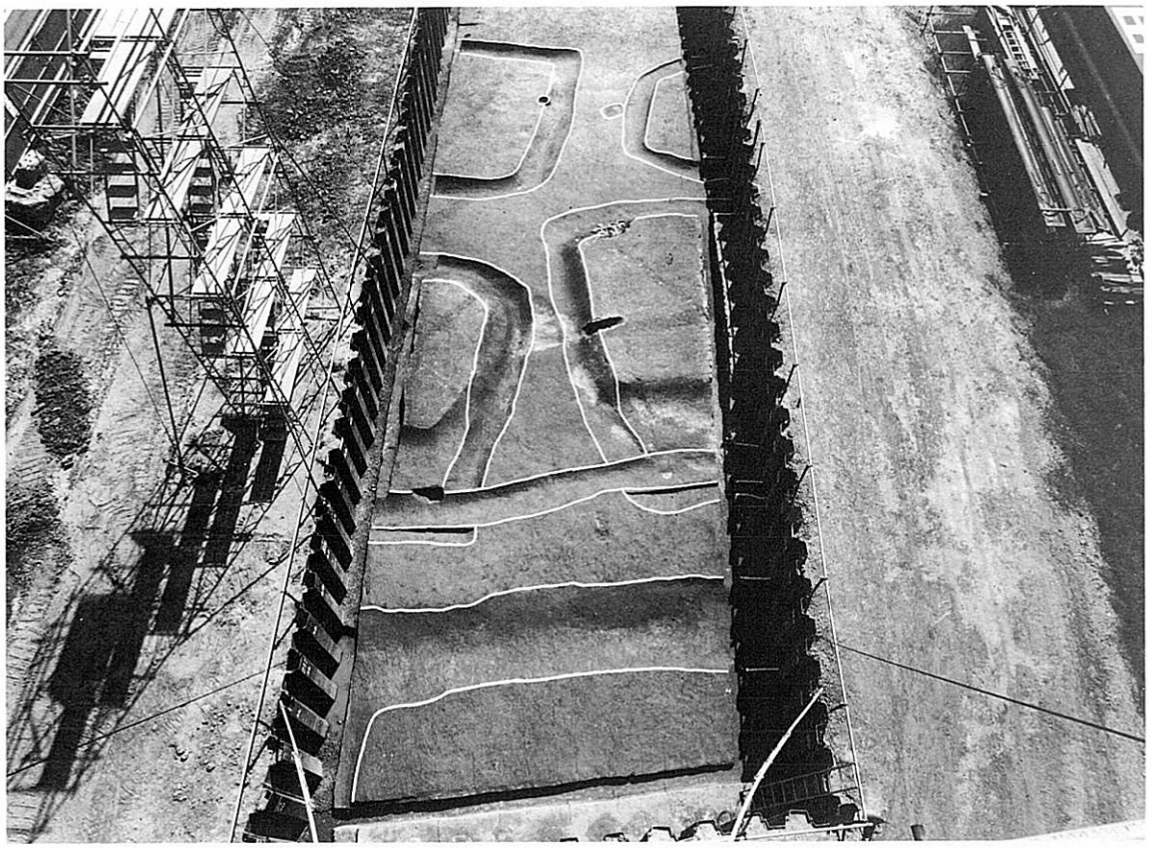
図版一二　古墳時代第一遺構面

1．D、遺構内遺物出土状況

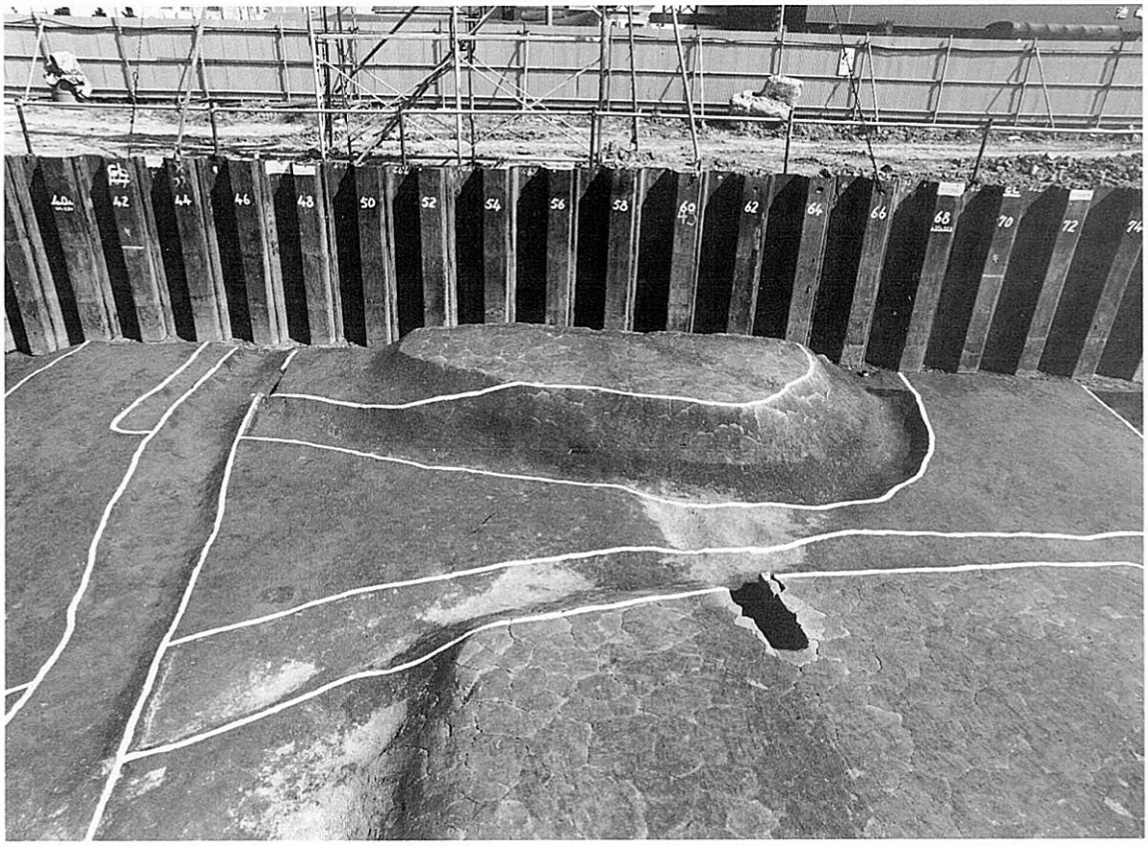


2．包含層遺物出土状況、SK１２土層

図版一三　古墳時代第一遺構面

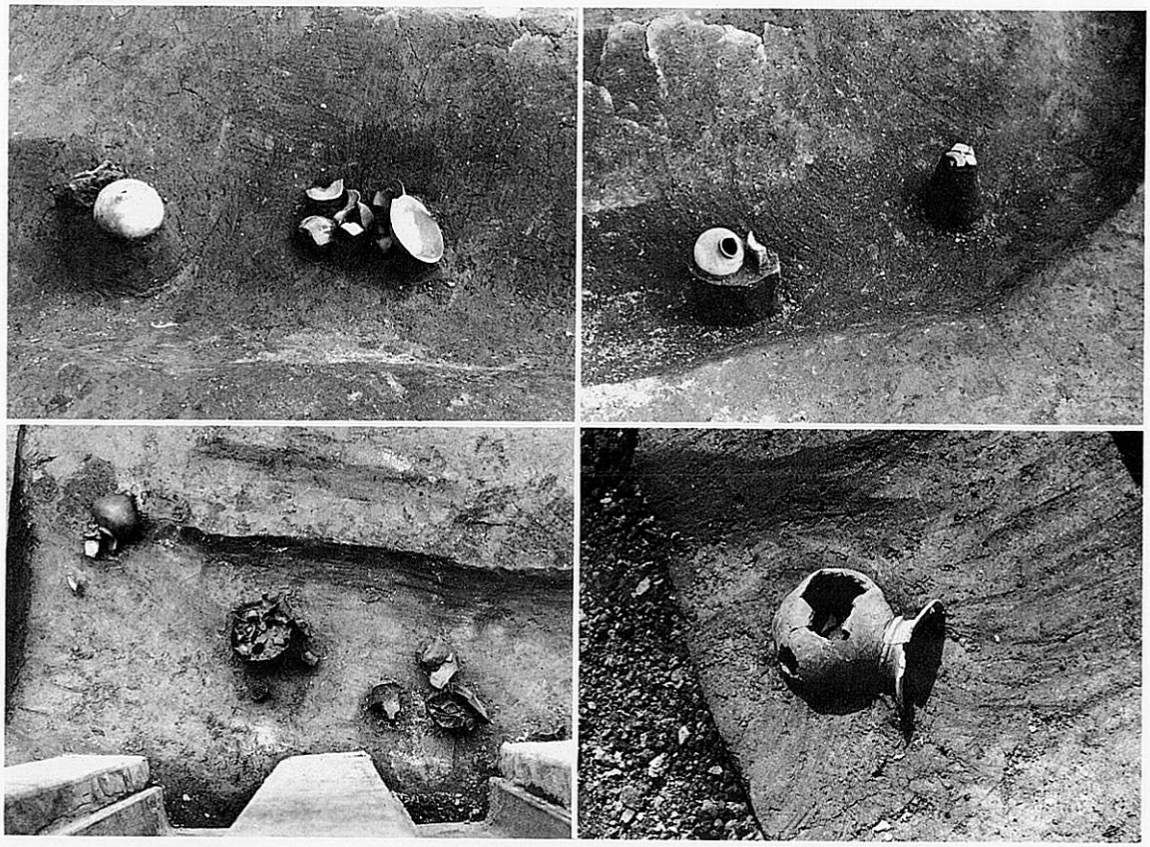


1．E、方形周溝墓群（北から）



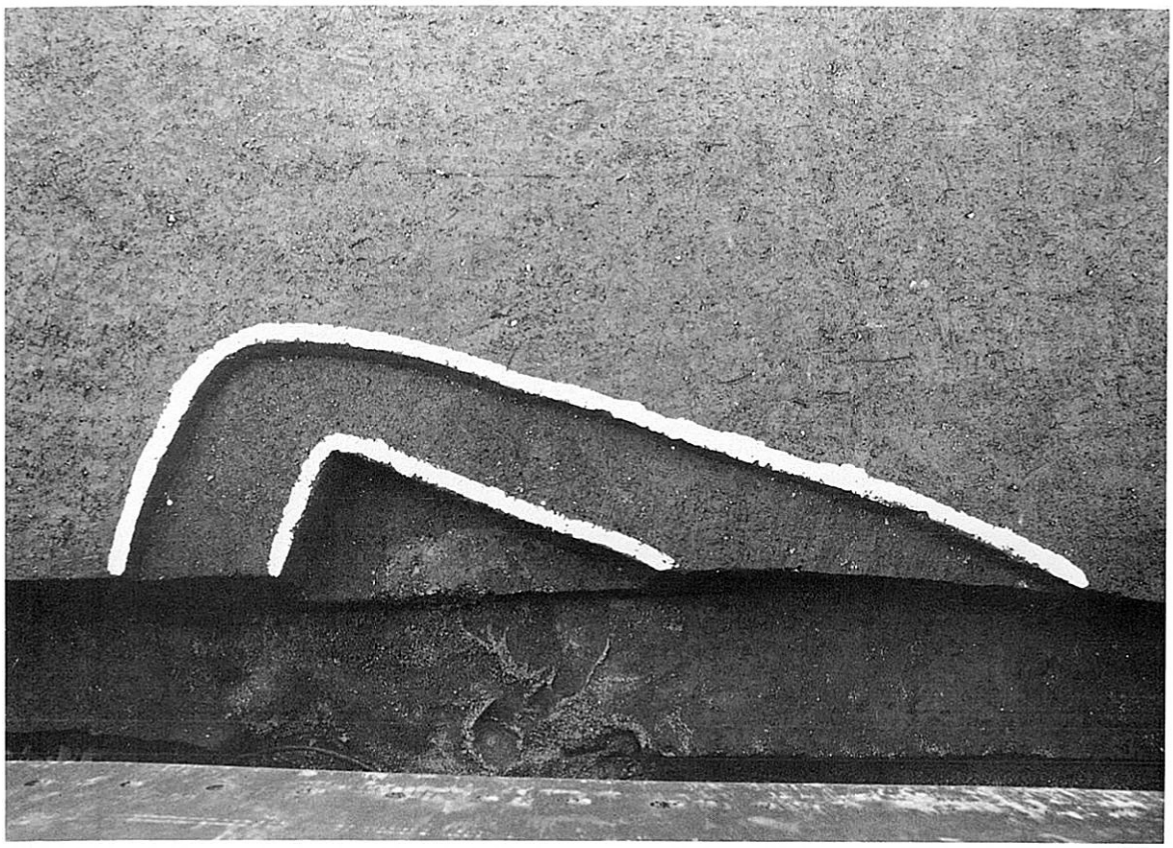
2．E、1号方形周溝墓（西から）

1．E、1号方形周溝墓遺物出土状況（北西から）

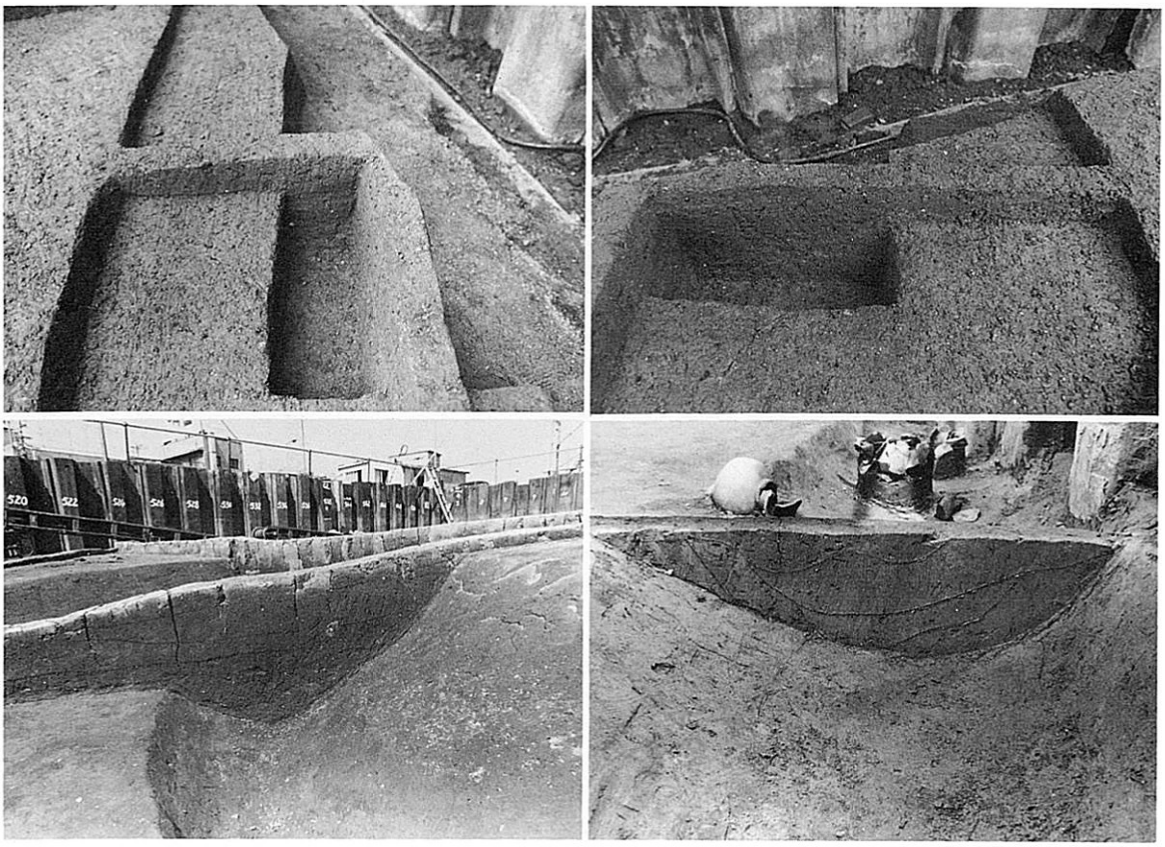


2．E、1号方形周溝墓遺物出土状況

図版一五　古墳時代第一遺構面

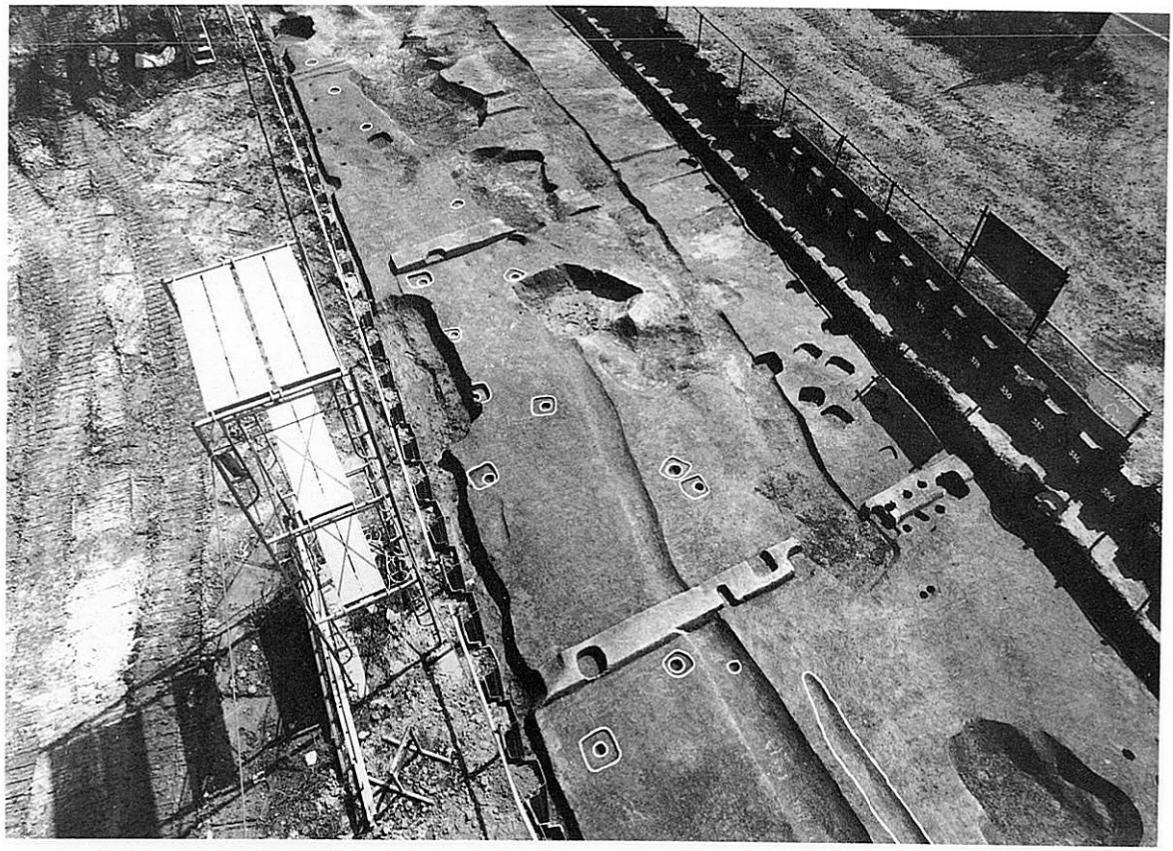


1．E、1号方形周溝墓主体部（東から）

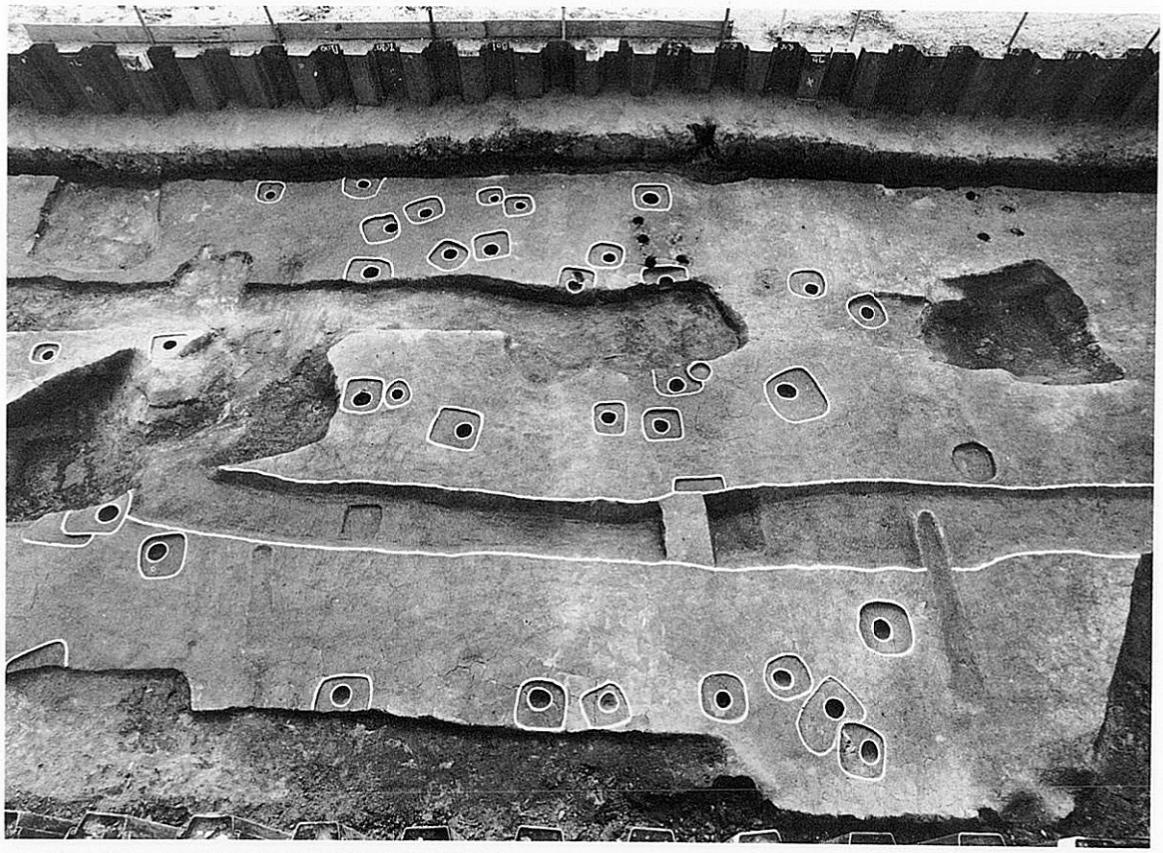


2．E、1号方形周溝墓主体部、周溝土層

図版二六　奈良・平安時代遺構面



1．E、奈良・平安時代第１遺構面 柱穴（北東から）



2．E、奈良・平安時代第２遺構面 柱穴（東から）

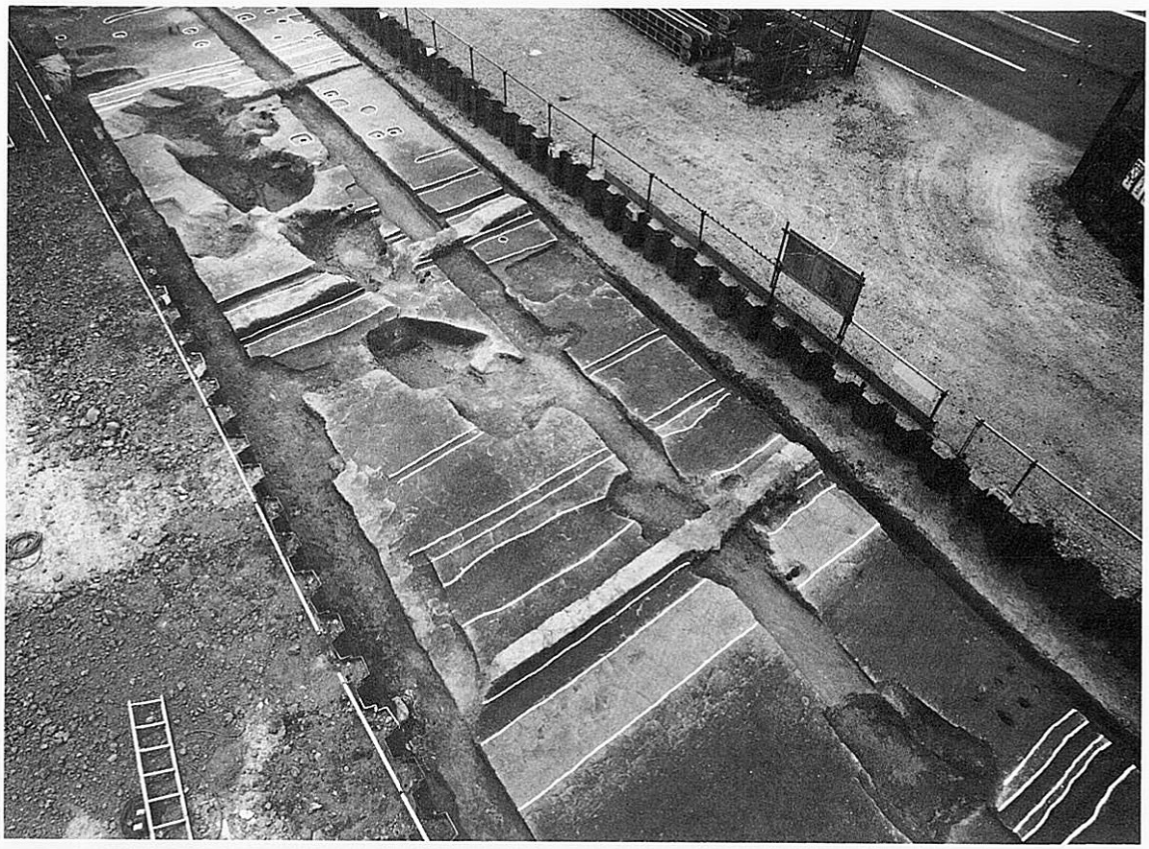
図版二七　中世遺構面

1．1D、中世第1遺構面 足跡（西から）

2．D、中世第2遺構面 P01瓦器埦出土状況（西から）

図版二八　中世第二遺構面

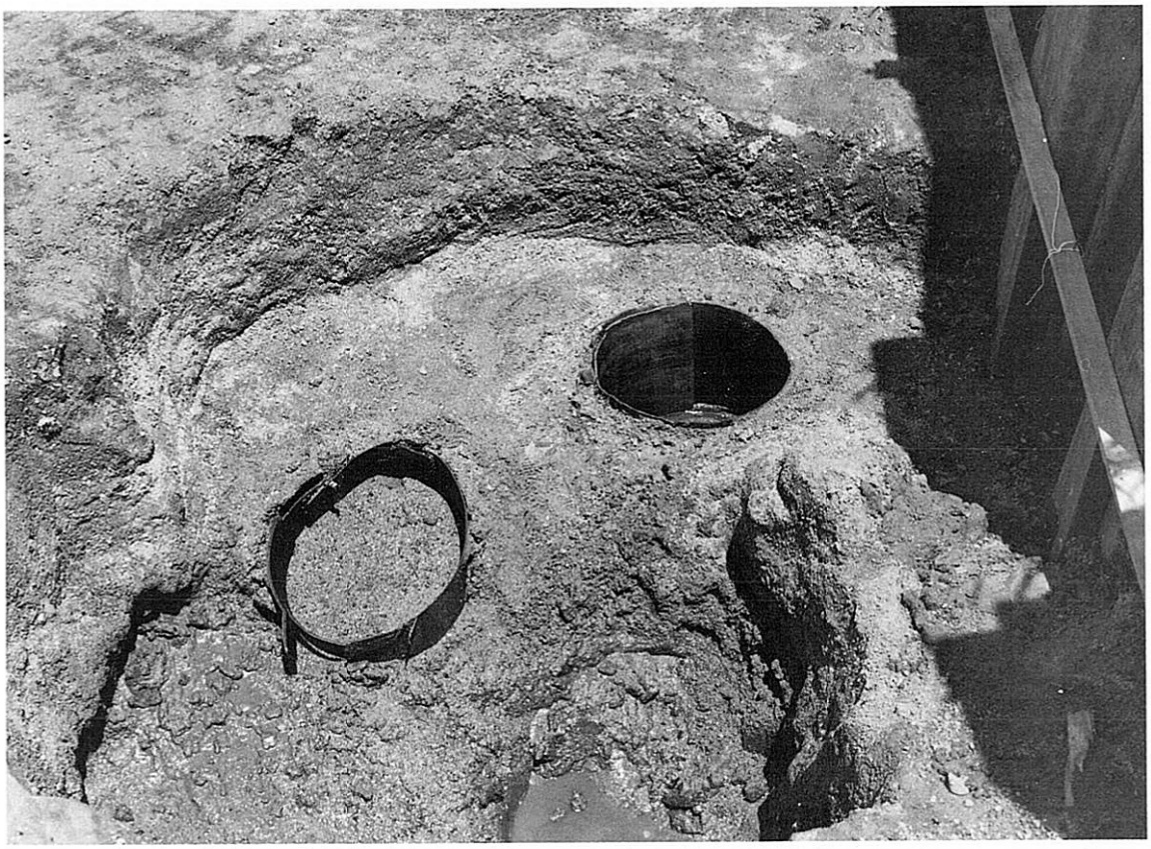
1．E、溝状遺構他（北から）



2．E、溝状遺構他（北東から）

図版二九　中世第二遺構面

1．E、SE01、02遺物出土状況（東から）



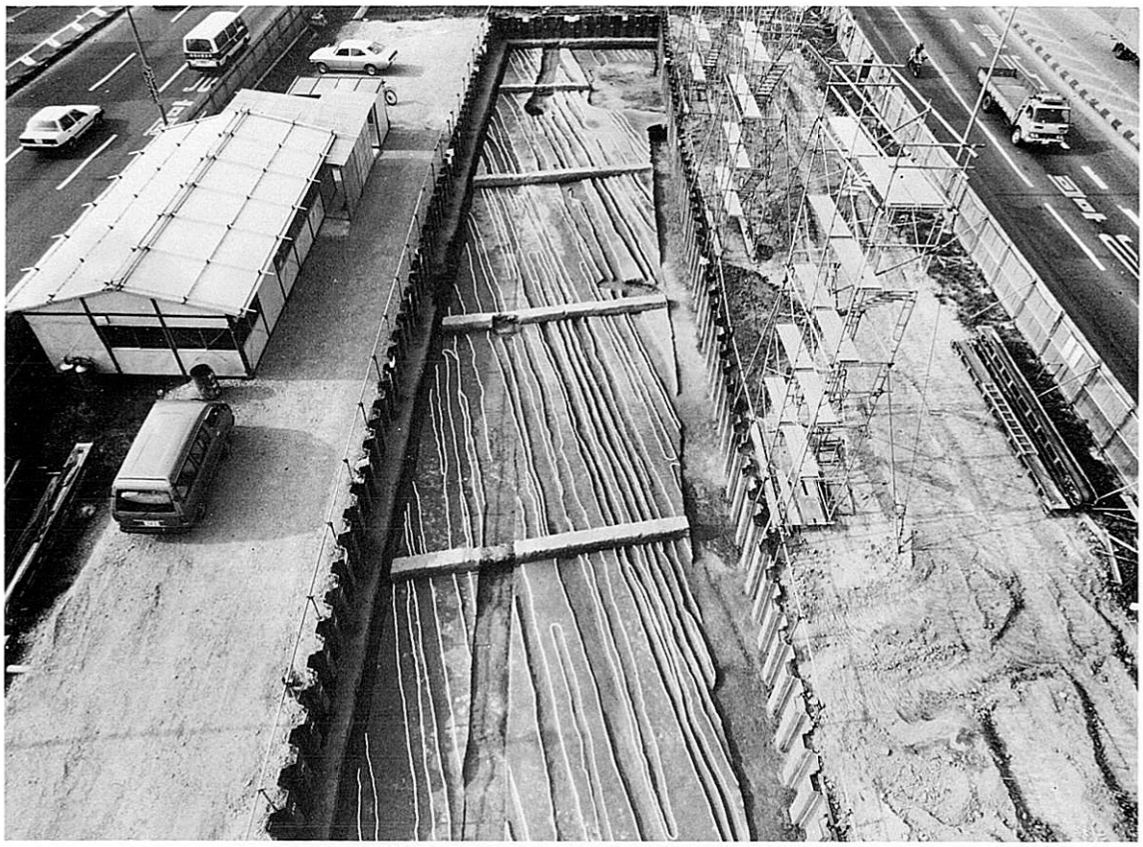
2．E、SE03、04（南から）

図版三〇　中世、近世・近代遺構面

1．E、中世第２遺構面　SE０１、０２

2．D、近世・近代第１遺構面　スキミゾ（北から）

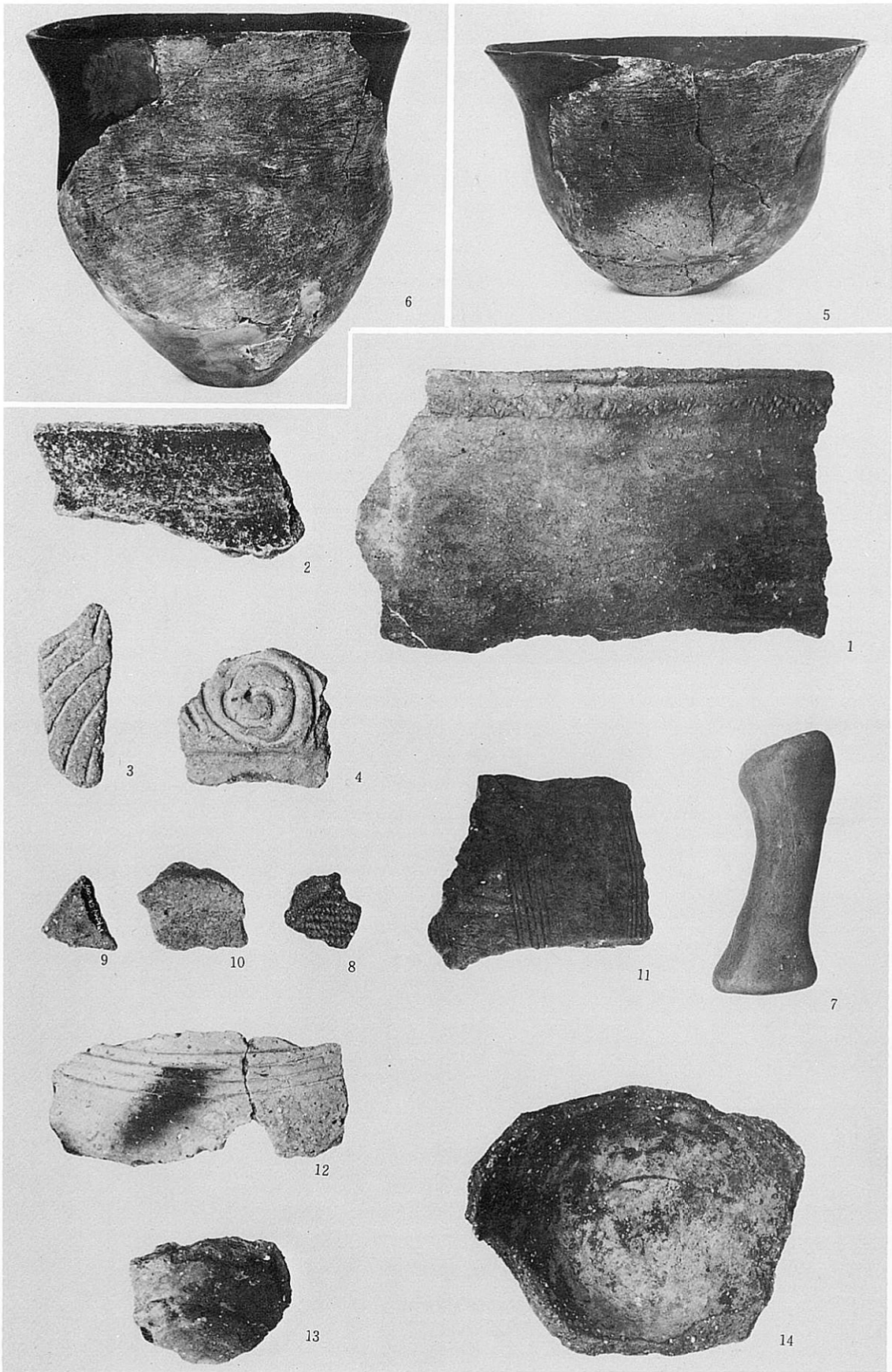
図版三一　近世・近代第二遺構面



1．D、スキミゾ（南から）

2．E、スキミゾ（北から）

図版三一　出土遺物

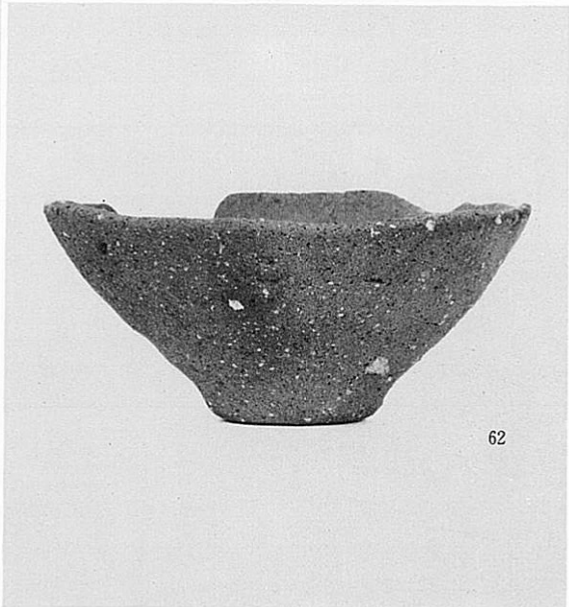


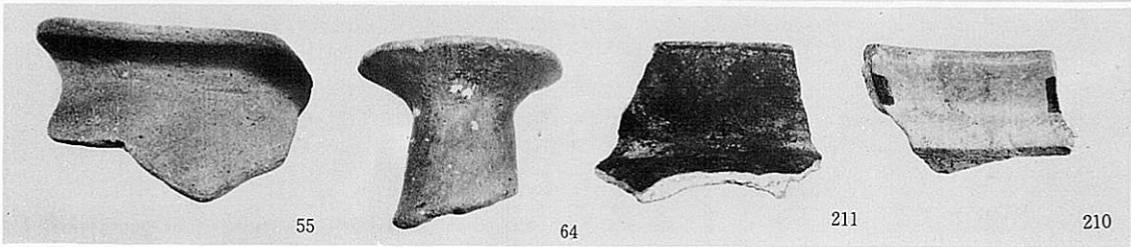
縄文時代遺構面　自然流路０２（１～11）、弥生時代第１遺構面（12～14）

1．弥生時代第３遺構面　SD０１（15）、弥生時代第４遺構面（17）

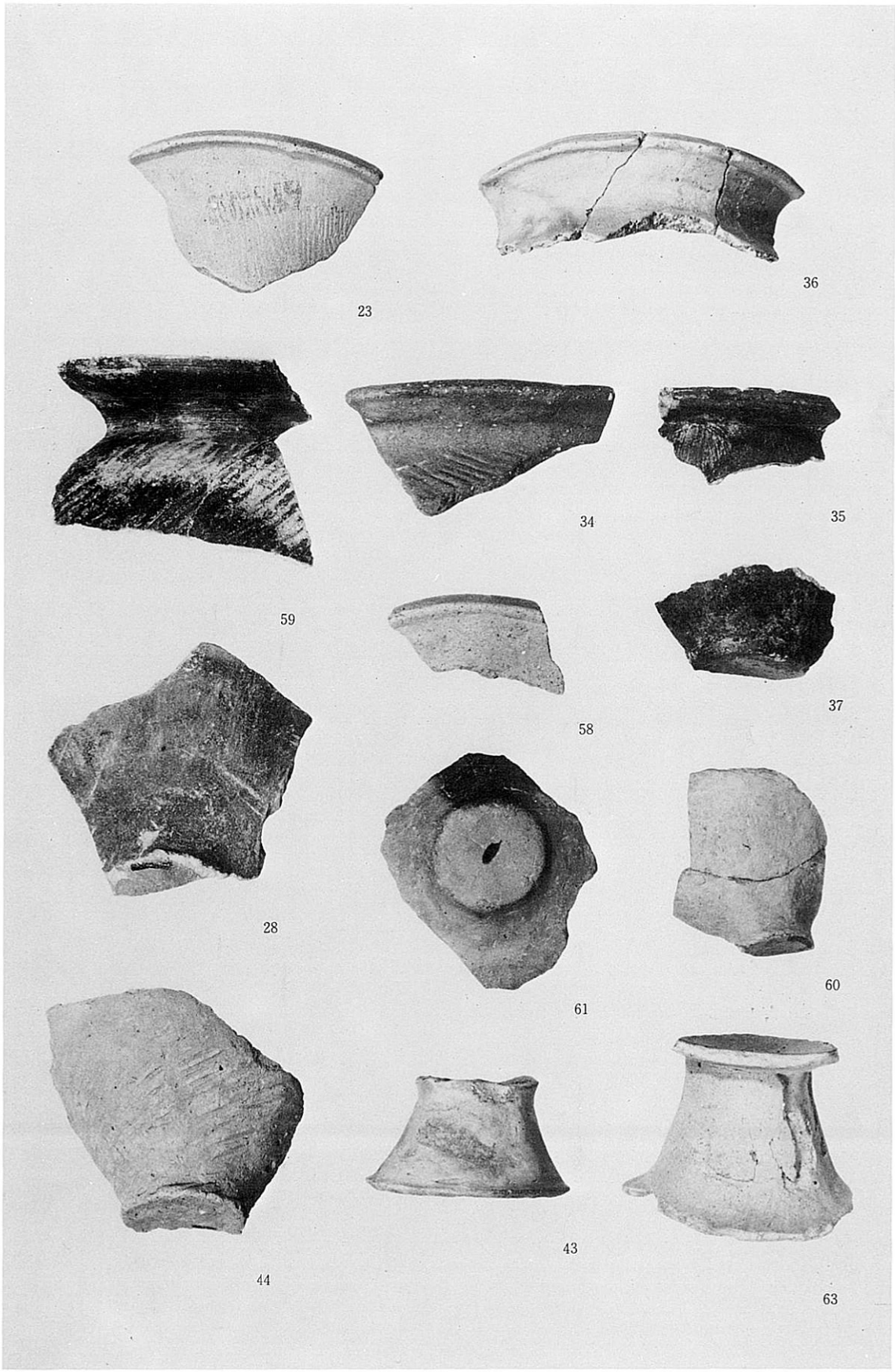
2．弥生時代第４遺構面　SD０１（19）、弥生時代第５遺構面　自然流路０１

図版三八　出土遺物





弥生時代第７遺構面　自然流路０１、０２他



弥生時代第５遺構面　自然流路０１、弥生時代第７遺構面　自然流路０１

176

175

178

177

181

179

古墳時代第１遺構面　１号方形周溝墓

図版四一　出土遺物

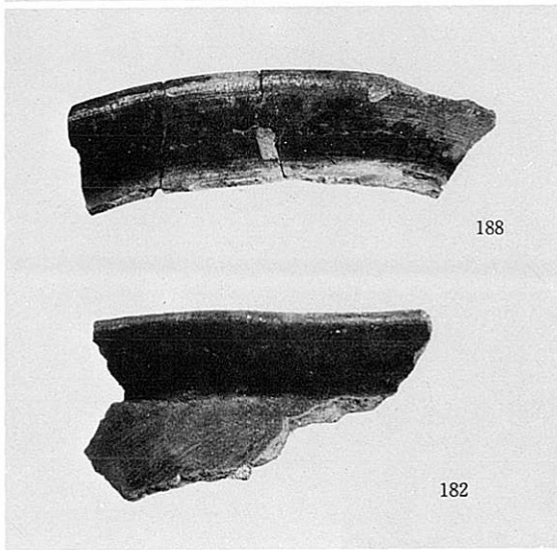
191

190

180

189

184


188

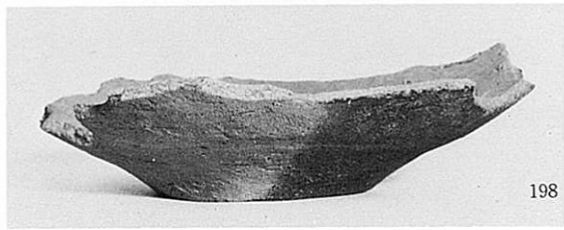
182

古墳時代第１遺構面　１号方形周溝墓

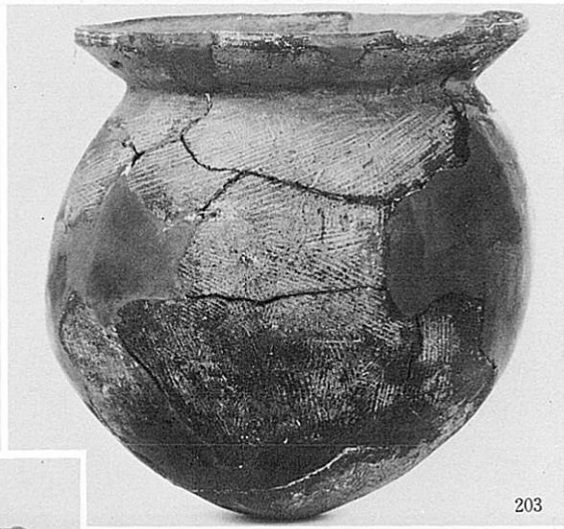
192

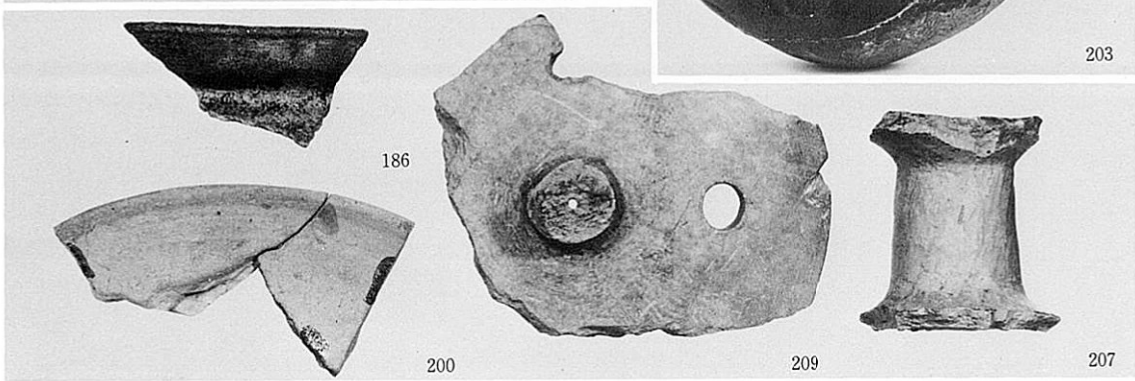
193

古墳時代第１遺構面　２号方形周溝墓



1．古墳時代第１遺構面　３号方形周溝墓（195）、５号方形周溝墓（196～198）





2．古墳時代第１遺構面　SD０１

65

66

74

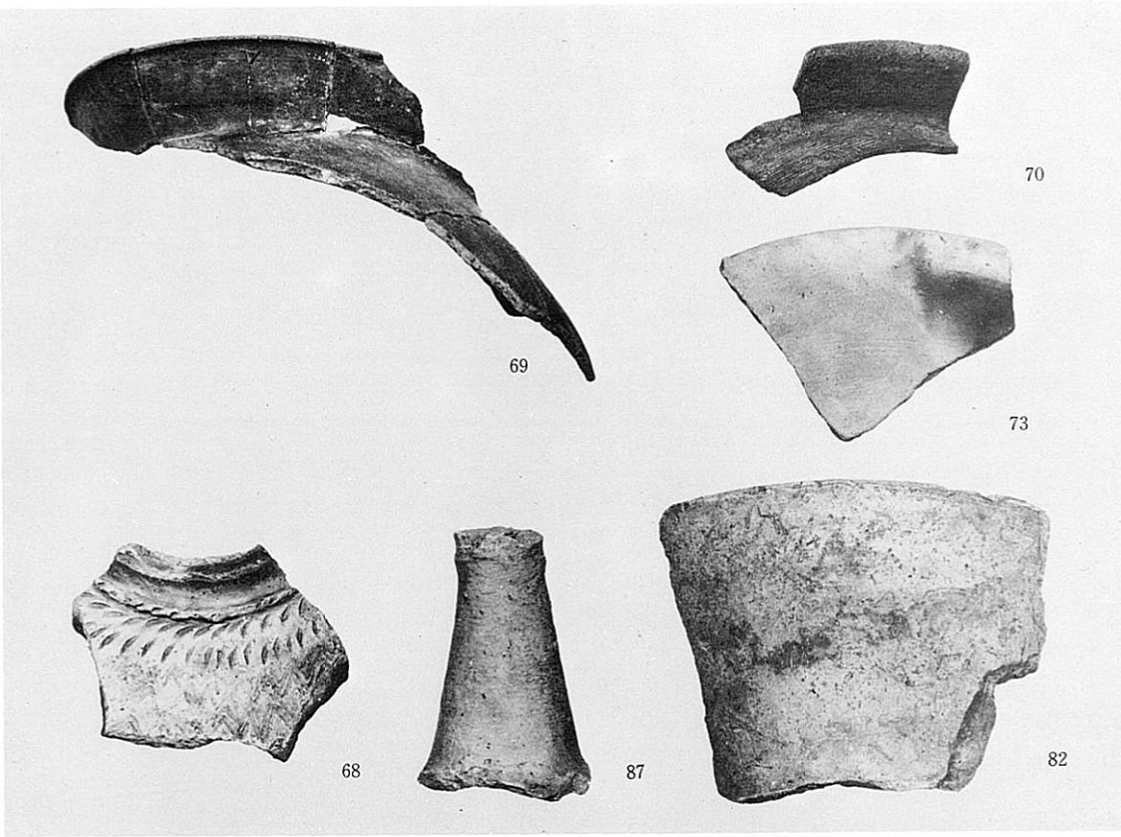
75

86

212

古墳時代第１遺構面

図版四五　出土遺物



1．古墳時代第１遺構面　SK０７、０８、ウネミゾ58、109

2．古墳時代第１遺構面　包含層

図版四六　出土遺物

古墳時代第１遺構面　包含層

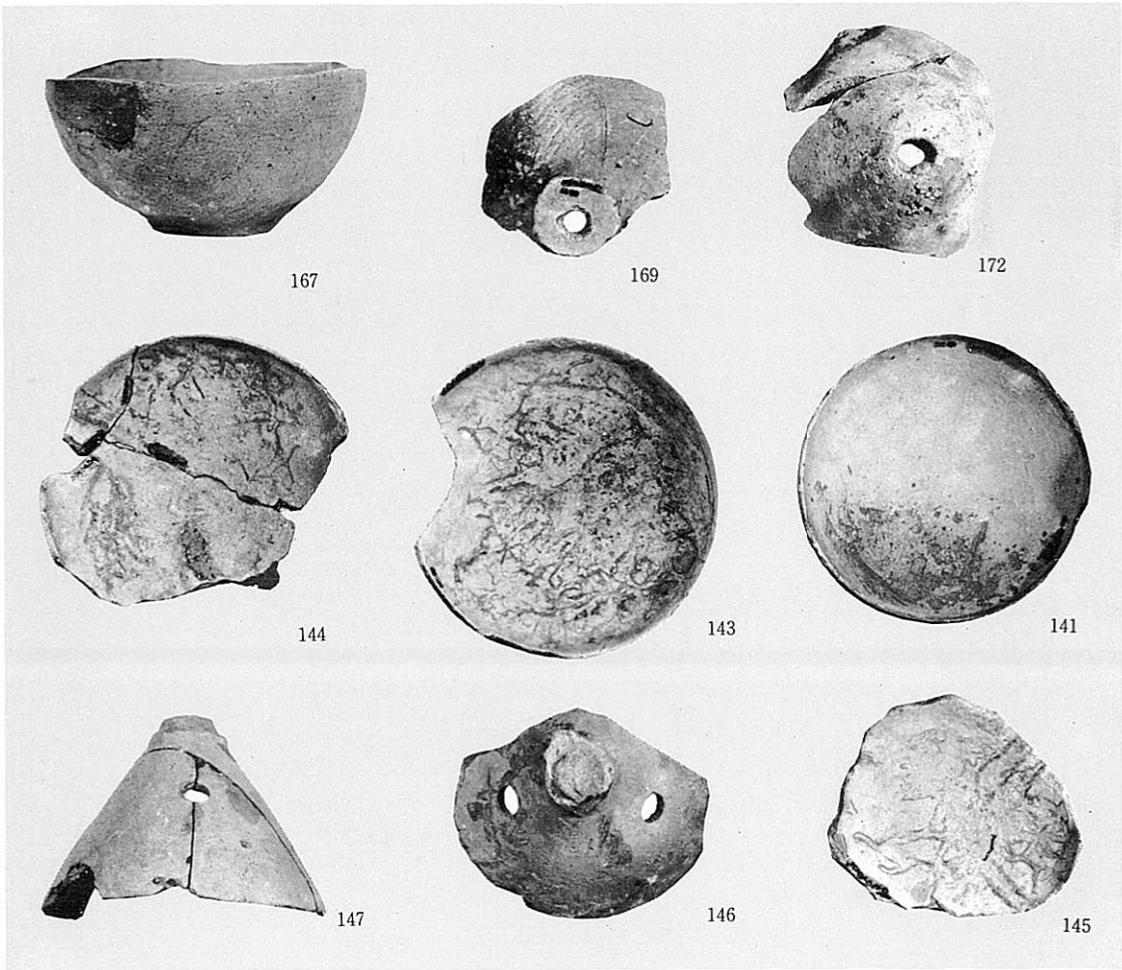
図版四七　出土遺物

149

150

155

156



古墳時代第１遺構面　包含層

図版四八　出土遺物

220

216

218

219

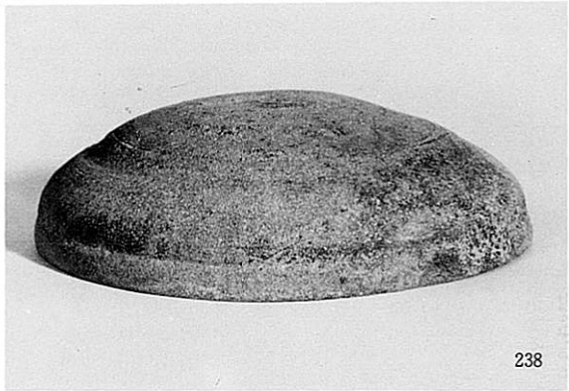
217

古墳時代第３遺構面

234

235

230


238

1．古墳時代第５遺構面　SD０１、０２

243

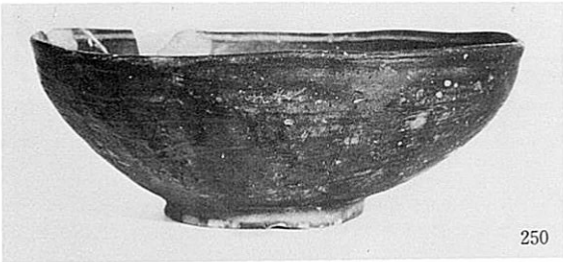
242

2．古墳時代第５遺構面　SD０２

1．古墳時代第４遺構面

2．奈良・平安時代遺構面

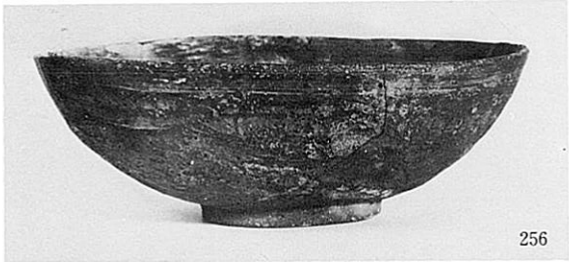
図版五一　出土遺物


250

253

252

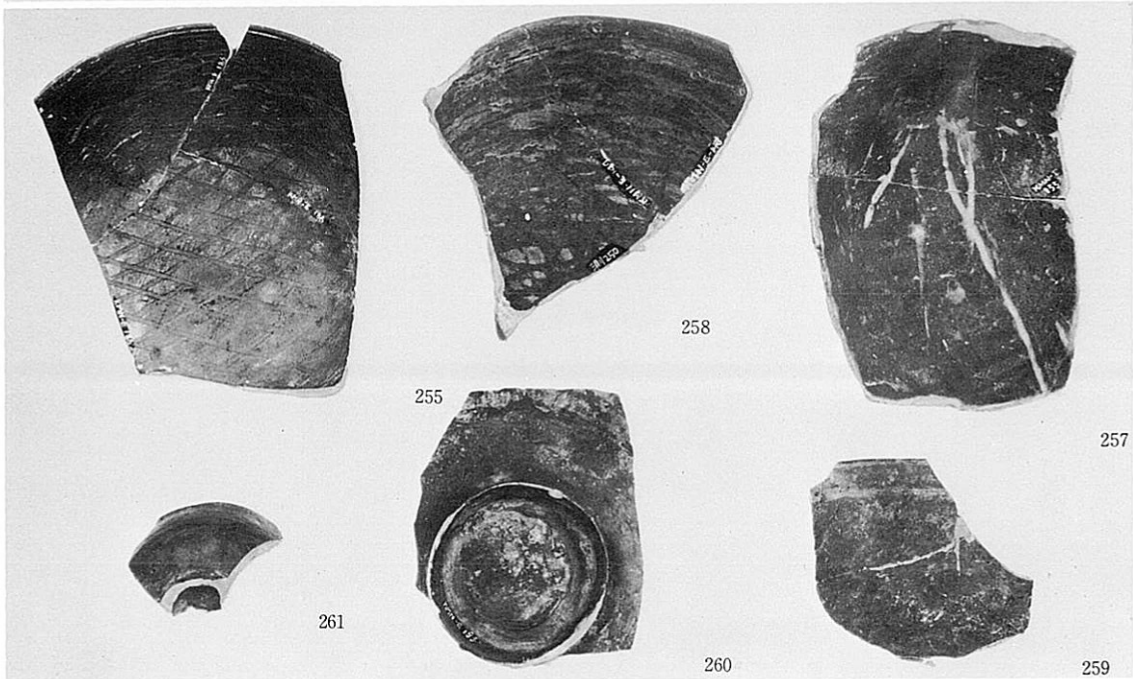
251


256

254

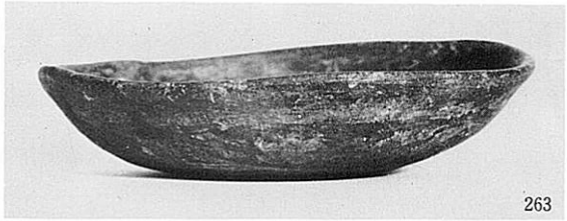
249

273



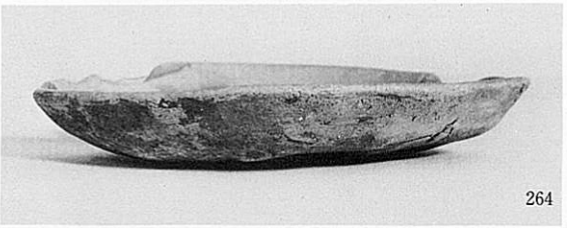
中世第２遺構面　SE０１

図版五二　出土遺物

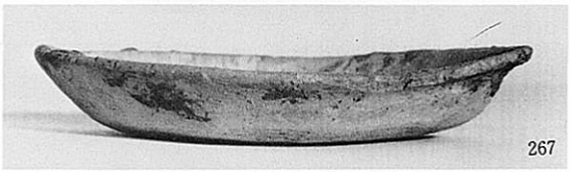

263

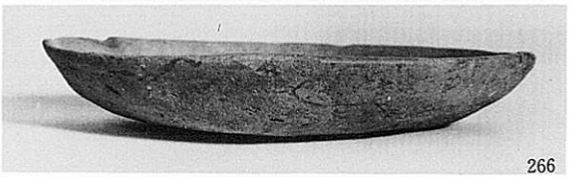
262

265

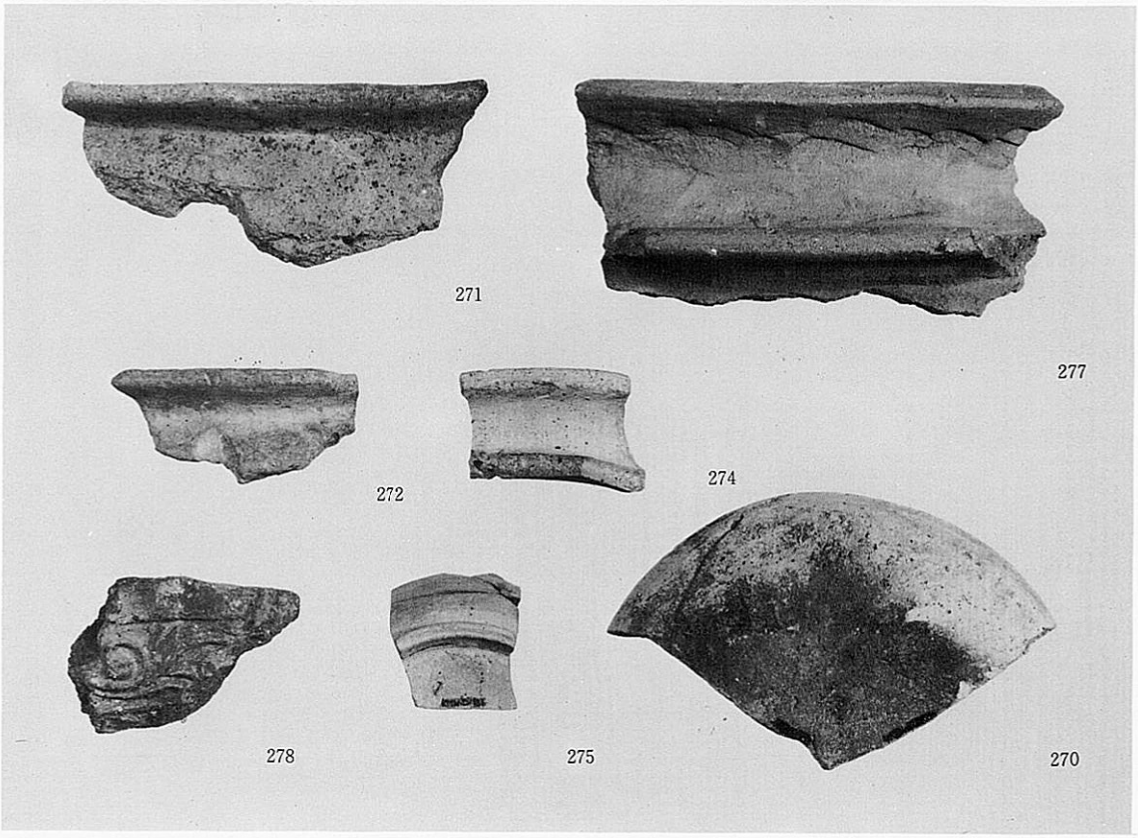

264

269

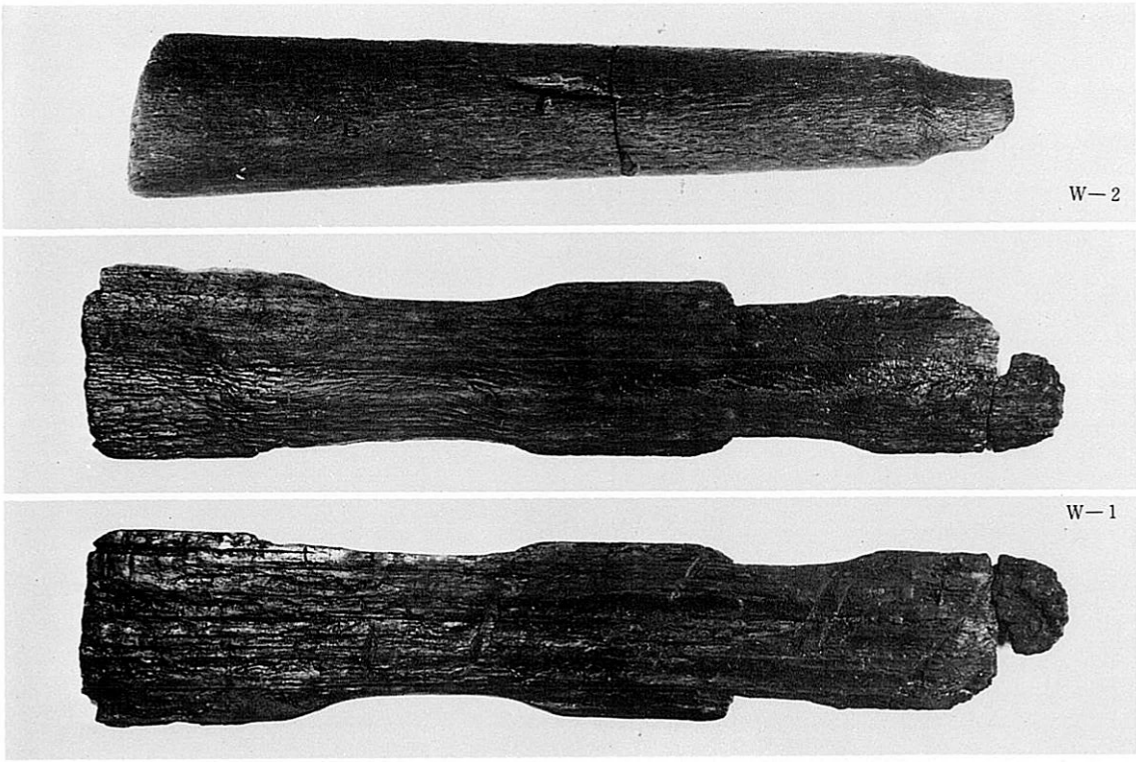

267


266

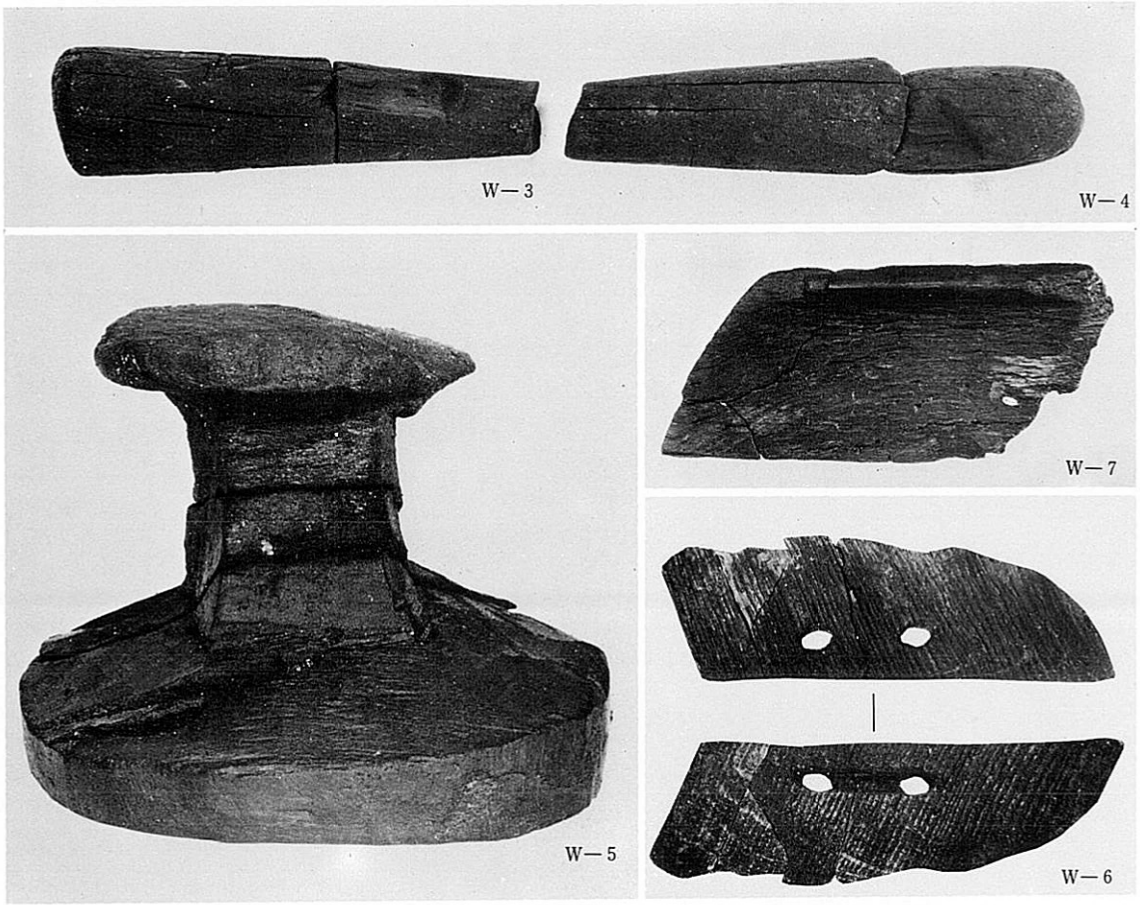
276



中世第２遺構面　SE０１、０２

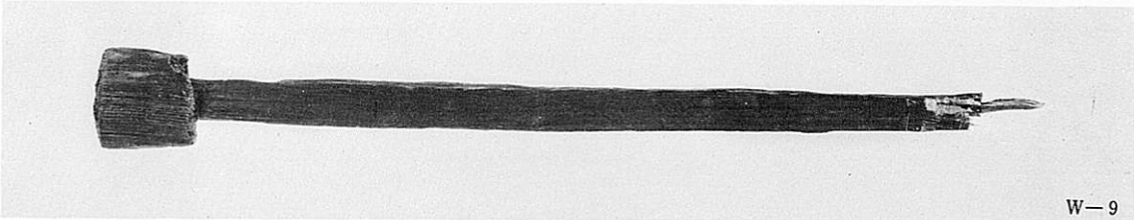


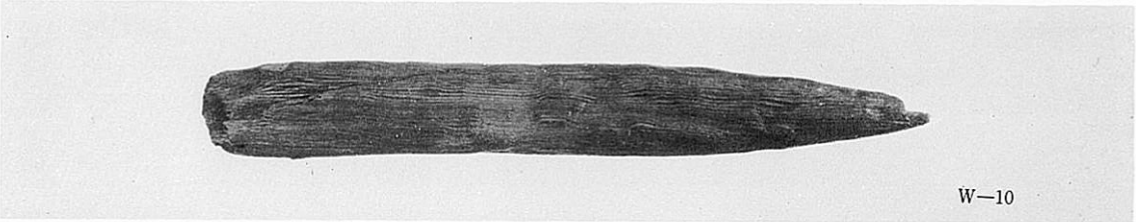
1．弥生時代第3遺構面　SD01　杵、鍬未製品



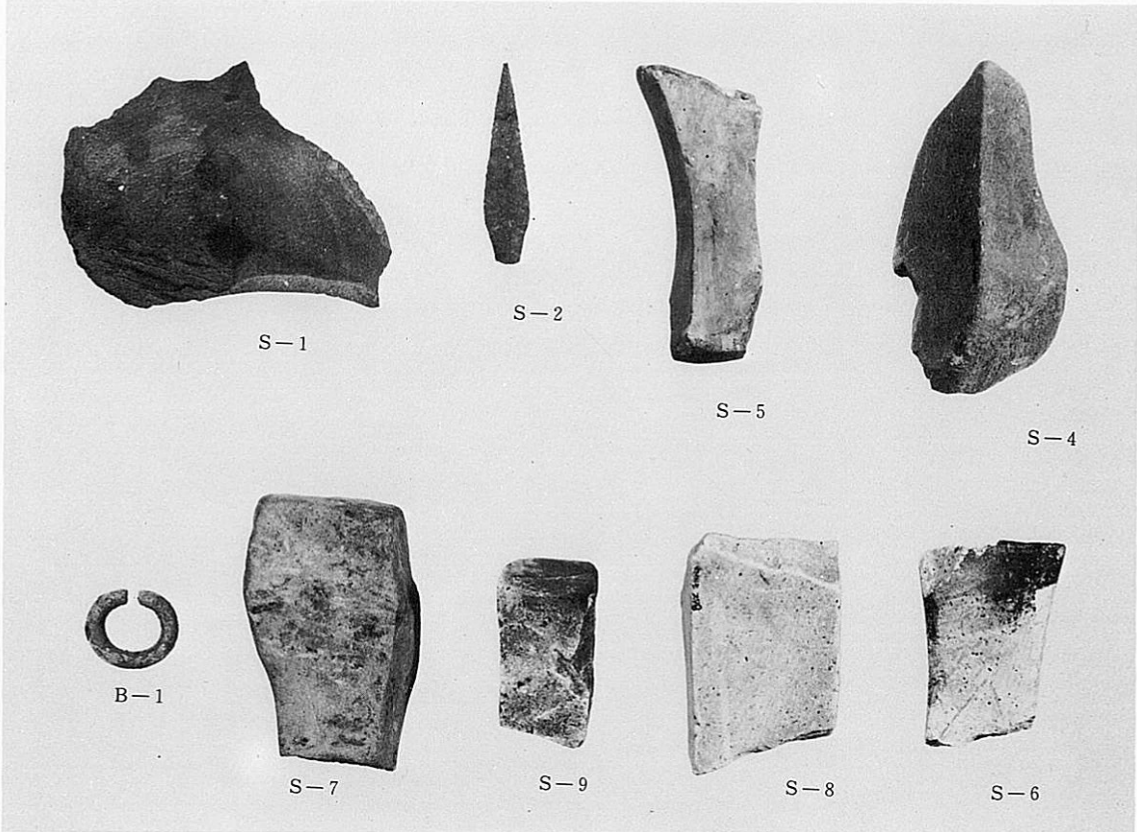
2．弥生時代第5遺構面　自然流路01　杵、木包丁他

図版五四　出土遺物





1．古墳時代第１、２遺構面　木製品



2．石器、砥石、耳環

亀　井　北
（その２）
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和61年３月31日発行

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生２丁目10番28号

印刷所　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南２丁目６番８号